

広島県立文書館資料集 11

村上家乗 安政元年・二年

広島県立文書館

凡 例

- 一 本書は、広島県立文書館資料集11として、広島大学大学院文学研究科日本史学研究室が所蔵する「家乗 続編卷之十一 安政元年 嘉永七年 極月改元」と「家乗 続編卷之十二 安政二年」を、「村上家乗 安政元年・二年」として刊行するものである。
- 一 本文の表記法は、原文の形に沿うようにつとめたが、読者の便宜のため、次のように改変を加えた。
- 1 原本には本文のほかに頭書があり、本書ではその体裁をできるだけ尊重して組版を行ったが、都合上、頭書の位置や体裁を変更した部分もある。
- 2 漢字は、原則として新字体を用いた。異字・当て字・俗字・略字・古字等は、通用の正字体に統一するようにつとめた。明らかな誤字は訂正したが、当時一般に慣用されていた誤字・当て字は改めなかった。また、并（ならびに）は小字で示した。
- 3 変体かなは、原則としてひらがなに改めたが、助詞に用いられている而（て）・江（え）・者（は）・茂（も）与（と）と、而已（のみ）は小字で示した。また、合体字 $ㇿ$ （より）はそのまま用いた。
- 4 漢字の反覆に「々」や「ヽ」を用いているものは、「々」に統一した。「ヽ」は原文のままとした。
- 5 原本の振りがなはそのまま残した。
- 6 本文中、記入がない部分や文意が通じない部分には（ママ）、推定できるものには（○○）、なお疑問が残るものには（○○カ）、脱字があると判断される部分には（○○脱カ）、誤って重複したと判断される箇所には（衍カ）などと、それぞれ傍注を付した。

- 7 原文の虫損などで読めない部分は□とした。その場合（虫損）などと傍注を付した。
 - 8 適宜、読点（・）および並列点（・）を付した。
 - 9 平出・闕字は省略した。
 - 10 著者自身が文字を抹消又は訂正した部分は、抹消文字の左傍に「と」を付し、訂正文字があればこれを右傍に記した。抹消部分が読めない部分は■とした。また、抹消又は訂正したわけではないが、読みにくくなり、右傍に○を付して、頭書部分に書き直した場合は省略した。なお、著者が返り点や線を加えて誤記を訂正している場合は、訂正後だけを示し、とくに注記しなかった。
 - 11 著者自身が朱書した貼紙をして文字を抹消した部分は、抹消文字の左傍に「」を付し、貼紙の朱書を右傍に「三月十三日」（朱書貼紙）などと記した。
 - 12 著者が転記した部分には転記確認したという趣旨の「スム」などと朱書した貼紙がある。また、安政二年六月三十日部分には「以下不要」と朱書した貼紙があるが、いずれも省略した。また、安政元年六月十九日部分の丁間に、同日頭書の下書きと思われる反故紙が挿入されているが、省略した。
 - 13 その他必要に応じて右又は左傍に（ ）で傍注を付した。
- 一 読者の便宜を図るため、巻末に人名・寺社名索引を付した。
- 一 本書の解説・校正にあたっては、広島県立文書館古文書解説同好会の有志者のお世話になった。
- 一 本書の解説は西村 晃（研究員（エルダー））が担当した。

目次

凡例
解題

村上家乘安政元年・二年

安政元年

正月	二
二月	八
三月	一三
四月	二三
五月	三三
六月	四〇
七月	四六
閏七月	五二
八月	五八
九月	六六
十月	七五

十一月	八一
十二月	八九
安政二年	九九
正月	一〇〇
二月	一〇七
三月	一一五
四月	一二二
五月	一二九
六月	一三八
七月	一四六
八月	一五一
九月	一六二
十月	一六九
十一月	一七八
十二月	一八四
人名・寺社名索引	(一)

解題

広島県立文書館では、広島藩家老東城浅野家の家中、村上彦右衛門の日記「村上家乗 続編」のうち、安政三年から明治四年まで（一八五六～七二）の十六年分（巻二三～二八）を「広島県立文書館資料集」3～10として、平成十五年度から原則として隔年で八冊刊行した。今回の資料集11では安政元年から同二年まで（一八五四～五五）の二年分（巻一一～一二）を刊行する。今回は解題と本文のほか、人名・寺社名索引を付す。

東城浅野家と、その家中である村上家、そしてその三代にわたる日記「村上家乗」、作者村上彦右衛門などの説明は資料集3の解題に譲り、ここでは本書の時期、安政元年から同二年にかけての政治情勢を概観するとともに、広島藩及び彦右衛門とその周囲の二年間の動向を記すことにする。なお、嘉永七年十一月二十七日に改元されて安政元年となるが、本稿では改元前（嘉永七年）も安政元年と表記することとする。

一 安政元年・二年の政治・社会情勢

安政元年（一八五四）六月十五日に発生した伊賀上野地震、十一月四日の安政東海地震、その翌日の安政南海地震、翌二年十月二日の安政江戸地震と、日本はこの二年間で大きな犠牲を伴う大地震に続けざまに襲われた。村上彦右衛門はいずれの地震についても、その被害状況に関する風聞や、被害を受けた諸藩に対する幕府からの助成金などまで「村上家乗」（以下「家乗」と略称）に書き残している。

これらの地震のうち広島に直接多大な被害を及ぼしたのは、彦右衛門が「当辺二而者唯今迄余り聞も不及大震」と形容した安政南海地震である（八二頁）。十一月五日の七時三、四歩（十六時半頃）に発生した地震は当初軽いように感じられたが、次第に揺れが強くなり、屋内には留まれなくなった。彦右衛門は妻と子の幾三郎を連れ裏の菜園へ出たが、揺れはますます劇しくなり、家の壁と柱は九尺（約二・七メートル）、上部は四、五寸（一二～一五センチ）も揺れたように感じられた。厠の水壺などはあふれ返り、座敷の壁は破損して一尺（約三〇センチ）ほど落下し、鴨井にも大きな狂いが生じた。筋違いに裂けた障子もあった。少し揺れが収まったところで東城浅野家上屋敷へ出仕してみると、高謙院（先々代当主浅野高平室）が居住する北の御部屋ごへやの廊下屋根が落ちて通行できない有様であったが、当主の浅野豊後（道興）や義弟の出衛（道積）、高謙院、そして六丁目下屋敷の先代周防（道博）も無事であった。その他上屋敷に大きな損所はなかったが、蔵や大手の壁に大きな損傷が生じた。広島城は天守を初めとして損害のない櫓は稀な状態で、栗林櫓は崩れ、京口門は傾き、八千蔵の被害も大きかった（八四頁）。広島藩はこの地震で広島城と三原城の両城、領内では五八五軒の家が損傷したことなどを幕府へ報告している（死者はなし）。彦右衛門は、広島近郊の安芸郡府中・海田近辺が強く揺れ、その他土地が潰れ、地割れが生じ、泥が噴き出す液状化現象も生じたという風聞を耳にしている。また川の潮汐は乱れ、夜は満干が認められなかったのに対し、昼は二三度満干を繰り返した（八四頁）。このような潮汐の乱れは十一月下旬になっても見られ、船頭たちは不安がったという（八八頁）。

翌五日には本震後に強い余震が発生し、村上家ほか上屋敷の多門に居住する東城浅野家中は申し合わせ、朝に霜が張るような厳寒の中を屋外で夜を明かすことになった。村上家ではその日は北庭大手外の馬立ての内へ取り急ぎ囲いを設けた。翌日もまたいつ大震動が起ころのではないかと「一統恐怖」の中、家の裏手の菜園に仮屋を構え、居住する多門に大きな被害が出た矢野源内一家と寝起きすることになった。七日朝、収まりそうな気配を

感じて仮屋を解き帰宅したが、昼前にはまた大きな余震（豊予海峡地震）が起こったため再び仮屋を建て、十四日まで滞在した。二十一日には収まったかのように思われたが、その翌々日午後から微震が絶えず起こるようになり、安心することはできなかった。その後、年が明けて安政二年になってもこの余震は続き、「家乗」に一日も余震の記事のない月は六月と十二月だけである。

安政南海地震が起きた安政元年冬は、医師・進藤寿白が『近世風聞・耳の垢』あかに、十一月十八日の小寒から十二月十七日の節分までは「寒中一日も温き日なし、近年の大寒なり」と記すように、広島城下町は厳しい寒さに見舞われた。十一月十六日から降り始めた雪は、翌日には彦右衛門が記憶にない「尺余」（三〇センチ以上）の積雪となった。この積雪は三日後の十九日、日当たりのよい南側でもなお消えず、彦右衛門を「生来未覚程之事」と驚かせた。日陰の宿雪しゆくせまですっかり消えたのは二十五日のことであった（八八頁）。

地震と並んで、安政元年に社会を揺るがせた事件はペリーの再航と開国である。前年の嘉永六年六月、ペリー率いる米国蒸気船四隻は浦賀に來航して、開国を要求する米国大統領の国書を浦賀奉行へ渡し、一年後の再航を約して去った。再びペリーが七隻の軍艦（後に九隻）を率いて江戸湾に現れたのはその約半年後の安政元年一月十六日のことであった。予想外に早い來航に驚いた幕府は、あくまで武力衝突を避け、穏便な態度で臨むよう警備の諸藩へ指令した。彦右衛門は諸藩の江戸湾の防備体制を描いた瓦版「江戸近辺海陸御固被為蒙仰候御場所附」を佐藤与三右衛門から借りて「家乗」に写している（一五～一六頁）。広島藩は築地藩邸を警備するため、前年の例に倣い、先鋒一番隊と青山内証分家の軍勢を派遣した。幕府は江戸市中の動揺を防ぐ対策を取ったため、前年と比較して江戸市中は平穏であった。両国間の交渉は二月十日から横浜村で開始され、三月三日、下田・箱館の開港、薪水の補給、領事官駐在の容認などを規定する日米和親条約（全二二か条）が調印された。その概要を幕府が公表したのは四月九日のことであった（「家乗」には五月十五日に掲載）。

九月十八日には、ロシアのプチャーチンが搭乗する戦艦ディアナ号が紀州沖から大坂天保山沖へと侵入する事件が起きた。プチャーチンは長崎での交渉を断念して、天皇が住む京都近くまで行くことで日本に圧力をかけ、早期の条約締結をめざしたのである。大坂商人から東城浅野家中岡田八十太郎へ宛てた手紙で、「ハツテイラ」二艘の六人が安治川四丁目迄乗り込み、三人が上陸したと聞いた彦右衛門は、「何分大胆不敵之振回之由、右二付大坂者以外騒動」と「家乗」に書き留めた(七三頁)。しかし、プチャーチンは安治川に乗り入れようとしたものの、大坂町奉行所の嚴重な警戒に驚いて引き返し上陸には至らなかつたのが事実であり、プチャーチンは大坂町奉行から下田へ回航するように要請を受け、十月三日に大坂を出港した。

このような諸国からの要請を受け、幕府は安政元年にアメリカのほかイギリス・ロシア・オランダの諸国とも和親条約を締結し、諸国船の寄港と補給のために下田・箱館・長崎を開港することになった。

二 安政元・二年の広島藩の動向

広島藩では、嘉永六年(一八五三)のペリー来航を契機に年寄上座今中丹後相親を中心とする守旧派政権に対する批判が高まり、黒田図書・辻勘三郎(後の将曹)・石井雄之進(後の修理)ら番方藩士を中心とする改革派藩士が、藩政不振を憂慮する家老浅野遠江(忠助)と意を通じ、家老上田主水(安節)・浅野豊後(道興)と協力し、政権交代を要求する三家老連署による建白書を作成した。この建白書を江戸の藩主浅野斉肃へ提出するため、同年十一月二十二日に遠江家臣の脇本武兵衛・吉村重介が江戸へ向かった。

この建白書を藩主へ提出するに当たっては慎重に事が運ばれた。脇本らは江戸でまず青山内証分家当主の浅野長訓(ながみち)に對面してその同意を得た。次に長訓自身が広島藩上屋敷に赴いて藩主斉肃と世子慶熾(よむてる)に面謁し、人払いしたうえで直接建白書を手渡したのである。この時藩主正室の泰栄夫人(將軍徳川家斉の二四女末姫)と慶熾が、こ

の建白が履行されるよう誠意をもって斉肅を説得したという。この三家老による建白が功を奏し、安政元年一月十九日にまず今中丹後が年寄上座から中老格へ左遷され、二十三日には一派である年寄寺尾石見が免職となった。また、郡奉行・用人の山下右伸が旗奉行、丹後の子で大小姓頭の今中権六が先手者頭へと異動するなど、守旧派は藩政の要路から去ることになったのである。帰国した脇本武兵衛からこの建白のことを聞いた彦右衛門は、江戸の「姫君様」（末姫）が藩政のことを心配され、今中ら「奸佞人」を除き去つたと、末姫の内助の功を高く評価している（八頁）。

寛政九年（一七九七）に家督を継いだ今中丹後（旧称大学、家督当初は二八〇石）は出世と加禄を重ね、文政五年（二八二二）三月には年寄、さらに弘化三年（二八四六）には年寄上座へと登り、禄高は二六〇〇石まで進んだ。この間、広島藩では、度重なる御手伝普請や天保飢饉などの災害、末姫と藩主斉肅との婚儀、饒津神社の造営などによる出費が相次ぎ、藩財政を逼迫させていた。これに対応するため、今中は家中から借知を行い、領内に徹底した儉約令を課し、六会法を初めとするさまざまな経済政策を試みたが、悉く失敗に終わり、藩札の乱発によってインフレを招く結果となっていた。また、近親者や腹心の配下を次々と要路に付ける情実政治が行われていた。

このような今中らによる守旧派政権の情実政治を「惟自己之榮耀を事与し、權勢を被貪候而已二而、一も国家之大事を心与被致候実忠者不相見」（五頁）と痛烈に批判する彦右衛門は、「國勢者日々左道二趣、当時如形恐入たる御時勢」となったのは今中の責任だと考えた。彦右衛門はこれまでも守旧派政権に対する批判を「家乗」に書き残してきたが、安政元年一月十四日、左義長さぎちやうでの今中家の振舞いについても冷ややかに指弾している。例年左義長の日には、三家老や家中諸士の飼馬が次々に威風堂々と八丁馬場へ集まり、縦横無尽に乗り試しを行った後、夕暮れになると八丁馬場を西へ駆け、今門を出て太田川の対岸、空鞆そらたづ堤の「大トンド」を馬に見せるため、小姓町裏堤へ集まることが恒例となっていた。しかし厳しい儉約令によって集まる馬数は、一時は一七匹にまで減少

していた。前年からは増加に転じ、この年は四〇匹まで回復していたのであるが、この中で一際目立つのが今中丹後の七歳になる孫であった。その孫は毛坊主けぼうず四人、若党二人、小者その他馬方の者など多人数を引き連れて左義長の行事に参加し、今門へと馬を駆けて行った。これを伝え聞いた彦右衛門は「權勢之使然者、末路驕奢之極」であると厳しい目を向けている（四頁）。

一月二十五日には前々日に左遷された守旧派諸士が登城した。それを伝え聞いた見物人が八丁馬場に群集し、通行する左遷諸士に対して悪口雑言あつちやうごんを高声に浴びせかけた。それは守旧派に強い嫌悪感を抱く彦右衛門でさえ「彼は甚気毒千万之事」と同情せざるを得ないほどの情景であった。守旧派に対する怨嗟えんさの声は広島藩家中に渦巻いていたのである（六―七頁）

三家老の建白書は、守旧派を解任するだけではなく、具体的な罪名を示して処罰を要求するとともに、改革派の具体的な名前と役職を挙げて藩要路への抜擢も求めていた。しかし、守旧派は藩政の要路から去ったものの、今中丹後は格式的には昇進である中老格に、御用達所詰頭取・勘定奉行であった横山十介はなおも重要な役職である郡回りへ転役となったことが物語るように、処罰を伴わない異動に過ぎなかった。横山は三家老からの要求により五月十五日になって改めて同役を解任されたが（三六頁）、十二月十九日に病気を理由に隠居した今中丹後から家督を譲られた子の大衛は、八〇〇石を減じられたものの、なおも二三〇〇石という高禄のまま先手者頭という重職に任じられた。これを聞いた彦右衛門は、今中丹後について「元来貞忠之志薄候故歟、御国政者此人ますます二而益衰廢之極ふけられ二至、唯身前之驕奢而已二被耽、足事を不被知、此度之家督者甚不首尾也と云共、其身二取候而者猶大幸之極与云へし」（九四頁）と皮肉に満ちた痛烈な批判を「家乗」に書き残した。

改革派からは、二月二十七日に用人上席であった藤田新五郎（兵庫）が従来の上格コースを踏襲して年寄役へ引き上げられただけで、その他の改革派からの人材抜擢は行われなかった。これは江戸で藩主斉肅から三家老の建

白に関する下問を受けた年寄二川清記が温和主義を取り、断固たる処分を行わなかったためである。彦右衛門は守旧派の左遷については「彼是二而殿様も御奮発為在、右様之御処置被為在候事共歟与奉恐察也、何分二も偏二御国運御興復之兆歟与窃二奉恐悦候也」（八頁）と期待を寄せたが、その一方で守旧派に対して処罰が行われなかったことについては、「屹与御咎有之候而、御国政御一新被為在度事与有心人々窃二希居候趣二有之候処、今日之被仰付者案外之事共也、斯人之身二取而者大幸之至与云へし、噫」（五頁）と落胆するしかなかった。

その後の広島藩政は、年寄生田筑後と二川清記（安政二年六月死去）を中心に運営されることとなった。広島藩では従来からの財政難に加えて、新たにペリーの再航によって築地藩邸へ出兵するなど、海防に要する費用が多額に及ぶことになった。広島藩の負債総額は、嘉永初年の守旧派政権下において百万両を超えていたという。安政元年六月、国元から江戸へ発つ前に生田筑後は浅野遠江へ、最大額の国元負債には着手せず、大坂と江戸負債については五十年賦とする趣法を立て、相手は納得しないだろうが、藩の財政的な窮状を丁寧の説明することにより「平和御頼談」するほかはないと、その負債再建案を示した。九月二日の「家乗」には、江戸から帰国する途中の生田筑後と用人堀田恂之助が大坂で藩債償却の交渉に当たり、「御借財五ヶ年浮置」という銀談が成立したと記されているが（六六頁）、これは単なる巷説に過ぎず、その銀談交渉は失敗に終わったと思われる。

このため生田政権下では、依然として領内でさらなる質素節儉を呼びかけて財政を維持するだけであった。この二年間に発令され、「家乗」に掲載された質素節儉に関する通達や事項は次のとおりである。

○安政元年四月九日 年寄衆から家老家へ対して着服・妻子着服・音信贈答などに関し「質朴之古風」に復するよう通達する。今回は一通りの儉約令ではなく、年寄衆、中でも生田筑後等が「格別」に質素を実践している（二五〇～二七頁）。

○同年六月十五日 厳島管弦祭に広島城下各町から出す御供船の飾りつけなどを行わないよう通達したため、御

用船以外は出船しなかった(四三頁)。

○同年六月三十日 来広した時宗の遊行上人(一念)に対する送迎儀式を省略して、家老・年寄が往訪する慣例を撤廃し、郡奉行・町奉行だけの往訪に留めた(四七頁)。

○同年八月九日 従来の藩財政困難に加えて海防のために生じた莫大な出費に対処するため、藩主浅野齐肃が、さらに諸有司が熟和して誠実に非常の節儉を行い、財政挽回の策を講じるよう江戸から親書を発令する。具体策としては駕籠を歩行・乗馬に改め、外出の際の無益な供連れ人数を減少するなど(六〇〜六一頁)。

○同年九月四日 二葉山社(現饒津神社)の祭礼は、前年に一日から二日間に戻したが、今年から再度九月十五日の一日だけとし、音楽も停止する(六七頁)。

○同年十二月十二日 東城浅野家でも前年秋より臨時の出費が相次ぎ、財政が困難であるが、恒例である十二月の家中への仕向銀は前年と同様に七分五厘渡しとする(九二頁)。

○同年十二月二十五日 嘉永元年十二月に発令された「嘉永の大儉令」を一部緩和し、歳暮の祝詞や年始の互礼などを復活する(九五〜九六頁)。

○同年十二月二十六日 着服・音信贈答・家居などにつき再度儉約の趣旨を徹底するよう通達する(九六〜九七頁)。

○安政二年六月二十一日 江戸から帰藩した藩主浅野齐肃は、自らの着服・飲食を制限するとともに、近郊への鷹狩りの際に充てる大洲新開・皆実新開の休所を撤去し、泉邸(現縮景園)内の幽玄庵の修理を中止するなどの親書を発令する(一四四〜一四五頁)。

○同年八月三日 東城浅野家当主浅野豊後は、自らの日常や外出時、また五節句・祭礼等の食事、常用の腕器、屋敷内の障子紙などまでも制限を加えて節約する(一五二〜一五三頁)。

○同年十二月一日 昌平が続く中で人心は虚飾に流れ、万端丁重すぎるため、諸事簡便を旨として無益の旧習を

廃止するとともに、丁重すぎる古格を省略して質直の士風に戻るようにとの思し召しが通達されたので、質素節儉と士風引立てについてはこのような旧態依然とした質素節儉の呼びかけに終始し、武備充実に着手して領内の士気を奮起させるような気概を感じさせる政策を実現することはできなかった。このため浅野遠江と上田主水・浅野

豊後の家老三名は幾度となく会談を重ねて対応策を提携審議している。この頃、「御用向」の内容については不明ながらも、彦右衛門を含む三家老家臣がしばしば往来を重ねていることが「家乗」の記事からも見て取れる。浅野遠江はしばしば生田筑後らを屋敷に招いて、言路洞開、人材抜擢、賞罰、世子慶熾補佐、士風復古、文武引立、財政再建、家中撫育、郡町憐愍という政策課題九か条を実行するよう懇諭したが、同意は得られても実行されることはなかった。生田筑後には財政困難に対処する才力が乏しいと判断した遠江は、生田を排除し改革派藩士を抜擢することにより、藩政を振起させることを決意する。そこで遠江は、三家老が藩主斉肅に直面して直接その裁可を乞い、実施に移すべきか、又は意見書を作成して年寄を通じて藩主に渡し、その裁可を得て実施に移すべきか、いずれの策を取るべきか上田主水・浅野豊後と協議した。これに対して主水と豊後は家老が直接藩主に言上するのは穏当でないと反対し、年寄を通じて意見書を藩主へ渡すことを主張した。しかし、遠江は辻勘三郎と密議した結果、遠江が単独で藩主に直言することを決断し、十二月八日に他の二家老へそれを通告した。翌九日、三家老が揃って寒気御機嫌伺いのため登城して藩主へ面会した後に、遠江だけが居残り、人払いをした上で単独で藩主浅野斉肅に対して藩政改革を実施するよう進言した。その要点は(一)藩政の中心機関である御用達所へ遠江自らが出席すること、(二)年寄生田筑後を更迭すること、(三)沢徳三郎(後の浅野外衛、浅野長訓の実弟)と辻勘三郎らを抜擢することであった。斉肅は即座にこれを了承したが、招き入れられた年寄武田大炊と浅野若狭が三日間の猶予を願ったため、後になって異議を主張しないことを条件に遠江は退出した。しかし翌十日遠江は、

上使として来邸した浅野若狭らから前日の判断を中止するという藩主の意向と、家老が藩政に関与しないことは五代藩主浅野吉長以来の遺法であることを伝えられ、計画が水泡に帰したことを知った。さらに、武田らは斉粛の内旨として遠江の隠居を勧告し、もしこれを拒否すれば藩主の公命として処分することを伝えた。

東城浅野家用人であった村上彦右衛門は三家老による藩主への言上については何も聞かされていなかった。十二月九日に登城した浅野豊後が通常の下城時刻になっても帰邸しないことを心配し、夕方再度出勤してから事情を知ったようである。ただし詳細までは説明を受けなかったのか、遠江が単独言上に及んだ件は主水・豊後へは協議されなかったと思い、彦右衛門は「何分不堪忍懼事也」と「家乗」に記している（二八六頁）。

十一日は非常にあわただしい一日となった。武田大炊ら上使から「御難題事」を突きつけられた三原浅野家から、周章狼狽して僕を連れず、釣燈も持たないまま久野秀太郎が東城浅野家へ駆けこんできたため彦右衛門も出勤、続いて三原浅野家へ使者として派遣された。彦右衛門が八時過ぎ（午前二時過ぎ）に帰邸した後、遠江は他の二家老に来邸を求めたが、豊後は風邪と称してそれを断つたため、その代理として彦右衛門は再度三原浅野家へ向かった。三原浅野家では上田主水・内記（安敦）父子と対応策が話し合われたと思われる。朝になると年寄武田大炊、続いて三原浅野家隠居浅野出羽、夕方には上田主水と東城浅野家には次々と訪問客があり、この事件への対応について忙しく協議が行われた様子が「家乗」から読み取れる（二八六頁）。

「資料集」第10集の解題でも記したように、浅野遠江は安政三年四月になって隠居に追い込まれ、三原で本藩に先駆けて西洋式銃隊の練兵など武備充実に専念することになる。生田筑後らが解任されて、野村良之進（帯刀）・辻勘三郎（将曹）ら改革派諸士が年寄に登用され、浅野右近（忠英）・上田主水（安敦）・浅野豊後（道興）の三家老と浅野遠江（忠助）が時々登城して藩政に参与するよう命じられたのは、安政五年に青山内証分家当主から本藩を襲封した浅野長訓が、本格的に藩政改革を開始する文久元年（二八六）以降のことである。

三 村上彦右衛門と東城淺野家周辺の動向

東城淺野家で弘化元年（一八四四）から用人役を勤める村上彦右衛門は安政元年（一八五四）正月で四十一才となった。厄年でもあり、伯父の水谷又左衛門に勧められ、「俗之事」としながらも二月二十日に神田八幡宮で厄払いを行った（一一頁）。

安政元年八月二十一日には、高齢で病気がちの同役佐藤与三右衛門が隠居を猶予される代わりに諸役を免除されたことに伴い「出衛様御用向引受」を命じられた。この担当は同六年九月二十七日に彦右衛門が「勤多端」となって宥免されるまで五年間勤めることになる。

安政二年二月十日には御前へ召され、「役向出精相勤満足」という理由で「御召下羽織」と肴料として千疋を下賜された。村上家四代勇藏や父の六代星右衛門は主家からこのような「重キ御褒賞」を度々受けていたが、彦右衛門は弘化元年一月二十七日に父の隠居に伴って家督を継ぎ、用人役を命じられて以来初めての経験であった。このため彦右衛門は「実ニ感戴かんたい之至、本意至極也」と感激し、家族や自宅の先祖廟だけでなく、東城淺野家六丁目下屋敷の隠居淺野周防（道博）や菩提寺の妙慶院・西向寺に眠る先祖の靈にまでこれを報告している（一一〇～一一一頁）。

彦右衛門は従来から外圧問題に関心が高く、前年のペリー来航に関する情報も詳細に「家乗」に書き込んでいた。ペリー来航に際しては、幕府が「国家の一大事」として、その対応策について諸大名をはじめ、旗本さらには庶民にまで意見を求めたにもかかわらず、広島藩では米国フィルモア大統領の親書と解の閲覧が三家老までに留まり、その家臣には閲覧させないことに憤慨し、前年の「家乗」に「縦たど御家来二而も外夷之事情等二達し、的切之存寄等申出候者も有之候ハ、御取用も可有之程之事」と書き残した。このようにペリー来航に危機感を抱く

彦右衛門は、安政元年には、浅野出衛から嶺田楓江の「海外新話」と斎藤拙堂の「海防策」、吉田与一右衛門から藤森弘庵の「海防備論」、渡部卓爾から林子平の「海国兵談」といった書物を次々に借覧し、海外情報を得ようとした。また同年九月十五日には、東城浅野家中の岡田八十太郎の紹介により、広島藩医市川文微の子で、大坂で緒方洪庵の適塾に学び、当時福井藩で砲術師範となっていた市川斎宮（兼恭）に面会する機会を得、その「發明之説」を聞いて深く感服し、「何分真卒実意之人、当地当時之秀才と称候人と者格別也、如斯人他藩之御用ニ被立候者可惜之事共也、噫」と、広島藩にその人がいないことを残念がった（七〇頁）。

東城浅野家では、ペリー来航直後の嘉永六年九月に、財政難や厳格な節約令の最中であっても、昼夜油断なく武芸稽古に励むよう家中に対して命じた。このため、その後家中では軍学（甲州流・劍術（貫心流・一甫流）・槍術（香取流）・弓術（日置流）・砲術（荻野流・南部流・外記流）・柔術（一甫流）・棒火矢などの武芸稽古に連日のように取り組むようになった。当主浅野豊後と出衛は香取流槍術に熱心に取り組み、広島藩の香取流槍術師範黒田弥五左衛門から印可を受けることができた。特に出衛は特に熱心に黒田に師事して、深く感心され、下総の香取神道家と黒田家にしか許されていない弟子取立ての免許も受けることになった（八九頁）。出衛は家中にも香取流槍術を奨励した結果、安政元年九月には、その業前は「当春見候節者拔群上達」したと彦右衛門は「家乗」に記した（六八頁）。彦右衛門自身も日常の勤務の傍らで諸武術を見聞し、自らも槍術・砲術・弓術などの武術稽古に熱心に取り組んでいる様子が「家乗」から窺える。

しかし三家老家のうち、東城浅野家は他の二家と比較して大砲開発が遅れていたことは否めない。広島藩では安政二年十月に、幕府へ届け出るため一貫目以上の大砲を調査しているが、三原浅野家と上田家では一三ポンドのホイットスル砲（忽砲）と、モルチール砲（白砲）をすでに所持しているのに対して、東城浅野家では一貫目以上の大砲を所持していなかった（一七六頁、ただし口径約二・三センチのハンドモルチール砲を所持）。また、安政元

年十月ごろには、上田家では岩国吉川家中の西洋流砲術師有阪淳藏（有坂長良）とその門弟を招いて江波で試砲を行い、上田家中からも有阪に師事する者が出ている。三原浅野家でも安政二年に有坂を招き、沖守次郎の自家隠居である為五郎に西洋式砲術を学ばせている。東城浅野家では「資料集」第10集の解題にも記したように、よく翌年になって美作国勝山から森谷慎藏という、江戸で修行した職人を雇い入れ、東城において六斤青銅製（砲径九・五センチ、砲身二四センチ、重量六〇〇キログラム）大砲の製造を行わせるのである。

彦右衛門と妻みつの間には安政二年五月二十五日に三男が生まれ、二十七日に他三郎と命名された。その出産は安産で、他三郎も誕生直後は丈夫なように見受けられたが、翌二十六日朝に乳を与えたところ「悪心」（吐気）気味となって飲まず、胸もとが悶えるように思われたため、義妹のたづ（森岡万之進室）に乳を代わってもらった。医師・松本良伯の診察を受けたところ「胸毒」という診断であった。午後になると今度は排泄が滞るようになり、夕方遅く一度尿がたっぷり出たきり、全く排泄できなくなった。そこで再度良伯に来診してもらい、浣腸を試したが無駄であった。翌二十七日は良順の父・玄順が昼前に来て、備急丸や浣腸などを試したがやはり排泄はできなかった。二十八日は良伯の弟三珠の診察を受けたが手立てはなく、若干の通気はあったものの危篤状態に陥った。啼声が強いことを一縷の頼りにして、良伯の勧めで、広島で種痘を普及させた上田家の名医である三宅春齡しゅんれいに受診したが診断に変わりはなく、二十九日には衰弱が進み、三十日明け六つ（午前六時ごろ）前に息を引き取った。わずか五日間の命であった。他三郎（義純童子）の葬儀はその日の夜に行われ、菩提寺妙慶院に眠る長男正介（秀山智英童子）の墓所に合葬された（一三七―一三八頁）。

七月十八日に他三郎の四十九日法事が終わり、八月四日にその位牌を妙慶院へ納めた五日後の八月九日、彦右衛門夫妻はまたもや次男幾三郎の急死という悲劇に見舞われる。嘉永四年（一八五二）七月十四日に生まれた幾三郎はこの年数えて五歳となり、前年の安政元年九月二十八日には袴着の儀式を済ませた。同月三日、岩崎常介の

江戸詰めの姪婿に依頼したという袴が江戸から届き、それを見た彦右衛門は「流石江戸拵二而殊外宜敷」と喜んだ（六六頁）。幾三郎は時おり口中を痛め、腫物ができ、腹痛で吐瀉し、風邪をひいて発熱するなどのことはあつても、決して病弱というほどではなく、医師の診察を受けて服薬すれば数日のうちには快癒していた。安政元年十一月頃からは東城浅野家上屋敷の奥からたびたび招かれて遊び、菓子などを戴くなど可愛がられた。幾三郎は亡くなる前日の夕方までは機嫌よく遊び、酉刻（午後六時）過ぎに床に就いた。翌朝卯刻（午前六時）前になって微熱を發し、さらに明け方に腹瀉を起こしたため、妻みつの往診で来宅した松本良伯に診察してもらつたところ、「格別之事ニも有之間敷敷」という見立てであつた。しかしその後閉塞気味となり、熱も出たため再度良伯を呼び戻し、脚湯治療をしたところ発汗して快方に向かいかけたことを確認して彦右衛門は出勤した。帰宅後七つ（午後四時）頃からは顔色が悪くなり冷汗を發し、始終うとうとして正気を失うように見えた。暮れ過ぎに良伯が来診した頃にはまた閉塞となり、脈も乱れるようになったため、良伯と相談して後藤松軒の来診を仰いだ。「危難之症」となつた。さらに金子元達を招いて浣腸を施すなど手を尽くしたが薬効なく、亥刻（午後十時）過ぎに死去した。幾三郎の成長を楽しみにしていた彦右衛門は、「案外至極之劇症」によるわが子の急死で惘然自失となり、「嗚呼天哉命哉」と悲歎した。幾三郎（実山賢秀童子）の葬儀は翌日夜に執り行われ、妙慶院の正介と他三郎墓の向かい側に新調された墓地に葬られた（二五四―一五五頁）。

過去にも長男正介、長女松濃というわが子を幼いまま亡くし、またこの安政二年にも短期間で二人の子供を失うという度重なる不幸に見舞われた彦右衛門夫妻は淋しく、また心細く感じ、十月十七日、縁類の藤川每登三男乙次郎を、養子に迎えるというではないが、生い立ちの世話をするので村上家に長期逗留させてもらえないかと申し出て、了承を得た。乙次郎はさっそく翌日から村上家に来て、最初は五日間、二回目からは十日間村上家に逗留して三日間藤川家で過ごすという生活を翌年三月まで続けた（安政三年三月四日、彦右衛門が多忙で、乙次郎の

素説などの温習の世話ができないなどの理由で解消)。

このほか村上彦右衛門の縁類では、東城浅野家中の辻清人(妹梅の夫)の父で、家司役を勤めた辻並次が安政元年三月十四日に死去した(光観院明山義雲居士)。妹梅は安政南海地震の前日、安政元年十一月四日に男子千之進を出産したが、余震が続き騒然とする中、同月二十一日に死去した(専祐童子)。彦右衛門の弟、森岡万之進と妻たづの間にも、安政元年十月十五日に女子おゆきが誕生したが、同年十二月二十八日に死去した(智証童女)。彦右衛門の父星右衛門と妻みつ(家小)の実家である木野家(家老上田家家中)では、前年七月十七日に誕生した、みつの兄一馬の男子百太郎が満一歳を間近にした安政元年七月一日に死去している(智蓮孩子)。安政元年九月十八日、一馬は支配下の歩行組同士の争論を調停しようとして失敗し、「外様御馬廻り役」を解任されて差控え(五日間)を命じられた。これに伴い彦右衛門は天保十一年十二月四日の父星右衛門の事例に倣い謹慎すべきか書面で伺いを立てている。

彦右衛門は安政二年一月中旬から左目に翳かげが生じ、執筆の際に困るようになった。一月十四日に眼科医の二宮五礼これいの診察を受けたところ、いわゆる「内障」の類だが、捨て置いてはいけないという診断を受けて、服薬と指薬を始め、二十七日にはもはや格別気遣う必要はないとされた。しかしその後も快復せず、五月十二日に妹の梅からの紹介で、「名灸」と評判の下九軒町喜久蔵から灸治を受けた。七月二十一日にも同人から留灸とめを受け、これでもう全快するだろうと言われたが、未だに翳は「自若じじやく」であった。次に八月二十五日には仁保島本浦村の藤井何某という眼医の診察を受けたところ、何れは「膿内障」となり、背中から悪血を取らないと実効はないので、四十日間同所での治療が必要と診断された。藤井は「余程功者」ではあったが、その治療を受けるわけにはいかず、翌日は廿日市まで出かけて蓮教寺れんきょうじ(長崎で蘭方医学を修め、眼科をよくした)という同寺(三代大潤か)の診察を受けた。蓮教寺の見立ては藤井とは少し考えが異なったが「何れにも難症」であることに変わりはなかった。九月十四日

に蓮教寺からさらに詳しい診察を受けたところ、まだ「内障」と診断するほどではないが、速やかに平癒させるためには「実張」と服薬と指薬をするよう指示され、その後も十月十九日と十二月二日に診察と施薬を受けている。その後は快方に向かったのか、眼病に関する記述は少なくなるが、「資料集」第10集の解題でも記したとおり、翌安政三年にも世羅郡小童村の按摩富助、安芸郡隠戸の鍼師源太郎から治療を受けている。眼病以外では、安政元年十月十日には耳鳴りがして小さな話し声が聞き取りにくいと松本玄順に訴え、服薬している。

安政二年は義母の慈君（仙）も体調を崩しがちであった。四月二十五日に高熱を発して吐き気を催した慈君は翌日には悪寒がして、さらには震えや譫言が出て嘔吐を繰り返すようになり、食も細くなった。二十八日に往診した松本良伯は軽い「瘧症」、松本玄順の見立ては「傷寒症」であった。五月十七日に完治するまで約二十日を要した。この間、全快はしないのではないかと覚悟を決めたという慈君は十七日、回復を喜び、増えた白髪が煩わしいこともあって、彦右衛門に頼んで髪を剃った。幾三郎の初七日法事があつた八月十六日には妙慶院へ依頼して「寿祥院光誉明心大姉」という逆修果号を得ている。八月三十日には項にできた腫物が疼くようになり、次第に大きくなって苦しんだ。膿も出始めて快方に向かった九月二十三日に医師の松本良伯が腫物を鉢を入れた。大量の血が出たもののそれで完治した。

安政二年には彦右衛門の家来（若党）が交代した。彦右衛門は、奉公人出替わりの七月十六日、病気のため勤めを果たせなくなった岩崎愛次に代わって十八歳の弘化四年八月十四日から九か年にわたって彦右衛門に奉公してきた家来永野平次郎（安政元年十月一日に千代吉から改名）に、暇を言い渡したのである。平次郎は「菟角平心得振熟与無之、猶此度甚心得違之儀有之候」というのがその理由である。平次郎は生来武芸を好んで日常的に稽古に励み、勤めの合間に「剣術千本仕合」を行い（一一四頁）、渡辺四郎右衛門から柔術目録を取得し（七五頁）、久野幾馬から貫心流の准免許を受ける（二二二頁）一方、四月一日には東城浅野家の席書の会へ無断で出席して彦右

衛門から戒められている。彦右衛門は平次郎の勤務態度について、嘉永三年十一月二十九日の「家乗」でも「家来千代吉兎角遊び歩行、ヤモスレハ行留りを致、用事ニ差間ニ相成候義毎々有之、是迄度々申聞候へ共不相改、今日も其儀有之候ニ付緊敷謹之、致下宿候様申聞来ル」と書いている。安政元年四月二十二日には突然宿下がりを願ひ出て彦右衛門の西向寺参詣に支障をきたし、同年六月には腰痛によって十日間も宿下がりにして、奉公を口入れた足軽田中栄作を通じて彦右衛門から異見されているので、この頃には平次郎の勤務態度に対する彦右衛門の不満は相当募っていたと思われる。彦右衛門は堀尾眠石を通じて平次郎への暇について堪忍できないかと慰留されたが断り、前年六月に平次郎の代理として勤めた経験のある水主かこ佐兵衛の二男兵藏（十八歳）を新たに家来（若党）として雇い入れた。

東城浅野家では、先々代当主浅野高平の正室高謙院が、実家である京都錦小路家にしきょうじで「御内輪之儀ニ付不被為得已御用向」があるという理由で京都へ帰ることになり、安政二年二月二十四日に広島を出立し戻って来ることはなかった。

また同家では出産が続いた。先代周防（道博）には、老女並たつから安政元年十月四日に男子舎人（同年十二月十五日に市松と改名、同三年三月五日死去）、安政二年十月十七日に太吉（安政三年四月一日に助七と改名、同四年十月二十三日死去）が誕生した。また出衛には、女中しつから安政元年四月三十日に女子常（同年六月二十一日死去）が、安政二年六月三日に男子はち之進（安政三年五月二十五日死去）が、十月には女中ちかから娘信（安政二年六月五日に於卓と改名、安政三年五月一日死去）がそれぞれ誕生している。

参考文献

- 『芸藩志』（文献出版、一九七七年）
- 『維新史』（吉川弘文館、一九八三年復刊）
- 『維新史料綱要』（東京大学出版会、一九八三年覆刻）及び東京大学史料編纂所『維新史料綱要データベース』
- 『広島県史』近世1・2・近世資料編Ⅰ・Ⅱ（広島県、一九七三～八四年）
- 『広島市史』（広島市役所、一九二三～二四年）
- 『新修広島市史』（広島市役所、一九五八～五九年）
- 『三原市史』資料編一・通史編二（三原市役所、一九七〇・二〇〇六年）
- 『東城町史』通史編（二冊）（東城町、一九九七～九九九年）
- 『日本歴史地名大系』35広島県の地名（平凡社、一九八二年）
- 林保登『芸藩輯要』（芸備風土研究会、一九七〇復刊）
- 小鷹狩元凱「芸藩三十三年録」、「自慢白鳥年中行事」（『元凱十著』、一九三〇年）
- 『広島県人名事典 芸備先哲伝』（歴史図書社、一九七六年）
- 『平成新修旧華族家系大成』（吉川弘文館、一九九六年）
- 『近世風聞・耳の垢』（進藤寿伯稿・金指正三校註、青蛙房、一九七二年）
- 三原市中央図書館蔵「上田家文庫」（広島県立文書館複製資料）
- 宇佐美龍夫ほか『日本被害地震総覧』（東京大学出版会、二〇一三年）
- 『新取日本地震資料』五、別巻二、一（東京大学地震研究所、一九八五年）
- 『佐伯郡医師会史』（佐伯郡医師会、一九七〇年）

村上家乗 安政元年・二年

(表紙)

家乘

安政元年

続編卷之十一

嘉永七年 極月改元

人皇百二十二代

今上皇帝御宇九年

御諱統仁

嘉永七年龍次甲寅

弘化丁未御即位、從神武元

平天下二年

年辛酉二千五百十二年

源家定公 徳川家康公十三代、從嘉永癸丑

治国廿四年

源齊肅公 浅野長政公十一代、從天保辛卯

齊家七年

紀道興公 堀田高勝公十三代、從嘉永戊申

兄弟方

寅卯之間

床飾

座敷

軸 由信蓬萊(翁野)

花 紅梅・水仙

居間

軸 庭田公御懷紙(金田)

着具并箱共

鉢植 万年青

勝手

軸 聿庵文字(頼)

鉢植 万年青

二日

海外新話者清英近年之取合

ヲ和文ニ訳し記候書ニ而、

鴉片始末与大同小異也、五

冊物也

元日

読初

大学三綱領

家乗統編卷之十一

嘉永七年甲寅

村上七世彦右衛門邦裕君綽謹記

正月 小

○元日、辛丑、曇、暖、慈君奉始皆々平安加寿、曉寅中刻起、若水、神拜、廟拜、手付熨斗、

祝詞、大福、屠蘇、菌固、読書始、吉書始、右祝式如恒規礼服ニ而行之、無滞相濟、味

爽麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞被為受、御家司中、引統御用人佐藤与三右衛門・

予・渡辺雅登一同罷出、御祝詞申上、御機嫌克被遊御超歳、御身祝・御規式等万端無御

滞被為濟、奉恐悦候段筆上(淺野)申上、夫於御次周防様江之御祝詞御用達堀尾精一郎迄申上、

直二出衛様江御祝詞御部屋ニ而申上、夫於御奥へ出、老女へ謁、退出掛北御部屋へ罷出、

高謙院様江御祝詞申上、御手付熨斗被下之、訖而帰宅、長喜三太祝詞旁入来

○二日、壬寅、晴或曇、暖、堀尾眠石祝詞旁入来、夕為伺御機嫌罷出、辻並次其後又々

食噎之気味有之、困候由二付夜訪之、酒出ル、祝詞旁參候也、夕森岡万之進祝詞ニ来、

祝盃致ス也、出衛様於海外新話与云書拜見被仰付也

○三日、癸卯、晴或曇、寒緩、午後六丁目御館江為御祝詞罷出、於

御側御酒頂戴被仰付、往来白神社・妙慶院・西向寺江參、森岡へも卒与寄、祝酒出ル、

妙慶院々々常々心得方宜、段々奇特之筋も有之趣ニ付、旧臘御誉之仰下り候旨被咄也、

歡を申、今朝辻清人祝詞旁入来、祝酒を出ス、夕平野藤吉郎来、同断、夜長喜三太来話

○四日、甲辰、雨、却寒、午後為伺御機嫌罷出、朝渡辺四郎右衛門入来

○四日、甲辰、雨、却寒、午後為伺御機嫌罷出、朝渡辺四郎右衛門入来

書初

君か代はあまの八千代を

さ、れ石の——

七日

立春

十一日、吉例之通具足鏡

開

十二日

一 七人扶持
被召出

勘十郎倅

沢田仙之丞殿

右年来学事心掛候二付、格別を以御扶持被下被召出候、此後弥以精出候様被仰出

十六日、於江戸

一 御加増五拾石
座順大御小姓頭之次

勤向唯今迄之通

中野富三郎殿

勤向御留守居也

○五日、乙巳、雨、寒、今朝御馬御乗初之処、雨天ニ而御延引ニ相成、五ヶ日雨天ニ而御

乗初御延引之事者文政九年以来二十八振也、朝為伺御機嫌罷出ル、身祝之祝

○六日、丙午、晴或曇、寒、節分之祝、今日方御役所出勤出初二候へ共、御省略中平服也、尤

予者御乗初へ罷出候二付麻上下着ニ而出ル、八時前退、山田多喜登・岩崎常介・長喜大夫祝

詞旁入来、常介・喜大夫江者酒を出候由、予留守中也、夕近隣旧臘挨拶事無沙汰之先方江行、

岩崎ニ而酒出ル、小倉甚右衛門方ニ而も達而酒出ル、後刻同人為挨拶来ル、夜節分之祝

○七日、丁未、晴、寒、立春、例時出勤、九半時頃退、夕槍術遣ひ初、渡辺雅登申合致

ス也、継肩衣着用、万之進來、辻並次義此間高橋文良老を迎、診を乞、薬剂も所望致

候由、同方被申方ニ而も何分大病難治之症之趣被申候由也

○八日、戊申、曇、余寒強、武内純介・由良保人・矢野源内・波多野権祐入来、権祐へ者

酒を出候由、松本良伯・同三珠も此間来也、妙慶院入来、午前為伺御機嫌罷出、夫方

直ニ海蔵寺へ拜参、和尚へ如例年玉壺封呈ス、隠僚をも訪ふ、堀尾眠石参被居、有将戲、

酒を被出、暫咄し先江婦ル、辻清人入来之由

○九日、己酉、晴、寒、例時出勤、夕八時退、夕槍術稽古、朝御馬へ出ル、御両殿様

御身据御鏡開例之通頂戴被仰付也、夜小倉甚右衛門・長喜大夫室来話、酒を出ス

○十日、庚戌、晴、寒、例時出勤、夕八時退、夕桑原吉郎ニ入来、祝酒出ス、夜慈君辻

江御出、御宿被成

○十一日、辛亥、晴、暄、午々木野・水谷・坪内・桑原へ祝詞旁二行、木野・水谷・桑原

ニ而者酒出ル、出掛御館へも為伺御機嫌出ル、御吉例之通御具足御鏡開二付御切餅頂戴

御加増拾石ツ、

本山小伝次殿

為積篤之助殿

〔十七日

松平雲州侯、(淺野齊藤)殿様御甥、

若殿様御従弟也、越富山侯

去ル弘化(三九)二年之御家督也

〔十九日

一御中老格

但只今迄之足輕其儘御

附被下

今中丹後殿

御年寄上座

右数年来出精相勤、近来足

痛難義可仕与思召、依之格別を以

右之通被仰付

一御切米三拾石

源六跡目

野口静馬殿

同日

〔此度御上小人之御抱四百

被仰付、御用達中方坊主を為持被差越、周防様方も御同様頂戴被仰付、一緒ニ持参ル、

御請申出ル

○十二日、壬子、雨少降、夕晴、寒、〔例時出勤、夕八時過退、〔星野武平次・坪内久米之助入来、

長束六左衛門・由良政太郎入来、〔慈君夜辻方御戻被成、〔夜万之進来話、酒を出ス、〔中

津屋より昨日(橋本屋)周五来、酒飯出ス、年玉沓封持来

○十三日、癸丑、晴、暄、〔朝素読所講釈始ニ付出席、例年之通白鹿洞学規、講師湯川新太

郎也、〔例時出勤、夕八時退、〔夕槍術稽古、〔此間頂戴之御具足御鏡并御身祝御鏡餅共今

日雜煮ニして拜食スル也

○十四日、甲寅、曇、寒、雨、夕罷、〔朝為伺御機嫌罷出ル、〔御門前左義長、雨天二候へ

共格別之事ニ無之候故、無御滞相濟、当年者御馬も四牽出候而殊外賑敷候由也、〔夕辻並

次病を訪、藤川江祝詞旁二行、堀尾へ旧臘贈物之挨拶二行、被留困某、入夜婦、酒飯も

出ル、永井仲之助をも訪、並次葉之義を談スル、撰州住吉安立町方出ル膈症丸之義也、〔今

日今門江者此御方様御馬者雨天二付不出、御両家様始御家中馬者極夕出候由、近年御家中

も馬数誠ニ大減少、惣体二而十六匹位迄ニ減候由之処、昨年以來者追々相増、四十牽許

二も相成候由也、今中丹後殿息権六殿之子息も当年七歳位二而、今門江乗馬二而被出候所、

毛坊主四人、若党兩人、小者其外御馬方等多人数付添罷越候之由、権勢之使然者、末路

驕奢之極与被考候事也

○十五日、乙卯、晴、余寒強、又雪飛、〔例時出勤、九半時前退、〔風呂を建、近隣来浴、〔山

村静人(登)・高木唯一等入来、森岡万之進も来、〔夜長喜三太来話

〔夜長喜三太来話

之余有之、皆々江戸江罷越候由、屹与御手当与申御趣意二而被遣候二者無之候へ共、内実者全御手当二付而之事之由也、尤右人数者近年稠敷御省略二而久敷御抱止居候故如右多人数御抱有之候由、何分彼是与御物入事多有之候由也

廿二日

雨水

廿三日

一御役御免
御寄合

寺尾石見殿

御年寄

一御旗奉行

山下右仲殿

御郡代御用人

一御役御免
御先手者頭

○十六日、丙辰、晴、余寒強、朝妙慶院へ参詣、例時出勤、夕八時退、夜家小帰寧、幾三郎も参宿

○十七日、丁巳、晴或曇、朝霜如雪、余寒烈、朝御乗馬へ出ル、夕槍術、今朝辻清人来、並次同篇之由也、撰州住吉安立町宝林寺へ出ル痛症名菓一包、桑原吉郎二方近所二持居候を一昨日所望致置候付服試候様二与申相贈也、松平出雲守様旧臘廿日御逝去被成候由二而今明日諸事穩便、尤普請者不苦旨被仰出也

○十八日、戊午、晴、暄、朝素読所会読へ出席、夫へ出勤、夕八時退、慈君午へ妙慶院へ御参詣、夫へ波多野権祐方江歛二御出、御帰り木野へも御寄被成、幾三郎・家小一緒二帰、森岡・水谷へも皆々卒与寄帰候由、夕小倉甚右衛門来

○十九日、己未、雨、寒、後温、朝例時退出勤、夕八時過退、森仙太郎時候見舞人来、御年寄上席今中丹後殿今日御中老格被仰付候由、此人者小身へ御拔擢を被蒙、文政年中へ執政職二被登、天保年中閔藏人殿退隱後者大政を一己二任しられ候へ共、惟自己之榮耀を事与し、權勢を被貪候而已二而、一も国家之大事を心与被致候実忠者不相見、国勢者日々左道二趣、當時如形恐入たる御時勢二相成候も、皆斯人之貞忠不足故之事二候へ者、屹与御咎有之候而、御国政御一新被為在度事与有有心人々窃二希居候趣二有之候処、今日之被仰付者案外之事共也、斯人之身二取而者大幸之至与云へし、噫、左之通被仰出候也

玉込二而鉄炮稽古之義、以来師家中宅二於而者四季共稽古有之不苦旨被仰出候、其外弟子中宅二於へ只今迄之通二候得共、当年者二月朔日へ稽古有之不苦旨被仰出候、右之趣—— 正月十九日

今中権六殿
大御小姓頭

一 御役御免
郡回り
横山十介殿

大御目付同格
御用達所詰頭取
御勘定奉行兼帶

一 町御奉行同格
御用達所詰頭取
足輕五人御附

永田完二殿
御勘定奉行

一 御勘定奉行

遠藤佐兵衛殿
御作事奉行

一 御役御免
浦辺御蔵奉行

横山十郎殿
御用達所詰

右仲殿者丹後殿弟、権六殿者丹後殿息、横山十介者丹後殿翼二有之候之処、皆々今日左遷也、寺尾殿も甚奸

○廿一日、庚申、晴、暄、午後為伺御機嫌罷出、夫方六丁目御館江も罷出ル、長喜大夫、森仙太郎江到来物之謝、山田多喜登へ時候見舞旁二行也、夜森岡万之進入来

○廿一日、辛酉、晴又曇、寒、例時出勤、夕八時過退、夕槍術稽古、渡辺四郎右衛門入来、兼而之着具・籠手相調候由二而持来くれる

○廿二日、壬戌、晴、暄、朝素説所講釈へ出席、夫方出勤、夕八時過退、西向寺江參詣不能、千代吉為參也、夕又御用向二而出勤、入夜五時過退、其前平田平丞為御用向二而来、謁ス、

〔夜辻方お梅年始旁二来候由、清人連来、酒飯を饗候由

○廿三日、癸亥、晴、暄、御嘉例御屋祈祷二付麻上下着出勤、明星院へ膳出候節相伴被仰付也、九ツ時揃二而足輕方武芸御透覧二付、為見分出ル、入夜相済退、周防様御出被遊、

於御次御機嫌相伺也、夜渡辺四郎右衛門来、内談事有之、跡二而有合酒を饗ス、今朝も出勤前来候也、御手回り庄助来、薪割を手伝呉る也、今日御祈祷之御供物頂戴被仰付、

帰宅之上紙面二而御請申出ル、今日も御上御役替之御用段々有之、唯今迄皆人奸物与唱、嫉候人々大方艾除二被遇候趣也、国勢も漸一新すへき歟与窃二恐悅を唱候之事也

○廿四日、甲子、雨、夕晴、寒、例時出勤、夕八時前退、西向寺へ千代吉為參也、吉本恒之丞今日跡被仰付也

○廿五日、乙丑、曇時々雪降、余寒冽、例時出勤、夕八時前退、夕御用向有之、遠江様へ罷出、於御表御居間御側江被為召、御用向被仰付、罷帰申上ル、主水様方吉田藤馬參居、一緒

二罷出、大和様二而脇本武兵衛二久振二而逢、去年十一月廿日三原出立、御内使二東武江罷越、夜前当所へ罷帰候由也、退出掛渡辺氏へ罷越、夜更帰ル、去ル廿三日左遷之面々

〔浅野忠助之〕
〔上田安節〕
〔宗右衛門〕

候人之由、十郎者十介子也
完二殿・佐兵衛殿皆當時之
人望也

〔廿四日〕

一〔御切米拾石
式人扶持〕

繁石衛門跡目

吉本恒之丞

勤向・筆列只今迄之通

右家芸弥以厚心掛、只今迄
之門弟稽古世話筋之義厚力
入候様被仰出、依之毎歳金
式百疋被下之

〔同日〕

江戸浦賀辺江此節重墨利加
船三艘渡来、諸家様方御出
張も有之、此方様二も築
地御屋敷江戸御人数出候由、
又々江戸大騒動二及候へ
共、何分夷人者至而穩便之
事之由也、実説与相聞也

者皆々衆之所嫉故当日御用之由追々承伝回勤、為見物多人数出湊、八町馬場辺成群集候由、
中二者悪口雑言を高声ニ云者も有之、彼是甚気毒千万之事ニ有之候由也、〔夜〕雪大降

○廿六日、丙寅、暁来積雪晷尺、近年之大雪也、余寒冽、嚴凝、〔朝〕為何御機嫌罷出、〔辻〕

清人入来、〔異〕国船渡来之節防禦筋之義ニ付而者、兼而段々嚴重之被仰出も有之候処、此

御方様築地御屋敷之義者防禦要害之御場所之由ニ付、御固メ可被遊哉之旨公辺御伺二相

成居候処、御伺之通御心得被遊、并同所最寄之海岸要地迄も御嚴重御固被遊候様被仰出

候由也、〔終〕日積雪不消、夜二入凝益甚、〔宝〕国童子祥月、妙慶院へ千代吉參せる也
〔村上彦右衛門弟康吉〕

○廿七日、丁卯、晴、余寒強、嚴凝、昨雪未消、地上も尚皚々たり、〔朝〕素読所講会読へ出

席、夫方出勤、夕八時前退、〔渡〕辺四郎右衛門朝夕来、三宅内外来、四郎右衛門皮之煉鍔

を持来、見せる、〔西〕向寺〔西向寺〕妙慶院へ千代吉為參、〔石〕州浜田沖二も異国船見候由風聞有之也、〔万

之進来候由

○廿八日、戊辰、晴又曇、余寒猶強、〔例〕時出勤、夕八時過退、〔夕〕射場江出ル

○廿九日、己巳、晴、暄、〔大〕柿忠次郎殿入来有之、此間吉本恒之丞義繁右衛門跡目被仰付

候吹聴也、〔脇〕本武兵衛入来、此間内々此方様方拜領物致候為御請来也、〔午〕後槍術、〔夕

辻〕清人来、酒を出ス、〔夜〕家小辻並次病氣見舞旁二行、慈君も御出被成、家小者藤川へも

卒与寄候由、おちかを伴帰ル

〔廿三日〕、於大坂

一御加増拾石 服部権右衛門殿

去ル十九日・廿三日兩日之御役替者、於江戸姫君殊外御国政之義御苦勞ニ被遊、乍恐奸佞人御芟除之義專御内助被為在候哉之趣、且又旧臘御三家様方も江戸表江御内々被仰上候義も有之哉ニ而、昨年霜月遠江様より三原御用人脇本武兵衛御内使二江戸江罷越候処、此間罷歸候由窃ニ承ル、彼是ニ而殿様ニも御奮発被為在、右様之御処置被為在候事共歟与奉恐察也、何分ニも偏ニ御国運御興復之兆歟与窃ニ奉恐悦候也

廿七日

一御使番

龍神角馬殿

一御槍奉行

松野文四郎殿
竹腰 恰殿

一御加増十石 得能保允殿

三日、於江戸

一御用人

御加増百石

小幡孫兵衛殿

大御小姓頭方

九日、於御城

一御目付

小瀬清九郎殿

一御代官

薬師寺小兵衛殿

二月 大

○朔日、庚午、曇時々雨、今日方予御武具役所引受故同御役所へ出ル、夕七時過退、初

午二付例歳之通御鎮守社御祈祷之御供物頂戴被仰付也、夕平野藤吉郎妻おたけ来、辻清

人も来、酒飯を饗、おちか者今晚も宿、夜長喜三太来、京師貫名（座巻）へ年始之書状出ス

○二日、乙未、雨、夕罷、猶曇、温、朝槍衛稽古ニ出ル、風呂を建ル、由良助三郎父兵

左衛門病死之由昨日永井仲之助方為知差越、伊田千松父定右衛門も一昨夜病死之由也

○三日、丙申、晴、暖、朝素読所講釈へ出勤席、夫御武具役所へ出勤、夕七時過退、藤

川おちか今晚帰ル、甚吉并下女迎ニ来ル、新開分島質証文此度改法相成候之由ニ而御移

檄出ル、事長故不記、畢竟此迄之証文與書等駢与引当ニ難相成、銀主不案ニ存候方島質

不融通、作人肥し仕入等ニ困り候由ニ而右様改法ニ相成候趣意也

一棒火矢方

杉谷龜次郎殿

去ル朔日

一知行高四百石

隼之進家督

竹腰左介殿

一御切米式拾九石

次内跡

速水瀬平殿

八日

啓蟄

十一日

佐藤益之丞

沢崎多八郎

大島五兵衛

長喜三太

平野藤吉郎

野口唯藏

岩崎良之進

右之人名申合、今日着具二而遠足、地御前迄参候之由、

○四日、^癸丁酉、晴、暖、夕寒、朝槍術江出ル、夕足輕方以下武芸御透覧二付為見分出ル、周防様二も為御透覧御出被遊、於御次御用達中迄御機嫌相伺也、^(敬進)芝山様方昨年之通御内々御扇子三握頂戴被仰付、告于廟、北之御部屋様通り来ル、依て別段二御請書状等者不差出候也

○五日、^甲戊戌、晴又曇、夕寒、例時御武具役所へ出勤、夕七時過退、堀尾眠石翁入来、内話事有之、夕由良助三郎父喪を訪、吉本恒之丞江跡目之歎二行、辻並次病を訪、酒出ル、帰藤川へ寄候様申来、参ル、酒被饗、亥鼓後帰

○六日、^乙己亥、曇、午前方雨、寒、朝弓術・槍術へ出ル、由良助三郎方故兵左衛門当座法事之由二付心行寺へ代参を遣ス也、^丙松本良伯入来

○七日、^庚庚子、雨、寒、後止、朝素読所会説江出席、直二御武具役所へ出勤、夕七時過退、^(永野)西向寺へ千代吉代参申付、藤川毎登殿年始旁御入来、酒・餅を出候由、家小午後腹痛、嘔吐有之、臥

○八日、^丁辛酉、晴、暄、朝槍術稽古出席、午後頭痛甚敷、臥、家小今日も吐有之、時々腹痛困ル、夕松本玄順入来、暫咄ス、矢野源内御用向二付明朝出立、東城江罷越候由、^戊為暇乞入来、此方方も参ル

○九日、^己壬戌、晴、寒、例時御武具役所へ出勤、午前頭痛甚敷致難儀、夕七時過退、家小今日も困ル也、疣虫之事与相見、虫度々下ル、虫薬を服候故也

○十日、^庚癸亥、晴、暖、朝槍術・弓術へ出ル、吉本恒之丞此間歎二参候謝入来之由

○十一日、^庚甲辰、曇又晴、夜風吹、朝御乗馬へ罷出、例時御武具役所出勤、夕七時過退、

着具者御武具役所ニ而拝借相調候也

〔十二日、槍術仕合、式百本遣ふ也

〔十八日、久野秀太郎より、刃鉄卷二重鍛、三拾目玉之

新筒壹挺抄物之由ニ而先達而頼越候ニ付、御武具役所

江御買入之義申談、御買入ニ相成也、価金六兩三分也

〔十九日、御先手者頭奥龜太郎殿旧臘廿二日出立、江

戸江被罷越候途中、江州水口ニ而病氣被取当、終同所

ニ而去ル九日死去被致候由也

〔同日被仰付
一御番頭

寺西雅楽殿
御仲小姓頭カ

一御仲小姓頭

〔蔵田和太郎入来之由

○十二日、^辛乙巳、晴又曇、風吹、寒、渡辺雅登・同姓四郎右衛門申合槍術終日稽古致、富永源五郎・長弥三郎も出ル也、^幾三郎今朝カ少々気重之様子ニ有之候処、午前閉塞之氣味有之、依て松本良伯を迎乞診、少々氣候ニ当り熱有之候へ共格別之義ニ者無之旨申候由、夕方又々閉有之、速ニ開、^小倉甚右衛門・長喜三太為見舞入来、^夜森岡万之進來、酒飯を饗

○十三日、^壬丙午、晴、余寒強、曉微雪、^朝素読所講釈へ出席、直ニ御武具役所出勤、夕七時過退、^幾三郎今日者大二快、気軽也、^朝松本良伯来診、最早宜敷旨申也、^長喜大夫

室見舞入来、^矢野源内室・小倉後室入来、見舞也

○十四日、^癸丁未、晴、冷、夕曇、^朝御内密稽古へ出席、^午カ六丁目御館へ為伺御機嫌罷出、往來蔵田和太郎・下瀬孫平殿留守・田辺幾衛殿を訪、森岡・波多野権祐・菅多久馬・

木野へも見舞帰、木野ニ而酒出ル、^今晚森岡万之進其外山田多喜登・伊藤徳之助等七人着具ニ而遠足致候由也、^朝松本良伯来診、^幾三郎愈快候也

○十五日、^庚戊申、雨暖温、後晴、^例時御武具役所江出勤、夕七時過退、^辻並次見舞千代吉遣、見舞之品を贈

○十六日、^辛己酉、曇、寒、^朝御寄合ニ付御館へ出ル、^午後妙慶院・西向寺へ参詣、^夕弓術、^夕木野一馬入来、当年初而也、酒を出ス、^伊藤徳之助入来

○十七日、^丙庚戌、曇、寒、^朝御乘馬へ出、^例時御武具役所へ出勤、夕七時過退、間ニ而

被為召御居間へ出、渡辺へも御用向ニ而行、^岩崎常介入来、此間源之進前髪を取候飲ニ

小鷹狩平馬殿

御先手者頭癸丁

一 御先手者頭

一 柳弥三右衛門殿

御槍奉行甲戌

一 御勘定奉行

今村文之助殿

郡回り乙

行候謝也

○十八日、辛亥、朝雨、夕罷、寒、(所脱カ)朝素読会読ニ付出席、夕弓術、夜辻並次病を訪、同

篇之趣二者候へ共、只様羸疲増候様二見ゆる、藤川毎登殿・菅多久馬母参り居、酒出ル、

風呂を立

○十九日、壬子、晴、余寒、朝炮術稽古ニ出、例時御武具役所出勤、夕七時過退

○廿日、癸丑、晴又曇、余寒、夕晴、暖、(又左衛門)当年四十一歳、水谷伯父君之御勘二随、俗之

事なから今朝厄祓をいたす也、朝神田八幡宮江参詣、帰途竹腰恰殿へ先達而御槍奉行被

仰付知せ被差越候挨拶・欝券二行也、午後弓術申値、数射を致入、渡辺雅登・堀尾精一

郎・石井寿兵衛・山県兵太郎・星野幸次郎也

○廿一日、甲寅、快晴、朝有霜、甚冷、後暄、例時御武具役所へ出勤、夕七時退、間二而

御館江も御用向有之、出ル

○廿二日、乙卯、快晴、暄、朝素読所講釈へ出席、槍術稽古ニも出、午後西向寺江参、

帰り佐藤江参、元家来三次御抱之儀取持被呉候様厚及内談置也、右者去ル天保十五年春

先考御退隠被遊候砌、御口演書を以堀尾五郎八在勤中ニ而同方江御内談被成置候処、其

後不得已仕儀ニ而暇遣し候へ共、只管御家人之義歎き居候趣、第一者先考右様御内願も

被成置候義故、何とぞ御時節を以御志願相立候様ニ与是迄も窃ニ希願罷在、折々者堀尾

翁へも相頼候義も有之候得共、何分ニもか、る御時合故強而も難相願訳合も有之、只時

節を見合罷在候処、昨年者渡辺氏(宗右衛門)・佐藤氏家来御抱も有之事ニ付、御時合中ながら厚相

願置也、尤昨冬渡辺雅登江も厚頼置候之事也、夕弓術稽古ニ出ル、矢野源内今夕東城

〔廿三日〕

春分

〔藤森恭助者江戸芝住居人之由也、儒者之由也〕

〔廿四日、木本衛門殿弟有之、いか、之故歟横川辺二別居致被居候由之処、常々仕向等之不足を不快ニ存候事共歟、昨日日本家へ来、衛門殿留守中大ニ荒狂ひ、夫方御城内ニ而衛門殿下城を待受、於途中悪口打擲等ニ及び、組付坏致し散々之仕合ニ付不得屋敷江連帰、

夜前手討ニ被致候由、珍事也、右之趣申出有之、檢使も有之、死骸見分等有之候由、其後之様子者未聞、右弟者元来狂気ニ有之候由也

方歸候由、(与一右衛門)吉田方之書状届来、歟使遣ス

壬辰

○廿三日、乙卯、雨、温、例時御武具役所出勤、七時過退、朝矢野源内入来、辻清人も同断、辻下女民来候由、吉田与一右衛門方海防備論与申書を見せ来、藤森恭助誌与有之、備中新見藩之人共歟、昨年重美理加船渡来書翰之義ニ付公儀御処置振之趣向を備と論したる書二而、余程卓見ある人与見へ、甘心スル也

○廿四日、丙辰、晴、暄、朝夕槍術へ出ル、江戸青山緑町方去ル十四日晝出火、同所御屋敷外御長屋一棟御類焼、尤外御別条者無之由、并江戸表江重墨利加船八艘渡来、追々近海江乘込、従公儀被仰出も有之、一之手御人数築地御屋敷江被差出、於公儀も彼是御手当も有之、未退帆不致候ニ付、此先之動靜難計候得共、先平穩之趣江戸方申来候段、御年寄衆方被申上候由也

癸巳

○廿五日、丁巳、晴、暖、夕曇、例時御武具役所へ出勤、夕七時過退、夕水谷又左衛門殿御出、酒を出、夜迄御咄被成

甲午

○廿六日、戊午、快晴、寒、寺西雅楽殿御役成誓詞ニ被罷出候ニ付、朝御館江出勤、午

乙未

後石井稽古場方白島中河原へ遠的稽古ニ出候付出ル、尤行掛西向寺へ参、井沢寿体先達而病死之跡を吊之、ニ付帰掛辻へも卒与見舞、並次追々羸疲之趣也、夜中窃ニ着具ニ而遠足を試、先達而手入調候を着し試、殊外工合宜敷候也、神田橋方二葉山新道通り奥海田町(安芸郡)離れ迄参り帰ル、晝七時前帰宅、石井寿兵衛・三宅内外を伴、小島左源太・桑原盛藏・中島庄七も同伴を乞、一緒ニ参ル、皆々者御武具方御貸具足借用ニ而参ル、予も千代吉江者番具足を借用、着せる也

江者番具足を借用、着せる也

廿七日被仰付

一 御加増四百石
御年寄役

藤田新五郎殿

御用人上席方

一 御切米四拾貳石

一 馬跡目

山村恒之丞殿

○廿七日、己未、晴、朝有霜、冷甚、朝御内密稽古ニ付出ル、御武具役所へ出勤、夕七時過退、

松本良伯入来、万之進同、風呂を建、三宅内外来浴、慈君夜街上へ御出被成

○廿八日、庚申、晴又時々曇、風雨、余寒甚、朝槍術へ出ル、午後堀尾精一郎宅ニ而申

合数射有之、出ル、同方之射場初而見ル、好射場也、尤射前者無之、帰掛辻へ見舞、兼

而約し置候故大久保武藏鎧を持参、読聞ス、入夜深更帰ル、慈君も夜御見舞、直二御宿

し被成、酒飯出ル、今日出掛隆玄院を訪

○廿九日、戊戌、晴又曇、朝有霜、余寒強、例時御武具役所へ出勤、夕七時過退、辻清

人入来之由

○卅日、己亥、晴又曇、朝有霜、余寒強、御乘馬江朝之内出、午後射術、夕槍術稽古、池

田加賀守入来、謁ス、先日八幡社江(神田八幡社)参候節軀之義相尋候処、其後しらへ出候由ニ而神代

卷通証・和訓栞等之書持来見せる、親切之仁也

三月 小

○朔日、庚子、曇、余寒強、今日方御館へ出勤、尤当月方与三右衛門月番被勤候故、予非

番也、夜慈君辻方御帰被成

○二日、辛丑、快晴、寒、夕少温、朝御乘馬江罷出、見せ馬有之也、槍術稽古へも出ル、

夕御内御用向ニ而遠江様へ罷出、於御居間御逢被為在、主水様方吉田藤馬罷出也、日之

入頃帰宅、直二御館へ罷出、夫方渡辺氏(宗右衛門)へ行、亥刻後帰

○三日、壬寅、曇時々雨、午後晴、寒、朝五ツ時麻上下着罷出、御登城前於御居間御祝詞

申上、周防様江之御祝詞於御次御用達堀尾精一郎迄申上、出衛様へ御祝詞於御部屋申上、御奥へも出、夫方退出掛北御部屋へ罷出、高謙院様へ御祝詞申上、御殿斗被下之、〔浅野道博〕当年六丁目様二而於磯殿御初雛二付、一昨年迄之例二而者同勤申合輕御鉢肴差上候得共、当度者昨年以來格別之御省略中之事故其義も相止、何も不差上候也、御上之処も御方々様御招事も不被為在、皆共刃被為召候義も無之候也、午後堀尾眠石人来、囲碁、夕節句之酒肴を饗ス、〔辻〕清人并森岡万之進入来、酒飯を出ス

○四日、癸卯、晴、寒、朝槍術へ出、此間之見せ馬又々来候二付御馬場へ出、直二出勤、夕八時頃退、伊助〔川本屋〕へ訛置候陣大小鞘塗出来持来ル、此二而皆出来也、夕射場へ出ル

○五日、甲辰、晴、暖甚、初脱綿衣、朝御乗馬へ出、夕弓術、渡辺雅登申值数射を致ス也

○六日、乙巳、曇、午後雨、有雷鳴、射・槍術江出、例時出勤、夕八時前退、暖甚、今日方部屋炉を塞、夕方辻並次病を訪、入夜帰

○七日、丙午、晴、寒、朝素読所へ出席、会読也、午前出勤、夕八時頃退、夕吉田藤馬

具修覆等相調、今夕四郎右〔渡辺〕衛門持来ル也

就御用向入来、謁、右二付御館へ出ル、夜又渡辺へも行、西向寺〔永野〕へ千代吉為參也

○八日、丁未、曇、寒、夕射場へ出ル

八日
清明

○九日、戊申、晴、朝有霜、冷、朝御内密稽古二付御裏へ出、夫方出勤、八時退、退出後御用向二付主水様二而福山直衛宅へ參、謁、晚景帰、御館へも卒与出ル

八日、飯田氏・井口氏兩流申合馬寄有之、近来二無之馬数も多出候由、御三家様御馬も出候由也

○十日、己酉、晴又曇、風吹、寒、例時出勤、夕八時退、退出後射場へ出、風呂を建、浴、夜辻並次病を訪、何分余程陽脱之様子二見ゆる、清人も今日方看病願差出、早速御免有之候由也

十日、此間之見せ馬御買入二相成、名桜戸と云、是二而御馬六牽二相成也

九日、於御城

知行高五百六拾石

新太郎跡目

伴 三之丞殿

○十一日、庚戌、晴、暖、朝御用向二而御館へ出ル、午後御乘馬へ出ル、今日者高謙院様御所望二而御透覽被成候付、御相手面々多人数御馬場二而乘馬、借も二匹、御貸入二而駆候も段々有之也、御馬松枝駆殊外能參候也、夜辻へ見舞人遣、先同篇之由也

○十二日、辛亥、晴、暄、朝槍術へ出、例時出勤、夕八時前退、夕弓術、又槍術、君午後方辻へ御出被成、御宿被成、並次同篇与申内追々差重候由也、当春異国船渡来二付江戸近辺海陸御固被為蒙仰候御場所附佐藤与三右衛門方借覽、左之通り也

浦賀御奉行

戸田伊豆守殿
(氏栄)
伊沢美作守殿
(政義)

品川一御台場
同 二御台場

松平誠丸様
(典則)
松平肥後守様
(容保)

品川三御台場

松平下総守様
(忠因)

大森羽根田

松平阿波守様
(経須賀齊裕)

武州本牧

松平相模守様
(池田慶徳)

同 金沢

米倉丹後守様
(昌秀)

浦賀大津

細川越中守様
(齊徳)

同 御助力

細川能登守様
(利用)

三浦三崎

松平大膳大夫様
(毛利慶親)

相州三ヶ所下田出張

大久保加賀守様
(忠愨)

三崎御相番
(大森)

井伊掃部頭様
(直徳)

豆州下田

水野出羽守様
(忠忠)

房州洲崎

松平内蔵頭様
(池田慶政)

上総富津天神山

立花飛騨守様
(兼忠)

御殿山

松平越前守様
(慶心)

芝高輪

松平越後守様
(齊忠)

、高輪敷

酒井雅楽頭様
(忠頼)

深川洲崎

松平越中守様
(正徳)

浦賀御加勢

真田信濃守様
(幸政)

鎌倉小山

小笠原左京大夫様
(忠敬)

房州海岸

酒井安芸守様
(忠一)

同

稲葉兵部少輔様
(正巳)

高輪金杉橋

松平薩摩守様
(島津斉彬)

上総海岸

水野志岐守様
(忠定)

上総海岸

林(忠勉) 播磨守様

同

黒田(直勝) 豊前守様

同

(大河内正和) 松平備中守様

下総寒川

堀田(正勝) 備中守様

同浜ノ村

森川(後民) 出羽守様

上総勝浦外海

大岡(忠勉) 兵庫頭様

同一ノ宮

加納(久敬) 備中守様

下総銚子

(大河内輝勝) 松平右京亮様

上総飯野

保科(正益) 弾正忠様

同佐貫

(正身) 阿部駿河守様

惣御人数合四十八万五千百余人 但一万石二付千人

但此人数積不審、実積二者あらざるへし

〔万之進入来、先妣君当月廿二日廿五回忌御正当二付、御墓所磨昨日西向寺江千代吉遣し、御馬捕出人国蔵を頼、手伝くれる、立派ニ相成候由、今日シツクキニ又々千代吉遣ス、来ル廿二日差間無之候ハ、法事執行致度、並前夕此方来呉候様口上ニ而申遣、承知之返答也

〔十三日

今明日石井園蔵方花見京矢

代有之、夕方出席

〔十四日、辻並次法名

光観院明山義雲居士

○十三日、壬子、晴、午後曇、暖、夜雨、朝素読所講釈へ出席、直ニ出勤、九時過退、

〔三月十三日(朱書貼紙) 左之通夜前御年寄衆方被仰上候之由也

先月晦日出之早道到着、此度重墨利加船江戸近海へ渡来ニ付而ハ從公儀被仰出之趣も有之、築地御屋敷江御人数出有之候処、弥平穩、不日ニ退帆之御見込有之由ニ而、海岸通屋敷々々御固ニ不及旨從公儀被仰出候ニ付、築地御屋敷江出張之御人数も引取候旨從江戸申来候

○十四日、癸丑、雨、午後罷、夜晴、早朝辻方並次病氣不出来之旨為知来、早速見舞、今朝夜引明頃絶續之由、当年六十五歳也、就右終日見舞合、夜五時出棺を見送り帰ル、慈

十六日早晨

酢和会

香茸

うと

御皿

こんにやく

油あけ

にんしむ

けん

みそ

御汁

菘豆ふ

推たけ

御飯

御香物

したし物

ちさ 針生質

葛煮

玉ふ

御坪

銀杏

岩たけ

筍

落

御平

しゐたけ

わらひ

油あけ

御菓子

焼饅頭

巻せんへい

吹よせ

君者其儘御逗留被成也

○十五日、甲寅、晴、寒、例時出勤、夕八時前退、夜中槍術、夕弓術へも出ル

○十六日、乙卯、晴、寒、先考御祥月忌、宿戒、晨興、礼服、献膳恒規之通相濟、先妣君

も御一緒二配祀仕ル也、朝妙慶院江参詣、例時出勤、夕八時前退、小倉甚右衛門入来、

夜辻へ見舞、千代吉遣ス、豊屋喜右衛門俵来、豊表替少々致ス也

○十七日、丙辰、晴、寒、夕曇、御法事前二付掃除等致ス也、周防様昨日古江御山へ藏

採二御出被遊候由二而、藏式把頂戴被仰付也、告于廟、夜雨

○十八日、丁巳、雨、午後罷、寒、例時出勤、夕八時過退、西向寺へ廿二日之備物為持遣、

并廿一日夕八時来くれ候様案内申遣、承知之返書来也、尤利円廟(村上三郎右衛門)当八百五十回忌御相

当二付、廿二日江取越、一绪二法事相頼候積故其段も申遣、備物も一绪二遣ス、木野・水谷・

森岡・桑原へ法事案内遣、辻・藤川江者昨日案内相濟也、辻方明十九日光観院初七日逮

夜二付夕方参候之様案内申来ル

○十九日、戊午、晴、暖、朝六丁目御館江為伺御機嫌罷出ル、九時頃帰宅、直二出勤、同

半時過退、夕八時頃辻へ参、誓願寺并一绪内・近隣彼是会、入夜慈君御同伴二而帰ル、

藤川・岩崎江も行掛卒与寄也、岩崎二而法事之案内申置也、夜岩崎およし来、当年初而

来候故酒を出候由

○廿日、己未、晴、暄、辻法事二付誓願寺へ千代吉代参二遣ス也、朝槍術江出ル、夜水

谷伯母君御出、御宿被成

○廿一日、庚申、晴、暖、例時出勤、御断を申少し早く退、先妣廟廿五回忌御逮夜二付、

夕御茶
(さ、け飯
団子)

右森岡・辻へ贈ル

〔十七日、海棠満開也

〔十八日、年回ニ付左之通

り茶壹袋ツ、贈之

木野氏 水谷氏

辻氏 藤川氏

森岡氏

〔十八日、西向寺へ備物

一御経料 銀五兩

一御鉢米 精五升

右廿五回忌之分

一御経料 金百疋

一御鉢米 精五升

右百五十回忌之分

一僧中江 銀貳匁

以上

〔廿一日廟飾

餅 焼饅頭

夕八半時頃西向寺来儀、於内廟読経・念仏・和讃相濟而、座敷ニ而膳并ニ酒を出ス、昨
年已来之被仰出ニ付、此度者別而手輕ニいたす也、但右読経者兼而之通利円廟当八月九日
百五十回忌をも取越回向相頼候ニ付、阿弥陀経再遍読誦也、今日招候人々左之通

西向寺

水谷又左衛門殿

森岡万之進

平野藤吉郎

森岡後室

田中榮作

同人妻

松本清次

外ニ西向寺家来、木野・水谷家来、久保万治娘

同伴僧

藤川每登殿

長束茂兵衛

桑原吉郎二

同 弟婦

同人妻

永野武八郎

久保万治

林茂平太

真藏事 国藏

木野一馬

石井園藏名代寿兵衛
来

岩崎常助(介)

水谷伯母氏

岩崎およし

田中実五郎

御馬捕

御馬捕

御馬捕

右内森岡姑婦・岩崎およし不来、其外皆々被来、下方ニ而者松本清次不来、外出入之者
者当时之義故不呼、明日当番之者計江残酒ニ而も為飲候積也、料理者武八郎江頼、国藏朝
方頼手伝呉る、通者万治娘を頼也、献立者左之通

膳

酢和会

蓮根

油あげ

人しむ

こんにやく

味噌

椎茸

汁 苞豆腐

青身

飯

飯

香物

香物

香物

寒具 卷煎餅

団粉

花

桜数種 胡蝶花

餘藤 映山紅

葉牡丹

同日到来物

一蒸菓子切手 木野氏

一菓子代 水谷氏

一同 藤川氏

一線香 石井氏

一菓子料 森岡氏

一同 岩崎氏

一外郎餅二 長束氏

一線香 平野氏

一唐菓子 桑原氏

一菓子料 辻氏

一丁字麩四十 佐藤氏

一花数種 堀尾氏

中酒

新盃

硯蓋

かす泥卵豆腐
蓮根 久年甫
ひしき かわる

平

人参 牛房
椎茸 吉野麩
青身

浸物

ちさ
生姜

吸物

すめ
菊豆腐
木の芽

小鉢

こんにやく糸
猪口からしす

くつ煮

椎茸

大盆

八寸

白玉麩
石焼豆腐
竹子

酢漬

さや豆

井

うと
小倉麩
三ツ葉

茶菓子 焼饅頭

下方之分猷立左之通

〔廿二日夕

御茶

牡丹餅

右辻・佐藤・堀尾三家へ贈る也

皿 酢わへ

汁 みそ 豆ふち 青み

四寸 安平麩 かつ溜り

めし

香物

酒肴

八寸 石焼とうふ ちさ

井 からしわへ こんにやく 水菜

〔廿三日

穀雨

〔廿三日、上田様ニ而長州

萩ニ於て六戸美濃殿御奥

様、主水様思召之義も被為

在、御離縁御引戻之義被及

御和談、御届も被為濟候由、

今日御知せも有之候由也

右者昨冬以来当所へ御

出、御逗留被成候之由也

〔廿七日

一御先手者頭

片岡大記殿

御馬回り方

水谷伯母君者今晚も御泊、万次娘も泊ル也

○廿二日、辛酉、曇後雨、寒、〔先妣君二十五回忌御相当也、朝五ツ時過西向寺へ参詣、

法事中相詰、観無量寿経・無量寿経有之、四ツ時過相濟、左之通参詣、法事中被相詰也

木野一馬殿

石井園蔵

森岡万之進

長束清次郎

平野藤吉郎

田中実五郎

久保万治

林茂平太

前後参詣、水谷又左衛門殿・佐藤与三右衛門殿代参・堀尾精一郎代参・辻清人代参・岩

崎良之進・桑原吉郎二等也、〔帰宅後直ニ出勤、夕八時過退、右ニ付今朝素説所講釈者佐

藤へ頼候而不出、夕射場へ出、水谷伯母氏今晚御帰、尤又藤川江御出之由、同方方迎來ル、

〔今日出入之者少々来、残酒并茶を饗也

○廿三日、壬戌、晴或曇、風吹、〔朝石井・佐藤・岩崎江法事之節之謝ニ行、佐藤ニ而者岩

崎娘さく勤向心痛事有之由ニ而、此間同方およし方頼之趣ニ付及内談置候義有之也、夫

方誓願寺ニ而辻並次墓所江参、吉本繁右衛門先生墓所江も去年以来未参候故卒与拜、桑原

一 御切米御扶持方被召上
逼塞

小池剛三郎殿

御騎馬弓

右金銀貸借之儀ニ付兼而被
仰出之趣も有之候処、品物
預置取替候銀札利息高歩
之取引仕候段達御聽、士分
二有間敷次第甚以不埒ニ思
召、右之通被仰付、尤家督
者可被下置ニ付相応之者相
撰申出候様被仰出

一 願之通隠居被仰付

国泰寺

一 国泰寺住職被仰付

道寛和尚

吉郎ニ・平野藤吉郎へ謝ニ行、帰ル、兼約ニ付午後堀尾精一郎方射場へ数射ニ行、夕方直ニ被留開基、入夜深更帰、酒飯出ル、石井寿兵衛昨夕之謝入来

○廿四日、癸亥、晴、暖、朝槍術へ出、例時出勤、夕八時前退、夕御乗馬へ出、夫方香

取流槍術御相手之面々稽古を見物ニ出、何れも去年以来之稽古ニ候得共格別之出精故、業前余程手ニ入候様子驚入也、岩崎常介此間之謝入来、森岡弟婦朝方来、夕方万之進も迎ニ来、酒鮮を饗、岩崎およしも折柄来、酒鮮を饗、今朝西向寺へ千代吉代參申付、長束茂兵衛も為謝入来之由

○廿五日、甲子、晴、暖、例時出勤、夕八時前退、夕射場へ出、昨夕松本三珠来、今夕何れ茂同方水楼へ招、豆腐田楽振舞度候間參具候様申来候得共、当御時節柄之儀、殊ニ一昨日者御上方も質素節儉筋之義厚被仰出も有之由ニ付旁相断置也

○廿六日、乙丑、朝雨、雷一声、巳鼓頃を霽、六丁目様ニ而於磯殿此間氣候ニ御当り被成、御吐乳度々被為在候由ニ付、午前を為伺罷出ル、昨日以来者大ニ御宜候由也、今日者最早御氣輕ニ被成御坐也、木野・水谷・森岡へ法事之謝ニ行、木野ニ而者酒出ル、八時過
帰宅

○廿七日、丙寅、晴又曇、時々雨振、寒、朝素読所会読江出席、直ニ出勤、夕八時前退、夕藤川・辻へ此間之謝ニ行、三宅吉左衛門をも訪、辻ニ而酒出ル、西向寺へ代參申付ル

○廿八日、丁卯、快晴、風寒、朝槍術へ出、藤川每登殿此間之謝御出、例時出勤、夕八半時頃退、長束茂此間之謝入来、(茂兵衛)松本良伯入来之由、夜渡辺四郎右衛門入来、今日方横関稽古場へ稽古ニ參候由咄ス、執心之段致感心也、周防様方御慰ニ被仰付候由ニ而御

〔亜墨利加人日比金介与云者之詩也〕
海城寒折月
生潮波際連
檣影動揺從
是二千三百里
北辰星下立
銅標

右者当地へ參候而之作之由、
金介与申者原仙台之士人、
有罪亡命、亜墨利加へ參り、
官人二成居候者之由也

薩州侯軍艦御製造御届之写

一大船拾貳艘

鮮一器御内々ニ而頂戴被仰付、必竟先達而御遠鏡數々直し差上候二付、其御謝意与見恐
察仕、御懇之御義、却而恐入候事也、告于廟、拜味仕也、今日出勤中足冷二付当夏秋中
時二取足袋相用申度段同勤与三右衛門迄申出置也

○廿九日、戊辰、晴、今午後昨日申出置候足袋之義、勝手次第仕候様被仰出候旨御家司中
方紙面ニ而申来、御受返書差出ス、風呂を建、夕槍術へ出ル、夜長喜三太来、同人昨
年窃二十日市町ニ而筆道指南を始候故、堂号を付度由ニ而頼、咸集堂与命遣ス也

内

- 三艘 長サ三拾間、横七間壹尺八寸 炮数三拾八挺 炮門三拾八 二段
- 三艘 長サ五間貳尺
- 三艘 長サ貳拾八間、横六間三尺六寸 炮数三拾四挺 炮門三拾四 貳段
- 三艘 長サ四間五尺五寸
- 三艘 長サ貳拾四間、横五間五尺三寸六步 炮数拾四挺 炮門拾四 貳段
- 三艘 長サ四間壹尺六寸貳步五厘
- 三艘 長サ貳拾間、横四間五尺五寸五步 炮数拾貳挺 炮門拾貳
- 三艘 深サ三間壹尺五寸四步五厘

一蒸氣船三艘

内

- 壹艘 長サ貳拾五間、横四間三尺九寸 炮数拾貳挺 炮門拾貳車
- 壹艘 長サ貳拾間、横三間四尺四寸貳步 炮数八挺 炮門八車
- 壹艘 長サ貳拾間、横三間四尺四寸貳步 炮数八挺 炮門八車
- 壹艘 長サ拾八間、横三間貳尺五寸貳步 炮数六挺 炮門六車
- 壹艘 深サ貳間壹尺

炮数都合式百九拾七挺

右之通追々致製造、尤異国船不紛ため白帆ことに朱ニ而日之丸相印、小旗・吹貫等別紙
絵図之通造法を以異船之趣ニ取立申度、製造被仰付候得者日本海岸乘筋深淺等相測置不
申候而ハ非常之場合難致弁利、依之平常運送船ニ相用候ハ人数要用之分乗せ候ニ付為致
習熟度、此段得御差図候、以上

十二月六日

(島津斉彬)
松平薩摩守

右之通阿部伊勢守様へ被仰伺候所、可為伺之通候、尤帆印ハ御国之惣印取極、追而被仰
出候間可被得其意旨昨夕御附札を以被仰渡候、此段申上候

十二月廿一日

松平薩摩守内
仙波市十郎

右者大御目付へ之御届書也

四月 大

○朔日、己巳、晴、暄、今日ハ予月番也、例時出勤、夕八時頃退、夕射場へ出ル、平
野藤吉郎先日之謝入来

○二日、庚午、晴、暖、朝為伺御機嫌罷出ル、夫方御乘馬江も出ル、慈君午前ハ幾三郎を御連、
二葉山辺迄御出、夫方直ニ辻へ御出、御宿被成、幾三郎者帰ル、伊藤徳之助明日回村出
立致候由ニ付、深江静衛・宮崎藤九郎へ書状を出ス、去月廿八日左之通被仰出也

別紙御触書之趣一統承知有之、御家来中ニおいても右之御振合ニ准、兼々被仰付置候

質素節儉之儀弥以堅く相守、婦人之着服仮令有来ニ而も上品者用捨有之、大概袖已下之用品相用、其外音信贈答・客来等之義も精々御示し有之通り、音信之筋ハ何ぞ謝礼等之外一円ニ用捨可有之者素々之義、客来者是迄之処御用召当日限、身近キ親類・同役・手付杯江手輕之酒肴差出候儀格別ニ相成居候得共、是又以後者一円ニ用捨有之、手付熨斗限ニ可被仕候

右之趣猶又手厚相示し置候様被仰出候間、不洩様可被相達候、以上 三月廿八日
右之通別紙御触書者従上之被仰出式通也、長文故爰へ不記、全文移檄録へ写し置也

○三日、辛未、曇、微雨後晴、遠江様御出ニ付例時少早出勤、夕八時退、午後渡辺雅登御裏御馬場を拜借、槍術之会を催、横関新兵衛門人多人数来、予も出ル、右之趣御承知被遊、為御見物御馬見所へ御臨坐被遊也、惣人数四十人余也、此方様御家来中も同方門人彼是有之也、樋口志津馬・金子熊之助・坂崎恒吉・丹羽庄蔵・畑口莊五杯者格別達者、感入也、家小夜前以来腹痛、平臥

○四日、壬申、晴、暖甚、例時出勤、夕八時退、朝術へ出ル、家小今日者快起也

○五日、癸酉、晴、薄陰、午後御用向有之、御武具役所へ出勤、御館へも為伺御機嫌出ル、夕御乘馬江出、今日周防様御出被遊、於御裏御目見仕候故、御次江御機嫌伺二者不出、此度御武具役所御出陣用之御陣屋長持出来、今日組建試有之、御覽も被為在候ニ付出而見分する、右者長持二棹ニ而八疊敷、御陣小屋悉皆組建相整仕掛ニ而、長持も夫々解放候得者直ニ座板ニ相成、棒者桁ニ成与申様ニ而甚弁利成細工也、御扶持人檜物屋市郎右衛門細工也、何分結構之御道具出来、恐悅を唱候事也、辻清人方墓所石塔之文字を被頼、

六日

八十八夜

同日、於江戸

一御歩行頭

近藤万之進殿

御目付方

昨夕相認、今日為持遣又也

○六日、甲戌、晴、暄、例時出勤、夕八時前退、朝辻清人入来、小倉後室此間見舞使遣候謝入来、石井園藏此間痛持病之腹甚敷、殊外難儀之由二付見舞、出勤掛卒与參、此

間以来使者度々遣又也、此度者余程難儀之趣也、食餌不進、便閉之気味有之由也、中津

屋方周五郎来、酒飯を饗又也

○七日、乙亥、雨、寒、朝素読所会読へ出席、直二出勤、夕八時前退、西向寺へ千代吉

為參也

○八日、丙子、晴、暖和、朝卒与射場へ出ル、御馬養生二付罷出、御館へも為窺御機嫌出ル、

午後遠江様・主水様へ時候御機嫌伺罷出、夫方山村静登・丹羽庄司・吉田藤馬を訪、長東茂兵衛江法事之節之謝二行、石井園藏病をも訪、少し者宜敷方之由也、夜万之進来話

○九日、丁丑、晴、暖、朝御内密稽古二付御裏江出、四半時頃出勤、夕八時頃退、夕射

場江出ル、高謙院様為御養生今晚御窃二能美島佐伯郡へ御渡海、手島道仙方江御出被成候由也、

右二付而格別為御暇乞不罷出、与三右衛門老人罷出候也、左之趣此間御年寄衆より向々

江被申談候之由、窃二其書付を見

質朴之古風与被仰出候上者、御代々様被仰出之内格別手軽成処江相復候心掛專一二候、

尤俄二相改候義差間之筋も可有之、先ッ差向左之通

一着服

一木綿 染色勝手次第 同縞

一生平 晒縞

十日

立夏

十一日

一知行高百五拾五石

左門太郎目

藤井百太郎殿

一同式百五拾五石

龜太郎跡目

奥 久之助殿

十五日、於江戸

一御奥小姓筆頭

小池亀之丞殿

一御小納戸

井上彦之進殿

十日

立夏

重複

十五日

一金式百疋

井口喜久馬

右年来出精二付

一上下布 但御紋附横麻ハ着用勝手次第

一袴 御国産ニ而手織類着用

但葛袴有合之分者相用、此後新ニ求候義不致候事

一妻子着服

一絹紬 木綿 越後

一带 繻子 呉絹

一襟袖 縮緬絹迄、其外結構之品無用

一子弟等稽古往来随分纏服甲斐ノ敷、惣而惣絹裏之羽織着用不致候事

一召仕男女着服等

一生平 木綿 家来

木綿 晒縞

带 木綿

一 衿袖 絹太織

掛ケ物 紙之外無用

銀筭不相成

一贈物廉立候吉凶之節

看料 菓子料 但員数御定者有之候へ共、尚手輕ニ致候心得ニ候事

一 一間近キ親類無扱先キ類焼・近火之節、為見舞めし・したし物・香もの手輕ニして遣候事

一 一間近キ親類大病等ニ而為見舞菓子・肴之内至而輕少之品遣候事

一 一年回之節、茶の子・餅遣候義不致候事

一 稽古料
銀三枚ツ、

仙太郎倅

森 光太郎

満四郎倅

得井勘次郎

右馬術心掛厚出精仕候付每

歳被下之

一 御切米壹石御増
御小姓組本格

湯川新太郎

一 御小姓組並
御取立

土屋政之進

右貫心流稽古取立方厚申談
候様被仰付、依之金子貳百
疋毎歳被下之

一 御切米七斗御増

小島左源太

一 御切米壹石御増
御小姓組並御取立

御代官加

渡部卓爾

一 銀五兩

右之通ニ候得共、此余軽ク取計候義勝手次第之事

一家居物数奇ケ間敷事、其外無益之品もの求候義無用

一家来男女とも減振銘々勝手次第

以上

別紙

一 幟八四半共式本ニ不過、其余相減、又ハ一円不建共勝手次第

但木綿・紙幟共銘々便利次第

一 槍其外品々右ニ准し飾候義成丈相減、手込之分有合候共用捨之事

右之通書付を以被申談有之、何分此度者一通り之事ニ而者無之、御年寄衆辺、第一生田

筑後殿杯格別ニ質素被相行、御家中一統も稍旧弊も改可申趣之由、一段之事共也

○十日、戊寅、快晴、暖和、朝槍術ニ出、例時出勤、夕八時前退、藏田和太郎方先達

御貝太鼓役被仰付候段為知差越候ニ付為歡參ル、鮮を被饗、松本玄順隠栖を訪、巖島へ

此間方參候由ニ而皆々留主也、三珠へ昨年羅倫石刻を惠候謝扇子三本、筆両管を持參贈、

留守婆へ托し置帰也、夕弓術、夜辻へ見舞使遣ス、京師去ル六日午之刻仙洞北之端

大宮明御殿辺方出火、夫方日之御門へ火移り上、両御所其外御構之内不残御類焼与相見、

町家ニ而八北者今出川、南者下立売、西者千本通り、東者寺町通り迄焼失、同夜五ツ時迄

も真鎮不申旨相場便ニ相聞候由、飛脚屋方申出候由也、右ニ付而承候得者、六日夜不明

月色不常、七日朝日之出色殊赤、何れも怪しミ候由、畢竟右京師大火之故ニも有之哉与

申值候事也

高木唯一
右年来出精仕候付

逼塞御免
御切米四石
式人扶持
御步行組
御次坊主

宇佐美寅之丞

一還俗

土屋徳甫

銀三両為御祝義被下之

一 御切米壹石御増
御步行組並御戻し

山川熊賀

一 倅喜藏
足輕組御抱

吉田栄藏

足輕以下も数々有之、略之

良伯父

松本玄順

右自今折々為伺御機嫌罷出

候様被仰出

十六日

月蝕 二分半

○十一日、己卯、晴、暖、朝_レ炮術稽古ニ出ル、風_レ呂を立、夕_レ為伺御機嫌罷出、夕_レ射術稽古

○十二日、庚辰、快晴、覚薄暑暖甚、夕曇、雲_レ山様廿五回御忌御法事ニ付、為御寺詰六

半時前出宅、海藏寺へ罷在、御法事中相詰、且那樣・御隠居様御代香・御代拝相勤、例

之如御斎も頂戴仕、相濟正九時頃帰ル、帰掛直ニ御館江罷出、御目見被仰付、直ニ相詰、

九半時頃退出、今日供連者若党・小者・道具ニ而參ル、天氣宜敷候故合羽籠者为持不申、

尤駕籠ニ而參候也、夕_レ弓術稽古ニ出ル

○十三日、辛巳、雨、暖、朝_レ例時出勤、夕八時前退

○十四日、壬午、雨、暖甚、居間塞炉、朝_レ六丁目御館江為伺御機嫌罷出、帰森岡へ寄、午

飯を齧、為伺御機嫌伺御館江出ル、九時揃於素読所席書有之ニ付出ル、御臨坐被為在、

書生御步行組以上廿九人、足輕以下十人也、藤川甚吉も出候ニ付来飯ス、夜_レ前以来時々

雷鳴

○十五日、癸未、曇、夕晴、過暖覚薄暑、御_レ用向有之、大御目付衆被出候ニ付五時過出勤、

夕八時前退、御_レ用召数人有之也、森仙太郎・湯川新太郎へ欲使遣ス也、夜_レ慈君辻方御

戻り被成、夜_レ始垂蚊囀

○十六日、甲申、朝風雨、雷、蒸気甚、单衣猶覚重、夕晴又曇、早_レ朝妙慶院江參詣、森

仙太郎昨日之為吹聴入来、松_レ本三珠入来、昨日被仰出之吹聴玄順可来処、今朝之天氣合

故不能其義、先同人差越候由、大石良雄之画軸を持来、見せる、良雄之絵予始而見之也、

例_レ時出勤、九半時過退、夕_レ弓術

十八日、京師大火之義彦造方申越之趣左之通

当月六日午之刻、女院御所方出火故御所焼、夫方禁裏

御所へ飛、夫方一条様・日野様・今出川様・勸修寺様・

烏丸様、夫方中立売御門方烏丸通りへ移、南者榎木町、

北八今出川堀川方西者南榎木町、北元誓願寺、西者智

恵光院迄焼、七日卯ノ刻及鎮火候由

廿一日早晨

す和会

香茸

三ツ葉

御皿

あけ

こんにやく

大根

けん

御汁

めうか小口

みそ

菘豆ふ

しゐ茸

○十七日、乙酉、晴又曇、寒、朝炮術、午前為伺御機嫌罷出ル、渡部卓爾吹聴入来

○十八日、丙戌、晴又曇、寒、朝馬術・槍術、松本玄順今朝為伺御機嫌罷出、御目見も被仰付候由、為吹聴来、例時出勤、夕八時前退、夕弓術、京師大火之様朝尾彦造方委

細申越、芝山様方も葆光院方申来候由、禁裏御所を奉始、都而御所々々、仙洞迄も不残炎上、奉恐入候事共、尤芝山様者御逃れ被成候由奉恐安、火元彦造方者女院御所与申越、葆光院方者しは之御所与申越、いか、朝尾彦造者類焼いたし候由也、主上者一旦下加茂

江御幸、夫方聖護院宮様へ遷幸被為在候由、夕石井園蔵を訪、湯川新太郎江欲二行、渡辺四郎右衛門へ当春以来度々着具之義世話二成候謝旁訪之

○十九日、丁亥、晴、暖、例時出勤、夕八時前退、夕風呂を建、妙慶院二供養有之、慈君御參被成、藤川甚吉来、終日遊、海蔵寺現住得舟和尚旧臘寺内観音堂修理を申建、無願二而因頼子(母脱カ)を企、方々配札、銀子も余程集り、既二鬮引興行にも可及場合郡方江相聞、

村方役人方差留、約合有之、甚難相濟次第之処、右者寺内行者堂番人与作与申者寺江も沙汰不致発起いたし候与申事二相成、表向相濟、依之去ル三日郡方裁許有之、得舟和尚者急度叱二而相濟、与作追込日数十五日被申付候由、先表向者右様二而相濟候得共、甚

以御寺之御外聞二も係候義、得舟心得振不埒千万之事共也、右二付此方様方も今日和尚御叱、与作追込被仰付、内々得舟義病氣之趣を以隠居願出有之候様二与隠居和尚へ御諭し有之候由也

○廿日、戊子、晴、夕曇、暖、朝槍術、午後弓術、午前為伺御機嫌罷出ル也(嫌脱カ)

○廿一日、己丑、晴、暖、例時出勤、夕八時前退、潤誓廟御祥月、今早晨献膳如恒規相勤、

○廿一日、己丑、晴、暖、例時出勤、夕八時前退、潤誓廟御祥月、今早晨献膳如恒規相勤、

薄くつ

玉ふ

御坪

銀杏
さや豆
おろし生か

御飯

御香物

御平

筭
牛房
蕨
油揚
三ツ葉
山椒

御菓子

焼まん頭
卷せん餅
ふきよせ

以上

夕 御茶

さや豆飯

廿三日、於御城

一大御小姓頭

八島外守殿

御仲小姓頭方

一御仲小姓頭

(村上彦兵衛室)
休誓廟も御一緒ニ配祀仕候也、夕弓術へ出、京師貫名先生(海陸)へ火事見舞書状遣ス、朝尾

彦造江も見舞申遣ス也

○廿二日、庚寅、曇後雨、朝素読所講釈へ出、其前槍術へ出、例時出勤、夕八時前退、(備覧カ)

森万之進来候由、千代吉午後方下宿を願候之故西向寺参詣不能、代参申付、夕射術

○廿三日、辛卯、曇、朝炮術、夕弓術、夕為伺御機嫌罷出ル

○廿四日、壬辰、晴又曇、朝槍術、例時出勤、九半時頃退、夕弓術、西向寺へ代参申付、

夜家小・幾三郎従木野帰ル

○廿五日、癸巳、雨、冷気強、今朝幾三郎幟を立候積ニ候得共雨天故其義不出来、尤其式而已を致ス也、例時出勤、夕八時退

○廿六日、甲午、晴或曇、冷気也、朝渡部卓爾・松本良伯・得井満四郎・高木唯一等へ為

歛行、辻江見舞、堀尾江も寄、武内純介・名倉求馬を訪、森仙太郎へも歛二行也、夕射

場へ出、数射を致ス也

○廿七日、乙未、終雨濛々、寒、(村上勇藏室)信楽廟御祥月、早晨献膳如恒規相濟、(村上勇藏)常称廟も如例献膳

仕候也、朝西向寺江参詣、朝素読所会読ニ付出席、夫方出勤、夕八時退、御用向ニ而

大御目付小島太郎作殿御入来ニ付夕又出勤、夕射場へ出ル

○廿八日、丙申、晴、冷、朝射場へ出、例時出勤、夕八時過退、京師大火ニ付、去ル

十八日出仕立飛脚を以芝山様其外様江御見舞被仰進候処、右飛脚夜前罷帰、委敷御様子

相聞候由、主上者一旦下加茂江御立退御小休ニ而、夫方聖護院江被為入、其後去ル十五日

方桂宮仮皇居ニ相成、同所江被為入、桂之皇居与称候様二との事之由、関東方早速為御

杉田新兵衛殿
御先手者頭石河致平

一 御先手者頭

能勢伝之進殿

一 御普請奉行

大橋序助殿

御目付左

一 御目付

坂本十尋殿

御側詰次席左

一 御加増三拾石
御用達所詰

加藤衛守殿

御代官左

一 御代官

江田佐源太殿

御馬回左

廿五日

小満

見舞高家衆御一方去廿一日御上着、早速御普請惣御奉行御老中阿部伊勢守様、御勘定奉行石川土佐守殿御用掛被仰付候由也、石河致平夕久野秀太郎時候見舞入来

○廿九日、丁酉、晴、夕又曇、暖、夕為伺御機嫌罷出ル、夕弓術、極夕主水様御目付高津応輔御用向ニ而来ニ付御館へ出、御返答ニ出ル、高津応輔者桜井広馬事之由也、六丁目様御庭之筭三本御内々頂戴被仰付、告于廟、但昨日之事也、今夕熟而薦于廟、何れも拝味仕ル也

○卅日、戊戌、雨、寒、夜前四時過、出衛様御附女中志つ安産、御女子様御誕生被成候由、例時出勤、夕八時頃退、出勤中御奥へ罷出、老女迄出衛様御妾腹御誕生之恐悦を申上る也、夕弓術稽古ニ出ル、今朝槍術へも出ル也、禁裏炎上ニ付三日之間鳴物停止之旨従公儀被仰出候付、於爰許も今日方三日之間鳴物停止、普請者不苦旨入夜被仰出也

廿七日

剛三郎家督

一 七人扶持 小池常太郎殿

御普請奉行受引

一 御改易 森 豊吉殿

奉公御構

御領分住居御構

此豊吉者盜業等働候義有之候ニ付而之事之由風聞有之也

右常々不行跡ニ付

廿七日早晨

いり酒

御皿

蓮根
油あげ
こんにやく
香草
三ツ葉
けむ 柚の花

すめ

御汁

苞豆腐
結こんぶ
粒椎茸
茗荷小口

ねりみそ

御坪

きんなん
香たけ
山の芋

御飯

御香物

御平

筍 蕨
椎茸
油揚
牛房
三ツ葉
葉山椒

御菓子

焼まん頭
巻せんへい
ひくわし

江戸御沙汰書之内

三月廿八日

(前田齊泰)
松平加賀守様

此度異国船渡来ニ付固之義相達候処、早速
人数及出張候段、兼而申付方宜故之儀、殊
二家来共者数日相詰、一同骨折候段御懇之
上意有之

(直綱)
井伊掃部頭様

(谷保)
松平肥後守様

(忠国)
松平下総守様

同断ニ付御備場其外御警衛向之義精入申
付、家来共も数日骨折候段御懇之上意有之

右九侯加州侯御同文

(齊民)
松平越後守様

(慶水)
松平越前守様

(蜂須賀齊裕)
松平阿波守様

(久松勝善)
松平隠岐守様

(池田慶徳)
松平相模守様

(慶憲)
松平兵部太輔様

(定敵)
松平越中守様

(鑑寛)
立花飛騨守様

(忠順)
酒井雅楽頭様

(忠敬)
小笠原左京大夫様

(幸教)
真田信濃守様

右二侯も前同文

(典則)
松平誠丸様

右井伊侯等同文

松平阿波守様

四月九日

井伊掃部頭様

近来異国船度々近海へ渡来ニ付、追々内海

異国船渡来之節羽田・大森御警衛被仰付

夕

御茶
青豆飯

御警衛向御改革有之候処、江戸近海而已二

候、防禦之手筈嚴重二可被申付置候

も無之、京都表御警衛筋之義も弥御大切二
被思召候、然ル処其方家之儀者前々方京都

不慮之御守護被相心得居候儀二付、猶此上御守護筋之儀一際手厚二可被相心得候、依之
羽田・大森差定候御警衛者御免被成候、御先手之儀者勿論、非常出張之儀者其節之時宜
次第被仰付義も可有之候

五月 小

朔日

日帶蝕

陰而不見

同日

出衛様御妾腹様御名

於常殿

同日

一知行高五百六拾石

大式跡目

三好伊織殿

一同百五拾五石

次左衛門跡目

寺川源之丞殿

○朔日、己亥、雨罷、猶曇、寒、今日方御武具役所へ出勤、尤佐藤与三右衛門頼二依而也、今日

日諸品御礼被為受候筈之処御延引被仰出也、此度御出生之御女子様、於常殿与御名御付

被成、依之出勤中御奥へ罷出、老女まで恐悦申上る也、且（佐伯郡）那樣明後三日方已斐村石風呂

江御入治被遊候二付、当年も不相替御相伴奉願度、其段今日御用達藤川毎登江被相願具

候様二与頼置、尤当年も御用向之余暇罷越候積也、夕七時過退、菖蒲風呂を建

○二日、庚子、晴、夕曇、朝槍術、後弓術、石風呂御入治御相伴之義昨日御用達中迄奉

願置候処、其段相叶候之旨今日菅馬之進方紙面二而申来、御請申上ル、辻江四十九日逮

夜二被招行、誓願寺所化參ル、慈君も被御招被成候へ共御出不被成、外菅・高木後室參

候而已也

○三日、辛丑、晴、涼、今朝五時揃諸品御礼二付出勤、相濟御武具役所へ出、今日方石

風呂江御入治被遊候二付、御役所御断を申、四時過方石風呂へ參、日入頃帰ル、狐爪木

〔三日、狐爪木社屋根修理
二付而当家方も先達而御初
尾少々相備候義も有之也

〔二日、於江戸

一〔御広式詰御免
御国勝手被仰付

津田格兵衛殿

社神主木村河内守来、御札を惠候由、右者先達而同社屋根修理二付銀杓枚御備有之候御
札二出候二付予等江も惠候由也、〔今日辻寺江者差間、代参も得不遣候也、〔下女此間方
下宿、兄弟不快二而難見捨二付、差向逗留致度旨申出、替りを差向差越也

○四日、壬寅、晴、涼、〔四時過方石風呂江へ行、日入前帰ル、〔昨日替りに差越候下女朝来
痛腹甚敷、大二難義致候付直二下ル、兄弟之者駕籠二而迎二来候由、〔朝石風呂行掛、
辻寺誓願寺へ参

○五日、己卯、晴、終日北吹、夕涼、葛纒可用、〔朝五ツ時麻上下着出仕、御登城前於御居
間御祝詞申上、周防様・出衛様江之御祝詞御用達迄申上、出衛様今日迄御血忌二付御祝
詞御受不被成候也、高謙院様御留守中二付北御部屋江者不罷出、御奥江出老女江謁、如例
今日者於常殿御七夜二付恐悦も跡二而申上ル也、〔四時過方石風呂江行、暮頃帰、〔今日
森岡万之進來、酒を出、其外出入之者少々来候由

○六日、甲辰、晴、薄暑之意あり、〔朝御乘馬江出、〔例時御武具役所江出勤、四時過方御断を申、
石風呂江行、夕日之入前帰宅、今日方出衛様二も為御入治御出被成也

○七日、乙巳、晴、涼、〔朝素読所会読江出、四時過方石風呂江行、常称廟御祥月二付行掛
西向寺へ参、献膳者先月廿七日相济居候也、夕日入前帰ル、〔辻清人忌明返礼与して入来
之由、〔今日石風呂二而御捕らせ之小鮮御料理被仰付候由二而頂戴被仰付也

○八日、丙午、曇、雨はらつく、後晴、〔朝御乘馬へ罷出、〔例時御武具役所へ出勤、四時過
方御断を申、己斐村江行、日入頃帰、六丁目様方御見舞被進候由、鮮御取分頂戴被仰付也

○九日、丁未、曇、夜雨、冷氣甚、〔朝六丁目御館へ為伺御機嫌罷出ル、但佐藤回り之処此

〔九日
献菓子

夕 御茶

豌豆飯

〔九日

一〔願之通り隠居被
仰付

海藏寺現住

得舟

右同寺後跡有之
迄看坊之義、且
後住相撰被申出
候様被仰出

右同寺隱居

快瞳

右委細者去月十九日之記二
有之也

十一日

芒種

十三日、石風呂二而同所
植木屋ニ活花会有之、御一
覽ニ御出被遊、御供仕ル也、
宗匠五日市光禪寺也、会者
木村喜齋杯催し候由、光禪
寺江初而逢ふ也

十四日

入梅

節雅登・予兩人共日々石風呂へ通ひ候而不便利之義も有之候ニ付、代り合予罷出ル、例時方己斐村江行、日入頃帰ル、菅原恒之丞江戸帰着、為見舞来候由、海藏寺和尚昨日願ニ依て隱居被仰付候由

○十日、戊申、雨降、冷氣甚、朝射場へ出、例時御武具役所出勤、四時過方御断を申石風呂へ行、幾三郎今朝閉之氣味有之、早速開、其後熱ニ成、少々氣重ニ有之候へ共、何分格別之事ニ者無之、日之入頃帰宅、矢野源内夫婦・小倉後室・三宅内外為見舞入来也、高謙院様一昨夜能美島鹿河村(川)より無御滞被為入候由、今朝出勤掛為何御機嫌北御部屋へ罷出(佐伯郡)

○十一日、己酉、雨罷、霽、夕白雨、雷鳴稍甚、朝松本良伯来、幾三郎診し呉ル、格別之事ニ者無之、全氣候之感觸有、微熱有之由申、薬を投、岩崎常介来、同方ニ男源之進義遠江様内藤井佐内与申者方婿養子所望ニ逢候由ニ而内談有之也、且聞合せ之義も相頼、諾し置也、四時過方石風呂へ行、日入頃帰

○十二日、庚辰、晴、薄暑之意あり、朝射場へ出、例時御武具役所江出勤、日入頃帰ル、昨夕之雷白島南部伴五郎殿屋敷土蔵へ落候由

○十三日、辛亥、晴、薄暑意あり、朝素読所講釈へ出席、例時方己斐村へ行、々掛松田謙藏を訪、一昨日岩崎常介頼之藤井左内方之義委細ニ承候也、其段石風呂之方ニ而常介へ相咄ス、暮頃帰宅

○十四日、壬子、快晴、薄暑、朝御乘馬へ出、例時御武具役所へ出勤、四半時頃方石風呂江行、出衛様ニ者昨日迄日々御入治被成、御相応被成候ニ付今日方御止被成候由、御出不被為

〔十五日〕

一御役御免

〔企〕
横山十助殿

〔郡回り〕

右者当春先御役御免ニ而郡
回り被仰付候処、猶又此
度御免也、畢竟郡回り者郡
之御目代ニ而重キ御役ニ候
処、右様之人物被仰付候者
甚難居合筋ニ付、御家老様
方御内々御存寄も被為在、
猶又右様被仰付候趣也

〔十六日〕

此度石風呂御相伴罷越候
面々左之通り也

渡辺雅登

藤川每登

佐藤益之丞

山田多喜登

井口喜久馬

長束茂兵衛

在也、日入頃帰宅、〔今〕朝岩崎常介昨朝之謝入来、何分宜敷先方ニ相考候故、追々及熟談
可申哉与存候旨申也、〔入〕梅、〔今〕朝松本良伯入来、幾三郎弥快旨申候由

○十五日、癸丑、晴、夕曇、涼、〔朝〕湯川新太郎入来、長喜三太入治見舞与して来、〔例〕時
方石風呂へ行、今日者山下多八郎殿・松村弥助殿・原田丈太夫殿御見舞ニ被出、御酒被
遣候由ニ付、御入方内勝手ニ引取候様被仰出、帰途植木屋辺遣遙、暮頃帰宅、〔左〕之通被
仰出候也

此度渡来之重墨利加船内海退帆致し候、然処右滞舶中彼是自儘之所業等有之候より意
外之兵端を相開候儀も難計候ニ付、夫々御固被仰出候得共、船軍之御備向もいまた御
整ニ不相成折柄、無余儀平穩之御処置ニ被成置、彼方志願之内漂民撫恤并航海来往之
御薪水・食料・石炭等船中關乏之品々被下度との儀御聞届相成候処、場所御取極無之
候得者何国之浦方江も勝手ニ渡来不取締ニ付、豆州下田湊、松前之箱館ニおゐて被下
候積ニ候、当今不容易御時節ニ付、兼而被仰出も有之候通質素節儉を相守、此上水陸
之軍事一際相励、若非常之儀も有之候ハ、速ニ本邦之御武威相立候様可被心懸候

右之通早々可有相触候 四月

○十六日、甲寅、曇後晴、薄暑、〔朝〕松田謙藏来、此間留守へ参、聞合置候藤井左内方之
義至極之先方与存候旨申也、〔例〕時御武具役所へ出勤、四時過方御断を申石風呂江行、々
掛妙慶院へ参詣致ス、去ル三日方日数十四日御入治被遊、御相心も被遊候之御様子ニ
而、今日御上り風呂被仰出、夕方御休息等被為濟候処ニ而、雅登同様御前江罷出恐悅申
上、予等御相伴之御受をも申上ル、予も御蔭ニ而当年者別而相心之様被考也、日入前帰宅、

松本良伯

井沢元秀

岩崎常介

小倉甚右衛門

三宅内外

外二御跡風呂願

山川熊賀

九日之補

一知行高百五拾五石

糺跡目

岡田大記殿

一同百拾五石

登跡目

大橋盛登殿

一同百石

弥六跡目

一御切米三拾四石

鹿之助跡目

奥田平八郎殿

当年も雅登申値、亭主利三郎へ茶巾餅廿五贈之、夜五半時頃出火之由二而早拍子木を打、

早速出見合候処、月明り二而焰氣不見、猶承候処竹屋町之由二付出ル、相応之町家二軒

焼失之由、無程鎮ル

○十七日、乙寅、晴、涼、朝御乘馬江出ル、朝夕弓術、早朝お梅来ル、朝御次へ罷出、

御入治無御滞被為濟候恐悦并予御相伴之御受御用達中迄申上ル、渡四郎右衛門・小倉

甚右衛門入治済之見舞入来、夕辻清人お梅迎旁入来、酒鮓を饗入、夜中お梅も供々帰ル

○十八日、丙辰、晴、朝弓術稽古二出、素読所会読二付出席、夫御武具役所江出勤、

夕七時過退、慈君午後御寺參被成

○十九日、丁巳、曇、朝弓術、午後弓術稽古二出ル、貫水流稽古場江も見物二出ル、夕

石井園藏病を訪、矢野源内江先日之謝二行、岩崎江源之進縁談之見舞二行、木野・水谷

へ見舞、入夜帰ル、両家二而酒出ル、森岡へも後室先日不快之由二付訪之、最早快由也、

慈君夜明信院へ御參被成、法談有之候由

○廿日、戊午、曇、夕雨、朝御乘馬へ出、例時御武具役所へ出勤、夕七時過退、夕弓術、

今朝辻清人入来

○廿一日、己未、晴、薄暑、夕弓術稽古場へ出

○廿二日、庚申、晴、薄暑、早朝西向寺へ參、素読所講釈へ出席、一甫流劍術へ出、例

時出勤、夕七時過退、極夕弓術、去夏異国船渡来二付而者武刃之筋厚御力被入、其以

来者諸武芸出精之輩も有之候得共、中二者今以何れ之稽古場へも罷出者も有之趣、甚

如何敷事二有之、病身等二而耽々稽古難出来候ハ、其段相届、形前丈ケ二而も致候ハ、

夫たけ有事時之足りも可相成候間、得斗相心得、甲斐々々敷稽古有之候様二との御趣意御移檄出ル也、全文移檄録二記之

〔廿三日、御嘉例之通今日於明星院御屋祈禱無滞相濟、御供物頂戴被仰付候也

〔廿四日、今夕此方様・主水様御用談ニ付遠江様へ御出被成候之由

〔廿七日

一御切米四拾四石

市大夫跡目

大田保之進殿

〔廿七日

夏至

〔廿九日、石井園藏先生病死、行年七十四歳、山下故勘右衛門先生弓術之門人ニ

○廿三日、辛酉、曇、極夕方雨、蒸、朝御乘馬へ出ル、午後渡辺雅登申合数射を致ス、三宅内外も同様式百本射ル也、夕慈君石井へ御見舞被成、園藏今日者不相勝由也

○廿四日、壬戌、雨、夕晴、涼、朝弓術、例時出勤、夕七時過退、西向寺江千代吉為參也、

○廿五日、癸亥、快晴、如秋色、朝炮術江出ル、夕石井園藏病氣を訪、遇、大二勞疫之様子也、夫方御輿御鎮守江拜參、夏岳君明日御祥月二付妙慶院へ參、夫方辻江先達而法事被呼候謝、藤川へ伯母氏不快之見舞二行、辻二而酒出ル

○廿六日、甲子、晴、向暑、朝槍術・弓術江出ル、例時出勤、夕七時過退、妙慶院へ千代吉代參申付

○廿七日、乙丑、晴、向暑、夏至、朝御内密稽古ニ付御馬場江出ル、堀尾眠石翁・松本良伯入来之由、西向寺江千代吉代參申付、夕射場江出ル、慈君夜中岩崎江御見舞被成、酒出候由、源之進義いまた願者不下候得共何分先方病人殊外急候由ニ付、明日一応卒与遣候筈之旨申候由也

○廿八日、丙寅、雨振不甚、涼、朝一甫流劍術江出、弓術も致ス也、御武具役所出勤、夕七時過退

○廿九日、丁卯、雨霽、朝炮術へ出、午後石井園藏病氣不出来之由、慈君御見舞被成、無程居合候由、於常殿此間方少々御不例ニ被成御坐候由、朝午前為窺御輿へ出ル、尤御葉御所望之義ニ付山中一庵老江も逢対致ス也、未鼓後園藏又不出来之由、慈君又御見舞被成、

而、其後松井佐直先生より皆伝を得、弓術師役被仰付、專御家来中弓術指南被致居候処、可惜事也、尤弓術格別堪能二者なかりし也
石井先生法諡
正善院悟法日顕居士

終二物故之由、千代吉度々使等被頼遣ス、早速見舞ニも遣ス也、
〔夜〕前松本良伯来話、〔夕〕弓術

石井先生辞世之和歌 但暗記故少し者誤もあるへし

つゐの道 何くらからむ 西山や いさなわれ行 月のおちかた
今は此 世を空せみの 唐衣 むかしにかへす 身の涼しさよ
つなかれし うき世のき綱 たえもせは 仏の御手の 糸むすはなむ
露の命 きえなて齡 ふりしおへる 身は世に何か 思ひ残さん

〔江戸御沙汰書之内〕

五月十四日

御勘定吟味役格
御代官
御鉄炮方兼帯

時服二

江川太郎左衛門殿

下田表へ御備向取調之義ニ付而ハ彼是手数も相掛、其上是迄同所異国船渡来之節々急速出張も致シ、久々骨折候ニ付被下之

五月廿八日

時服三十ツ、
〔鍋島齊正〕松平肥前守様
〔黒田齊逸〕松平美濃守様

長崎表へ去秋魯西亜船渡来之節々御備向其外手配嚴重行届、家来共格別骨折候段常々申付方宜故之儀与一段之事ニ被思召候、依之被下之

六月 大

朔日

一御先手者頭

稻生豊人殿

一(伊東權守等)
柴松院様
御傳役

沖次郎兵衛殿

御供頭方

一御鎗奉行

浅野八太郎殿

弓削織衛殿

湊源太郎殿

五日、今朝此方様・遠江

様御用談事二而主水様へ御

出被成候之由

同日

一閉門

浅野玄蕃殿

御番頭也

右於江戸異国船渡来二付卷
番手出張之儀相組之輩へ相

○朔日、戊辰、朝雨、晴又雨、蒸、朝岩崎常介へ源之進一昨日藤井江内分卒与参初候由歛、

見舞旁二行、石井江梅二行、御乘馬へ出ル、当月も予御武具役所へ出勤二付例時出、

夕七時過退、尤今日者於常殿御宮参二付卒与御奥江罷出、老女迄恐悅申上る也、勿論平

服也、岩崎常介何角之挨拶人来之由、慈君度々石井へ御見舞被成、夜九時石井葬送二

付妙風寺へ使者千代吉遣入、出棺之節窃二露地前二而見送ル也

○二日、己巳、雨霏々、後晴、向暑、感冒之気味有之、晏起、朝弓術へ出ル

○三日、庚午、霽、向暑甚、朝素読所講釈へ出席、例時御武具役所へ出勤、夕七時退、岩

崎常介入来、此間参候謝也、源之進藤井佐内方江遣候義願之通今日被仰出候由、夕射場

へ出

○四日、辛未、晴、蒸暑、朝御乘馬へ出ル、夕射場へ出、夕方雨ふり雷鳴

○五日、壬申、夜来雨甚、後晴、蒸、例時御武具役所出勤、夕八半時頃方御用向有之、

渡辺氏へ参、極夕帰

○六日、癸酉、晴、暑し、石井先生初七日二付朝妙風寺へ千代吉代参申付、午後石井江見舞、

内仏へ拜致致、先生病中辞世之歌有之候由二而寿兵衛見せる、流石先生平生之氣質殊勝之

事共及感涙也、岩崎常介へ此間願下之歛二行、夕弓術へ出、慈君夕石井へ被呼御出被成、

今日初七日二付緩々咄度由二而酒出候由、矢野源内夫婦・小倉甚右衛門母等参候由也

○七日、甲戌、曇、夕雨、涼、朝御馬江出、炮術稽古へも出ル、素読所会読へ出席、去

月廿七日方孟子二相成、論語者其前迄二而卒業也、西向寺へ千代吉参す、素読所濟御

達候処、杉江喜内当夜泊御
番二付翌朝二至相達、依之
ハ出張遅刻ニ相成候段達御
聴、甚以等閑之儀二付

八日

半夏生

十日、材木町誓願寺本門
天保之初頃歟解崩ニ相成居
候処、此度再建、今日柱立
有之候由、其節大工老人梁
上落、致怪我候由也

武具役所へ出勤、夕七時退、
午後於常殿御播擲之御気味被成御坐候由二付、暮前為伺御奥江出ル、其後者御居合被成
候由也

○八日、乙亥、雨、午後罷、涼、朝一甫流并弓術へ出ル

○九日、丙子、雨、涼、朝炮術へ出、例時御武具役所出勤、夕七時退、夕弓術、今朝
松本良伯入来

○十日、丁丑、雨、涼、夕罷、早朝御用向有之、被為召候二付御館へ出、渡辺氏へ行、其
後弓術

○十一日、戊寅、曇、夕微雨、又罷、朝炮術へ出ル、来ル十三日炮術御相手御覽被仰出候由、
今朝恒之丞吉本方申聞、朝五時揃之由、御相手御覽与申事者是迄余り不被仰出候へ共、此度

思召ニ而被仰出候趣也、予等も本式之御覽ニ者是迄者不罷出候へ共、此度者御相手御覽故
罷出候而も可然趣也、夫故被仰出方も此度者御目付通り之達し等者無之也、例時御武具
役所へ出勤、夕七時退、々出後射場へ出ル、慈君夜辻へ御出被成、お梅先傾傾カ以来兎角申
分有之候処、愈懐胎之趣、松本良伯申聞候由、左候得者当月ニ而五月ニ相成候由なり

○十二日、己卯、曇、蒸、夜雨、雷鳴、朝一甫流并槍術・弓術へも出ル、腹背灸治、夕
御用向ニ而被為召罷出、渡辺氏へも參ル也、今朝中津屋橋本屋方周五郎来候由

十三日

小暑節

○十三日、庚辰、曇時々雨、午後暴雨、雷鳴烈敷、早朝被為召御館へ罷出ル、今朝五時
揃炮術御相手御覽二付予も罷出ル、五玉被仰付、予中り五玉ニ而星三ツ、外レツ也、
相濟候処ニ而吉本恒之丞へ御意被為在候由ニ而同人方御意之趣申聞、同人迄御受申出ル

也、今日者至而御手輕之事二而、皆共方も席詰者忝人罷出ル、其外都而御用達引受二而相濟、尤予等も業前者仕候得共、御出并御立坐之節者御射前江罷出、且又業前之間合二も同所江出、都而之業前見物仕ル也、〔今夕之雷鳴格別之大雷二者無之候へ共、何分近年二而者珍敷、数声烈敷鳴也、内一声強響候処、国泰寺新開江震、畑中糞壺覆之上江落、作人夫婦連、烈二て其内へ避居候処、不幸二し而震死致候由、夫婦共死候敷未審、佐藤氏家来使二出、偶其近辺を通りか、り大ニ消魂、誤而水道へ陥候由也、〔於常殿今夕以来度々御搖蕩有之、御難儀被成候由二付、極夕為伺罷出ル、何分御案申上候御様子也、入夜退

○十四日、辛巳、快晴、朝有霧、午後向暑、〔六丁目御館へ予伺回り、昨夕之雷鳴も有之、旁今朝之内予罷出候筈ニ申置候処、千代吉義此間以来不快、腰痛甚敷、一応快方之処、今朝者又々致難義、供ニ難列候故無抛渡辺雅登江相頼、〔朝お常殿為御伺罷出ル、今朝者先御居合被成候由也、〔昨夕国泰寺新開之震死者主水様御家来二而、夫婦共致即死候由、同時江波江も震し、老人忝人死候由、其外所々江落候由風聞有之、〔朝弓術へ出ル、〔朝辻清人・湯川新太郎入来、〔家来千代吉今朝者難義いたし候趣二付、松本良伯へ診を乞、大分熱氣有之由申、葉を投候由、何分難義致候趣二而下宿を乞候二付、下宿為致、宿方迎二来、駕籠二而帰ル、田中実五郎彼是心配致し呉る也、〔夕御乘馬江出ル、〔夜九半時後地震、稍大也

十五日

一知行高百七十石

守衛跡目

家所佐一郎殿

○十五日、壬午、曇、蒸、〔朝御輿江お常殿為伺罷出ル、先御同篇与申内、菟角御困被成候由也、〔朝松本良伯入来、〔例時御武具役所出勤、夕七時過退、間二而御用向有之也、御館江も卒与出ル也、〔千代吉下宿、差向無人二而困り候故、御水主佐兵衛〔森鳥二男兵藏を雇、今日方

十八日、於江戸

一大御小姓頭同格

森島左伊記殿

十九日

一御役御免
一新組御者頭

一柳弥三右衛門殿

御先手者頭

一御先手者頭

青木弥次右衛門殿

一御目付

近藤権次郎殿

一御代官

小林弥右衛門殿

御馬回り

一知行高百石

十兵衛跡目

堀正之助殿

来り呉る、十七歳二相成候由、田中実五郎世話也

○十六日、癸未、曇、蒸、朝妙慶院江参、興徳寺へも当五月六日不参候故参、木野江見舞、

百太郎病気兎角寝々無之、氣遣候之由、酒出ル、水谷へも見舞、西向寺へも参ル、貞善村上彦右衛門

祥月也、午前於常殿伺与して御奥へ出ル、先御同篇之御様子也、夕弓術、当年巖島祭

礼御供船も当処二而者飾等付不申候様ニ与の事二而、御用船之外志艘も不出候由、何分惣

体旅人等も寡、淋敷趣也、江戸表異国船渡来ニ付而者、従公儀被仰出之趣も有之、品二

寄殿様御出馬被為在候様之義可有之歟、左候時者趣次第御並様方も急速被為召候義も可

被為在哉之旨当春窃ニ御内意も有之候処、異国船も先平穩ニ退帆いたし候趣被仰出候ニ

付、此先之様子者難計事ニ者候得共、只今之趣ニ而者先其義ニ被及間敷哉之御振合ニ有之

趣、今日御年寄生田筑後殿被仰上候之由、窃ニ承候也、千代吉不快ニ付兄源助来、米

を搗呉ル也

○十七日、甲申、曇雨又晴、夕又曇、有風、蒸、朝炮術へ出ル、例時御武具江出勤、今

日者宮島祭礼ニ付休日之処なれ共、当御場合之義故其儘出勤、尤夕八時退也、出勤中御

奥へもお常殿為伺出ル也、夕弓術、夕長喜三太入来、夜慈君・家小・幾三郎槽下浜へ

潮戴ニ参ル

○十八日、乙酉、曇、蒸、夕雨、朝御乗馬へ出、一甫流へも出ル、素読所会読へ出席、

夕お常殿為伺御奥へ出ル、先御居合被成、御同篇之由、弓術江出ル、今朝辻清人入来、

光観院百ヶ日来ル廿五日之処、寺之方差問候故明後廿日江取越法事致候由申候由也、岩

崎源之進来ル

〔廿一日〕

於常殿御法号

嶺幻雲禪童女孩

〔廿四日、於京都

一三人御加持持

熊谷桐琴老

右年來衣紋方出精二付

一〔御医師組御免
還俗

右同人

其儘定京、左門与改

右此度相願候趣も有之、右

之通被仰付候間、此後弥以

衣紋方心懸執行仕候様被仰

出

〔廿六日晝

土用入

〔廿七日、湯川新太郎先達

而頼置候予印章二顆三面刻

し呉ル、左之通也

表

○十九日、丙戌、曇、蒸甚、〔例時御武具役所出勤、夕七時前退、朝松本良伯入来

○廿日、丁亥、終日曇、時々豪雨、蒸甚、〔朝一甫流并弓術へ出ル、午前御輿へ出、於常

殿昨日以来御居合被成、殊外御宜被成御坐候由、〔辻之方光觀院百ヶ日取越法事二付、誓

願寺へ今朝兵藏を代參二遣又也、夕木野へ百太郎見舞二人遣又、先同篇之由也、〔旦那

様今朝遠江様へ御集会御出被遊候由

○廿一日、戊子、晴又曇、夕雨、朝五半時頃お常殿御不出来之御様子二付早速罷出ル、昨

日者程御宜敷御様子二被為在候へ共、昨夕以来又々頻二御搖搦被為在候由二而、今朝之

処誠二御難義被成、無程御死去被成候也、直二相詰、午後方御武具役所へ出勤、夕七時

過退、〔夜五時お常殿御病氣建り二而海藏寺江御入寺被成候二付、六時比より罷出、御出

棺之節御広式御使者之間二而御見送り申上ル、平服也、前二御棺拜等者無之、御出棺相

濟御輿へ出、老女迄御機嫌相伺、五半時頃退出、右御出棺後無屹御家来中江心得御達し

有之也、〔右御死去被成候二付而事々敷御方々様へ御悔等之申上者無之、今午前弥御事切

之処二而御輿へ罷出、老女迄御方々様御機嫌相伺候迄也

○廿二日、己丑、晝雨、雷鳴、其後終日曇、蒸、朝素読所講釈へ出席、其後射場へ出、〔午

鼓後御用向二而出勤、夕西向寺江參、石井膝中を訪、〔夜慈君辻へ御出、御宿被成

○廿三日、庚寅、晴又曇、蒸、朝御乘馬へ出ル、〔例刻御武具役所出勤、夕七時過退、〔辻

於梅今日致着帯候由、岩多帯料二而鯉節相添贈、御時合柄之事故右様料二而贈候之事也、

〔夜半後雨

○廿四日、辛卯、晴、向暑、朝六丁目御館江為伺御機嫌罷出ル、出掛出衛様御風邪二而昨

村上

邦裕

裏

伯容一

字君緯

関防

不如学

関防・鈕も同人刻也

廿九日

遊行上人明卅日朝潮に着

船、水主町大雁木方被揚候

筈之由、役僧者去ル廿五日

先達而來清岸寺ニ罷在候由

也

夕以來御難儀被成候御様子ニ付為伺御奥へ出ル、帰り木野へ見舞、百太郎其後発搔ニ相成、

殊外致難義候由之処、先両三日居合居候之由、おきよも暑邪ニ而一昨日方困り候由、辻

清人入來、夕弓術

○廿五日、壬辰、晴、向暑、朝炮術へ出、例時御武具役所へ出勤、夕七時退、慈君夜

辻方御帰被成、昨夕森岡万之進來、酒飯を出ス、木野へ蜚針之義伝言申遣ス也、千代

吉痛所少々快、今晚帰、去ル十四日夜半之地震、上方筋者大地ニ而同夜丑刻方震出し、

十八日之朝迄ニ五十余ゆり、家藏共大損し、別而大和・伊賀・伊勢嚴敷候由、未詳説を不聞、

何分大變之趣也、田中榮作へ千代吉異見之義厚申合ル也

○廿六日、己巳、曇、蒸甚、午微雨、朝御乘馬并弓術江出ル、慈君午前卒与辻へ御出被成、

千代吉夜前方帰候付兵藏今夕帰ス、夕方木野へ見舞、百太郎同篇之由、お喜代者快方也、

今日竹ヶ鼻ニ於て死刑兩人有之候由

○廿七日、甲午、曇、夕微雨、蒸、例朝御内密稽古ニ付御裏江出ル、其後御武具役所出勤、

夕七時退、極夕見せ馬有之、御馬場へ出ル

○廿八日、乙未、曇、蒸、朝一甫流并射場へ出ル、朝岩崎常介來、源之進養父藤井左内

昨朝致病死、仍而源之進引越之義申出候由申也、夕岩崎へ源之進引越之怡・見舞旁二行

○廿九日、丙申、晴、午後曇、豪雨一両過、朝炮術江出、例時御武具役所出勤、夕七時過退、

蒸暑甚

○卅日、丁酉、晴又曇、微雨、蒸暑、弓術へ出、稻田少々虫氣付候ニ付、石内村八幡社

ニ於て五穀成就之御祈祷被仰付、明日ニ而一七日満座之由也

(佐伯郡)

江戸御沙汰書之内

六月十八日

一御刀備前国長光

(鍋島齊正)
松平肥前守様

長崎表湊神之崎(馬之)・伊王島台場築立之

義格別之大業ニ而、費用等も莫太之

事ニ相聞候処、積年丹誠致及成功、

築立方も際立宜敷、長崎表永世之御

備相立候段達御聴、御満足之御事ニ

候、依之思召を以御伝来之御刀被下

之

六月廿九日

一御鞍鐙

宗(義和)
対馬守様

朝鮮信使来聘御差延之義去々子年被仰出

候処、取計方行届、彼国より延聘之儀相願、

其旨御聞届被遊候様相成候段一段之事ニ

被思召候、依之被下之、猶此上入精可申

付旨上意ニ候

一銀二十枚
一時服二

宗対馬守家来
古川采女

一銀二十枚

広瀬豊吉

朝鮮信使来聘御差延之義彼国江掛合方宜骨

折候ニ付被下之

七月 大

五日、木野亡尼法諡

智蓮孩子

江戸ニ而青山ニ有之公儀

之焰硝蔵へ火入、土蔵ニ戸

前跡形なく相成、其響ニ而

近辺之家々余程損し、人死

朔日、戊戌、晴、暑、朝涼、今月予月番也、

此節早出勤故五時頃出、九時前退、江清

人入来之由、極夕被為召候而御館へ出、

渡辺氏江も行、入夜婦、夕木野百太郎義病

氣養生不叶、今朝死去致候旨為知来、仍而為悔千代吉遣(永野)也、

夕夕曇、夜微雨、蒸気甚

○二日、己亥、晴、暑甚、夕曇、西北雷鳴、午後御用向ニ而被為召罷出、渡辺宅へも罷越、

今朝弓術へ出

も有之候之由專風説有之也
 遊行上人江御口上之御挨拶御使者被差出、御馬回八木喜真太相勤候由、御両家様方も御同様之由也

遊行上人宿坊へ御家老様方二も御先例者為御見舞御出被成候処、去ル文政

八年二者何角御省略二而、

甲斐様御忝人御見舞被成候

由之処、此度者尚又御作略

二而一円相止、御年寄衆迄

も見舞無之、郡御奉行山田

清助殿為御見舞被參候由也

九日

御役御免

村越孫六殿

御目付也

右孫六殿御役御免者借銀

弘方之義二付差（繩力）事有之、

少々不統も有之候哉之趣二

○三日、庚子、晴、朝遠雷、暑甚、朝素説所講釈へ出席、相濟出勤、昼九時退、夕御用向二而渡辺宅へ会、夜二入御奥へも出ル、遊行上人御札弘通二付、此節日々誓願寺へ成群集參詣有之候由、明日者東照宮江社參被致候由

○四日、辛丑、晴、炎暑、夜前以来御内密御写物被仰付候二付例時少遲出勤、四半時頃退、

平野藤吉郎入来、長喜三太夜中入来、暫話、水谷之方廿日市差纏一件今以落着二不至、

何とも気毒二付昨年内々大島五兵衛へ談置候趣を以岡田八十太郎江扱を入試させ呉候様

二との義、昨日五兵衛へ内々厚頼置也、水谷方抑以来贈答之書類も窃二見せ置候事

○五日、壬寅、晴、暑甚、寒有涼風、今朝六半時揃、貫心流劍術稽古前御覽被遊候二付為

席詰出ル、出人四十人余、何れも近來出精故業前見事也、四半時頃相濟、此間方被仰付

候御写物今午後迄二相濟、直二差出ス也、慈君今朝遊行上人御札受与して誓願寺へ御參

被成、夕木野へ悔・見舞二行、酒出ル、水谷へも寄、入夜深更迄話帰ル、同方二而酒飯

出ル、御年寄生田筑後殿今朝出立、江戸江被罷出也

○六日、癸卯、晴、暑甚、朝木野一馬何角之謝与して入来、例時出勤、九時前退、夕弓術

○七日、甲辰、晴、夕曇、微雨、炎威強、朝日出頃麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝

詞申上、周防様江之御祝詞於御次御用達迄申上、出衛様江御祝詞御部屋二而申上、御奥

へ出、北之御部屋二而高謙院様江御祝詞申上退、辻清人為祝詞入来、酒飯出ス、其外出

入之者少々来

○八日、乙巳、晴、炎威強、朝御乘馬并弓術へ出、午為窺御機嫌罷出、家小・幾三郎早

朝方木野へ行、夜中帰ル、参りかけ誓願寺江參、遊行上人之御札を受ル也

而、右様御免之由風説也

十日

遊行上人へ御札守被差出候御挨拶御三家様方御使者出、此方様方者御馬回由良助三郎相勤候由

同日

海蔵寺隠居和尚

一 快瞳

右病氣二付寺役難勤趣を以先年隠居願出候処、近来病氣快全二付尚又再住職之義願之通被仰付

右之通今日被仰付候由之

也

十三日

由良助三郎

右此間御使者之節不作舞之義有之、恐人申出候処、此度者先方内濟二相成候之事故、格別不被及候得共、以

○九日、丙午、晴、炎威強、早朝御内密稽古二付罷出ル、夫方直二出勤、夕八時退、其

後御用向二付渡辺氏(宗右衛門)へ行、御館江も出ル、渡辺雅登失念之義有之、恐入申出、早速不及

其義旨被仰出候由、今朝松本良伯入来之由

○十日、丁未、晴、炎威強、早朝例時出勤、九半時頃退、慈君夜中妙慶院觀音江御参り被成也、

江戸表垂墨利加船不殘致退帆候旨被仰出候由、昨年寄衆方被仰上候由也

○十一日、戊申、曇、雨はらつく、蒸、夕涼、夜大二涼、朝御乗馬へ出、炮術江も出ル、

遊行上人今日午刻出立有之候由、遊行上人方此間御札守被差上候二付、尚又御挨拶御

使者被差出、昨日御馬回り由良助三郎御使者相勤候処、時刻余程遅参二相成、其上宿坊

誓願寺門内へ菅笠を着ながら参、持槍も御貸供小人銀助不都東二而門内へ入レ、甚不作舞

之事二而、役僧方段々八ヶ間敷申候由之処、町方御歩行目付伴喜八郎厚心配致候而、何

も内濟二相成候之由、甚御不外聞残念之事也、尤座上二而之作舞者何も宜敷候之由也、夕

為窺御機嫌罷出ル、昨日松本良伯入来之由

○十二日、己酉、晴、朝涼、午後炎威強、夜又涼、早朝例時退出勤、九時頃退、夕森岡

万之進來、夜妙風寺・心行寺・誓願寺・清住寺等へ参、昨十一日秋露祥月、西向寺へ

千代吉為参也

○十三日、庚戌、晴、朝夜涼、午熱甚、家小夜来腹痛二而臥、朝(術脱力)炮稽古二出、夕(朝)為窺御

機嫌出、今日方例之如御役所廢休也、夜寺々江千代吉燈籠点二為参也

○十四日、辛亥、曇、炎熱、夜蒸氣殊甚、朝為窺御機嫌罷出、夕御用向二付郡御奉行山

田清助殿へ行、謁、前後御館江も出ル、夜妙慶院・西向寺江参、燈籠を墳墓へ点す、如

後之処厚心付候様今夕御示有之候由、小人銀助右同断也

十五日朝

立秋節

廿日、渡辺宗右衛門殿母義死去、当年九十一歳、誠二稀成果報厚き人と一統申值候事也

右母義病氣太切之趣達御聽、御兩殿様方為御尋宗右衛門へ奉文被下候由也

廿二日、渡辺氏母儀死去二付今日為御悔御尋御兩殿様方御使者被下、御上屋敷方御兒小姓名倉求馬、御下方御側詰室角左源次相勤、表門通り罷越、玄関前白沙江家来兩人出迎、同式台へ取持御取次永井仲之助出迎、退出之節主人式台まで

例寺僧へ銀一封ツ、贈、其外西蓮寺・本逕寺・明信院・本照寺・興徳寺等へも參

○十五日、壬子、曇、蒸熱甚、午後有風、雨時々霑葉、朝六時頃方出宅、海蔵寺江拝參、五半時頃帰宅、和尙へ再住職を賀、昆布料を呈、立秋也、午前為窺御機嫌罷出、夜君御寺參方直二辻へ御出、御宿被成、長喜三太来

○十六日、癸丑、雨、蒸氣、渡辺千寿院殿当春来菟角不被相勝候処、此節者水氣二相成被困候由二付、出勤掛訪之、早朝例時出勤、九半時頃退、下女出替無人二付、妙慶院拜參怠、夕弓術へ出

○十七日、甲寅、時、残暑強、朝御乘馬へ出、為窺御機嫌出、松本良伯益前葉謝之礼として入来、去ル十四日幾三郎四ツ誕生、当夏者別而息才二も候故、今日内祝致し遣ス、尤當時之事故真之心祝迄也、夕田中榮作を呼、酒を飲ス、夜慈君御帰り被成、去ル十五日貫心流劍術師細六郎病死之由也

○十八日、乙卯、晴、秋暑嚴酷、夜蒸熱最甚、早朝弓術、早朝例時出勤、夕九半時頃退、堀尾眠石翁入来之由、朝万之進來、酒飯を饗候由、夕六丁目御館江為窺御機嫌罷出、森岡江後室不快之由二付訪之、同方二而酒出ル

○十九日、丙辰、晴、秋暑烈然、早朝例時出勤、九半時前退、夕渡辺千寿院殿病氣を訪、何分追々疲勞増候姿二而被氣遣候由也、夕弓術へ出、昨朝海蔵寺再住之為吹聴入来之由、扇子五本被患、夜蒸熱甚

○廿日、丁巳、時々雨、炎蒸甚、早朝長喜三太来、渡辺千寿院殿病氣不出来、尤今暁死去之旨為知来、早速見舞、直二相詰何角見合、尤御機嫌伺として御館へ罷出、御武具役

被送出候由也

〔十七日、於江戸

一御加増拾石

松野覚衛殿

〔廿四日

一御切米拾式石

一式人扶持
弓術師加役

園藏跡目

石井寿兵衛

但父園歳年来出精相勤候二
付御切米宜品被下置候之由

右同人

前文之通被仰付候間、家芸
之義弥以心掛、弟子取立可
有之候、依之毎歳銀壹枚被
下之

〔廿六日

一閉門被仰付
一置候処御免

浅野玄蕃殿

但五十一日振御免也

所へも雅登頼二付出勤、其前後渡辺江詰見舞、夕方帰ル、来ル廿一日・廿二日於正清院
(徳川家慶)
慎徳院様御法事被仰付候二付、諸事穩便二仕、火之元別而念入候様召使之末々迄申付候
様との旨被仰出也

○廿一日、戊午、曇時々降雨、蒸気甚、朝例時退出勤、午鼓後退、渡辺氏母儀今晚四
時之葬式故、暮後方参見合、出棺之節玄関二而見送ル、寺江者家来使者二遣、葬二会せ
しむ、葬礼之節親子共供被致、尤宗右衛門殿二者見送り之外を供被致、此儀当不当いか、
未其定格を不聞、御家中大臣之方角之仕成いか、識者二可問、亥鼓後帰、石井寿兵衛忌
明返礼入来之由

○廿二日、己未、曇時々雨、夕暴雨、雷鳴、蒸気猶強、朝素説所講釈江出席、其後出勤、
夕八時過退、今日正清院二於而慎徳院様御法事二付、御名代御焼香此御方様御蒙御勤被遊、
御寺詰者昨日遠江様、今日主水様御詰被成候由、夕方西向寺江参、辻清人入来之由

○廿三日、庚申、晴、秋暑猛、蒸気強、朝渡辺宗右衛門殿江見舞、岩崎・小倉江盆前到来
物并寺参等之謝二行、三宅内外・渡辺四郎右衛門をも訪、午前為伺御機嫌罷出、夕方
妙慶院江参十六日意、夫方白鳥二而吉本恒之丞方稽古場開今夕致候付出席くれ候様一昨日
同人申来候付見物旁二行、稽古場去冬損壞之处、猶復此度御建被下、立派二相調、今日
出席も多人数二而殊外賑敷候也、藤川・堀尾江先達而到来物之謝二行、帰り辻江も見舞、
酒出、夜中帰ル

○廿四日、辛酉、晴、朝夕纔覚涼意、朝弓術稽古場へ出ル、朝万之進來、早朝例時出
勤、九時過退、西向寺江千代吉為参也、今日石井寿兵衛亡父園藏跡目被仰付候段為知来、

廿七日

一御役御免

右同人

御番頭

右思召有之二付

一知行高百石

和多理跡目

芝和平太殿

卅日

処暑節

去ル廿三日

一御加増三十石宛

南部伴五郎殿

徳永吉十郎殿

一同拾石宛

伊藤久之助殿

吉田藤太殿

川村和三郎殿

成川大五郎殿

小池直次郎殿

三好彦之進殿

歛使遣又、地蔵尊御供物如例頂戴被仰付

○廿五日、壬戌、晴、秋暑強、朝御乘馬へ出、例時出勤、九時過退

○廿六日、癸亥、晴、夕白雨、雷鳴、午秋炎猛、夜些涼、弓術へ朝之内出ル、為何御機嫌罷出、

秀山祥月二付妙慶院江千代吉為參、石井寿兵衛江跡目之歛二行、午後佐藤益之丞方炮

術会二付出席

○廿七日、甲子、晴、秋熱猛、朝些涼、早朝御内密稽古二付御裏へ出、其後出勤、九半時

頃退、昨日方下女を下ケ無人二付西向寺江參詣怠

○廿八日、乙丑、晴、秋暑烈、朝些涼、早朝弓術へ出、例時出勤、午時前退、石井寿兵

衛此間參候謝入来、夕小倉甚右衛門入来、当人身前之義二付内談有之、愚見申置、納得

之様子也、今朝万之進來、夕長束茂兵衛内用事二而來、折節有合之酒を饗ス、長喜三

太入来、渡辺氏方明夕麤抹之茶漬被振回数候二付參兵候様二与の義伝言申来、厚挨拶申

返ス也

○廿九日、丙寅、晴、秋暑酷烈、午前為何御機嫌罷出、渡辺氏江も御用向二付行、佐藤

益之丞妻不応家風及離縁、徳永滄人殿方差戻候由一昨日与三右衛門方達し有之趣二付、

夕方為見舞行、極夕渡辺氏へ被招參、小座敷二而沓汗沓菜、茶漬出、肴三種二而酒出ル、

得井満四郎・長喜三太会、右之外此間參相詰候者不殘被招候由二候へ共表座敷故不出会、

當時之御時節柄ニしてハ叮嚀之事也、今朝周五郎来、同人義近頃迄中津屋方二逗留罷在

候之処、先年養子ニ參候橋本屋助四郎夫婦共先達而追々病死致し、周五郎元之妻周五郎

実子を連相暮し居候由二而、段々再人家之義取持人有之、尤助四郎其後身代持崩し、当

朔日、森仙太郎備前辺へ御馬牽二被遣、今朝出立之由也

五日

一御用人並郡御奉行

木村幾三郎殿

青山御家老方

一御加増五拾石

永田丹解殿

右常々出精二付

一御代官

時借屋住致し居、格別家督等も無之候得共、何分右様実子も有之事故取持二任せ、去ル廿五日入家致候由也、夕迄咄ス、午後波多野権祐来、三原小林彦左衛門倅を連来、此間方逗留、今晚船便二而帰候由、始而逢、(邦)国太郎与申候由、十三歳之由也、酒飯を饗ス
○卅日、丁卯、曇、蒸、夕白雨雷鳴、至夜大涼、早朝射場へ出、例時出勤、九半時前退、出勤掛渡辺へ昨日之挨拶二行、夜長喜三太来、幾三郎少々腹合不回り之様相見候二付、昨日松本玄順偶来薬を乞候由、勿論為指事二者無之也

閏七月 小

○朔日、戊辰、曇時々雨、夕雷鳴、夜些涼、当月予御武具受二候得共、今日者例時方御館出勤、夕八時前退、長喜三太朝夕来、朝松本三珠幾三郎来診、宜敷由申也、由良助三郎当盆故兵左衛門墓へ燈籠を立候謝入来

○二日、己巳、曇、蒸気甚、夕遠雷、朝弓術、五半時頃方御武具役所出勤、夕七時退、今日者清光院様方御拝領之御下召・御刀等御風入二而、小幡繁太郎殿為拜見被罷出候故、御書院二而出会致ス也、夕又弓術

○三日、庚午、晴或曇、秋暑、朝夜些涼、早朝弓術、素読所講釈へ出席、又炮術、夕又弓術

○四日、辛未、晴又曇、午秋暑烈、朝些涼、今朝六半時揃弓術稽古前御覧二付、予も罷出ル、出人十五人、今日者惣体中り甚少し、予も三本中ル、但拾本通り御覧也、森岡万之進来飯、四半時御武具役所へ出勤、夕七時過退、森仙太郎倅光太郎昨日御乗馬之節浅

寺川直衛殿

吟味役方

一御代官御免

伴 佐助殿

九日

(千脱方)
二百日

十一日

八月九日利円廟百五十回二

付東城徳了寺江

茶湯料

銀貳兩

松本屋へ

掃除料

銀貳匁

右之通り送り遣ス也

香山之御馬へ乗、落馬致候所、誤而馬之前足蹄頤江当り、余程之疵致候由、見舞使遣ス、渡

辺四郎右衛門娘此間内方驚風症二而氣遣候由、見舞使遣ス

○五日、壬申、曇、朝涼、午秋暑強、有蒸氣、朝方砲術稽古二出ル、渡辺四郎右衛門娘今

晝病死いたし候由、悔・見舞使遣ス

○六日、癸酉、曇、蒸、時々雨、朝方馬術・弓術江出、例時御武具役所へ出勤、夕七時過退、

渡辺四郎右衛門を吊、大島五兵衛妻此間以来瘧疾二而困候由、見舞使遣ス

○七日、甲戌、曇、午後雨、有風意、雷亦鳴、夜涼、朝方素読所会読へ出席、西向寺江

(永野)千代吉為參、今日於射場山田多喜登弓会相催候筈之処、天氣合二付止候由同人申来候由、

今朝稽古場二而砲術稽古定日二付足輕方も出席致居候処、水主米藏不都束二而、誤而砲

薬へ火入、五百目許相發候由之処、幸ニして些も怪我者無之候由、余程音も聞へ、煙氣

大分二見ル也

○八日、乙亥、雨、朝如晴而又振、夕方大涼、朝射場へ出ル、例時御武具役所へ出勤、

夕七時退

○九日、丙子、曇、纔時晴、又曇、涼、二百十日二候へ共風意者少も無之、穩也、朝砲術稽古、

大崎和三郎明日吉本稽古場二於て砲術集会催候由申来、今日嶺光殿御四十九日二付御

茶被仰付候由二而、御重之内牡丹餅十六御内々頂戴被仰付也、夕桑原吉郎二入来、酒を

出、夜迄話ス

○十日、丁丑、曇、朝涼、午後暑し、朝弓術へ出、又御乘馬へ出、例時御武具役所出勤、

夕七時退、御奥江も昨日之御受出ル、夕又弓術、遠江様今日御出立、三原へ御越被成

候由也

○十一日、戊寅、快晴、涼、午秋暑強、〔村上三郎右衛門〕采月九日元祖利円廟百五十回忌御相当二付、徳了

寺書状を以茶湯料相備、并御墓所掃除等之義松本屋亀治郎へ頼遣候二付、去ル七日付二而夫々書状認、今日御役所へ相頼置也、〔朝〕炮術稽古、夕弓術稽古、〔松〕田謙藏時候見舞入来、〔慈〕君昨日方御腰痛ニ而御平臥

○十二日、己卯、朝曇后快晴、朝涼、午暑、〔朝〕弓術、〔例〕時御武具役所出勤、夕七時退、〔佐〕藤与三右衛門先達而益之丞妻離縁之見舞二行候謝入来、松本良伯見舞入来、〔夕〕万之進來、〔辻〕清人昨夕以來不快、大分熱有之、困り候由、今朝良伯咄ニ而承候二付、夜見舞千代吉遣ス、格別之事ニも無之由也

○十三日、庚辰、晴、朝涼、午熱、夜蒸、〔朝〕御乗馬へ出、〔素〕説所講釈へ出席、〔炮〕術稽古

二出、〔夜〕弓術

○十四日、辛巳、朝曇、雨はらつく、後晴、秋暑烈、〔朝〕御内密稽古二付御裏へ罷出、相濟御武具役所へ出勤、夕七時過退、〔夜〕蒸

○十五日、壬午、晴、秋暑烈、〔朝〕大島五兵衛此間同人妻不快見舞遣候謝入来、〔炮〕術江出ル、〔夕〕六丁目御館へ為窺御機嫌罷出、御手洗焼団粉御到來被遊候由ニ而頂戴被仰付也、入夜帰、森岡へ卒与見舞、〔夜〕岩崎およし入来

○十六日、癸未、晴又曇、午前時々雨、後晴、蒸、〔早〕朝妙慶院へ参詣、〔御〕寄合二付御館へ出勤、午方御武具役所へ出勤、夕七時退、〔於〕江戸当月朔日若殿様御登城被遊候処、殿様御願之通御国元江之御暇被仰出、御例格之通御拜領物被遊、依之当月廿七日江戸御発

〔十六日

白露節

〔廿日、先月廿七日、佐伯郡原村二隆円寺と敷申寺有之、其裏へ雷落候様子ニ而寺内一統大二魂消、出見候へ者大なる銀杏之木半方折落、其下二六七人持程成石有之候処微塵ニ碎居、其辺二人之拇指之爪之形ニして、大サ小杓子程成爪落在之、能見候へ者少し肉も附、

血杯も附居、夫二又毛も附居候処、全猪之碓毛之大なるか如、甚奇怪之物二有之、依之定而雷獸之爪二而も可有之歟杯与打寄申値、小キ箱二納、床之上へ碁盤之下へ入置候処、翌廿八日之夜何事もなきに玄闕之上方夥敷火出、空中江登り候様二相見へ、其跡二而件之爪を尋候処不見、箱者碎て庭之池中二落有之、誠二以奇々妙々之事共二有之し由、右寺二同居罷在何某与歟医師此間当所江出、古金買を致候万吉与申者之方二而咄候由、右爪者現二其医師拾ひ揚候由二而、決而虚説二而者無之趣、右万吉方直咄承候由、長束茂兵衛話也、甚珍事也

駕被遊、御滞無御坐候へ者来月廿五日御帰城可被遊旨御年寄衆方被仰上候由也

○十七日、甲申、暁丑刻頃方時々豪雨、雷烈敷、朝纔晴又曇、巳鼓後雷止声、蒸、夕涼、〔暁来雷鳴殊外烈敷事二而、近年二稀成雷鳴也、夕渡辺氏宗右衛門朦中を訪、夫方辻清人不快を訪、今日者愈快、仕回も致候由、未色合等透与者無之様二見ゆる也、酒出、暮迄咄、帰り堀尾老人を訪、困棊、深更婦、永井仲之助をも參掛訪也、〔今暁来之雷処々江震候由風聞有之、未耽与致たる者話者不聞、主水様御妾腹雄吉様今日御死去被成候之由、依之主水様〔安敷〕内記様御定式之御服忌御受被成候之由、雄吉様今年御九歳、先年御驚風御治し被成、誠二御虚弱之御生質二被成御坐候、此度猶又前症御再発之御気味二而御死去之由、御遺体者今晚御病氣分二而禪林寺へ御入寺被成、直二御葬送有之由也〕

○十八日、乙酉、晴、涼、昨暁之大雷雨二而氣候大二居合、今日者初而秋色を催ス也、〔朝弓術、素説所会説へ出席、相濟出勤 御武具也、夕八半時頃退、〔退出後主水様江昨日雄吉様御死去被成候二付御悔として罷出ル、麻上下を着ス、御出頭中村善三郎二謁退、今日藤井源之進入来之由〕

○十九日、丙戌、曇後晴、涼、〔朝御乗馬へ出、巳鼓前方遠江様江御奥様御差合・御機嫌伺旁二罷出ル、一昨日雄吉様御死去、御舍弟様故廿日之御服忌也、平服二而罷出、御客对関浦友助江謁し退、沖守次郎を訪、松田謙蔵を訪、藤井源之進江一昨日跡目被仰付之悦、昨日入来之謝旁二行、同人昨日来、一昨日同姓佐内跡目、八石三人扶持、御玄闕小姓被仰付候由也、夫方桑原吉郎二・平野藤吉郎を訪、午後婦、岩崎へも源之進跡目相濟悦二行也、桑原二而午飯出ル、夕弓術

○十九日、丙戌、曇後晴、涼、〔朝御乗馬へ出、巳鼓前方遠江様江御奥様御差合・御機嫌伺旁二罷出ル、一昨日雄吉様御死去、御舍弟様故廿日之御服忌也、平服二而罷出、御客对関浦友助江謁し退、沖守次郎を訪、松田謙蔵を訪、藤井源之進江一昨日跡目被仰付之悦、昨日入来之謝旁二行、同人昨日来、一昨日同姓佐内跡目、八石三人扶持、御玄闕小姓被仰付候由也、夫方桑原吉郎二・平野藤吉郎を訪、午後婦、岩崎へも源之進跡目相濟悦二行也、桑原二而午飯出ル、夕弓術

〔廿五日御用

一御児小姓

永井仲之助

〔御馬回りら

一同御免

名倉求馬

一御次詰加

田宮嘉仲太

〔御中小姓ら

右出衛様御側へ相勤候之様

被仰付

〔同日夕、宅御用

一禁足

万次郎俣

池田要之進

右不風俗之儀有之趣達御

聽、不埒之至被思召候二付

但此後家督二者不相成候

事

一〔御與付定加
御免

池田万次郎

○廿日、丁亥、晴、夕曇、微雨、秋暑、〔朝弓術へ出、〔例時出勤、夕七時過御武具役所也、

〔渡部卓爾來、海国兵談ヲ戻ス

○廿一日、戊子、曇、暑、夕晴、〔朝弓術へ出、〔左之通被仰出、席達有之也

昨年異国船渡來二付、武備筋之儀從公儀被仰出之趣も有之、依之御家來中武辺之嗜御
手厚二被仰付、猶又当年二至候而茂被仰出趣も有之、何れも御趣意厚相守、專諸若
稽古被仕、老年或者病身之輩茂山川之漁獵等も相止居候趣一段之義二被思召候、尤右
等之義も折二触仕候ハ、是以筋骨之鍛、鬱散保養二も相成、甲斐く敷諸稽古仕候一
助共可相成二付、随分有間敷事二も無之との御沙汰二候、乍去壯年之輩者猶更左迄も
無之、病氣等申立、漁獵等二相泥ミ候而者折角之御趣意二反し候間、万一左様之輩も
於有之者可被及御沙汰候間、聊以氣弛心得違無之、弥以諸芸稽古無怠出精可有之候、
此旨無屹寄々為相響可被置候、以上

閏七月廿一日

○廿二日、己丑、晴、朝涼、午暑、〔早朝西向寺江參詣、〔素読所講釈へ出席、射場へ出、〔例

時御武具役所出勤、夕七時退、夕又弓術

○廿三日、庚寅、曇時々微雨、涼、〔朝御乘馬へ罷出、又炮術稽古二出、夕弓術、永井仲

之助先日參候謝入來

○廿四日、辛卯、晴又曇、暑し、〔朝御内密稽古二付御馬場へ出、巳鼓後相濟、御武具役所

出勤、夕七時過退、〔極夕弓術、〔下女不快二而下宿、無人二付西向寺江代參も得不申付

○廿五日、壬辰、晴、蒸、夜涼、〔夕吉本恒之丞炮術会二付稽古場へ出席、〔今日御用召有之、

差扣

右倅要之進不風俗之趣達御聽、禁足被仰付候へ共、全体常々家内向示し筋不行届、不埒之至被思召候二付、右之通被仰付

〔廿八日〕

一 御用達役
御免

八木野右衛門

一 御輿奉行

右同人

右北御部屋江日参二出勤、

高謙院様御用向相勤候事

一 御用達御膳番
兼帯

室角左源次

御側詰方

但周防様御附、六丁目御

屋敷江日参二出勤、御用

向諸事引受相勤候事

夕方宅御用も有之也、俱如頭書

○廿六日、癸巳、曇、蒸、夜雨、朝御馬並弓術へ出、例御武具役所へ出勤、夕七時過退、辻清人・渡部卓爾入来、金備兼而壹両二付六拾四匁之取引与被仰出有之候処、尚又此節六拾七匁取引致候様町方江被仰出候由也、いか、

○廿七日、甲午、曇、午後晴、夕又曇、遠雷、蒸、夜豪雷雨鳴、朝素読所会読二付出席、其後御裏御稽古場へ一甫流劍術・柔術稽古前御覧二付出ル、右二付御館江も出、九半時過退、主水様方先達而為御悔罷出ル御挨拶御使被成下、御口上書有之、留守中二付帰宅之上御用人中まで御受手紙出ス、今日も御用召数人有之、左之通

一 御輿奉行定加
御免

鱷 兵馬

一 御目付
御免

山田多喜登

一 御側詰次席
御免

山県兵太郎

一 御輿付

由良保人

右思召有之二付

右同人

一 御見小姓

相庭百藏

右弓術稽古筋之儀二付被仰付置候

趣も有之候処、以後不及其義候、

依之毎歳被下金三両者上ル

一 御次詰加

佐久間藤之丞

一 御免

真野謚五郎

右出衛様御側江相勤候様被仰付

一 御次詰加

御中小姓方

一 御輿詰

鱧 兵馬

但周防様御附

一 御輿附定加

野口半助

御中小姓カ

一 御上屋敷明御多門江
御替被下

大島五兵衛

五兵衛御多門へ

八木野右衛門

野右衛門御多門へ

室角左源次

左源次御多門へ

鱧 兵馬

五日

一 知行高百三拾石

右兵馬者家内不締之趣、多喜登・兵太郎者不身持筋有之趣、謚五郎者同人産母不身持之由二而共二醜評有之、其義二付而之被仰付与相見る也、夕弓術、今日も西向寺代参も怠也

○廿八日、乙未、曇、午後微雨、蒸強、朝弓術へ出、例時御武具役所出勤、夕七時退、今日も御用召有之也、夜前之雷沼田郡安村へ落、百姓志軒焼失之由也

○廿九日、丙申、曇時々雨、夕涼、朝炮術へ出、拾弋玉異放稽古致ス也、高謙院様又々為御養生能美島(佐伯郡)へ今晝御渡海被成候由、石井寿兵衛御供二罷越候也、佐藤益之丞後妻先達而離縁之処、尚又此度中江保登殿妹を縁組之合、尤回縁之事二も有之、先真之逗留として去廿二日夜引受、婚姻者追而相調答之由也

去ル廿五日池田万次郎倅要之進不俗之義者、全体万次郎方家内向不示之義者是迄評も有之候由二候処、要之進義者内職二傘骨を削候由二而得意先有之、不絶其方江持参候処、先達而其隣家之店先二と歟有之候打網を志状提帰り候由、然処折悪敷途中二而其亭主二出逢被見咎、其儘万次郎方江付来、八ヶ間敷申約候処段々断を申、網を帰し内分二而相済候義有之候由、不埒至極之事也

八月 大

○朔日、丁酉、雨、涼甚、朝六半時麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞申上、周防様へ御祝詞、御次二於て御用達三宅吉左衛門迄申上、出衛様御祝詞、御部屋二而御逢被成、

新兵衛跡目

今中角右衛門殿

一同百石

登門跡目

井上熊太郎殿

〔九日朝、渡辺氏四十九日

法事有之由二付千代吉代參

二遣又也

同日早晨

生盛

蓮根

香茸

油あけ

御皿

こんにやく

あかみしま

白か大根

青み

けむ

みそ

御汁

苞豆ふ
粒しゐたけ
青み

さわく

御坪

ちりめんふ
岩たけ

おろし生姜

御飯

御香物

御奥へ罷出退、北御部屋江者高謙院様御留守二付不罷出、〔午後堀尾眠石翁・岩崎常介聞

某二入来、夕酒を出ス、〔夕辻清人入来、酒を出ス、〔当月者予非番月也、〔午前炮術

○二日、戊戌、快晴、涼、〔朝弓術へ出、〔夕西向寺去月末度々參詣怠候二付參詣、妙慶院

へも卒与參、渡辺氏寺興禪寺へ參、夫方松本玄順隱栖水楼を訪、達而留、酒を出ス、三

珠横笛を吹聴也、高介与申盲人箏築を吹、面白し、入夜婦ル

○三日、己亥、晴、夕曇、蒸、〔朝素読所講釈へ出席、〔炮術へ出、〔例時出勤、夕八時退、〔夕

弓術、〔今日夕方夜へ掛白島川中河原二於て島本甚内殿方玉相図有之、昼夜六十余玉有之

由、当辺方も能見る、尤昼者不出来多有之様二見ゆる也、〔周防様一昨夜方字品島辺へ御

釣二御出被成候由二而、御獵之鱸・茅渚・鯛一尾ツ、頂戴被仰付也、告于廟、夕方打寄

拜味仕ル也、〔夕松本三珠昨日參候謝入来

○四日、庚子、曇或晴、蒸氣あり、〔朝弓術江出席、〔例時出勤、夕八時過退、〔夜辻清人夫

婦来、酒を出、お梅は宿ス

○五日、辛丑、晴、暑し、〔朝炮術江出、異放拾匁玉致稽古也、〔夕辻清人入来、下女民も来、

夜お梅婦ル、夕酒鮮を饗ス、慈君も一緒二御出、御宿被成

○六日、壬寅、曇、蒸、〔朝御馬并二弓術へ出、〔例時出勤、夕八時退、〔森仙太郎昨夕備前

方婦、被仰付候馬兩疋引帰候出、〔夜雨

○七日、癸卯、曇時々雨、蒸、〔朝素読所会読二付出席、相済出勤、夕七時前退、〔夕渡辺

宗右衛門殿臈中を訪、〔今朝西向寺へ千代吉代參申付、〔夜慈君辻方御戻り被成

○八日、癸卯、晴、暑し、〔朝弓術へ出席、〔夕岩崎常介入来、昨日藤井源之進方家内并一

御平
人參 牛房 飛龍頭
松茸 山の芋
白芋茎 輪袖

御菓子

焼まん頭
さわし柿
なつめ

以上

夕

御茶

牡丹餅

〔十二日、於江戸

一 御役御免

〔安藤市兵衛殿

年来出精相勤候付銀三枚被

下之

一 〔御住居付
御広式御用達

〔中山半之丞殿

家内無屹相招相済候由、夫二付到来物・残酒も少々有之候間、咄二參申間敷哉之旨申、明日不遷廟御祥月二付不得已辞ス

○九日、甲辰、曇、夕雨、涼、

〔元祖利円廟百五十回忌御相当二付、宿戒、晨興、礼服、献膳、献茶、献菓子、東城墳墓遙拜何も恒規之如相済、尤妙円廟も如例配祀仕ル也、当所

二而之御法事者当春三月江取越執行致し、東城徳了寺江去月十一日記二有之通茶湯料相備候二付、今朝時刻を考礼服静坐可仕処、御内密御用二付御馬場へ出候故不能其義候也、早朝御馬場へ出ル、相済出勤、夕七時過退、々出後御用向有之、渡辺氏へ行、入夜帰ル、〔早

日主水様二而、内記様を先達而御悔罷出候為御挨拶御使被成下、御請御使へ不調候故御用人中へ紙面差出ス、遠江様之御奥様方も右同様御挨拶御用人戸田平丞・井上市太郎を紙面二而申来、御請返書差出ス也、右夫々昨日之事也、〔沖守次郎留守中入来、昨年貸置候貫名之法帖持来戻候由、書学第大概執筆第一与申書を見せらる

○十日、乙巳、晴、冷氣、〔朝弓術・劍術へ出、例時出勤、夕八時過退、〔辻清人入来之由、

〔左之通昨日公辺を御達し有之候由

御勝手向御不如意二付御家中長々御減石、嚴敷御省略被仰付候得共、臨時御物入被為湊、御勝手向忽難御持堪、深く御不安思召、依之此上格外之御大儉被仰付、御世帯御取直し方之儀御勝手掛御役人等江手厚申談候様御厚御内慮之趣、別紙写之通御直筆を以被仰出候、右二付御家中一統江茂兼而被仰出候通質素節儉相守、文武之道相勵、此場合如何様共取続相勤候様二との御沙汰二候

右之趣相組支配方末々迄不洩様可被相達候

〔海屋

〔丙午

〔左之通昨日公辺を御達し有之候由

御勝手向御不如意二付御家中長々御減石、嚴敷御省略被仰付候得共、臨時御物入被為湊、御勝手向忽難御持堪、深く御不安思召、依之此上格外之御大儉被仰付、御世帯御取直し方之儀御勝手掛御役人等江手厚申談候様御厚御内慮之趣、別紙写之通御直筆を以被仰出候、右二付御家中一統江茂兼而被仰出候通質素節儉相守、文武之道相勵、此場合如何様共取続相勤候様二との御沙汰二候

右之趣相組支配方末々迄不洩様可被相達候

〔海屋

〔丙午

〔左之通昨日公辺を御達し有之候由

御勝手向御不如意二付御家中長々御減石、嚴敷御省略被仰付候得共、臨時御物入被為湊、御勝手向忽難御持堪、深く御不安思召、依之此上格外之御大儉被仰付、御世帯御取直し方之儀御勝手掛御役人等江手厚申談候様御厚御内慮之趣、別紙写之通御直筆を以被仰出候、右二付御家中一統江茂兼而被仰出候通質素節儉相守、文武之道相勵、此場合如何様共取続相勤候様二との御沙汰二候

右之趣相組支配方末々迄不洩様可被相達候

一 御輿詰

宮川盛磨殿

八月九日

御直筆之写

一同

佐々木彦藏殿

御馬加役

但其儘御番外

勝手向難決ニ付取縮筋之儀毎々申付候得共、菟角臨時物入多、借財相重ミ、就而者家中長々減石申付可為難儀候得共、融通も難付、更ニ取直之期も無之所、昨年以來尚又莫太之入用出来湧、忽勝手向難持堪、此姿ニ而ハ公務初国民撫育之儀も無覺束、甚以不相濟事ニ候、当時専大儉中ニ候得共、此場合尋常之儀ニ而ハ迎も難取直、依之此上万端可令勘弁候間、勝手掛り役人共者勿論、其外向々急度相心得、熟和誠実ニ申合、從來之仕成等ニ不泥、際立格外ニ作略取締致候様手厚ニ可申談候、右之趣家中一統へも為心得知せ可置、尤兼而申付候通節儉筋弥堅相守候様可申付候

閏七月

年寄中

〔左之通も昨日被仰出候也

〕此度諸家供連省略被仰出候付而者、陪臣之面々使者等相勤候類、其余供連別而減少可致、平日駕籠相用候儀步行・乗馬ニ改め、駕籠之儀者無余儀節者格別、先平に成丈ケ不相用、都而無益之供連無之様銘々主人より可被申付候、右之趣可被相触候 六月 別紙之通従公儀被仰出候所、都而作略筋之儀ニ付而ハ於御内輪も兼々被仰出之趣も有之、御使者柄一様ニも難成可有之候へ共、此先キ江戸詰之面々御使者等被勤候儀も候ハ、此場合可成丈供減、步行ニ而被相勤候様夫々可被相触候、以上 八月九日

○十一日、丁未丙午、晴、冷氣、夕少蒸、朝御乘馬へ出、尤此間森仙太郎從備前牽帰候御馬初

而御覽被遊候ニ付見分致ス、〔四時揃ニ付鼓螺稽古前御見聞被遊候ニ付罷出ル、〔午時炮

十四日、昨日秋月君御祥月之処失念二付、今日西向寺へ千代吉代參申付、御菓

子并御鉢如例供也

十五日、藤川兎名

又次郎

右之通二候由

十八日

寒露節

十九日夜

初廢蚊帳

先達而備前より帰候御馬

左之通名御付被遊候由

青毛之分

烏羽玉

鹿毛之分

電光

同日

歎二付

一大御小姓御免

瀬川静人殿

術、午後永井仲之助先達而御兎小姓被仰付候歎二行、昔馬之進へも当夏紅梅被患候謝二行、藤川・辻を訪、辻二而酒出ル、岩崎へも此間之挨拶二行、極夕帰、渡辺雅登忌明後何角之挨拶入来之由

○十二日、戊申丁未、曇、冷氣也、朝弓術江出、例時出勤、夕七時退

○十三日、己酉戊申、曇、夕蒸、朝素説所講釈へ出席、直二出勤、夕八時過退、夕御乗馬へ出ル、古

江御山方出松茸九本御内々頂戴被仰付也、森岡方之進入来、酒を饗、辻清人も卒与入来

之由、夜雨、藤川伯母氏今晝安産、男子出生之由、使遣ス

○十四日、庚戌己酉、曇、夜及深更晴、月不佳、朝弓術へ出、午後少之物を削候とて誤て小

刀を走らし、大二左手を傷、血余程出ル、家小昨日以来面部右之方少し痺之気味二而、

口左へ變付候二付松本良伯診を乞、夕方入来、全血并火之事二而可有之、格別之事二者

無之由申、薬を恵

○十五日、辛亥庚戌、曇、夕晴、暑し、例時出勤、夕七時前退、今日例年之通家内召使之者宗

門改証文致印形、同勤へ差出ス也、夜月色佳也

○十六日、壬子辛亥、晴、冷氣也、早朝妙慶院江參ル、朝御乗馬江出、例時出勤、夕八時過退、

夕六丁目御館へ為何御機嫌罷出ル、御次二而栗之御下夕頂戴仕、森岡・木野・水谷を訪、

木野二而酒出ル、夕方水谷又左衛門殿御出被成、酒を出、寛々御咄被成候由、夜帰掛途

中二而御目二かゝる、今夕大島五兵衛御多門替之見舞、室角左源次・八木野右衛門へ転

役之悦二行し也、夜長喜三太来話、月佳也、今朝松本良伯来候由、夜中石内村方出候

由香茸御取分頂戴被仰付也

(佐伯郡)

由香茸御取分頂戴被仰付也

○十七日、癸丑壬子、晴、冷氣也、朝炮術江出ル、夕渡辺宗右衛門殿先達而忘明二付何角之返礼与して来儀有之、芝山様(敬患)方御扇子三握被下置、告于廟、同勤一同也

○十八日、甲寅癸丑、曇、夕雨、温、朝素読所会説二付出席、直二出勤、夕八時頃退、辻清人入来、藤川每登殿御入来

○十九日、乙卯甲寅、終日雨、朝炮術へ出席、例時出勤、夕八時頃退、中津屋万之助来宿、朝松本良伯家小来診、周防様今日河上へ御出被為在候由二而、与三右衛門御獵見合被仰付、

昨夕より被參、留守中予御用向引受也、高謙院様夜前從能美島被為入候二付、今朝為伺御機嫌罷出、老女幾田へ謁、其後御土産之由二而琉球芋御内々被下置也

○廿日、丙辰乙卯、晴或曇、冷氣、朝弓術へ出、手痛所いまた得斗無之故不能射、中津屋万之助今午後帰ル、夕藤川江安産之歡二行、被留酒出ル、辻へも卒度寄帰ル、今朝室角

左源次先日參候謝入来之由
○廿一日、丁巳丙辰、晴、冷氣、例時出勤、夕八時退、今朝出仕之上御家司渡辺宗右衛門殿

方今朝於御前被仰付候義有之候間、無程可被為召旨被申聞、無程御用達藤川每登方御次江回候様被申聞、尤佐藤与三右衛門も同様二付同人一緒二相回、同人初二被為召、続而予被為召候二付、三之御間江脇指例之如脱し置、二之御間御唐紙根へ罷出、左之通被仰付、

御意之趣奉畏候旨御請申上ル

其方義出衛用向引受申付ル

右之通相濟退、於御次御用達へ右之趣申述、御用処へ帰候而猶又御家司中江右被仰付候段申述、御家司中御書付被相渡、一応拜見仕、不都束之私義加様御用向引受被仰付候

廿一日、御書付

村上彦右衛門

右出衛様御用向引受被仰

付

佐藤与三右衛門義者右御用

向引受御宥免被下候也

廿四日早晨

酢和会

れん根

香茸

御皿

油あけ

こんにやく

にんしん

けん

みそ

焼豆腐

小椎たけ

青み

白わへ

御坪

せんまい

こん弱

御飯

御香物

御平

油あけ

人參

牛房

松茸

里いも

白芋くき

わ袖

焼まん頭

かき

ふきよせ

夕御茶

さ、け飯

段本意之義奉存、乍併下地すら物こと届兼候処、只様届兼候義可有御坐、其段深恐懼仕

候段申述ル、御書付如上文、其後同勤へも右之趣申述、御次へ罷出、御用達中へ謁、出

衛様江之御受申上、後刻於御奥御逢も被成下候也、去ル十八日東城宮崎方書状到来、先

達而頼遣候徳了寺・松本屋へ之書状届被呉、当月九日徳了寺二而回向も有之、無滞相濟

候趣之旨申来ル、森岡後室不快之由、見舞使遣ス、最早宜敷由也

○廿二日、丁巳、晴又曇、寒し、朝素読所講釈へ出席、其後出勤、夕八時退、退出後西

向寺へ参詣、朝万之進来候由、松本良伯も来候由、慈君夜街上へ御出被成

○廿三日、戊午、晴、暖、朝冷氣、朝砲術へ出ル、夫方御乘馬江出ル、今日者周防様御出

被為在、於御馬見所御機嫌相伺、松宮半五郎殿手馬を牽被罷出、予も乗る也、夕又砲術、

夕松本玄順入来、家小を診しくれる、何分爲指事二者有之間敷与申也

○廿四日、己未、曇又晴、朝冷氣、夕暖、能称廟御祥月如恒規早晨献膳仕、無滞相濟也、

朝御内密稽古二付出ル、相濟直二出勤、夕八半時頃退、退出後西向寺江参、夜家小木

野へ参宿、幾三郎も参也

○廿五日、庚申、辛酉、晴、夕曇、温、朝砲術並二御乘馬江出、例時出勤、夕八時前退、六丁

目様御附御用達室角左源次方子并渡辺雅登江連名手紙二而明後廿七日正九時方御鉄炮御

打揚被遊候、右二付同刻方兩人共爲御相手被爲召候旨被仰出候段申来、返書二御請申出ル、

右之趣者下地昨日森岡万之進方内々御移合之趣申聞候也、夕方水谷君を訪、酒出、深更

迄話帰ル、兼而御頼之福田直右衛門殿方一件、其後岡田八十太郎段々心配致し呉、河田

平内殿方江も度々参、内田織馬殿江も参呉、何分平内殿厚配意も有之、何れ之道二も追々

以来

河田

河田

同日

御切米四石
式人扶持
御步行組並

千太家督

中山彦太郎

一願之通り隠居

中山千太

廿七日

御館二而佐藤益之丞方若殿
様御十五歳之御書を見せ拜
見仕、殊外御見事也、一沫
明霞暗淡紅と云句を一行二
被遊、脇二益齋時年十五と
被遊有之、関防之御印遷善、
御名下御印上源長(長)、印
下益齋之御文字也、長之字
下不分明

落着二赴可申様子二有之趣委細御咄申上候也、朝辻清人入来

○廿六日、辛酉壬戌

晴、暖、朝弓術稽古二出ル、若殿夜前海田駅御泊、今朝四時頃御機嫌
好御帰城被遊候由、旦那様為御迎八丁堀へ御出被遊、其後御登城も被遊候也、沢崎多八
郎妻今晝病死之由、鱸兵馬方為知差越、産後痢病之由也、夜

○廿七日、壬戌癸亥

晴、暖甚、時服可也、例時出勤、四半時過退、夫方直六丁目御館江罷出ル、
九時過方兼而之通御打揚被遊、御相手被仰付、外二御相手渡辺雅登・堀尾精一郎・武内
純介・森岡万之進・吉本恒之丞也、四寸角十玉、一寸角方六寸角迄二玉ツ、都合廿玉被遊、
予七玉御相手仕、夫方御景物迫合被仰付、壹寸角武内純介中、貳寸角予・万之進中二而、
三人共御景物頂戴仕ル也、予諸口紙・真書筆二品頂戴仕、問二而御茶御下夕被下、相濟
予・雅登兩人者御奥へ被為召、御酒・御吸物御側二而頂戴被仰付也、其外御相手も御次
二而御酒被下候由也、西向寺へ千代吉為參、夜家小・幾三郎木野方帰ル、今朝御帰国
御歡御帖付、旦那様御登城被遊候也、御普請奉行大橋助殿昨日御帰国二付登城有之候
処、於御城頓死被致候由也

○廿八日、癸亥甲子

晴、蒸氣あり、朝弓術へ出、今日四時揃諸品御礼被為受候二付、麻上
下着出仕、尤海蔵寺住職御礼も被為受也、依而海蔵寺へ挨拶二出ル、夕七時前退、渡辺
宗右衛門殿此間方兎角時々吐血有之、尤全逆火之事与相見候由二者候へとも、兼而肺癰
之名灸阿戸村源左衛門へ一応被為見度、内々今朝被罷越候由也

○廿九日、甲子乙丑

晴或曇、夕微雨又晴、蒸氣甚、朝炮術稽古二出ル、慈君早晚方中津屋
万之助方江御出被成、中来月中旬頃迄御逗留被成候筈也、夜戌鼓後方雷鳴稍迅、雨も大

晦日

一御切米三十四石
三人扶持

清磨跡目
名井敬之進殿

二降

○晦日、丙寅、曇、夕微雨、冷氣、朝弓術へ出、例時出勤、夕七時退、夜前之雷新庄大芝江震候由

九月小

○朔日、丁卯、晴、冷氣甚、当月予月番也、御日方年頭御礼御登城二付早朝罷出、一応退、例時出勤、入夜退、例年之通夏以来一統無難を祝し小豆飯を炊、祝意を述、松本良伯入来之由、藤井源之進来候由

○二日、戊辰、晴、冷氣強、御登城二付早朝罷出、午時方又御用向二而出勤、夕七時退、夜湯川新太郎来話

○三日、己巳、晴又曇、有風、寒し、御登城二付早朝出勤、一応退、素読所講釈へ出席、夫方例時出勤、夕八半時退、退出後山田多喜登弓会二付出席、幾三郎袴着用、大小先達而岩崎常介へ頼、同人姪婿守山源之助与申御步行組江戸詰中二付同方へ頼遣し呉候処、此節届来候之由二而、昨日常介方方差越呉る、流石江戸拵二而殊外宜敷有之也

○四日、庚午、晴、冷氣強、夕暖、朝弓術槍術并御乘馬へ出ル、御登城二付早朝卒与罷出、例時出勤、夕八時過退、夕又弓術稽古二付出ル、出勤留守へ佐藤与三右衛門入来之由

○五日、辛未、晴、暖、周防様年頭御礼御不参二而、御城中之口へ御出頭中御使者被差出候二付早朝出仕、無程退、足輕方弓鉄炮改、六半時揃二而見分致候二付、五半時頃射場江出ル、今日者御透覽被遊也、九時前相濟、足輕方当年者一統出精二付業前も近年二無

御年寄生田筑後殿今日從江戸帰着被致候由、此度者婦掛大坂へ御銀談御用向二而被立寄候之由、別二江戸方御使者与して御用人堀田恂之助殿被罷越、御借財五ヶ年浮置之御談示相整候との風聞也

七日、御用

一 御代官
御免

伊藤徳之助

一 御目付
御役料並之

右同人

一 御目付役
御免

武内純介

一 御代官
吟味役兼帯
御役料銀百目

右同人

之見事也、夕九半時揃二而弓術・炮術共稽古前御覽被遊、予并雅登も業前仕、弓術相濟直二炮術也、両術共近来二無之多人數罷出、炮術者夜二入六時過相濟、今日者両術共五步中り以上江御知行所之松茸少々宛被下置、予も炮術星角中二而、見事成松茸八本頂戴被仰付、雅登も同様也、弓者予一本中り也、尤一統江者打込二而御射場溜二而被下候へ共、予等者於御次被下候段御用達中へ被達也、夜万之進御覽歸り来話、酒飯を饗入、同人も鉄炮星角込二而松茸頂戴仕ル也

○六日、壬申、晴、暖、今朝も足輕方改為見分射場へ出ル、九時前改相濟出勤、夕八時過退、佐藤与三右衛門俸益之丞後妻二御奥詰中江保登殿妹縁組、願之通昨日被仰出候由昨日為知有之、今朝欲使遣入也、夜三宅内外来話

○七日、癸酉、朝曇後晴、夕又曇、暖甚、例時出勤、夕八時過退、西向寺江水野千代吉為參、退出後主水様へ時候之御機嫌伺罷出、吉田藤馬を訪、尤折柄被仰付候御用向有之、申談置也、今日御役替有之、頭書之通り也、岩崎江行

○八日、甲戌、晴、暖、朝為伺御機嫌罷出ル、下瀬孫平殿御供二而從江戸帰着之由、来儀、松本玄順入来、左之通此間被仰出候由

二葉山御祭礼御省略振之義者昨年より以前へ御復し相成候之処、尚又御省略筋此度被仰出候趣も有之、当年御祭礼一日二相成、音楽被差止、諸去丑年以前之通被仰付候事

九月四日

○九日、乙亥、晴、暖、朝五時前出仕、御祝詞例之通申上、夕大御目付衆御入来二付尚又罷出、夕岩崎常介入来、囲碁、森岡万之進も来、祝酒を饗入

七日

一知行高百四拾五石

瀬兵衛跡目

川村常之進殿

○十日、丙子、晴、暖、朝松本良伯来、例時出勤、夕七半時頃退、今日者香取流槍術稽

古前御覽二付、為席詰罷出、皆々業前見事二出来致感覺也、何分出衛樣格別二厚御力を

御入御取立被成候由二付、一統当春見候節者拔群上達二相見ゆる也、今日者周防樣二

も御出、御覽被遊候也、左之通席達二而被仰出也

近年異国船渡来二付而者、武備筋之義度々被仰出之趣も有之、就中炮術稽古者当今第

一之要務二候得者、御家来中ニおゐても專出精有之度事二候得共、何分失費筋不容易

業柄故、内実不任心底筋合茂可有之与被思召、当御場合中甚以御六ヶ敷義二者候得共、

格別之御趣意を以左之通二可被成下旨被仰出候間、其段承知有之、志有之輩者出精稽

古可被仕候

一御步行組並以上御場所並ニ吉本恒之丞宅稽古場ニおゐて炮術稽古有之節、面々之玉数

都度々々扣置、毎暮相約、御覽ニ出候事

但右両所之外ニ而も恒之丞并稽古場世話役之内出席有之候得者、右玉数ニ相成候事

一右之通ニ而壹ヶ年稽古之玉数五百玉ニ相成候得者、入用之炮薬上方御仕向ニ相成、且

又五百玉之余者何程迄茂玉数ニ応し御仕向ニ相成候事

一右ニ付入用之炮薬者御武具役所ニ而相渡、壹ヶ年五百玉ニ不相成候得者代銀上納可有

之候事

付紙 本文之通ニ候得共、当年之処者玉数ニ不拘御仕向被下

一鉛・火繩者右同所ニ而代上御下相調候事

一異風筒稽古有之輩者、玉数多少ニ不拘炮薬御仕向被下、玉も借用相調候事

十二日

〔江戸御沙汰書之内

金三枚

時服三

二丸御留守居

下曾根金三郎殿

大筒附属御道具、并御貯玉菓

製造、其外南蛮鉄御筒御修

覆、車台製造等之御用相勤

候付被下之

右之外略之

但異放之分玉菓者吉本恒之丞受引二而、同人見合有之節計本文之通二候事

右之趣席々江可被相触候、以上

九月十日

御目付中

○十一日、丁丑、晴、暖、〔朝〕弓術稽古ニ出ル、〔午〕後下瀬孫平殿へ江戸帰着之歛、先日來

儀之謝旁ニ行、夫方六丁目御館へ為何御機嫌罷出、帰掛森岡後室姉之喪、万之進伯母之

喪を弔、沢崎多八郎妻之喪も弔也、森岡後室姉者公儀御步行組岡田清太郎母也、昨日病

死之由、万之進二者養母方之伯母也、〔武〕内純介入來、此間之吹聴並使遣候謝也、〔高〕謙

院様今曉東在中江御忍やかに御出被成候由、御実者御祈願事被為在、〔備後丸〕

詣被成候由、渡辺宗右衛門殿内密御供也

○十二日、戊寅、曇又晴、〔例〕時出勤、夕八半時退、又御用向ニ而出勤、無程退、〔夕〕弓術、

〔慈〕君夜中從中津屋御帰り被成、橋本屋周五郎送り來ル

○十三日、己卯、曇又晴、暖、〔朝〕素読所講釈江出席、相濟直ニ出勤、夕八時過退、〔周〕五

郎今朝歸ル、〔清〕明軍談与云新刻本拜借被仰付、一覽仕、先達而東城方差越候雲南新話与同、

後明与清朝戰爭之始末を略記し候書なれ共、新話与者事実格別之相違、何とも不審之も

の也、〔夕〕射場へ出席、今明日例年之京矢代也、〔辻〕清人度々來、飯を饗す

○十四日、庚辰、曇又晴、暖甚、〔朝〕御内密稽古へ出ル、〔内〕記様時候御見舞御出被成候二付、

御内密濟後出勤、御立座之節御送りニ罷出、八時過退、御迎二者与三右衛門被出也、〔夕〕

射場京矢代へ出ル

○十四日、辛巳、晴、暖、〔例〕時出勤、九時過退、

〔越〕前候之御家中市川齋宮与申人へ内々

〔松平慶水〕

五

〔兼恭〕

〔十六日、於江戸

一御使番

塚本小八郎殿

〔十八日

立冬

〔廿二日早晨

酢和会

蓮根

香茸

油揚げ豆ふ

葛薺（葛）

人参

けむ

味噌

豆腐さい

小椎茸

青味

御汁

白和へ

御坪

しほの茸
こんにやく

御飯

御香物

応対之義被仰付、仰付退出後岡田八十太郎宅へ行致応対、暮過帰ル、大島五兵衛も同様

二参ル、右斎宮と申人者当所市川文昌老之弟也、先年方浪華方江戸江遊学中、蘭学二長

し、其故を以六ヶ年越前候へ御抱二被逢候之処、二来秀才故段々御力も入、蘭学益精、

惣而外国戦術等之事二も達し、近年海防之御軍備御講究有之二付而者同人之發明居多二而、

終二御軍法御改正等之義も皆此人之手二出、当時專御用二被立候之由、然る処此度老母

対面与して被下、此節文昌老方二逗留之由也、同方二而応対之義者外二当合も有之趣二而、

八十太郎方二而逢候也、八十太郎者兼而知音之由、八十太郎宅者袋町也、近年建替候由二

而宅者殊外立派、相応二手広二も有之、家者祖父喜六代方持伝居候由、当八十太郎相応

二暮候由二而右之通規模之事也、尤当時予等勤柄二而者不参格式二候へ共、不得已義故

罷越候也、斎宮殿応対、段々發明之説を聞、深致感服也、何分真卒実意之人、当地当時

之秀才与称候人与者格別也、如斯人他藩之御用二被立候者可惜之事共也、噫、二葉山御

祭礼御名代主水様御勤被成、其後若殿様御社参被遊候由、御社詰者遠江様之由也、二幾三

郎千代吉を連午前二葉山へ参、二米原岩之助先日妻縁欲使遣候謝入来之由

○十六日、壬午、晴、暖、二市川斎宮殿へ昨日応対之挨拶、文昌老方江参、尤斎宮殿仕回中

二而文昌老被謁、始而逢也、正喜撰茶四半斤餞別之意二持参贈る、尤是者予か出銀二者無

之也、全体昨日少々饗応も可致筈二候へ共、兼而其義堅断二而真ノ茶菓子限、何も不設

候故旁右之通贈候也、帰り妙慶院へ参、二例時出勤、夕八時過退

○十七日、癸未、快晴、暖甚、二煤掃を致、平野藤吉郎・長喜三太来助、田中実五郎をも頼、

来ル也、二夕為伺御機嫌罷出ル

のつへい

油揚

人參

牛房

香たけ

里いも

焼とうふ

こんにやく

へち柚

御平

御菓子

まん頭

柿

蜜柑

以上

夕御茶

さ、け飯

○十八日、甲申、晴、朝寒、後暖、朝御馬養生二付御馬屋へ出ル、相濟出勤、夕七時退、辻

清人入来、慈君今晚御出被成候之様申候由、夕弓術稽古ニ出ル、夜慈君辻江御出被成、

夜中木野一馬方方使来、今夕御役御免、差扣被仰付候旨為知来ル、右二付夜中水谷迄様
子聞千代吉遣候得共聡与之義不相分候也

○十九日、乙酉、曇、風吹、寒、木野一馬昨夕被仰付之趣二付、予も恐入之義今朝申出、

左之通紙面差出ス、戸を少し立慎罷在、去ル天保十一年極月四日、水谷又左衛門殿御役
御免、閉門被仰蒙候節も先君恐入被仰出、予も同様ニ有之し也、右之様子万之進へも為
知遣、慈君へも辻之方江申上也

以手紙得御意候、然者私従兄主水様御家中木野一馬義昨夕御役御免、差扣被仰付候旨
申越、於私も恐入相慎罷在候、此段可然被仰達被下候様奉頼候、以上

九月十九日

佐藤与三右衛門様

渡辺雅登様

村上彦右衛門

昼九半時過御家司渡辺宗右衛門殿方手紙二而、御自分恐入不及其義旨被仰出候段申来、
御受返書出ス、右二付早速出勤、今日者遠江様三原方御入、何角為御挨拶御出二付御立
座迄相詰、入夜退出、風吹、雨降、時雨之気色也

○廿日、丙戌、晴時々曇雨、全時雨也、寒し、今朝六半時御供奉揃二而河下へ御出被遊、夫
方御船屋敷江被為入、同処二而九時揃御船歌御透聴被遊候二付、予壹人月番二而席詰二
出ル、御船奉行宅ニ於て御透聴被遊也、七半時頃相濟帰ル、直ニ水谷へ參、夜二入窃ニ

同日長弥三郎江与ふる実
名左之通り

信任

論語曰、信則人任

花押者任字也

廿六日、御年寄衆方御連
手紙二而、大坂天保山沖江
異国船壹艘去ル十七日渡来
二付、諸家様御蔵屋敷御有
合之御人数被差出候様、川

木野一馬を訪、両家二而酒出ル、一馬此間之被仰付者思召有之、御役御免、差扣被仰付
と申御振合二有之候由、畢竟御步行中之方差縫事有之候由之処、先支配下之因を以内々
頼筋を受込、吉田藤馬へ窃二取持遣し候之処、其義段々六ヶ敷相成、下二而表二致、口
上書二認差出候様之義二付右様被仰付候もの与被相考候由、乍併内実之意味合熟与承候
処、差縫之根元方彼是与御役方偏頗之取計共有之歟之様被察、全一馬不幸与相見、残念
之事也、外二御步行目付兩人御役御免、差扣被仰付候由也、高謙院様一昨夜無御滞被為
入候由、今日伺御機嫌罷出ル、佐藤へ益之丞後妻此間婚儀相整候悦二行、御館へも伺御
機嫌卒与罷出ル

○廿一日、丁亥、晴、寒、勝手衾炉を開、例時出勤、夕八時退、慈君今朝辻方御帰り被
成

(村上喜兵衛)

(村上喜兵衛室)

○廿二日、戊子、晴、寒、誓廟御祥月二付宿戒、晨興、献膳如規則相済、受安廟も配祀仕
ル也、例時出勤、夕七時前退、退出後西向寺江参詣、夜前会所江相場便大坂方十八日
之書状来り、亜墨利加船四五艘紀州沖江来り、亜墨利加人小舟二乗、大坂安治川口へ入込、
陸江も揚り、人氣洶々たる由申来候由、茶屋七右衛門方岡田八十太郎へ窃二申越候由也、
夜前長喜三太来、倅弥三郎実名を与へくれ候様頼、尤差急候之由二付今日直二付遣ス也、
夕喜三太右之礼二来

○廿三日、己丑、晴、暖、朝弓術へ出、夕為伺御機嫌罷出、今日御吉例之通於明星院御
屋祈禱有之、御供物頂戴被仰付、御用達方坊主三津井玄賀を為持差越、則頂戴、玄賀を
通して謁、御請申帰ス也、出衛様方伊勢斎藤篤藏(徳藏、拙堂)之海防策を拜借仕、高論感説致ス也、

村^(修就)对馬守殿方御達し有之、此方様ニも御有合之御人数百々亀之丞引纏、市岡新田へ出張被致候段被申上候之由也

廿八日

鱈

薄みそ
汁 蛤

小豆飯

平 のつへい

酒肴

吸物 ^{すめ}
うを

平鉢 ^{はまち}
^{糸作り}

猪 ^(猪口) 胡椒醬油

八寸 ^{きぬいか}
^{さわく}

井 ^{柚子大根}
うを

以上

篤藏名者正謙与云、津藩文学、当時之文章家之由也

○廿四日、庚寅、晴、寒、朝御内密稽古ニ付御裏へ出ル、相濟而出勤、夕八時過退、木野一馬方差扣一昨日御免被仰付候旨為知来ル

○廿五日、辛卯、晴、夕曇、寒、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時退、夕御馬へ出ル、一

昨記ニ有之大坂江亜墨利加船来候之儀者弥実説、尤亜墨利加ニ而者無之、魯西亜船之由、抑去ル十六日紀州賀多冲江一艘来、跡ニ四五艘も目鏡江乗候処、其内ニ又々出帆、何江

歟參り、右一艘者十八日昼九半時頃大坂川口天保山方廿丁許冲迄来、碇を卸し、夫方ハツテイラ^{小船}名也二艘へ六人乗、安治川四丁目迄乗込、三人上陸いたし、猶も乗込候様子

之処、上荷船ニ而川を横截いたし候故、不得已元船へ帰り、何分大胆不敵之振回之由、右ニ付大坂者以之外騒動、御奉行衆并御加番様方者天保山辺へ御出張、尼崎侯も早速御

駈付被成候由、当御国御屋敷ニも御有合之御人数被差出候由、爰元ニ而年番之衆江者夫々

頭衆通り心得之御達も有之、御武器者早速夜前之潮ニ船ニ而相回り候由也、今夕御鎮守

天満宮江拜ス

○廿六日、壬卯、晴、冷、朝御用向ニ付吟味役下瀬孫平殿へ行、押証文御頼之義ニ付而也、

帰掛御館へ出ル、岩崎常介来、おせつを菅馬之進方へ世話可致与申者有之由ニ而相談有之、夜松本玄順来話、午後炮術へ出ル、風呂を建る

○廿七日、癸辰、晴、寒、午暖、朝素読所会読へ出席、会読後出勤、夕七時前退、西向寺へ千代吉為參也

○廿八日、甲巳、晴、暖、午後曇、明日祭礼ニ付御役所廢休、為伺御機嫌罷出、今日

去ル廿六日

一遠慮

井上權之丞殿

右旧冬江戸江罷越候節、伊勢路東海道人馬繼立罷越候管之処、折柄差湊之義有之趣二而、美濃路江振替繼立罷越候段達御聽、右街道人馬繼立之儀者公辺御伺濟之上二而無之候而ハ難相成義二付、兼々御触示之趣も有之候所右之次第、甚以心得違二付

就吉辰幾三郎袴着初為致、朝之内白神社へ為參、岩崎常介を頼、同伴致しくれる也、当

御時節柄誠ニ嚴敷被仰出も有之事故、一緒内へも一円沙汰なしニ仕、常介右様同伴を頼

候故、午前帰候節麤抹之膳を饗、猶夕方招候而祝酒を出し、余者真之家内限り祝ふ、尤

田中栄作を呼飯酒を饗ス、常介四男繁之進も伴行くれ候ニ付飯を饗ス

○廿九日、乙午、晴、暖、午前為伺御機嫌罷出ル、幾三郎午前ハ千代吉を連白神祭礼江參、

木野・水谷江參、夕方帰ル、夕炮術稽古ニ出ル、夜辻清人夫婦来、お梅者宿ス、祭之

祝酒を饗、外客来等無之、山田多喜登此間參候謝一昨日来ル

廿八日、於江戸

一大御小姓頭

安井雄之丞殿

右同格御奥小姓筆頭方

一大御小姓頭同格

寺西小八郎殿

御奥小姓筆頭

九月廿七日、江戸御沙汰書之内

金七枚

大御番頭

稻葉兵部少輔組

時服二

植村左近

大筒三挺、車台共新規製造差上候ニ付

被下之

十月 大

朔日、一昨日難波津御馬御放し、代り二鹿毛馬御牽入二相成、左之通名御付被成候由也

小車

同日

一御加増五拾石

落合軍兵衛殿

三日

小雪節

四日、大島五兵衛・八木野右衛門へ御多門遷徙之歎、岩崎へ此間幾三郎袴着之節之謝二行也

同日、周防様御妾腹御男子御出生被成候旨席達を以被仰出也

六日、此度御出生之御男子御名舍人殿与被為付、尤御奥向二而者様唱之旨席達

○朔日、丙申、晴、寒、今日方御武具役所引受也、朝射場へ出、例時方御館へ出勤、其後御武具役所へ出、夕七時退、大島五兵衛此度御替被下候御多門御普請相調、今日引移候由、為頼来、此方方も使を以歎申遣ス也、夜辻清人来、お梅帰ル、酒飯を饗ス、(水野)千代吉平次郎与改名致度由願出、今日方改名為致也、同人義渡辺四郎右衛門方柔術目録相伝致候由二付為祝義鳥目遣ス也、夜半後雨

○二日、丁酉、朝雨後罷、晴、寒、夕炮術稽古二出、岩崎常介此間之謝昨日来候由

○三日、戊戌、晴、寒、朝素読所講釈へ出、堀田恂之助殿息伊三郎殿御館入初而被罷出候二付出而謁ス、初相逢ふ也、堀田保右衛門殿同道二而被出也、御武具役所へ出勤、夕七時退、辻清人入来之由、夕弓術へ出ル

○四日、己亥、晴、暖、六丁目様二而老女並たつ今晚安産、御男子様御誕生被成候由、右二付午鼓後為恐悅伺御機嫌罷出、御小兒様御目見仕、何之御滯も不被為在、至極御丈夫二被成御坐也、御次二而御祝酒頂戴被仰付、退出懸森岡・木野へ見舞、坪内久米之介をも訪ふ、木野二而酒出ル、暮前帰ル、玄猪之祝

○五日、庚子、晴、暖、朝例時御武具へ出勤、夕七時退、水谷伯母君八太郎^十を連朝方御出、夜御帰り被成、酒鮮を饗ス、菅多久馬母も入来、酒を饗候由、今日六丁目御館へ与三右衛門為伺御機嫌被出、夜万之進來、酒鮮を饗ス

○六日、辛丑、晴、冷、屋上始見霜、午後暖也、朝御乘馬へ罷出、六丁目様二而御小兒様御名付二付為恐悅午後罷出、麻上下着用、御次二而御吸物・御酒頂戴被仰付也、夕山

を以被仰出也

十日

一御本丸へ相勤候様
被仰付

山田隼之助殿

御用人也

御用人、若殿様江御附被成

八島外守殿

御仲小姓頭カ

十一日、炮術師井上權之

丞殿此節閉門被仰付候由、

右者江戸ニ於て当春築地御

屋敷江出張之砌、窃ニ柔弱

之作舞有之候哉之由風聞也

但此義聞違、追前ニ記置也

十二日、新組者頭今枝弥

三郎殿於江戸御用人吉田儀

右衛門殿を被切掛候処、御

持頭辻勘三郎殿被抱留、跡

甚六ヶ敷相成居候之由、右

者何之意趣ニ而も有之候哉

梟兵太郎弓会ニ付射場へ出ル

○七日、壬寅、晴、寒、後暖也、朝素読所会読へ出、其後御武具役所へ出勤、夕七時退、西

向寺江平次郎千代吉為參、夕弓術へ出、朝桂辰馬入来、元家来三次義一甫流柔術執心ニ致出精、

此度免状遣し候由、就夫内々申聞候義有之也

○八日、癸卯、晴、朝冷、午後暖也、午御用向有之、出衛様御部屋へ罷出ル、午後弓術、夕

横関恒太郎門人渡辺四郎右衛門稽古場内へ来、稽古有之、見物ニ行、夜長喜三太来話、大

坂異国船去ル三日無事ニ退帆致候由風説承ル、夜前渡辺四郎右衛門を呼、内密心付及示

論候義有之、忝之旨申聞也、平野藤吉郎妻昨朝安産、男子出生致候由也

○九日、甲辰、曇、寒冷、朝御内密稽古ニ付御馬場へ出、其後御武具役所出勤、尤御館へ

も出ル、夕七時過退

○十日、乙巳、曇、温、夕雨、朝御乘馬江出ル、風呂を建、大島五兵衛母近隣へ參候ニ

付頼旁入来、予兎角耳鳴、小音之咄打難聞取、御前向杯別而困候義有之、先夜松本玄順

へ咄試候処、奇方承出候由ニ而昨日藥劑を投与候ニ付、今日方服試也、未鼓前六丁目様

へ御七夜御内祝為恐悦罷出、舍人殿愈無御滯御肥立被成候由、於御次御吸物・御酒、小

付ニ而御赤飯頂戴被仰付也、七時過帰宅、出掛途中方雨振出し、藥師坊ニ而傘を無心申

借候也、森岡へ卒与見舞、後室痛所今以得斗無之由也、今日も勿論上下着用之事

○十一日、丙午、雨霽、風吹、暖、例時御武具役所江出勤、夕七時過退、菅多久馬母卒

中風之氣味之由承候ニ付見舞使遣入、少し居合宜方之由也、夜御用向ニ而御奥へ罷出、

深更退

深更退

之趣ニ相聞候之由、松本玄順話なり

○十二日、丁未、晴或曇、御用向有之、例時方出勤、夕八時前退、幾三郎少々申分有之哉、夜中寐軒高候故松本良伯診を乞、薬を投、全肝火之事ニ可有之与申候由、夜松本玄順来話、酒を出、深更迄話ス、夜雨

○十三日、戊申、曇、夕時々雨、寒、朝素読所講釈へ出席、直ニ御武具役所へ出勤、今日主水様為時候御見舞午後方御出被成、尤御兼約被為在候由ニ而折柄御馬御牽せ被成、御馬場ニ而御乗馬被為在、為拝見罷出、予も御相手乗馬被仰付、主水様御馬をも拝借仕ル也、日入過相済退、夜家小帰寧、幾三郎も参宿ス

○十四日、己酉、晴、暄、朝炮術稽古ニ出ル、午後尾長天満宮江参詣、同処方山を越、神田八幡宮江参り帰、白鳥ニ而堀尾・藤川・辻江見舞帰ル、辻ニ而酒出ル、藤川又吉此間方時候ニ障候由ニ而難義之趣也、出掛矢野源内留主をも訪ふ

○十五日、庚戌、晴又曇、又晴、寒し、例時御武具役所江出勤、夕七時過退、尤御館江も卒与出ル、今日若殿様九時御供揃ニ而御城内西御門通、小姓町方丁場(馬脱力)、夫方東御山屋敷迄御馬ニ而御召切被遊候由ニ而、其節卒与御門前へ出拝見仕ル、久振ニ奉拝見、乍恐御丈夫ニ被為在、御馬御達者ニ被為在候御様子、窃ニ奉恐悦也、御前後御馬數十匹参ル也、(淺野忠敬)

禪昌寺

道牛和尚

右願之通海蔵寺住職被仰付

右之通今日御勘定奉行星野

正大夫被遣被仰付候由也

出羽様今日早メ九時御供揃ニ而時候御見舞旁御出被成、香取流槍術御所望ニ而御覽被成候由、尤御家来中者達者組計罷出、黒田御相手衆三人程見へ候由也、就右而予等罷出候

二者不及也、夜家小・幾三郎従木野帰、森岡弟婦昨夜以来産之催之様子ニ而少々困り候由ニ付、夕方見舞ニ平次郎を遣ス、其内ニ安産、女子出生、母子共何之滞も無之由申

帰ル也

十四日

海蔵寺和尚

快鐘

右病氣ニ付願之通隠居被仰付

右同人

右先年以來住職中心得宜、御寺御為筋厚取計候ニ付、格別を以毎年米三石ツ、生涯被下之

〔十七日、森岡小兒左之通名を命候之由

おゆき

〔井上権丞殿閉門昨十六日御免被仰付、先月廿六日〆日数振之由、尤閉門ニ而者無之、遠慮ニ而有之し由、且御咎之趣意も道中ニ而心得不行届之義有之、道中奉行中〆尋来候義有之ニ依而之事之由也

〔十八日

小雪節

〔此義間違、追而先月廿六日之処ニ記し置也

○十六日、辛亥、曇、寒、〔朝御乗馬へ出ル、〔午後妙慶院へ参、森岡へ見舞、愈滞無之由、小兒も至而丈夫也、酒出ル、室角左源次・鱧兵馬へ御多門替悦ニ行也、〔辻清人入来

○十七日、壬子、曇、夕時雨之気色あり、寒し、〔例時御武具役所へ出勤、夕七時過退、〔夜慈君・家小森岡へ見舞、幾三郎も参ル、〔夜御用向ニ而被為召御奥へ罷出、深更退く、〔出衛様今日古江辺へ山狩ニ御出被成、御槍術御門人之面々皆相願候而御供ニ罷越候由也、〔主水様ニ先達而三貫匁玉之モルチイル筒御新調ニ相成、此度岩国吉川家之御家中西洋流砲術師有阪淳藏御招待、今日江波ニ於て御打試有之候由、右淳藏門弟五六人連候而此間〆十日市町ニ逗留罷在候由、先方〆百貫目玉之木筒持参、是又今日丁を被打、主水様并内記様ニも御覧ニ御出被成候由、此節砲術都而者口塞り中ニ候へ共御達し有之、右之通相成候由、主水様御家来ニ而者本山大進方之隠居何某昨年以來有坂氏へ入門被仰付、西洋流修業致候由、御手厚之事也、遠江様ニ而者沖守次郎本家之隠居為五郎右同様被仰付、当秋三原へ淳藏御呼寄、御筒打試も有之候由也

○十八日、癸丑、曇、夕時雨、寒し、〔朝素読所会読へ出席、〔朝湯川新太郎入来、由良政太郎并平川勘助申合せ世説之会読を催くれ候様ニ与申聞候ニ付、於素読所稽古濟催度存候由内談申聞、予ニも閑暇之節者出席致くれ候様ニ与申聞候ニ付、一向夜当家ニ而引受候而者いか、哉与申置、其後何れも左様仕度申候段申候ニ付、明晩〆直ニ相始候咎ニ申置也、〔松本三珠来診、〔夕辻清人弓会ニ付射場へ出席、尤予者先日以來右之中指を痛候故不能多射、〔清人入来、〔夜風吹甚

○十九日、甲寅、曇、時雨、風烈、〔朝六丁目御館へ為伺御機嫌罷出、々掛被為召候而御館

江も出ル、婦掛森岡へも卒与寄、弥無滯肥立候由、婦宅直二御武具役所へ出勤、夕七時過退、森岡へ安産を祝、肴料・赤小豆飯并小児着物を贈ル也、夜昨記之如会読二付湯川新太郎・由良政太郎并平川勘助来、世説序・凡例迄済、来ル廿一日（浅野音啓）天祐院様二十五回御忌被為当候二付、於国泰寺一夜越之御法事御執行被仰付候間、諸事穩便二付火之元念入候様二との義此間御移檄出ル也、今朝雪始飛

○廿日、乙卯、晴、寒、朝辻清人入来、慈君今晚方同方江御出被下候様ニ与被申、下女用事出来、明日宿へ下候由也、夜慈君辻江御出御宿被成、当月者お梅臨産月故、兼而此節方者御逗留之義頼も有之候二付、直二暫御逗留被成候筈也、且那樣今日国泰寺為御寺詰御出被遊候由也

○廿一日、丙辰、晴、暖、例時御武具役所へ出勤、出衛様御用二付御館へも出ル、夕七時過退

○廿二日、丁巳、晴、暖、朝冷甚、有霜、朝素読所講釈へ出席、其後炮術へ出、未鼓後西向寺へ参詣、夕方吉田藤馬御用向二而入来、謁、就夫卒与御館へも出ル、昨日旦那様国泰寺江御寺詰与して御出、御法事済、若殿様為窺御機嫌御登城も被遊候由也

○廿三日、戊午、晴、暖、朝御乗馬へ出、夫方御武具役所へ出勤、夕七時退、夕弓術へ出ル、今朝長束茂兵衛来、内用談也

○廿四日、己未、晴、朝冷甚、霜如雪、朝御内密稽古二付御馬場へ罷出、夕炮術稽古、妙巴廟御祥月二付夕御茶・点心如例献す、西向寺へ千代吉平次郎代参申付、極夕御用向二而被為召、御輿へ罷出、雅登も同断、入夜九時前御用向相済、鳥之御到来物被為在、

〔廿七日、去ル十九日之風二、御国御回米船大坂川口一之洲沖二而沈没二及、御米三百石程水二入候由、尤人者一人も溺死二不至候之由也

〔江戸御沙汰書之内

十月六日

藤堂和泉守様(高懸)

領分地震二而城内住居向其外及大破、家中・町郷共悉破損二而拝借之儀被相願、可及難儀与被思召候、当时御事多二候得共出格之詔を以金二万両拝借被仰付之

松平越中守様(金懸)

凡右同断之御趣意二而金五千両拝借

御開被遊候由二而、御側二而御酒并鳥之御下夕頂戴被仰付、九時過退出、三宅吉左衛門今朝入来

○廿五日、庚申、晴、朝寒冷、霜如雪、朝弓術稽古二出、例時御武具役所出勤、夕七時過退、

〔周防様御出被遊、為伺御機嫌御次へ罷出、御奥へも夜前之御受二罷出ル

○廿六日、辛酉、晴、朝有霜、嚴冷、初見氷、後暖、朝御乘馬へ出、風呂を建、矢野源

内昨夕從世羅郡帰候由入来、從是も今朝使遣ス、夜此間以来風邪之気味有之、今日風呂へ浴し候二付要慎して早臥

○廿七日、壬戌、晴、朝冷甚、有霜、朝辻清人入来、素読所会説へ出席、夫方御武具役

所へ出勤、夕七時退、極夕弓術へ出ル、西向寺江平次郎代參申付、夜雨

○廿八日、癸亥、晴、寒冷不甚、朝炮術稽古へ出ル、并一甫流稽古場へも出ル、菅多久

馬先日之挨拶入来之由

○廿九日、甲子、曇、不寒、朝弓術稽古二出、例時御武具役所へ出勤、夕七時退、渡辺

四郎右衛門同方系凶添削之義一昨年来相頼取掛り居候処、漸相調候二付、未清書二者不至候へ共、不絶繁多二而迎も其期も無之候二付、草稿之儘二而今夕同人を呼、戻ス、同

人殊外悦、厚挨拶を申也、夜世説会読、新太郎・政太郎并勸助来候也、波多野権祐時

候見舞来候由

○晦日、乙丑、晴、朝有霜、寒、朝遠江様へ時候為伺御機嫌罷出、久野秀太郎を訪、辻二

而慈君御見舞二參ル、昼飯出ル、午後御乘馬へ出、佐藤与三右衛門風邪之由、見舞使

遣ス

十一月 小

○朔日、丙寅、晴、朝有霜、寒冷強、朝森岡万之進來、与三右衛門煩二付從今日予月番を勤、月次御登城二付五時過出勤、夕七時退、今日例年之通知行物成切手相渡、御勘定奉行星野正大夫方紙面二而為持來、附足輕御切米切手も相渡、夫々頂戴仕、今日米相場石二付九拾貳匁替二立候由、幾三郎朝方辻江參、極夕帰ル、藤川広次を伴帰り宿ス

○二日、丁卯、夜來雨、寒、夕雨罷、夜晴、午前為窺御機嫌罷出、夜前喜三太來話

三日
冬至

○三日、戊辰、曉來雪降、寒冷強、朝素読所講釈へ出席、直二出勤、夕八時過退、今朝藤川甚吉來、広次伴帰ル、夕射場へ出席、今日予引受之弓会を催ス、天氣惡敷出席寡し、景物両品出ス、辻清人朝夕入來、夕者冬至之祝酒も有之、入夜迄話ス、昨日松本良伯入來、去ル弘化四年冬、玄順方巖島江石燈籠寄附致度由二而少々ツ、志を寄附致くれ候様相頼、旧国幣三十錢目托し置候処、其後いまた志願不至成就内国幣如形之次第二相成、夫成二而廢事之外無之事二移合、無是非事共之由挨拶二而、右寄附二封之儘戻し來、當時六錢二相当候へ共最早不通用二而棄拵二相成也、尤聊ながら右寄附之志無二相成候義諸人へ対氣毒二付、右之節寄附二加り候人之家々先祖菩提之為経卷を寄附致候由二而見せ二來、大般若経也、是者玄順寸志之由也、留守二而不調

○四日、己巳、晴、朝有霜、寒冷甚、辻清人方手紙二而於梅義先刻安産、男子出生、母子共滞無之旨五ツ時過為知來ル、早速見舞千代吉遣ス、今曉八半時頃安産、至而速二而、小兒も至極丈夫二相見へ候由、巳刻前地震、余程強く且長し、例時出勤、夕申刻前退、今朝之地震余強程之義二付、若殿様・梅梢院様江御機嫌御伺御使者等出候由、薄暮方

〔江戸御沙汰書之内〕

十一月七日

土方備中守様（維幕）

地震破損二付金千両拝借

同十六日

松平相模守様（池田慶徳）

異国船為防禦御殿山下御台

場御取建二付同所御警衛被

仰付、武州本牧御警衛者御

免被成候

松平出羽守様（定安）

異国船渡来之節武州本牧御

警衛被仰付之（忠義）

酒井左衛門尉様

前略之、五之御台場御預、

三千坪御陣屋地被下之

真田信濃守様（幸教）

右同六之御台場御預、御陣

屋地被下之

同十八日

酒井修理大夫様（忠義）

辻江見舞・欲ニ参ル、母子共愈滞無之由、小兒も丈夫ニ見ゆる、お梅輕産故跡も宜敷趣也、
慈君も弥御安泰、殊外御歡被成、酒出、酉刻頃帰、夜九時頃輕地震有之候由、予者寝而
不知

○五日、庚午、晴、寒冷緩也、朝御乘馬江出ル、夕方御館并御奥へ出ル、夕弓術稽芸古ニ出ル、

夕七時三四歩頃地震、最初輕キ様ニ有之候処、追々蕩募候二付家内ニ居ニ不堪、家小・
幾三郎俱々脊戸之菜圃へ出、其後弥劇甚、家之壁・柱等之振事九尺、上ニ而四五寸許振
候歟と思わる、走り先水溜壺之水、小用壺之小水杯七歩目程ニ淘溢ス、当辺ニ而者唯今
迄余り聞も不及大震也、座敷三尺之壁壹尺程下り、其外処々之壁少々宛傷ミ、鴨居等之
くるひ者大分有之、障子も処ニ因り紙悉筋違ニ裂る、誠ニ恐懼ニ堪たる事共也、昨朝之
震者少し短くして鎮る、早速為伺御機嫌出勤、尤出掛高謙院様御部屋へ出ル、御部屋
ニ而者御廊下之屋根落居候而難通候二付、御庭へ下候而御小座敷江出ル、夫方御館へ出
ル、御館者差寄損所も不見、且那樣・出衛様・高謙院様共御機嫌被為受候義も不被成御
坐、奉恐悦也、且那樣ニ者若殿様為御機嫌御伺即刻御登城被遊、尤御馬ニ而御登城被遊
也、遠江様・主水様・内記様ニも御同様ニ御登城被成候由、尤主水様・内記様ニ者遠江
様・此御方様御下城後御出被成候由、何分右様御押掛ニ而御登城被遊候義も御並様方ニ
而者中古以來稀有之事与被存候也、就右六丁目御館江者雅登即刻為窺御機嫌罷出ル、御機
嫌被為替候義も不被成御坐候由、御上屋敷内も御藏・大手壁等大分之損し有之、御多門
ニ而者矢野源内方格別之大損し与相聞、六丁目御抱内も御館始処々損所多く、森岡万之
進方者湯殿・雪隠倒れ候由、夫方六半時過輕震、五時前又震稍強、一応帰宅、火元等之

近来異国船度々渡来二付、京都表御警衛向之儀、弥御大切二被思召候、依之其方儀京都御警衛被仰付候、(柳沢保徳)松平時之助も被仰付候間諸事可被申合、井伊掃部頭江も申談、御警衛向之儀厚可被心掛候

松平時之助様

右同文 内酒井(忠義)

本多(康徳)隠岐守様

異国船渡来之節京都七口之御固メ被仰付候、青山(忠貞)下野守・稲葉長門守・永井(重輝)遠江守も被仰付候間申合可被勤候、時宜二寄候而者相互二援兵をも差出、御警衛向厚可被心掛候、委細之儀者所司代江可被承候、尤火消之義者は迄之通可被心得候

義示し置尚又出勤、五半時前退出、其後又稍強震、何分案内之大変故御多門内不残外住居之覚悟ニ申値、当家も北庭大手外馬立之内へ火急ニ囲を附、家内不残其内ニ而夜を明す也、其後も尚度々輕震有之也、家小今晚辻江見舞二行、幾三郎も行、留主中田中実五郎妻来居呉る也、右大变ニ付今夕早速此余尚も震動之程も難計候間、火之元手厚ニ念入候、立除候覚悟可仕旨御移檄出ル也、右大变ニ付御多門内彼是為見舞来、此方方も使を以見舞申遣ス也、出入之者も来ル、谷口喜作・下番弥三何角見合、囲を附候義手伝くれ

六也

○五日、辛未、晴、朝有霜、寒冷強、夜来も度々地震有之ニ付早朝為伺御機嫌罷出、北御部屋へも出ル、朝之内六丁目御館へ昨夕大地震ニ付為伺御機嫌罷出、森岡江も卒与寄ル、途上少々宛之損処所々ニ見受る、就中御城内三ノ丸脇御米蔵二棟大損也、例時少し速く出勤、夕八時過退、今日も朝々時々輕地震有之、何分尚も大震動可有之も難計与誰云となく一統恐怖、今晚も外住居之覚悟致候趣ニ付、予亦外之菜園場へ仮屋を構させ臥ス、尤矢野源内方与申値、一緒ニ構る也、夜中聊之震者有之候へとも先穩也、森岡万之進見舞与して来ル

○七日、壬申、曇時々雨、不寒、夜来地震もとふ歟鎮候様被考候ニ付今朝仮屋も為解、何れ茂致帰宅、然処四時頃又大震、尤一昨夕者少し短、動きも些者輕キ様ニ思わる、早速竈下・炬燵之火を滅し脊戸へ避ク、下地之損所少々増候へ共、別之損所者不見、就右早速出勤、御上御方々様御避御場下地御奥北之御二重戸内御庭へ仮成ニ御出来之処、尚又急ニ御馬場御馬見所脇へ御仮小屋建候ニ付、見合彼是御用多ニ而夕七時前退、北御部

青山下野守様

稲葉長門守様

永井遠江守様

右同文意

〔七日、一昨夕之大地震以來、川口潮汐之満干難定、夜中者一円満干無之、昼之内者兩三回も満干有之、今以其通り之由也

〔同日主水様御用人横関新兵衛御役御免、御組頭格被仰付、跡役河瀬喜和馬被仰付候由、新兵衛者近年兎角申分有之、内願二依て右之通之由也

〔八日、辻小児名左之通

千之進

〔十一日、此間之地震、（豊田郡）忠ノ海辺者別而嚴敷趣二而人家式百軒許之内百五十軒位も倒、人怪我有之、上之

屋御仮小屋者菜園場へ相調也、〔今日も急々御登城被為在候也、〔西向寺へ平次郎代參申付、妙慶院へも為參、御墓所者皆々くるゐる等者無之候由、辻へも見舞二遣ス、母子共愈滞無之、慈君も御安泰之由、〔夕八時頃又中震、前後微少之震者時々有之様子也、〔右之通故又々

仮小屋を構、尤今日者門前仮御馬立へ取付構、暫時住居之覚悟二致ス、此度之大変二付御上屋敷内住居之面々江者御軍用之渋紙并御幕等内々借用相調、予も大渋紙四枚、筋幕壹張致拜借也、夜中九時過輕震、八半時頃大分震動有之也、〔今日藤川・堀尾・永井へ見舞使遣ス也

○八日、癸酉、晴、午後風吹、寒、〔朝四時頃輕震、其後も時々微動者不絶有之趣二候へとも先穩也、〔何分變氣、何時大震も難量、衆口喧々、各覚悟を第一二致候趣二付、今日者終日仮屋二而認等致ス也、〔午前為窺御機嫌罷出、〔夕長喜三太来話、〔夜中兩度小震あり、〔此度之地震上方筋も大震与申風説二候得共未実説を不聞、防州辺も大震之由、嚴島者一円無之由、当近辺二而も山近所者大二輕、尤府中（安芸郡）・海田辺者余程強く候由、御城下二而も処二寄大二輕重有之趣也、御城者御殿守始御櫓々悉損之なき者稀之由、就中京口御門傾キ、栗林御櫓一ヶ処崩れ、八千歳大分損し候由、且又近郊者土地潰込、泥吹・地割れ等処々

に有之候由、諸説紛々、未虚実を不分

○九日、甲戌、曇將雨不降、夜晴、寒、〔例時出勤、夕八時退、〔夜中御用向有之、又出勤、〔夜松本良伯入来、辻之方母子共愈宜敷趣申也、〔今日も三度輕震、夜兩度、夜半之分稍強

○十日、乙亥、朝雪霏々、寒冷甚、〔朝微震、〔例時出勤、夕八時前退、〔六丁目御館江為窺御機嫌罷出、〔終日時々有微動、〔東城辺（奴可郡）も六日迄之処当処同様未曾有之大震之趣御用人

御藏も崩候之由、浦辺御藏奉行大柿忠次郎殿此節出張中、同方々様子申来候由也
 十四日、左之通飛脚屋方注進申出候由

一尾州・濃州・勢州大地震・大津波

一龜山・庄野・石薬師往来地破、泥吹出

一桑名大地震・大津浪

一宮之宿御本陣両家共潰、舟付御番所同様

一鳴海之宿出火二相成、人家多く焼潰、不通路

一池鯉鮒・岡崎・藤川大潰、無通路

一美濃路大破損

一吉田・二川・白須賀・袋井・掛川・島田・吉原津

波二而半潰

一新井御番所潰流失、舞坂

中々申来候由、其後之儀者未聞、大坂も去ル四日朝々震始、五夕方申中刻大地震、出火等も有之、諸人散乱致候由、然処同日夜酉刻兵庫灘目・泉州路辺洪浪二而大坂川口滞船一時二湊ひ込、船損・人怪我も余程有之候由、飛脚屋方之注進書二而見之、其外播州路・備前・備中辺も同様大地震、下者下之関辺迄同断、四国も余程敷敷由、京師以東、九州辺之様子者いまた不聞候由也、今朝辻清人入来、其後も母子共愈無滞、小兒も漸一昨日名を命候由

○十一日、丙子、晴或曇、寒し、巳鼓後為何御機嫌罷出ル、昨日以来も弥張微動有之、未透与鎮り候二も無之候得共、何分最早格別之事も有之間敷哉二被考、乍去一統之気配猶も不案二存候様子故、仮屋解崩候二も難至候得共、外住居二而ハ甚不便利二有之候二付今日門前之仮屋を引、脊戸之空地江構候也、田中実五郎・小回り利作来、手伝くれる、

夜長喜三太来話

○十二日、丁丑、曇或晴、時々雪飛、寒冷強、例時出勤、九半時過退、夜前以来今日も弥張時々微動有之、仮屋へ臥

○十三日、戊寅、晴、寒冷強、朝霜如雪、朝素読所講釈へ出席、夫方出勤、夕八時前退、極夕辻へ慈君御見舞二行、於梅母子も弥無滞肥立候由、今日も時々微震有之、夜仮屋へ臥、尤近隣者大概今晚方内へ帰臥候由也、辻二而酒出、入夜帰ル、波多野権祐地震見舞来候由、寒サ強候故酒を勧候由、同人話二、六丁目下新開辺大分地震候処有之、少々田地も損候由申候由也

○十四日、己卯、晴又曇、寒冷強、晝有雪、終日不消、有堅氷、今日屋内を掃除し帰居ス、

不殘同斷

一岡ヶ谷・岡部(興)・沖津・丸

子石大潰、岩淵半潰

一吉原大津浪・丸燒、府中

江川町方出火、金谷大崩

掛川半半燒(併劣)

一由井・日坂無事

一藤枝半崩半燒

以上

十八日

小寒節

十九日

遠江様方御到来之三原大根
不相替御取分、一本頂戴被
仰付也

廿一日夕

御茶

豇豆飯

同夜辻千之進病死、法名

專祐童子

廿三日、先達而横関新兵

辻清人入来、午後為伺御機嫌罷出、夜中微動有之、日之内者不覺

○十五日、庚辰、晴、朝嚴冷、有堅氷、例時出勤、夕八時退、今日大坂方出候搦物を見る、昨日飛脚屋方注進之外京都も同様之地震、尤格別損所者無之由、撰州西ノ宮大損之由也、

今曉并今朝も微動有之

○十六日、辛巳、雪、寒冷甚、例時出勤、夕八時退、旦那様一昨日以来御風邪被為在、少々御熱御ねまり被遊候御様子二而、今日も御平臥被遊候也、夕妙慶院江參、西向寺江も卒

与參、地震後今日始而參候也、夜五時頃有震、少し有力、夜半後も有微震

○十七日、壬午、夜来大雪尺余二至、嚴凝、松本良伯入来、幾三郎近頃夜来駒船甚く息塞り、安眠兼致候様二有之二付乞診、薬を恵、全火之所為二て為指事二不考由申也、午前為伺

御機嫌罷出、今日も御熱御同様二被為在候由也、辻之方先達而七夜之節者地震騒動二而

内祝延引、今日二七夜二付真之内祝致候由、尤客来事者一円不致由二候へ共、予二者夕方參候様申来候へ共、天氣合且月番二も有之候故辞ス、此方方も祝義延引、今日糺抹之

産衣、軽キ肴、赤小豆飯器添贈る也、今日之雪者予生来未覚大雪也、地上も終日不消、

近來之嚴凝也、微震今日も未止也

○十八日、癸未、晴或曇、寒威甚、小寒節入、屋上・地上共日南之積雪終日不消、以寒威之嚴を験すへし、例時出勤、夕八時退、夕弓術稽古二出ル、今日弓会之定日二候得

共延引之由也、今日も微動有之、夕方坪内久米之介入来、夜嚴凝、幾三郎御奥へ罷出、

御菓子頂戴仕ル也

○十九日、甲申、晴、寒威嚴、積雪尚不消、例時出勤、夕八時過退、今朝森岡万之進來、

衛御役御免者病氣ニ付内願
 二依而之事与者申条、何ぞ
 小内之有之事与被相考候、
 今日吉田藤馬話振也、遠江
 様御用人戸田平之丞も三原
 勝手を被仰付候由、其代脇
 本武兵衛当所へ出候由、是
 も平丞内願ニ依而右様被仰付
 候由二候へ共、其美小内有之
 事与被考候由、藤馬話也
 当度之地震津波四国路余
 程之大損、就中讃州高松之
 御城下大破損、半者沼与相
 成候程之事、何分惣体地
 陥候様之事与被相考候趣之
 由、今日新太郎話也、大坂
 も去ル十二日又々海哨ツナミ、此
 度者五日之夜方も勝り、人
 損も凡一万二も可及哉之風
 聞之由、是者昨日平野藤吉
 郎も話し居候也

夕森仙太郎・上野彦三郎来、夜世説会、湯川新太郎・由良政太郎・平川勘助来、日南
 地上之雪今以凝然たり、日南之雪如此三日ニ至而未消事者予等生来未覚程之事也、今日
 も微動有

○廿日、乙酉、晴、寒威厳、積雪未消、午後六丁目様江為伺御機嫌罷出、森岡・坪内・木
 野・水谷江見舞、木野・水谷ニ而酒出ル、入夜帰ル、朝辻清人入来、午飯を出ス、夜
 前以來千之進風を引候様子ニ而氣遣候由申也、今日者不覚震

○廿一日、丙戌、晴又曇、寒威厳、積雪日南稍消、受安廟御祥月、朝清人入来、千之進
 菟角困り氣遣候由話也、例時出勤、夕七時前退、夕辻江見舞平次郎遣ス、先居合同篇
 二候へ共今夕者少々宜敷方之由也、地震益鎮候趣ニ而昨日以來不覚微動ヲモ

○廿二日、丁亥、晴或曇、寒威厳、積雪猶不全消、凝者緩也、朝辻清人方千之進義養生不叶、
 先刻死去いたし候旨為知来ル、此方方も早朝見舞ニ平次郎遣ス、実者夜前四時過病死致
 候由、多残之次第也、右之趣ニ付予も今日一日致遠慮候間、同勤兩人江手紙を以案内申
 遣ス、就右西向寺江參詣得不致、平次郎代參申付ル、佐藤与三右衛門今日方快出之由也、

松本良伯辻小児病死ニ付為見舞入来、夕平野藤吉郎来、暫話ス、茶漬を出ス、夜辻小
 児葬式平次郎を見合ニ遣ス

○廿三日、戊子、快晴、寒氣緩也、然共雪未全消、朝御乘馬江出、午後為伺御機嫌罷出
 ル、且那樣御風邪弥御快方、今日方御表江被成御坐、御月代等も被遊候由、奉恐悅候也、

吉田藤馬時候見舞旁入来、先達而河瀬喜和馬御用人役被仰付候付、自今時々此方様江為
 伺御機嫌罷出度、其段宜申上呉候様ニ与被相頼、夕御弓御相手ニ罷出ル、御相手斎藤七

〔廿七日〕

御茶

牡丹餅

太郎殿被出、尤今日者出衛様計御稽古被成候也、先達而以来御稽古之節罷出候之様御沙汰も被為在、御相手之義奉願置候得共莞角差間、今日始而罷出ル也、渡辺雅登も被出、今日者又々地震有之由風聞有之候処、果而微動二者候得共午後時々不絶震之気味有之、何とも不安心之事也、湯川新太郎入来、唐土歴代州郡沿革地圖何卒京師方取寄くれ候様二頼也、粗諾し置

○廿四日、己丑、晴、暄、尤日陰之雪者未全消、全体温也、例時出勤、夕七時前退、風呂を建、

〔夕木野一馬入来、酒を出、夜迄話ス、西向寺江怠、昨夕者不絶微震有之、案し候得共夜前者西鼓頃少々有震而已也、東海道筋大変ニ而往来留之故歎地震後江戸表方之御左右一円無之由之処、去ル十四日江戸方之仕立飛脚到着、江戸表当月四日辰中刻地震甚敷候処、都而御屋形回り其外五ヶ所御屋敷共御別条無之旨申来候由、今日御年寄衆方申上も有之候之由也

〔廿八日、当御国ニ而大地震者、当年方百四十八年前、宝永四年十月四日昼九時過方震始、余程之地震ニ而処々損有之、其夜中ニ三十二度許も震、此御方様ニ而も御表・御奥とも御広間之御庭へ御除被遊候之由、日記ニも有之候由也、

此年富士山大焼ニ而宝永山出来候由也

○廿五日、庚寅、雨、温、宿雪稍全消、朝雷鳴地ニ響、全山鳴かことし、然れ共稍甚ニ至而者雷也、又海鳴も有之、雷与前後ニ混鳴致候旨申者も有之、此節も弥張潮汐之来去時々不同有之、舟子抔者不案ニ存候趣也、朝射場へ出、例時出勤、夕八時過退、辻江見舞平次郎遣ス、慈君此間少々足を少御控キ被成、御痛被成候由也、石井寿兵衛入来、此間矢野源内も入来之由、堀尾眠石翁入来之由

○廿六日、辛卯、晴、夜来温暖甚、朝辻清人へ悔ニ行、明日千之進初七日之由ニ而茶漬・酒出、午後帰ル、永井仲之介へ先達而安産之欲ニ行、藤川・堀尾・三宅・吉本江見舞、夕為何御機嫌罷出、夜中御内御用向ニ付御奥へ罷出ル、幾三郎へ遣候之様御意ニ而御手自御菓

子頂戴被仰付、此後時々幾三郎差出候様御意被為在候也、戌鼓後退出

○廿七日、壬辰、暁来雪飛、寒威強、後晴、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、夕八半時退、

辻初七日二付誓願寺へ代參遣入、吉本全忠院先生一周忌二付是又代參遣入、同寺也、西向寺江も平次郎為參、幾三郎今日も御奥へ罷出ル、休廟御祥月、御備仕ル、夜万之進

来話、酒を出ス

○廿八日、癸巳、朝雪飛、寒威強、後晴、例時出勤、夕八半時過退、幾三郎御奥へ出ル

○廿九日、甲午、曇、寒威強、午後為伺御機嫌罷出ル、慈君御迎二辻江平次郎遣候得共、御足痛所菟角耽与不被成候由二而今晩も御帰り不被成、幾三郎御奥へ召出ル、戸田平丞近々三原表江引越候由二而為暇乞人来之由、夜世説会例之三人来ル

十二月 大

朔日、於御城

一

○朔日、乙未、晴、寒威強、今曉地震有之、旦那様・出衛様今日御槍術御印可御相伝二

付、黒田弥五左衛門殿極早朝被罷出候二付出而及挨拶、一応退、猶又例時出勤、夕七時退、

朝御乗馬へ出ル、夕七半時前地震、稍有方、此度御両方様御槍術印可御相伝者、第一出衛様近来御家来中御自身御取立被成、格別二御執心被為入御力候段弥五左衛門殿深被

奉感心、不怪被忝狩、香取流印可者全体黒田家二而者一子相伝与申程二重キ事二有之候得

共、格別二御相伝被申上、出衛様へ者弟子取立方之儀も御相伝被申上、全流儀を分^{ワケ}而御讓被申上候趣意之由、当時日本二而者同流与申者下総国二而何と歟申家二有之与、黒田家

与両家限之由也、夫故当度二而三ツに相成候訳也、幾三郎御奥へ出ル、今月者予御用

非番也

○二日、丙申、晴、寒、朝炮術江出ル、夕戸田平丞江此間入来之挨拶・暇乞旁ニ參、西向寺へも先月廿二日遠慮ニ而怠候故參ル、帰り岩崎常介へ地震後無沙汰いたし候故見舞、同方ニ女おせつ菅馬之進後妻ニ縁組内約相極、此間内窺書も出候由ニ付其欲も申也、夜慈君辻方御戻り被成、駕籠ニ而迎ニ上ル也、依之御門乗通之義御目付中江口上を以申達ス、尤慈君夜前以来御胸痛ニ而御困り被成候由也、御戻り被成候而も時々御難儀也

○三日、丁酉、曉有雪、寒威酷、郡御奉行木村幾三郎殿御館入初而被罷出候ニ付五半時出勤、初而謁ス、御馬医高橋良左衛門殿ニも初而被罷出、挨拶ニ出ル、夕七時前退、夕名倉求馬弓会ニ付出席、夕七時過地震、夜五時前又震、稍強、松本良伯入来

○四日、戊戌、晴、朝大霜、寒威強、凝甚、朝辻清人入来、朝御乗馬へ出ル、例時出勤、夕七時退、夜森岡万之進來

○五日、己亥、晴或曇、朝大有霜、嚴凝、寒威冽、橋本屋周五郎来、近隣地震之節之挨拶ニ行、極夕松本良伯慈君来診、御痛所とつても口ニ成申候様ニ申、針を入呉ル、夫方御疼輕相成、御心下之痛も輕ミ、少々御食餌も御快御出来被成候方也、夜食を出ス

○六日、庚子、晴或曇、酷寒、嚴凝、六丁目御館ニ而舍人殿一昨日以来御不例ニ付為伺罷出、今日者大分御快方之御様子ニ被成御坐也、九時頃帰り直ニ出勤、夕七時前退、夕御弓御相手ニ罷出、今日も斎藤七太郎殿被出也、午前松本良伯来診、慈君両御痛所共益御快方也、小倉甚右衛門昨日參候謝入来之由也、韃韃勝敗記大島五兵衛方伝覽、北狄之独立、韃韃略爾略王清朝ニ叛し、黒龍・艾丹等之三要地を攻落し、終ニ雲南之朱天徳与一味し、

去月八日朝兩日並出、須與ニして一日者消候由、其

カルカス

後も時々右様之義有之趣、

予者不見、其外現二見候人

之話者不聞候へ共虚説二而

ハ無之由、金子先生之説二

者、空中二偶有異氣而、夫

二朝日之映候而右様相見候

事二而、実二兩日之出ルニ

而者無之、ケ様之義も希ニ

者有之事之由也

〔九日、此間廿日市山ニ而

獵師野猫を打得、甚大猫ニ

而重十七貫目有之候由也

大二威勢を張候趣を記し候書也、虚実いか、与思わる、書也

○七日、辛丑、晴又曇、酷寒、〔朝素説所会説へ出席、夫方出勤、夕七時退、〔松本良伯来診、

慈君愈以御快方也、〔西向寺江平次郎為參、〔夜御用向二而御奥へ罷出、亥鼓退、〔今日吉

本恒之丞先達而參候謝并寺へ代參之謝ニ来候由也

○八日、壬寅、晴、寒威猛、朝霜如雪、〔朝御乘馬へ出、〔夕御弓御相手ニ出ル、斎藤七太

郎殿被出、〔夜御奥へ被為召罷出、此間吉本恒之丞石内村へ被遣、雁二羽御手ニ入候由

ニ而其御開キ傍此節地震漸相鎮候ニ付御祝ひ心之御趣意等被為在候由、御酒頂戴被仰付、

亥鼓後退、渡辺氏并同動同様ニ罷出候也、〔長喜三太入来、米壹苞無心申、貸遣候筈也、〔今

朝辻清人入来

○九日、癸卯、晴又曇、寒威嚴、〔朝御内密稽古ニ付御馬場へ出ル、夫方出勤、夕七時退、

〔幾三郎御奥へ出ル、〔矢野源内妻今晩安産、男子出生致候由為知来、歛使遣ス、〔檜垣捨

次郎入来之由

○十日、甲辰、晴或曇、寒威猛、嚴凝、〔例時出勤、夕七時退、〔朝六丁目御館江於磯殿・

舍人殿為御伺罷、〔夕未鼓後有地震、稍強し、〔夕平野藤吉郎入来、約束之六味丸製し置

候ニ付遣ス、〔渡辺四郎右衛門入来之由、〔夜世説会説例之三人来、夜前之処今晚二延、

今晚限二而納候筈也

○十一日、乙巳、朝晴後曇、寒威甚、凝稍甘、〔朝御乘馬へ出ル、〔辻清人入来、〔午後渡辺

雅登江地震之節見舞ニ預候謝旁行、長喜大夫へ同断、矢野源内江安産歡ニ行、〔夕堀尾老

室被来、辻民慈君御見舞ニ来、〔今朝松本良伯来診、慈君又々少々御感冒之気味与申也、〔夕

弓術へ出ル

○十二日、丙午、晴又曇、寒威強、凝者輕、例時出勤、夕八半時過退、当年も一昨年之振ニ御仕向被下、諸銀渡物も昨年之振ニ七歩五厘渡被仰出也、御移檄左之通

当御場合御勝手向御難渋ニ付而者御家来中御仕向筋御手不被為届、一統難渋仕候趣深御苦勞被思召候段者毎々被仰出、何れも承知之通ニ候、然処一昨年方御減石五歩方御宥も有之、其上昨年以來者武芸筋格別出精之輩も不少趣ニ候故、御惠筋者可成丈御手厚ニ御計も被下度被思召候得共、一昨春銀札之御改革有之候より者、年々諸御上納等を初、何角与莫太之御出銀増ニ相成候上、昨秋以來臨時之御物入筋出来湧、彼は大ニ御手違ニ相成、御撫育筋不容易義ニ而御差練方弥増御六ヶ敷、甚御当惑之処、去月初旬地震大變ニ付而者猶又不時之御物入筋出来湧、彼は大ニ御手違ニ相成、御撫育筋一円不被為御所存候へ共、色々厚御判断之上、当年之処も一昨年之振合を以御仕向可被下旨被仰出候間此旨承知有之、御趣意之処深被相心得、兼々被仰付置候質素節儉之筋堅相守、御為筋精々相心掛、身前之覚悟不取乱御奉公精勤、文武之道油断無之候様ニ与被思召候、此段厚申間候様ニ与被仰出候

但渡方員数等之義者御勘定所方可相達候

右之趣不洩様可被相触候、以上 十二月十二日

右之外銀渡之御触書者略之

今日者健徳院様御祥月ニ付夕方海蔵寺へ拜参可仕与存居候処、雅登六丁目御館へ罷出候

二付不能拜参、夜辻清人入来、兼而頼之大小修覆之義四郎右衛門へ頼具候様ニ与申持参

也、酒を出さ、夜輕地震有之

○十三日、丁未、快晴、寒氣緩也、朝素読所会読江出席、直二出勤、夕八時前退、今夕

御弓御射揚二付為御相手罷出、山下太八郎殿・竹腰恰殿・斎藤七太郎殿・松村弥助殿・

原田丈夫殿被出、小の一之中丈夫殿、二之中旦那様、三之中予二而、御景物小半紙

三束頂戴被仰付、金の中者予今日始而也、是迄二も三光二而中候義者有之、相濟為御受御

次江罷出ル、幾三郎御奥へ罷出ル、夕万之進來候由

○十四日、戊申、晴、寒氣緩也、御用向有之、四時頃方出勤、夜二入退、昨今於射場石

井方射揚京矢代有之候由、不能出候也

十五日

六丁目様二而

於磯殿御事

於時殿

舍人殿御事

市松殿

右之通御改名被成候段無吃
席達有之也

講釈

○十五日、己酉、曇或晴、寒氣緩、夕又加寒威、今曉八時頃地震甚、大二駭、早速為窺

御機^(機脱)出勤、夜明頃退、去ル^月五日夕、七日朝之震二比し候へ者少し軽く短し、夫故損処等

格別無之様子也、朝北御部屋へ今曉地震二付為伺罷出ル、例時少し早く出勤、夕八半

時頃退、主水様御用人川瀬喜和馬今朝初而御館へ罷出、御逢被遊候二付為挨拶出ル、尤

御目見之節御取合せ予仕ル也、六丁目様二而お磯殿・舍人殿今日御改名被成候由、依之

為恐悦者不罷出候也、今日御仕向米切手相渡、附足輕之分も同様致頂戴也、相場石二付

八十五匆替二立候由

○十六日、庚申、曉風暴雪降、寒威強、午後雪積六七寸也、例時出勤、夕七時退、松本

良伯来診、慈君増御宜、家小大便秘結二而困ル、薬を投、今日妙慶院参詣、御用書状之

認有之、且平次郎使二出候二付怠ル、尤平次郎代参申付也、今朝渡辺四郎右衛門入来、

予御武具役所二而借用致居候^丈五尺物槍差寄来春迄借用致度^目頼、諾置也、岩崎常介

〔十七日〕

節分

〔十八日〕

立春

夕七日五分(時力)

〔廿日〕

一御多門御用二付被召上

山県兵太郎

一御輿錠前詰被仰付

藤野源兵衛

御帳前詰よ

但北御部屋へ出勤也

〔江戸御沙汰書之内〕

十二月七日

石川(総様)主殿頭様

地震破損二付金三千兩拜借

加藤(明馳)越中守様

右同二千兩

本多(伊予守忠康力)伊豆守様

右同千五百兩

同十五日

入来、此間おせつ縁組願下歎使遣候謝也、〔星野武平次入来

○十七日、乙酉亥、晴又曇、寒威冽、〔六丁目御館二而御両方御不例愈以御快方被成御坐候由、

奉恐悦候也、〔家小夜前以来度々大便通有之、今日者快起也、〔佐藤今日餅搗之由、家来

被頼參ル、〔風呂を建、近隣来浴、〔今朝松本良伯来診、〔夜節分之祝、〔昨夕吉本恒之丞

方炮術稽古取案内有之候へ共不能出席

○十八日、丙戌子、快晴、寒威者冽、残雪未消、〔朝素読所会読江出席、相濟出勤、夕七時退、

〔今日立春也、〔今晚六時過地震兩度、稍有方、〔今朝湯川新太郎入来、和書払物之由數々

持来り見せる
○十九日、丁亥丑、晴、余寒強、〔朝例時出勤、夕七時退、〔辻清人入来之由、〔少々心下を痛

困ル、〔今朝森岡万之進来ル、〔御中老格今中丹後殿病義二付願之通隠居被仰付、御召物

被下置、家督息大衛殿へ知行高弍千三百石被下置候之由、下地三千百石之処八百石減し也、

且家督も已前弓削老岐殿之節者息熊之進殿並寄合被仰付候由二候へ共、此度者其儘御先

手者頭之由也、丹後殿者元小臣方追々立身、終二右様三千百石迄御加増頂戴被致、御中

老格迄昇進有之候へ共、元来貞忠之志薄候故歎、御国政者此人二而益衰廢之極二至、唯

身前之驕奢而已二被耽、足事を不被知、此度之家督者甚不首尾也と云共、其身二取候而者

猶大幸之極与云へし、〔夜半兩度微地震有之候由
○廿日、戊子寅、晴、余寒強し、〔例年之通今朝餅を製入、田中実五郎・佐藤家来を頼、実五

郎母并永野武八郎も来助く、〔例時出勤、夕七時過退、〔朝辻清人入来、〔夜松本玄順来話、

家小妊娠之趣二付診を乞、弥相違有之間敷与申候由也、此間良伯も其通申候由也、〔夜微

松平肥後守様

其方家来共訓練先達而老中
及一覽候処、軍令隊伍相整、
兵卒足並行並格別專熟之趣
達御聽、一段之事二被思召
候、此段可申聞旨御沙汰二
候

同十八日

時服二十

上杉彈正大弼

累代勤向無怠、曾祖父以來
引統上下一同常々質素を相
守、奢侈之風習無之、政事
向堅固二行届、領内治方宜
趣達上聞、格別之事二被思
召候、依之被下之
時服十

本多豊後守

多年無懈怠精勤二付被下之

御鏡

松平丹波守

震有之、御役料相渡ル、当年七步五厘渡也

○廿一日、己丑、卯曉風烈、朝雪粉々、余寒甚、凝凍甚堅、例時出勤、夕七時過退、夜戌

鼓前出火之由、(安芸郡)仁保島淵崎辺之由

○廿二日、庚寅、曇后晴、余寒強、朝西向寺へ參、妙慶院江も去ル十六日怠候二付卒与參ル、

例時出勤、夕七時退、夜湯川新太郎入来、今日御役料渡、本高七步五厘渡也

○廿三日、辛卯、晴、朝御乘馬へ出、例時出勤、夕七時退、周防様御出二付御次へ

出、御機嫌相伺、松本良伯葉謝贈候礼として入来、夜雨

○廿四日、壬辰、晴又曇、例時出勤、夕七時前退、西向寺へ平次郎為參也

○廿五日、癸巳、未晴、朝有地震、鱷兵馬時下見舞入来、例時出勤、夕七半時退、左之

通御移檄出ル

御上御振合も有之、御並様方被仰合、年頭・暑寒之御勤御止、年頭御節等を初諸事御
作略被遊候二付、去ル申年相達候趣も候処、礼節者格別之義、年頭勤等永く相止候而
者終二者礼義通信を失候様移行可申哉も難計、依之来年々右等御勤向已前へ御復し被
成候様二との御移も有之候間、御家来中ニおるても同様可被相心得候、尤掛飾等差松
等作略振、其外諸事申年已後年頭勤無之節之通被相心得、就中御家来中右礼勤之義二
付而者去ル天保七年、其後弘化三年ニも相達候通、重役之外銘々支配頭、同役仲間合、
近隣之輩迄ニ而、其余諸親類者各別、并礼客煖酒出候義者同勤之間ニ而も堅相禁、表向
ニ而礼勤有之、其外都而質素節儉之筋聊氣弛無之様厚可被相心得候懸
右之趣足輕以下迄も不洩様可被相達候、以上

其方御預所之義年来取扱方行届、追々御取箇相進、且凶年備之ため困粗も多分出来致し、連年増二相成候段、常々格別申付方行届候故、郡中一同帰伏致し治方宜趣達上聞、一段之事ニ被

思召候、依之被下之

六千両 太田撰津守様(資功)

千両 松平丹波守様

二千両 (水野出羽守忠良方)

二千両 稲垣撰津守様(長明)

二千両 亀井(益監)隱岐守様

右地震ニ付拝借

右之趣者此間御年寄生田筑後殿遠江様へ被罷出被申上候之趣有之、夫ニ依而被仰出候由也

○廿五日、甲午、晴、朝有地震、例時出勤、夕七半時退、御役所今日限ニ而廢休也、鱸兵馬時候見舞入来、左之廉々当歳暮方御復しニ相成候旨被仰出候也

一歳暮御祝詞御家司・御用人計、其外者相止居候之處、当歳末方御側方之輩も申上候事一年頭御祝詞御小姓組以上御登城掛、御通り掛ニ御礼被為受候事ニ相成居候處、申年以前之通於御書院人別ニ御礼被為受、御步行組者於銅壺間御通掛御礼被為受候事

但夕八時揃之事

一御屋形詰之面々元日一日上下着用ニ相成居候處、申年以前之通ニ相成候事

一御出頭詰所御手付熨斗蓬菜ニ相復し候事

一表御門元日一日大門開候事ニ候處、申年以前之通ニ相復し、尤裏御門者元日一日大門開、

十五日まで小門開候事

一五節句御門詰申年以前之通上下着用之事

○廿六日、乙未、晴、余寒緩、例時出勤、夕七時過退出、御役所今日限ニ而廢休也、当年

者昨秋以来異国船渡来一件ニ付而者御武器御手入事等莫大之御物入も被為在、当八月之勘定も余程之御不足与相聞候へ共、程々御差繰も被為付、御上納事も御速ニ被為濟、乍少御家来中御扶助も被下、誠ニ以恐悅之至、偏ニ惣体御締り合好、御家来一統忠勤を尽候故ともいふへき歟、夫(七方)者替り御両家様ニ(者力)年々与御差詰り、当暮之處も御上納事甚以御困り之御様子ニ窃ニ承之也、左之通御移檄出ル

着服并音信贈答・家居等之義当春御示之趣も有之處、妻子之服今以心得違、御趣意ニ

不応輩も有之哉二相聞、如何之事二候、文化二年御定之趣者候得共、縮緬者下着たり
共用捨可有之、右ニ准其以下之者共御定之内上品之文夫々一統用捨可仕、末々并銘々
召仕之男女者素々布木綿之外不相成候事

一御役成・御加増・拝領・家督跡目等之当日、并江戸出帰之節酒肴差出候義一切相止、
手附鬘斗計ニ可被仕、尤御役成当日同御役者吸物ニ而酒差出候義者格別之旨、当春被
仰出之趣も有之候処心得違、都而御賞又者家督跡目等之節吸物ニ而酒差出、又者御役成
之節酒等差出方流合之向も有之哉二相聞、兼而之御趣意ニ反し甚以如何之事二候、向
後弥以猥成義無之、兼而被仰出之趣堅く相守可被申候事

一音信贈答是又兼而之御趣意ニ反し紛敷取引いたし候者も有之哉二相聞、不埒之事二候、
此後弥以堅く相守、聊心得違無之様可仕候事

十二月

右之趣相組支配方末々迄尚又急度相示し候様被仰出候間、不洩様可被相達候

都而差紙御役人中初下地中丈半切之処、御大俵中来卯正月尺三季不時渡共仙過紙四ツ
切ニ相成、并御書翰方以下小札下地中尺之処仙過紙ニ御品替ニ被成下候、此段侍中并
支配有之輩者支配下へも夫々通達有之候事

十二月

○廿七日、丙申、晴、午後西向寺江參、岩崎・森岡へ見舞、おゆき兎角難儀氣遣候由也、六
乙酉

丁目御館へ歳暮・御機嫌伺旁二出ル、然処八丁郭近処出火二付其儘帰ル、研屋町力・豎町
御門外町家志軒焼失也、類焼者無之、右ニ付出勤、七半時頃鎮火引取

廿八日、年号改元

安政

廿八日、森岡おゆき

法名

智証童女

○廿八日、丙酉、晴、暖、風呂を建、年号安政与改元被仰出候之旨御移檄出ル、森岡小

児不出来之旨為知来ル、午前方妙慶院・興徳寺江参、木野・水谷江歳暮旁二行、直二森

岡へ見舞、おゆき今朝以来不出来、急二病死いたし候由、(虫損)見合せ帰ル、夜森岡葬式平

次郎を遣ス也

○廿九日、丁亥、晴、辻清人入来、極夕六丁目御館江罷出ル、一昨日矢庭二引取候故也、

森岡へも寄帰ル

○卅日、己亥

戊子

(表紙)

<p>家乘</p> <p>続編卷之十二</p> <p>安政二年</p>

人皇百二十二代

今上皇帝御宇十年

御諱統仁

安政二年龍次乙卯

弘化丁未御即位、從神武元

平天下三年

年辛酉二千五百十三年

源家定公 徳川家康公十三代、從嘉永癸丑

治国廿五年

源齊肅公 浅野長政公十一代、從天保辛卯

齊家八年

紀道興公 堀田高勝公十三代、從嘉永戊申

兄弟方

未申之間

家乗統編卷之十二

安政二年乙卯

村上七世彦右衛門邦裕君綽謹記

正月 小

床飾

座鋪

軸 由信蓬萊(狩野)

花 白梅

居間

軸 庭田公御懷紙(重調)

着具

矢籠弓

勝手

軸 聿庵文字(頼)

花 白梅

読書始

大学三綱領

吉書始

君か代は千代に八千代を

さ、れいしの一

○元日、乙丑、晴或曇、余寒強、有水、慈君奉始皆々平安加寿、曉寅上刻起、若水、神拜、

廟拜、蓬萊、祝詞、大福、屠蘇、菌固、読書始、吉書始、右恒規之通礼服二而行之、日

出頃麻上下着出仕、御登城前於御居間御祝詞被為受、御家司渡辺宗右衛門殿、引統御用

人佐藤与三右衛門・予・渡辺雅登一同罷出御祝詞申上、益御機嫌好御超歳被遊、御身祝・

御規式等万端無御滞被為濟、奉恐悦候之段筆上申上、目出度与御意被為在、夫於御

次周防様江之御祝詞御用達菅馬之進迄申上、直二出衛様江御祝詞、御部屋二而御逢被成(淺野)

右御居間・御部屋へ出候節とも帶劍二而、相濟御奥へ出、老女江謁久、老女格かね以下女中も

出候事、出而逢、祝詞申聞、高謙院様江御祝詞、退出掛北御部屋へ罷出、御逢被成、御蓬萊被下之、

訖而帰宅、今日三ヶ日迄於御城若殿様年頭御礼被為受候筈之処、少々御湿瘡氣二被成

御坐候之由二而御延引、追而御礼可被為受旨被仰出、依之今日者殿様江御礼之御帖付、御

家中惣出仕之由也、当年頭方御家来中御礼以前之如く被為受候二付、夕八時過罷出、於

御書院御礼申上ル、予御礼之節奏者御出頭藤川每登殿也、御家司中御礼之節奏者予勤之、

七半時前相濟退、右出仕掛渡辺宗右衛門殿父子并佐藤江祝詞二行也、遠江様御用人始御(淺野)

家来中彼是祝詞入来有之、久振賑々敷年頭也、平野藤吉郎極夕来、祝盃致ス、長喜三太

も其節来、夜迄話ス、夜前も夜半後地震有之、相心荒々敷候之由、家内共眠而不知、夜

二日、辻清人祝詞入来、

致祝盃

風吹事甚

○二日、丙寅、曇、余寒猛、朝嚴凝、終日雪飛、午後為何御機嫌罷出、退出掛御多門内不
残祝詞二行、岩崎二而祝盃出ル、今日も祝詞客来少々有之、夜前も震動有之由、今日
も度々微動者有之也、夜中も微動有之也

○三日、丁卯、晴、余寒緩、上田内記様御出二付朝方出勤、午鼓後退、未鼓前方渡辺雅
登江頼置、六丁目御館并御両家様へ御祝詞二罷出、六丁目御館二而者周防様御目見被仰
付、御祝詞申上、於御次吸物二而御祝酒頂戴被仰付、遠江様二而御客对吉村重介江謁し、
主水様二而者御出頭中村何某江謁ス、其往来左之通祝詞二回ル、森岡・木野・水谷二而祝
盃いたず、黄昏婦宅、供列者若党・草履取、道具を為持也

久野秀太郎 井上市太郎 都筑九郎右衛門 脇本武兵衛 近藤重太郎

森岡万之進 坪内久米之介 木野一馬 水谷又左衛門殿 山村静人(登)

留主中下瀬孫平殿始祝客少々有之、岩崎常介へ致祝盃候由

四日朝、如例左之通献于
○四日、戊辰、朝曇、微雨、余寒緩、午後晴、朝為何御機嫌罷出、巳鼓過方祝詞回礼二出、
西向寺・妙慶院へ參、寺主へ如例年玉一封を呈、夫方左之通相勤、七半時頃帰宅

黄粉餅

海苔燎て

冲守次郎(元日方和多理
与改名之由)・久野八十介(助)・松田謙蔵・藤井源之進・桑原吉郎二・平野藤吉郎・

田辺幾衛殿・下瀬孫平殿・蔵田和太郎・吉本恒之丞・永井伸之介・藤川每登殿・堀尾
精一郎・辻清人・松本良伯・一井嘉内・山本十四郎・本照寺・興徳寺

右之内桑原・辻・平野二而卒与致祝盃也、夜前夜半後下柳町松生院小路堀田格人殿屋敷
自火二而焼失、御貸家壺軒類焼之由、予者家内共不知して不出、留主中渡辺宗右衛門殿

〔五日〕

松板 廿間

右之通堀田格人殿屋敷焼失
二付、為御見舞御贈二相成
候由、格人殿者求馬殿、近
頃改名之由也

為祝詞来儀有之候由、〔夜御用談有之、渡辺氏へ行、其序来儀挨拶をも述ル

○五日、己巳、曇、曉風吹甚、朝雪霏々、余寒烈、御馬御乗初二付已刻前より出勤、御乗馬
之節御馬見所脇へ罷出、無御滞被為濟候処二而恐悦申上ル、今日も御式者昨年迄之通御
大略二付、予月番を以て老人罷出候迄也、如例身祝之鏡餅を祝ふ、森岡万之進祝詞二来、
致祝盃、其外少々来客有之、〔夜軽地震、稍長し、高謙院様今曉窃二能美島へ御渡海被
成候由

○六日、庚午、晴、余寒纔緩、今日より御役所始り候二付例時より平服二而出勤、尤主水様昼
後為御祝詞御出被成候付直二相詰、夕七時過退、慈君近隣へ祝詞二御出被成候由

○七日、辛未、晴、余寒緩、例時出勤、九半時頃退、木野一馬・波多野権祐為祝詞入来、
祝酒出ス、昨夕藤川甚吉来、右同断、〔夜御用向有之、御館へ出ル、夜前も御用向二而被
為召、御奥へ出ル、今日西向寺へ千代吉平次郎（永野）為參也

○八日、壬申、曇後雨、暖也、遠江様為御祝詞御出二付早朝より罷出、九時前退、〔辻清人
入来之由、〔海蔵寺為祝詞被来、修正祈祷之札被惠、夕岩崎常介囲碁二来ル、夜迄対局、
〔江戸去臘廿八日出火、町数余程焼失之由、未詳説を不聞、〔昨日左之通席達を以被仰出
式日御屋形詰之面々肩衣不及着用旨申年相達候趣も候処、自今者以前之通着用可有之
旨被仰出候云々

右之通二候得共、御家司・御用人当日御祝詞被為受候義者是迄之通其儘無之候也

○九日、癸酉、晴、暄、暖氣殊甚、例時出勤、夕八時過退、〔近藤重太郎・坪内久米之助
祝詞入来、水谷又左衛門殿夕方御祝詞御出、祝酒出ス、〔極夕御用向二而六丁目御館へ出

ル、中津屋万之助留守中ニ来候由、御吉例之通今日御身据御鏡開ニ付不相替御切餅頂戴被仰付、出勤中於席御用達菅馬之進執達、席を進、御請申出ル、周防様御身据も同様頂戴被仰付、御附御用達室角左源次方紙面ニ而為持来、御請返書ニ申出ル、夫々告于廟、
 一昨日横関新兵衛病死之由、同方為知者無之候へ共、渡辺雅登内室父之喪ニ付、今朝出勤掛吊之

○十日、甲戌、晴、暄、夕少し寒、例時出勤、夕七時退

○十一日、乙亥、雨、寒し、具足鏡開礼服ニ而祝之、御吉例之通御具足御鏡開ニ付御兩殿様方不相替御切餅被下置、御用達中坊主を（以脱力）為持被差越、袴着、慎而頂戴、坊主長束千甫江謁し御請之義申含帰ス、告于廟、午前射場へ出、為伺御機嫌罷出ル、夜雨罷、今日遠江様方為御祝詞罷出候為御挨拶御使被下、留守之振ニ而不謁候故、御請御用人中江紙面を以申出ル

十二日

主水様方年始御祝詞罷出候為御挨拶御使被下、御請御用人中迄紙面ニ而申出ル

○十二日、丙子、晴、余寒強、例時出勤、夕七時前退、夕方松田謙蔵為祝詞入来、余寒も強ニ付酒を出候由、夜地震両度有之、かるし、夜風吹、嚴凝

○十三日、丁丑、朝雪降、後晴又曇、余寒劇冽、寒中よりも甚敷、凝も亦甚、素説所講釈初二付朝出席、例年之通学規講師湯川新太郎也、例時出勤、夕八半時頃退、此間内頂戴之御具足并御身祝之御切餅、今日熟而拝味仕ル也、南部要人為祝詞入来、初而通し而謁ス、此方々も去ル三日初而参り、通候也、一昨夜以来左眼（翳力）醫を生、執筆事ニ困ル也、夜有地震、深更雪降、寒威嚴酷

○十四日、戊寅、晴、余寒少緩、今曉雪積式寸余、朝為伺御機嫌罷出、予眼翳菟角不除

十五日、於御城

一御番頭
知行高千石ニ被成下

小鷹狩平馬殿

御仲小姓頭々

一御仲小姓頭

大島織衛殿

御先手者頭々

一御先手者頭

原伊三郎殿

御馬回り々

候ニ付、昨日二宮五礼へ一診之義頼遣し今夕来診、全腹中々之事ニ而、所謂内障与申類

ニ有之、何分些服薬致し可然、捨置候而者不宜旨申、薬を乞置也、夕桑原吉郎ニ祝詞ニ来、

倅竹吉を連来、酒餅を饗ス、今日左義長馬御城内乘通り有之、若殿様角御櫓々御透覽被

為在、御三家様御手馬も近年之振ニ被差出、此御方様々者兩匹被差出候由、周防様・出

衛様今日左義長馬御見物ニ遠江様へ御招ニ而午後御出被遊候由也、夜長喜三太来話

○十五日、己卯、晴、余寒大二緩、例時出勤、夕八時頃退、今日々式日御屋形詰肩衣着用

ニ相成ニ付、肩衣を着出ル、夕久野秀太郎為祝詞入来、丹羽庄司も昨日来候也、昨記之

通二宮五嶺薬を惠候付、今日々服薬并指薬をいたす也、留守中森岡万之進来候由、来ル

十七日惠教(智証)三七日ニ付、真之志法事故候趣咄候由也、矢野源内室来、夕射場へ出、夜

長喜三太来

○十六日、庚辰、晴、暄、稍覺春色、例時出勤、九半時前退、渡辺雅登他行差問妙慶院

へ参詣不能、平次郎代参申付ル、辻清人入来

○十七日、辛巳、晴、暄、朝御乘馬へ出ル、其後炮術稽古ニも出ル、今日稽古始也、依而

継上下ニ而出ル、夕妙慶院へ昨日参詣怠候故ニ参ル、夫々薬研堀禅昌寺へ参、和尚ニ謁し、

吉光氏之歴代戒名・位牌・墓所等之義を尋ル、過去帳を被為見、戒名者凡相分ル、位牌

者不分、墓所之義者猶追而しらへ候筈也、夕御輿へ出ル、夜辻清人夫婦来、於梅者宿ス

○十八日、壬午、暁雨、朝々晴或微陰、暖也、朝例時出勤、夕八半時退、夜家小妙慶院

地藏へ参、慈君・於梅・幾三郎も参ル、夜長喜三太父子来、夜西鼓前地暴震、大二驚

駭ス、震者余程強候へ共些時ニ而止、就右早速為伺御機嫌罷出、夫々六丁目御館へ罷出ル、

十八日

啓誓

〔廿日、白梅花此節満開、

寒紅梅も凡満開ニ至ル也

〔廿二日、三原光寂寺(香積寺)へ左

之通備

茶湯料 銀壹兩

塔婆料 同壹匁

右吉光家ニ而無庵一甫居士

卅三回忌相当ニ付

無庵俗名吉光軍右衛門、

実者蔵田彦蔵二男、慈君

父也

別ニ墓所掃除料与して壹匁

五分小林彦左衛門迄遣し、

何角之義頼遣也

途中ニ而も震稍強、其後時々微震、々者不強候へ共、地鳴強し、今晩初度之震ニ而御城并南之御屋敷へ御使者出、後度之震ニ而者御登城被遊候也、其後も時々地鳴、震者至而輕し

○十九日、癸未、晴、暖甚、渡辺四郎右衛門・堀尾幾之進予眼疾為見舞入来、例時出勤、九半時頃退、堀尾眠石翁為見舞入来、寛話、酒を出ス、夕辻下女迎ニ来、お梅帰ル、夜中松本良伯為見舞来ル、予眼疾全肝氣不展方之義ニ而、中々内障抔申程之事ニ者有之間敷哉之旨申也、時々地震

○廿日、甲申、雨、暖、午前為伺御機嫌罷出ル、夕二宮五嶺(礼)来診、予眼此間之処ニ而者寒欠ニも可相成敷与心中甚氣遣候由之処、今日者大ニ見直し、最早其氣遣者無之由申也、暫話ス、酒を出ス、夕地鳴震、今朝辻清人見舞入来、夜暖氣甚し

○廿一日、乙酉、晴、暖、例時出勤、九半時頃退、湯川新太郎・三宅内外・由良政太郎眼疾之為見舞入来、佐藤与三右衛門入来、此間同方退隱事之義ニ付内談事有之、其挨拶也、尾道三島屋孝助倅喜一郎当処ニ而実家大杉屋之方へ用事有之、此間參候由ニ而来、予未出勤中ニ而、慈君御逢被成候之由、孝助方も書状差越、土産之品とも恵、猶重而可来与申帰候之由、右喜一郎養子ニ囃受候義者旧臘書状ニ而申越、其節之記ニ有之通り也、宝国童子来ル廿六日十七回忌ニ付、平次郎を今日妙慶院へ遣し、墓所を為磨也

○廿二日、丙戌、晴、暄、朝素読所講釈へ出席、例時出勤、夕八時前退、八時後方海蔵寺へ拜參仕ル、早々之内支障有之、怠候故也、和尚へ例年之通年玉一封贈、尤和尚・隠居とも他適之由不遇、日入頃帰宅、慈君御父無庵一甫居士当正月二日卅三回忌相当之処、(廿二日力)

〔廿三日、去ル十八日之地
震者下筋者余程烈敷相聞候
之由、嚴島杯も昨年霜月之
震より者稠敷、塔之岡玉垣
石悉く崩れ落、人家も少々
損候之由相聞ゆる也

〔同日夕

酒肴

平鉢

鯛
さし身

八寸

板屋貝
のり煮

小井

したし物
ほうれん
生姜

吸物あら

鮓

菓子

卷せん餅

〔廿四日、妙慶院へ左之通
備ル

回向料 銀壹両

塔婆料 同壹匁

昨年慈君御心付不被成、先達而波多野権祐来候節右之趣申候由、当時吉光家断絶之事故寸志之茶湯料御備被成度二付、則小林彦左衛門へ書状を以其義頼遣、今日波多野迄為持遣ス也、〔今日海蔵寺拜参かけ西向寺江も参ル也

○廿三日、丁亥、曇、風吹、又寒、〔御嘉例之通御屋祈禱二付明星院相見候二付五時過方出仕、九半頃退、〔御供物例之如頂戴被仰付也、〔辻清人為見舞入来、〔夕三島屋喜一郎来、緩々話、酒鮓を饗ス、同方も近来追々与不如意、先年以来逼塞罷在候処、何分喜一郎二おゐて者当春方以前之如問屋職を復し、世帯取立候志願二而、近日中浜与云処へ転宅之積、其入用等才覚之為此度当処へ来候之由也、何分出来も宜人物之様二見ゆる也、〔夜西鼓後主水様御用人河瀬喜和馬御用向二而来、謁ス、就右二付御館江も卒与出ル

○廿四日、戊子、雨、寒、夜温、〔例時出勤、夕八半時過退、〔来ル廿六日年回二付妙慶院へ紙面二而法事之義頼遣し、備物為持遣ス也、同日朝之内先約有之候間参詣いたし候ハ、四時頃方参呉候様二与申来ル

〔三脱カ〕
○廿五日、己丑、雨、温、〔朝佐藤与右衛門入来、同人昨年以來持病之痰溜飲菟角平復二不至、不断被困候二付、不得已退隱之願差出度与の事二而、願書取次之義被頼也、〔例時出勤、夕八時過退、々出掛御與御鎮守天満宮へ拜ス、〔極夕三島屋喜一郎来、此間話居候契冲阿闍梨自詠自筆類題百首和歌帖、其外画帳・器物数品持来見せる、皆養父孝助年来所持珍藏之品二候へ共、此度家業復旧之入用之為、不残沽却致度積二而、当度持参いたし候由、千種公うす月之花瓶并御詠歌もあり、〔山村静登方御出頭同格被仰付候由二而為知差越、去ル廿二日之為知也

靈供米 精二升

以上

廿六日、廟飾

糕 寒具

卷煎餅 饅頭

靈供

夕

御茶

豉豆飯

右森岡・辻・小倉へ贈也

○廿六日、庚寅、雨後晴、宝国童子十七回忌相三付妙慶院江平次郎代參申付、法事中為誥也、

午時為窺御機嫌罷出、佐藤与三右衛門へ昨日退隱願書被差出候二付為見舞行、三島屋喜一郎来、夕松本良伯為見舞来、家小診しもろふ、少々腹中ニ水氣有之由申、葉を投

○廿七日、辛卯、晴、暖、朝素読所会読へ出席、相濟而出勤、夕八時過退、又御用向ニ而出勤、日入前退、西向寺江平次郎為參、岩崎常介為眼疾見舞入来、小倉甚右衛門昨日茶贈候謝入来、橋本屋周五郎為年始来ル、六丁目様より此間江戸へ御到来之海苔ニ而鮓被仰付候由ニ而、卷鮓一重御内々被下之、老女瀬川文二而為持来ル、同勤江一重ツ、被下候也、二宮五礼来診、眼も能居合居候間、最早格別氣遣成義者無之由申也、予出勤留守暫待居候故、酒を出候由

○廿八日、壬辰、曇、暖甚、夜雨、五半時出勤、極夕退、風呂を建、今日四時旦那様御登城被遊、公儀御代替ニ付被仰出候御条目之御達事有之候由、御両家様共御風邪ニ而御煩之由也、夜松本玄順来話

○廿九日、癸未、日カ暁風雨、終曇、寒、午為窺御機嫌罷出、夕堀尾眠石被訪、夜藤川おちせおちせ来宿、夕佐藤明日四時御用召被蒙候由為知来、見舞使遣ス、中津屋万之助留守中来候由、同人娘はつの義向灘ニ而百姓マシ

二月 大

朔日、於御前

佐藤与三右衛門

○朔日、甲午、晴、寒、今日御用向非番也、例時出勤、夕八時前退、佐藤江今日被仰付之歛二行也、初午ニ付藤川甚吉・広次来、夕森岡後室おさよを連被来、堀尾幾之進も

右病氣、其上追々及老年、御役向難相勤候ニ付、退隱仕度段達御聴、無余儀被思召候得とも、未格別高年与申二も無之候間、病氣養生相加、其儘在役可仕、月番其外勤向之廉々御甘々被下候之旨被仰出

御甘之廉々

一月番

一御代參

一御寺詰

一御法事御用掛

一水火之節出張

一都而御供

以上

〔四日、学問所春秋丁祭御大検中被差止、二月・八月上丁之日殿様・若殿様御拝礼被遊、其外も拜式有之而已之事ニ当年方相成候由也

来、夜辻清人来、夫々酒飯を饗ス、朝万之進來、今日御切米渡、予も附足輕御切米切手頂戴、今日米価久芳・壹歩米ニ而八拾八匁之由也、今日周防様御出ニ付御次ニ而御機嫌を伺、於時殿ニも御出被成、八木野右衛門方物見御借用ニ而御出被成候由也

○二日、乙未、曇、午時方雨、寒、朝御乘馬へ出ル、佐藤与三右衛門父子為昨日之吹聴入来、

米原岩之助母来、渡辺氏今間内窃ニ能美島へ渡海有之候処、夜前帰着之由也、今日四

時揃、北之明地ニ而飯田氏稽古乗馬有之、若殿様御櫓方御透覽被為在、御両家様御馬も出、

御馬役之者乗候由、此方様之御馬者今朝御乘馬日ニ付不出、森仙太郎・伴三之丞殿之早馬を乗、絹を為曳、殊外見事ニ有之候之由也

○三日、丙申、晴、風吹、寒、朝素説所講釈へ出席、夫方御武具役所、御館へも出ル、

遠江様御用人脇本武兵衛、同御側御用人久野秀太郎・小池良太郎・熊谷善兵衛為御館入

初而罷出候ニ付出而謁ス、町医木原慎齋も同断謁ス、七時退、前之面々為御受宅江入来

之由、松本良伯家小来診

○四日、丁酉、快晴、冷、夕弓術江出ル、小人直八江旧臘頼置候薪、今日回し呉ル也、夜

藤川おちか帰ル、迎者人来ル

○五日、戊戌、朝曇又晴、冷、夕又曇、寒、今晝以来兩三度地震、尤輕し、朝御乘馬江

出、御武具役所へ出勤、夕七時過退、朝辻清人入来、夕二宮五礼来診、夕射場へ出ル、

天神町二居候屋根屋方兵衛与歟申者、先達栗林ニ而仙石右中殿方江参り、帰途狐ニ被魅候由ニ而四五日之内日夜相尋候趣ニ而鼓声等不絶喧有之候処、漸昨朝同所裏川ニ死体掛居相知候由、五十歳許之男之由也、夜六時過地震、輕し、尤昼之より者稍有力

同日

春分

十日、御用

知行格

一 老入御加持

御側詰次第

吉本恒之丞

右家芸之儀(弥脱之)以相励候様被

仰出

但勤御兒小姓打込、鉄炮

口開中御番外

一 御切米壹石

岩崎常介

一 御加増

御目付同格

大島五兵衛

右御役向常々出精勤仕、御

用立候二付、格別を以別紙

之通被仰付

一 吟味役同格

御役料銀百目

○六日、己亥、曇雨、寒、高謙院様夜前徒能美島方御入被成候由、午後為伺御機嫌罷出、老女幾田へ謁、家小妊娠二付、今日穩婆を呼致着帯、祝義銀式匁五分遣入、田中栄作妻をも呼、一緒二酒飯を為祝候由

○七日、庚子、晴、風吹、寒、朝素読所会読へ出席、夫方御武具役所へ出勤、御館江も出ル、夕七時過退、夕弓術へ出ル、西向寺江平次郎(水野)参らず、昨今御手回り庄助来、薪割之合力致しくれる、一昨日者下番弥三も少し手伝くれ候由、三島屋喜一郎久不来候故大杉屋嘉藏方へ見舞二人遣入、両三日之内二者引取候積之由申越也、松本良伯家小来診、昨朝小倉甚右衛門来、内密談有之也、夜森岡万之進來、酒を饗入

○八日、辛丑、快晴、暖、朝御乗馬へ出、午後方白神社江参、妙慶院宝国童子墓所へ参、長安寺森岡智証童子墓へ参ル、往来小倉甚右衛門江先達而宝国年回之節寺へ参具候謝、岩崎常介へ二女菅馬之進へ引越達濟之歎二行、八木広次郎・森直十郎を訪、二宮五礼・松本玄順をも訪、夕方帰ル、極夕松本玄順来、夜家小・幾三郎木野へ行

○九日、壬寅、晴、夕曇、寒、朝御内密稽古二付御馬場へ出、其後御武具役所並二御館へ出、夕七時過退、朝松本良伯来、夕御家司渡辺宗右衛門殿方左之通奉書到来、御請返書出ス

御自分儀御用之儀有之候間、明十日四ツ時御屋形江罷出候様御意御坐候、以上

二月九日

右之趣告于廟、相慎罷在、并同勤・木野・水谷・藤川・辻・森岡・岩崎へ為知遣入、右二付木野へ迎二平次郎遣し、夜中家小・幾三郎共帰ル、木野おしけ兼而丹羽庄司倅庄藏

小倉甚右衛門

一 御切米一石
御増

渡辺四郎右衛門

一 御次詰
勤向唯今迄之通

得井満四郎

一 御小姓組本格
御見小姓

大崎和三郎

一 御小姓組本格
御番人

久野幾馬

右昼詰御番御除

一 御歩行組御雇
二人扶持

茂兵衛倅

長束清次郎

善三郎倅

松尾善三郎

一 老女格
御切米一石御増

老女格

たつ

一 御加増一石
御勘定所詰

妻縁組相濟居候処、庄司近日登坂いたし候二付、急ニ所望候而未願等も不相濟候得共、逗留分ニ而一昨夜為引越候之由也、佐藤・渡辺方見舞使来、岩崎良之進も見舞、且同方

ニも明日四時御用召相蒙候由為知旁ニ来ル也

○十日、癸卯、晴、暖、夕曇、朝小倉甚右衛門・石井寿兵衛為見舞来、辻清人も同断、四時出勤御用召ニ付時刻ニ応し罷出、其段御家司中・同勤へも及噴、無程与三右衛門方今日者御前御用ニ而頂戴物も有之趣、心得被申聞、九時頃於御書院左之通被仰付

其方儀役向出精相勤満足致ス、依之羽織・肴料遣之

右之通御意被為在奉拜承、則御召下御羽織御広蓋へ入、御肴料金子台へ据、前二出し有之、少し進而夫々頂戴仕、夫方御取合江向御懇之御意を奉蒙、御羽織・御肴料拜領被仰付、不存寄難有仕合奉存候旨御請申出、御取合方其段被申上、拜伏し而金子台を御広蓋之端へ戴、持退、着席之前江置、御立坐後書役へ頼、席へ取寄也、右之節御取合せ者御家司役渡辺宗右衛門殿也、夫方於御用所右同人方左之通御書付被相渡、厚御請申出、同役へも及吹調也

御召下御羽織

一

御肴料

千疋

村上彦右衛門

右御役向出精相勤御満足被思召候、依之右之通被下

夫方御用達迄猶又御請与して御次江罷出、出衛様江も同様御請御用達中江申述、御奥へ出、老女江及吹聴、其後帰宅かけ御家司中宅江為御請罷越申置、帰宅之上右被仰付之趣慈君

岡田八十太郎

筆頭方

一 御步行筆頭

中根栄蔵

御步行目付方

一 御步行目付

御先供頭取

兼帶

富水源五郎

御帳前方

一 御小姓組並
御取立

星野幸次郎

御帳前方

右弓術出精二付格別を以別紙之通被仰付候間、自今弥以相助、追々御用立候様可仕与被仰出、依之銀式枚每歳被下之

一 銀五兩

平野藤吉郎

年来無懈怠出精二付

へ申上、一同江及吹聴、告于廟、当家二而者先君・祖考君共度々御褒賞をも被蒙候得共、

予者当度初而也、(付上右衛門(付上勇蔵) 付上君・祖考君共)当御役者御勤之御年数も不被為在候故、予か此度之

如御褒賜者無之候処、予か身二当而初而重キ御褒賞奉蒙候義、実ニ感戴之至、本意至極也、

一 応帰宅之上、早速六丁目御館江為御請罷出、御目見被仰付也、往来妙慶院・西向寺江

参、御靈々様へ御吹聴申上ル、右之趣御家司中・同勤并一緒内格別之分程へ為知差出ス也、

佐藤与三右衛門・渡辺雅登初歎客来数々有之、藤川毎登殿・辻清人・森岡万之進朝方

来、被詰、夕一緒内歎来合之人程へ真之取合着二而祝酒出ス、吸物蛤・酒肴式種限也、

堀尾眠石夫婦夕方来被呉、幸祝酒を饗、今日予か外二も御用召数人有之

○十一日、甲辰、雨、朝有地震、稍強、朝渡辺・佐藤江昨日之吹聴二行、其外昨日御用

召之方格岩崎始夫々江歎二行也、辻お梅朝方来、山下太八郎殿昨日同方家来小人二被

召抱候挨拶与して御入来之由、留守中二付不遇、歎客来彼是有之、幾三郎少々(腹方)服痛二

而困ル、格別之事二者無之

○十二日、乙巳、雨、一昨日予被仰付之義二付、即日高謙院様江も為御請可罷出処、風与

氣抜いたし其義不仕、然処今朝心付候二付早速罷出、八木野右衛門江遇、厚御断之義相

頼置也、甚以迂闊至極、恐懼之至也、例時出勤、夕七時過退

○十三日、丙午、晴或曇、寒、朝素読所講积二付出席、直二出勤、夕七時退、久野秀太

郎入来之由、出勤留守中二而不遇、夕岩崎常介・平野藤吉郎来、此間之残酒を饗ス、右

之外歎客来数輩有之

○十四日、丁未、曇、雨はらつく、寒、朝久野秀太郎来、謁、御内用向也、右二付渡辺へ

一 御小姓組並御取立
鼻紙代並之通
御祐筆

長喜三太

鼻紙代卯年御借半方御甘メ

一 御切米五斗御増

辻権太郎

一 御切米壹石御増

御小姓組並御取立
御作事奉行定加

上野彦三郎

同奉行添役方

一 御歩行組被召出
鼻紙代並之通
書役

桑原盛藏

御雇御用部屋詰方

一 御切米高三五五斗
御歩行列加

原庄水

足輕坊主方

行、北御部屋へも出、御館江も出ル、風呂を建、近隣来浴、夕久野秀太郎江行、今朝之御内答也、夕二宮五礼来、且那樣当年御四十一御厄入、明日御内祝被為在候筈二付、同勤申値御祈祷之御守護差上候筈二付、神田社二而高良大明神御祈祷相頼、去ル十一日子方池田加賀守江紙面を以其義頼遣置、今夕取二遣ス、御祈祷之御策・御守護・御供物等差越、御初穂者銀三兩相備候也、堀尾精一郎・森仙太郎歛入来

○十五日、戊申、晴、暖、御用向有之候二付例時少早く出勤、昨記之通、今日就吉辰御

厄入御内祝被為在候二付、同役三人申合、左之通御内々差上

御祈祷之御策守 木地台据 下ケ札 三人名

御供物 同 下ケ札なし

右上下着、御奥へ罷出、老女八十野へ逢、恐悦申上、且右之品何れも申合御内々差上度候間宜取計くれ候様頼置也、同人方今日右御祝二付御吸物・御酒被下候旨申聞ル、全体右御策守江御鉢肴を添差上候筈なれ共、此度者格別二御手輕之御計二付、右等何れも方差上候品も成たけ手輕二仕候様二との御内意も被為在候二付、右之通御肴者止而不差上候也、御家司中も同様也、夕方御奥竹之御間二於て御吸物・御酒頂戴仕、鱈・吸物・小付飯・四寸御煮物・御酒肴・角皿さし身、猪口したし物也、御家司中も同様也、上下着二而頂戴仕、右之節左之通御内々被下置候旨老女八十野方申聞、御請申出ル、但銘々江被下也

御赤飯 一重箱

御鉢肴料 金百疋

十四日

神田二而池田加賀守江紙面を以別紙之通、男子武運長久之御祈禱、高良大明神広前二於て修業いたし呉候之様頼遣、別紙二御年甲認遣ス、右御初穂左之通備る也

銀 三兩

十九日

一還俗
御作事所諸品方

山河熊賀

坊主

右久左衛門与改

周防様午後御出被遊、夕方御酒之御取持被仰付罷出、一応上下二而罷出、其後肩衣

者脱ス也、御方々様御賑々敷御酒被召上、何れも頂戴仕ル也、夜半頃退、木野一馬方丹羽庄司方家内今夕招候二付、夫婦共夕方參候様申来候へ共、右恐悅事差湊候二付辞ス、今日度々軽地震有之也

○十六日、己酉、雨、朝御奥へ昨日之御受二罷出、妙慶院へ參詣不能、平次郎代參申付、

幾三郎夕方御奥へ被為召罷出、昨日之御残二而堀尾眠石始御出入之者彼是被為召、御酒

御吸物等頂戴仕候由、入夜帰ル

○十七日、庚戌、晴、風吹、例御武具役所へ出勤、夕八時前退、退出直二御船屋敷江行、

今日者黒田之方同所内を拝借被致、槍術之出稽古有之、御方々様御見物二御出被為在、

予も見物仕ル、名越忠藏業前を始而視、余程達者之由也、帰長束茂兵衛を訪、達而被留、

酒出ル

○十八日、辛亥、晴、暖、御用向有之、御館へ出ル、高謙院様御里錦小路様之方、御内

輪之儀二付不被為得已御用向筋被為在、近日御上京被遊候筈二付、御内々御餞別之意御

菓子一箱差上ル也、尤至而軽キ干菓子也、夕木野一馬へ先達而おしけ丹羽へ内々引越之

飲二行、酒出ル、山村静人へ江先達而御出頭格被仰付候飲、横関庫次郎へ新兵衛死去之

悔二寄、水谷江も見舞帰ル、夜北御部屋へ被為召罷出、御餞別之御心持二而御酒頂戴仕ル、

与三右衛門・雅登も同様也、岩崎およし来ル

○十九日、壬子、晴、暖、朝北御部屋へ夜前之御受二罷出ル、例時御武具役所へ出勤、御

館へも出、夕七時退、朝弓術稽古二出ル、三島屋喜一郎明日尾道へ帰候由二而来候由

廿四日

高謙院様御上京御供

御家司

渡辺宗右衛門殿

御武具奉行

長束茂兵衛

御中小姓方御奥付差

佐々木平左衛門

鏡前詰

藤野源兵衛

隆玄院

老女

幾田

御雇女中

かね

袴着

谷川兵助

小回り

兩人

中居

忝人

半下

忝人

○廿日、癸丑、晴、暖、三島屋喜一郎猶又来、愈明朝帰候之由、夕弓術江出、夕小倉甚右衛門到来物も有之候故酒を出、矢野源内室も折柄申遣し来、家来永野平次郎今日劔術千本仕合いたし候由

○廿一日、甲寅、晴、暖、例時御武具役所へ出勤、夕七時退、御館江も出ル、朝弓術江出ル、鱸兵馬入来

○廿二日、乙卯、晴、暖甚、朝素読所講釈へ出、午御館へ出、夕西向寺江参、丹羽庄司へ歎二行、六丁目御館へ罷出、森岡へ寄帰ル、出掛隆玄院近日御供二而上京候付、暇乞旁二訪、菅馬之進・室角左源次歎二入来

○廿三日、丙辰、晴、暖、朝御馬並二弓術へ出、例時御武具役所へ出勤、夕七時退、高謙院様明眺御出立、御上京被成候二付、夕方同役一同二御暇乞与して罷出、並二渡辺氏へも行、宗右衛門殿此方江も暇乞二入来有之也、同方此度無屹御供也、長束茂兵衛へ使を以暇乞申遣ス也、慈君夕方岩崎へ被招御出被成、菅馬之進方家内出会、並二常介年賀之意も有之由也、五礼来診、松本玄順来

○廿四日、丁巳、晴、暖甚、北御部屋様今眺御出立被成、何角御取込、御六ヶ敷由二付御見立二者不罷出、雅登忝人者宗右衛門殿御供之義故罷出ル、午後神田社へ社参、帰り白島辺返礼勤いたし、入夜婦、夜方之進夫婦来、弟婦者宿ス、今朝弓術へ出候

○廿五日、戊午、晴、暖甚、朝例時御武具役所へ出勤、午後退、夕八時揃、弓術稽古前御覽二付予も罷出ル、忝本中也、木野一馬歎二来、酒を出ス、丹羽庄藏・波多野権祐・平野藤吉郎入来、権祐者一馬一緒二来候故酒を出ス也、夕弟婦帰ル、矢野源内東城方

外二願而

菅多久馬

母

右之内長束茂兵衛者内々願候趣も有之、幸ニ御途中限御連被成候由、かね者藤野源兵衛娘ニ而渡辺氏妾也、必しも同人御雇ニも不及事なるへきに、様子ある事与相見へ、内々評論も有之趣也

婦候由、使を以見舞申遣又

○廿六日、己未、風雨、寒、矢野源内・武内純介来、若殿様明日御発駕ニ付御暇乞旦那樣御登城被遊候由也

○廿七日、庚申、雨罷、朝素読所会読へ出席、夫より御武具方出勤、御館へも出、夕七時過退、若殿様御発駕被遊、且那樣八丁堀江例之通御出、御送り被遊候由也、幾三郎御発駕拜見ニ罷出參ル也、西向寺江平次郎為參也、夕弓術

○廿八日、辛酉、晴或曇、朝御乘馬へ出、午後より幾三郎を連西辺へ歩行、茶白山江登、帰途上野彦三郎へ先達而之歡ニ行、村酒を饗、帰途方入夜也、夜雨

○廿九日、壬戌、雨、朝弓術、御武具役所出勤、夕大御目付中御入来、雅登留守ニ付予出会

○卅日、癸亥、雨、御館へ出勤、夕二宮五礼来、横関庫次郎忌明返礼来、夕大島五兵衛・岡田八十太郎を招、酒鮓を饗ス、水谷之方一件両人心配いたし呉候故、右猶厚頼候為招候也、尤旧臘以来之兼約延引ニ成候也

三月 小

○朔日、甲子、曇、夕雨、温、当月予月番也、例時出勤、夕八時過退、大島五兵衛・岡田八十太郎昨夕之謝ニ来、先月廿四日晝吉本恒之丞方江盜賊這入、恒之丞拜借致居候鉄炮一挺盜取候由之処、右筒を山県兵太郎方一本木辺御歩行組何某与申者方へ典物ニ入候趣ニ而、此節相知れ、恒之丞手ニ入候由、いか、之訊ニ而兵太郎取扱候事哉、何とも苦々

敷次第、気毒之事共也

○二日、乙丑、晴、暖甚、朝東方方地鳴響、軽キ震動有之也、今日出羽様・久姫様御招二而御出二付午時方罷出、出羽様御出之節御勝手御玄閤へ御出迎仕、御居間二而御目見仕、久姫様御出之上御奥へ罷出、老女まで御機嫌を伺、夕方退、夜中御立座之節者出羽様思召二而堅御断被為在候由、夫故御送二者不罷出して相濟、幾三郎被為召候而御奥へ罷出ル

○三日、丙寅、終日微雨、暖甚、朝五時麻上下着、為御祝詞罷出、御登城前於御居間御祝詞申上、夫方周防様江之御祝詞於御次御用達三宅吉左衛門迄申上、出衛様御祝詞者於御部屋申上、次二御奥へ出、老女へ調、退出、辻清人為祝詞入来、酒飯出、夕三宅内外話二来、石井後室・長老室杯も来、酒を饗也

○四日、丁卯、朝晴、夕雨、寒、例時出勤、夕八半時退、夕就御用向六丁目御館江罷出、御次二而昨日之御残酒之由、御吸物・御鮓等二而御酒頂戴仕ル、帰り森岡へ寄、同方二而も酒出し入夜帰ル、幾三郎今日御奥へ罷出候処、此間久姫様御出之節之御土産之由二而繪本三冊・守袋一頂戴罷帰ル、告于廟、昨日老女八十野遠江様へ被為召罷出候砌、同人へ御附托被為在候由、八十野江逢候節厚御請之義頼置也

○五日、戊辰、雨、寒、朝射場へ出ル、午時為窺御機嫌罷出、夜晴、風吹

穀雨

○六日、己巳、晴、寒、夕曇、例時出勤、夕八時過退、夕御乘馬江出ル、夕桑原吉郎二悦二来、酒を出ス、慈君夕方辻江御出、御宿被成、幾三郎も参宿、夜雨、今夕宅御用有之也

地震強、跡大雷鳴二相成候之由也

○七日、庚午、雨罷、夕晴、寒、朝素読所会読へ出席、直二出勤、夕八時過退、御旗奉

八日朝、御用

一御暇

山県兵太郎

都而奉公并御城下住居御

構

右思召有之二付

一白鳥明御多門当分御貸被

置候得共即刻引払候事

一家内向者勝手ニ親類へ引

取候事

右者先達而吉本恒之丞方炮

術盜難一件、何とも難明白、

且者不相替不風俗之不相止

候ニ付而之被仰付与被察也

行吉田儀右衛門殿御館初而被出、謁ス、甲州流軍学家也、小幡孫兵衛殿同様ニ此後御稽

古ニ被罷出候由也、尤此義者昨日之事也、夕弓術へ出ル、夜慈君辻方御帰被成、幾三

郎も帰ル

○八日、辛未、晴、夕曇、寒、今朝五時宅御用有之、山県兵太郎名代真野謚五郎、加席御

目付松井庫人来也、朝御用向ニ而出勤、午前金子徳之助殿御稽古納ニ付被罷出、挨拶ニ

出、近日江戸江被罷越候由也、夕見せ馬來、御馬場へ出ル、夕弓術へ出、今朝辻清人

入来、夕二宮五礼来診、夜中長喜三太来、話ス、夕地鳴甚敷、震も稍有之

○九日、壬申、晴、暖、朝御内密稽古ニ付御馬場へ出ル、例時出勤、夕八時退、其後昨

日之見せ馬二番御覧ニ出候ニ付猶又御馬場へ出、直ニ御乘馬、御相手も仕ル

○十日、癸酉、晴、夕曇、暖、例時出勤、夕八時過退、夕弓術へ出ル、山川久左衛門先

達而結構被仰付、吹聴之由ニ而来り、謁ス、久左衛門者熊賀致改名候也、夜雨

○十一日、甲戌、曇、寒、内記様候脱力時御見舞御出ニ付五半時頃方出仕、九半時過退、夕一

甫流剣術・柔術稽古前御覧ニ付為席詰出ル

○十二日、乙亥、雨、温、例時出勤、夕八時退、夕弓術稽古ニ出ル、今朝辻清人入来、

明後十四日光観院一周忌法事致候ニ付、明夕慈君并予ニも参候様案内有之也、清人母九

月十三回忌、同弟恒次郎六月七回忌ニ付是又一緒ニ取越致法事候由也

○十三日、丙子、曇、夜雨、朝素読所講釈へ出席、夫方出勤、夕八時頃退、夕七時頃方

辻へ速夜ニ被招行、慈君者今晝以來御腹合悪敷ニ付御出不被成、誓願寺其外松浦久米之

承殿・八木喜真太・星野正大夫・名倉兵衛・菅多久馬等会、有饗、入夜帰ル、三宅吉左

十四日、此間深緑之御馬
与御牽替二相成候御馬左之
通名付候由也

八千年

十五日

一新組者頭

湯川十郎次殿

御供頭方

一 御住居附御広式
御用達

寺尾弥左衛門殿

御馬回方

一 御納戸奉行

津田三郎兵衛殿

割奉行方

一 割奉行

(14)

十六日早晨

酢和会

香茸

御皿

独活

油揚

木耳

けむ

衛門へ先達而欲之謝二行、先日参候処留守之趣二而、案内之答無之、空敷帰候故也

○十四日、丁丑、晴又曇、寒、朝辻寺誓願寺へ参、法事中相詰ル、午後為窺御機嫌罷出、直二六丁目御館江も出ル、今日昼九時御供揃二而且那樣草津辺迄御遠馬被遊、渡辺雅登手馬二而御供仕ル、御出入衆島本甚内殿・山下多八郎殿・原田丈夫殿御供被仕、其外佐藤益之丞・森仙太郎・大崎和三郎・森光太郎・得井次郎・堀尾幾之進・佐藤喜代植等御供被仰付、御立入之外二松宮半五郎殿も御供を被願被参候由、都合馬数十一匹、内御馬五匹参ル、殊之外御賑敷候由也、昨今射場二而花見京矢台有之由、夕方出席いたす也

○十五日、戊寅、晴、暖、朝寒、朝堀尾幾之進・佐藤喜代植・同猶人へ兼而頼之実名を与ふ、例時出勤、夕八時退、佐藤益之丞今朝兄弟へ実名を与候謝入来、酒切手被惠、固辞スレ共達而被贈候故受置也、夜佐藤喜代植算稽古ニ来ル、厚頼ニ付今晚始而來ル也

○十六日、己卯、晴、夕曇、夜雨、暖、先考御忌日ニ付如恒規宿戒、晨興、礼服、献膳無滞相濟、妣廟も如例奉配祀也、朝妙慶院江参詣、御乗馬へ出、例時出勤、夕八時退、夕宅御用有之、大崎和三郎・武内純介也、加席御目付松井庫人來ル、夕二宮五礼来診、酒を出ス、慈君夜正観寺地藏尊へ御参被成、此節地藏尊遠忌祭中之由也、江戸表先月廿四日・同廿九日・当月朔日、右之三日余程之大火有之候由也

○十七日、庚辰、曇後晴、夕又曇、暖、午為伺御機嫌罷出、其前射場へも出ル、尾道三島屋孝助方書状差越、去ル十四日達ス、然処同人倅喜一郎義先月廿一日当処出立、尾道へ帰候由二而前日当家へも暇乞ニ参候処、其実者不帰、兼而段々目論見事有之、当処来

御汁 みそ
苞豆ふ
椎茸
青味

御飯

御香物

浸物

針生姜
ちさ

御坪 さわく
蕨
ふり芥子

御平 ちさ
筍
蕨
椎茸
油あげ
皮牛房
三ッ葉
葉さん椒

御菓子
焼饅頭
卷せんへい
吹よせ

夕

御茶

こ、け飯

右森岡へ贈

候へ共折合悪敷心願不遂、徒に日数を費、長逗留いたし、今更面目無之二付当所を者尾道へ帰候与申出立候而、直二上方江罷越、一年与半季辛抱いたし可罷帰候二付、夫迄相待呉候へと申書状を差越、持参之品物等者送り帰し候之由、就而者先達而縁談下世話人金屋源兵衛与申者当地へ差越、大杉屋両家へ及駆合候処、何分早々尋出し可返与申返答二者候へとも、何とも当家方そも大杉屋嘉藏杯呼寄、其処今一応腕与根を押し可れ候様二との趣頼越候二付、嘉藏方江駆合振之義田中実五郎を呼、委細二頼置也、夜雨

○十八日、辛巳、雨、寒、朝素読所会読へ出席、相濟出勤、夕八半時退、夕射場へ出

○十九日、壬午、晴、暖、朝冷、例時出勤、九半時過退、夕射場へ出、夕七時前々御用

向二而御下屋敷江罷出、帰かけ木野・水谷へ見舞、入夜帰、両家二而酒出ル

○廿日、癸未、晴、暖、朝炮術江出ル、午後為伺御機嫌罷出、夕弓術百射を致ス也、慈

君午方御寺参り、夫方森岡并蔵田・辻江御出被成、同方江被留、御宿被成、桂辰馬明日

長州へ参候由暇乞来

○廿一日、甲申、晴、暖、例時出勤、九半時頃退、朝辻清人入来、慈君今晚も御宿被成

候由申也、夕木野伯母君御出被成、お喜代も来ル、酒鮓を饗ス、渡辺四郎右衛門今晚

乗船、長州へ修業二趣候由、為暇乞来、夕同方江為暇乞行、防州三田尻并八代村（屋代島）上家之

義聞合之事を頼置、岡部冠斎紙面も渡置也、防州山城二於て堀才兵衛与申者方江罷越、

夫方三田尻辺へも参候積之由、桂辰馬も同道二而参候由、堀才兵衛者一甫流師家也

○廿二日、乙酉、晴、有霞、夕曇、暖甚、妣廟御忌日、猷膳者先達而相濟也、朝森岡方之進廟拜二来ル、朝素読所講釈へ出席、例時出勤、九半時退、退出後西向寺江参、夕

十七日夜

始垂蚊帳

廿日

立夏

弓術

○廿三日、丙戌、曇、夕風吹、雨降、朝御馬へ出ル、其後御弓御相手二出、直ニ夕迄御数射之御相手仕ル也、夜眼痛之気味有之、早臥

○廿四日、丁巳、晴、夕曇、暖甚、微雨、例時出勤、九半時退、西向寺江平次郎(水野)為參、夕射場へ出、今日者渡辺雅登松村弥助殿を頼、見合もらい候二付同方被来、予も見合もろふ、堀尾精一郎・石井寿兵衛・星野幸次郎茂出ル也、夜中慈君辻方御戻り被成、夜長喜三太来話、去ル十四日白昼、御城御勘定所江盜賊入、御銀式貫匁余盜取候由、尤御歩行組渡辺幸次郎名前を偽、番人を欺、鎗を為出、這入候由、盜賊者御歩行組御用達所詰何某二而可有之趣之由也

○廿五日、戊午、晴、寒、朝弓術稽古ニ出ル、例時出勤、九半時頃退、木野一馬方同方室昨日安産、女子出生之趣為知来ル、夕貫心流劍術御覧二付為席詰出ル、夜木野へ為見舞平次郎遣ス、佐藤与三右衛門昨日以来又々手足痿痺(痺力)之気味有之由、見舞使遣ス、格別之義二者無之由也、夜松本良伯御用向二而來、暫時話ス

名
廿六日、木野小児
おまつ

○廿六日、己未、晴、夕曇雨、早朝御用向二而出衛様江罷出、今朝小幡孫兵衛殿方御採配之義御伝授被申上候二付、四時頃為挨拶出ル、香取流御槍術御場所へ見物二出ル、近來勝負口始り、何れも出精之様子也、夕為弓術御相手出ル、原田丈夫殿息恒吉殿を先生同道二而被出、始而逢也、暮前方木野へ歎・見舞旁二行、酒出ル、夜二入戌鼓後帰ル
○廿七日、庚申、雨、夕罷、暖甚、蒸気あり、早朝弓術、素読所会読江出席、例時少晩出勤、九半時頃退、長束茂兵衛昨夕自京師帰候由、菅多久馬母・小回清藏等も同船二而

歸候趣也、西向寺江平次郎為參也、夜風吹

○廿八日、辛酉、^卯雨、寒、例時出勤、夕八時前退、六丁目御屋敷二而於時殿昨朝度々御

吐乳被為在、御難儀被成候之由二付、極夕為伺罷出、入夜歸ル、今日者先御居合被成、

御宜方也、尾道三島屋孝助方善兵衛与申船乘を以、先達而申越喜一郎義二付大杉屋之方

様子いか、之振合ニ有之哉、返書を待居候由ニ而尋ニ差越、昨日来候二付、昨夕大杉屋

半右衛門江平次郎遣し相尋候之処、今以為何様子も不相分、尤一昨日満足屋船頭歸候而、

大坂へ參候ニ相違無之段者相知候二付、追々呼戻し方取計可申段申遣候二付、其段返書

認、右船頭へ托し返ス也、平次郎今日貫心流准免許久野幾馬方致相伝候由、平次郎義生

得武芸好ニ而、不絶精出候故、貫心流劍術業前も余程宜敷由、何れも普為聴致くれる也、

渡辺宗右衛門殿於京師去ル十四日岡崎自洲庵へ被參掛、二条川東頂妙寺二彦根候御人数

出居、大炮等有之由、兼而承居られ候故、見物ニ寺内へ被參候処、暫時之内ニ大雨沙石

黒煙を吹卷り、屋瓦皆飛散、其内ニ大雨降来り、誠ニ大変奇異之想をなし被居、其あた

り之人々も大ニ狼狽之様子ニ有之処、須臾ニして空も晴、何之事なく自洲庵へ被參候由、

跡ニ而能々被聞候へ者、右頂妙寺々内墓地方龍蛇天上致候由、扱も珍事之由書状ニ申来

候由也

○廿九日、壬戌、^辰晴、寒、朝射場へ出、午後為伺御機嫌出ル、六丁目様方御庭之竹筍三

根拝領被仰付、見事成竹子也、告于廟、平次郎昨日准免許を得候礼之由ニ而酒肴を出ス

也

四月小

○朔日、癸巳、晴、夕曇、朝御乘馬江出ル、例時出勤、夕八時前退、今日於素読所席書有之、御臨坐御覽被遊、出席致ス、書生三十四人、何れも見事ニ出来ル、足輕以下も十人余り出、御透覽被為在、今日者書生之面々江為御褒美諸口紙三帖ツ、被下置、予方申達ス、堀尾幾之進、藤川甚吉・広次席書無滯相濟為挨拶来ル、平次郎も今日席書へ出候処、予へ無案内ニ而出候ニ付戒ル、依之湯川新太郎断ニ来ル、同人押而出し及迷惑候由也

○二日、甲午、曇又晴、寒、夕射場へ出、吉本恒之丞今日江波江壹丁之稽古ニ出候由、予ニも出候様ニ与申聞候得共、今夕雅登六丁目御館へ出候ニ付不能出、平次郎此間貫心流劍術准免許を得候ニ付、為褒美銀三匁遣ス也

○三日、乙未、雨、寒、朝素読所講釈へ出席、夫方出勤、九半時過退、夕弓術へ出ル

○四日、丙申、晴、暖甚、朝炮術稽古ニ出ル、例時出勤、九半時退、御用向ニ而退出後六丁目御館へ出ル、帰り卒与森岡へ寄、夕弓術御相手ニ出ル、相濟申上事有之、出衛様御部屋へ出ル

○五日、丁酉、晴又曇、夕雨、寒、朝御乘馬御相手ニ出ル、御用向有之、御奥へ午前出ル、夕射場へ出ル

○六日、戊戌、雨、温、例時出勤、夕八時前退、大島五兵衛風邪見舞之謝ニ来ル、夕御弓御相手ニ出ル

○七日、己亥、雨罷、猶曇、御用向有之、朝素読所へ不出、々勤も例時方遅く出、八時前退、二宮五礼来、西向寺へ平次郎為参也、夕松本玄順来

五日

一 御役御免
大御目付

中井出衛殿
御用人方

一 御用人並
郡御奉行

小島太郎作殿
大御目付方

七日

小満節

○八日、庚子、曇、蒸、朝御奥江罷出、於信殿江始而御目通り仕ル也、於信殿者出衛様御子様ニ而、昨年十月女中ちか於能美島御誕生申上、只今迄同所へ御内分ニ而御逗留被成候由之処、夜前窃ニ御奥へ御引取ニ被為成候之由、仍而無屹御様子伺旁罷出候也、岩崎、米原岩之助姉アネ夜前病死之由、岩之助姉者女中ちか事也、御弓御相手ニ夕方罷出ル、朝掘尾眠石入来、夜岩崎常介来話

○九日、辛丑、晴、薄曇、例時出勤、九半時頃退、座敷之壁、昨年地震之節損所、御作事方修覆ニ来ル、夕弓術へ出、夜前常介来話、藤井源之進方之事ニ付話有之也

○十日、壬寅、晴、薄曇、朝炮術へ出、例時出勤、九半時頃退、夕辻江先達而法事之節之謝、藤川・堀尾へも竹子其外之礼ニ行、尤堀尾ニ而者弓矢を携參、致稽古也、相濟眠石達而被留、少々困棊、酒飯出ル、堀尾辻ニ而も卒与酒出ル、お梅当春以来菟角申分ニ而困候ニ付、先達而後藤松軒江診を乞、薬を服候、少者快方之由之処、此節又々名灸之者有之、被勸候而此間方致灸治候由也、留守中木野一馬先達而安産之節ニ来候由、慈君夜中万行寺へ説法之名人来、先達而以来説法有之由、御參被成、殊之外説方善上手ニ而聽聞成群集候由也、直ニ辻へ御出、御宿し被成

○十一日、癸卯、晴或曇、蒸氣強、夜雨、弓術江朝之内出ル、中津屋万之助来、尾道三島屋孝助方七日認之書状一昨日飛脚便ニ而到来、兼而申越候喜一郎義、当月二日夜大坂方帰来、大ニ致安心候由申越、今日返書飛脚屋へ出し置也、於時殿此間中者追々御快方之処、今夕方御上見御内搖之御気味ニ而、大ニ御難儀被成候由ニ付、夜今方為伺御機嫌罷出、昨夕者早速雅登罷出、今朝帰候也、今日者夕方御居(合方)今被成、先御快方也、夜御

用向二而被為召、御輿へ罷出、去月廿四日記二有之御城御銀藏盜賊、御書方御步行組増田藤兵衛倅二而、此間尾路(道九)召捕帰候由、藤兵衛ハ一井嘉内弟也

○十二日、甲辰、雨、涼、朝六丁目御館江罷出ル、於時殿先御居合被成御坐候也、例時出勤、夕八半時退

○十三日、乙巳、晴、涼、朝素説所講釈へ出席、其後出勤、夕八時過退、朝辻清人入来、夕射場へ出、夕申刻頃有輕地震、昨夕も同刻地震有之、兩度とも地鳴も致候也、昨日平野藤吉郎来、觀光院殿当八月十七回忌二付、明後十五日江取越致法事候得共、當時之義故案内等者不致旨申聞、茶壺袋持參之由也

○十四日、丙午、快晴、薄暑、初夏之順候也、朝御内密稽古二付御馬場へ出、其後御乘馬江も出ル、午後ハ檜垣捨次郎・平野藤吉郎江先達而飲之挨拶二行、平野二而者同方飲并明日法事之見舞等申述、内仏へ拜致、兔香式把を備ル也、夫ハ桑原吉郎二江飲之謝、長束茂兵衛へ京都方帰候歎旁二行、井沢元秀へ妹之喪を吊、夕七時頃帰ル、桑原二而者今日朋友因会、酒肴之設も幸有之由二而被留酒出、茂兵衛方二而も達而留、酒を出ス、尤茂兵衛者留守也

○十五日、丁未、晴又曇、寒、朝射場へ出、例時出勤、夕八時退、朝平野法事二付本照寺へ平次郎為參也、長束茂兵衛昨日參候謝二来、小倉甚右衛門内談有之来、夕六丁目御館へ罷出、於時殿先御居合御同篇与申内、少々者御快方二被成御坐候由也、幾三郎義昨年以來不絶へ御輿江被為召罷出、御懇意を奉蒙候故、昨日見事成鱧見当候二付御内々幾三郎方差上さず也

○十六日、戊申、快晴、例時出勤、夕八時前退、退出後妙慶院江參、夫方広瀬神主渡辺駿河守宅へ活花一覽二行、土屋政之進門人之会也、政之進誘引二而緩々一覽す、式三拾瓶程も有之、立派也、政之進者遠州流活花補助之由、昨日周防様二も御覽二御出被為在候由二而、昨夕罷出候節何とぞ見物二參候様二与御沙汰も被為在候故、見二參候也、夕二宮五礼来診、酒を出す、左之通従公儀之御移檄出ル

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘、本寺之外古来之名器及び当節時之鐘二相用候分相除、其余可鑄換大炮・小銃之旨従京都被仰進候、海防之儀專御世話有之候折柄、觀慮之趣深く御感戴被遊候事二候間、一同厚相心得、海防筋之儀弥可相励旨被仰出候、尤右之趣諸寺院江者寺社奉行方申渡候間、被得其意、取計方等委細之儀者追而可相達候

三月

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘を以可鑄換大炮・小銃之旨被仰出候、右者武備御充実之御趣意二候間、此外銅・鉄者勿論、錫・鉛・硝石等いつれも必備之品二付、右等二而無之候而も相濟候品を右類二而相製し候義自今不相成事二候、且又梵鐘を鑄換被仰出候程之儀二付、銅・鉄を以新規二仏像等鑄造いたし候義難相成候、仏器之儀も木製又者陶器等二而も相濟候分者、以来銅・鉄類を以製造之儀可為無用候

右之趣可被相触候以上 三月

別紙之通従公儀被仰出候間、為心得相達候、尚細々之儀者追而可相達候

右之趣可被相触候、以上 四月十五日

○十七日、己酉、晴、薄暑、蒸、朝弓術稽古二出ル、御方々様今日江波新開丁打場江

廿一日早晨

煎酒和会

御皿

香油揚
香茸
菓約
大根
三ツ葉
けん

御汁

すめ
苞豆ふ
椎茸
茗荷小口

煉味噌

御坪

銀杏
慈姑
岩茸

御飯

御香物

御平

落
牛房
椎茸
筍
油揚
三ツ葉
葉山椒

御菓子

焼饅頭
巻せんへい
ふきよせ

四百目玉・三百目玉遠丁為御稽古御出被遊、井上権之丞殿其外士中七人御頼二而被罷出候由、吉本恒之丞も此間炮術免許相伝有之、今日式百目玉致稽古候由、其外当度者此方様御相手之者も権之丞殿噂二而御業前拜見も出来、渡辺雅登江者五拾目玉相伝被致候由也、藤川毎登殿、当六月廿九日秋教院殿五十回忌、七月十九日法信院殿七回忌相当二付、明後十九日江取越法事被致候由二而、明夕參候様案内申来

○十八日、庚戌、晴又曇、夕雨、蒸、朝素読所講釈江出席、夫方出勤、夕八時退、今日

遠江様・主水様為時候之御見舞御出被成、御寛々被成御坐、折柄山下多八郎殿其外門弟中弓術業前被入御覧候由也、右二付周防様二も御出被遊、御用達中まで御機嫌相伺也、夕弓術へ出ル、藤川方今日參候様昨日案内有之候処、前段御出事二付差間不能參、断申遣也、(与三石衛門)佐藤氏此度馬を被求、今日引入有之候由也

○十九日、辛亥、雨、寒し、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時過退、其後又御武具役所へ出ル、

今年者市松殿御初幟二付、御武具役所二而出来被仰出、今日皆出来候付致見分、殊外立派二相調候也、先年当御代様・出衛様御初幟之節吹貫壹本、御幟・四半共六本、其外御槍も数有之候由二候へ共、当度者当時御家中之振合等も有之、別而御作略二而、御幟二本、四半一本、御槍対、御道具御目付道具・御持道具、御打物計也、外御飾兜壹対也、尤御幟も紙二而、全去ル天明年中被仰出候御家法之趣也、已二先年虎人様御初幟之節も此度之通二而、四半之処吹貫二而有之候由也、今日藤川法事二付本照寺へ平次郎為參也
○廿日、壬子、晴、暑し、朝炮術稽古、午後射術数射を致ス也、夕辻清人来話、酒飯を出ス、
嚴島山去ル十八日九日両日余程焼候由也

夕 御茶

豇豆飯

○廿一日、癸丑、晴、朝涼、潤誓廟御祥月二付宿戒、晨興、礼服、献膳何も恒規之通相濟、休誓廟も配祀仕ル也、朝弓術稽古二出、例時出勤、夕八時頃退、夕御弓御相手二罷出ル

○廿二日、甲寅、晴、薄暑、朝西向寺江參、同素読所講釈へ出席、例時出勤、夕八時前退、夕弓術稽古二出ル、岡本主馬殿先達而從江戸帰着之由二而来儀有之

○廿三日、乙卯、晴又曇、夕雷鳴、雨降、全白雨之気色也、朝御乗馬へ出ル、其後弓術、

午後岡本主馬殿江此間来儀之挨拶二行、本照寺藤川之諸墓へ拜し、夫方白鳥二而藤川へ此間法事之挨拶、堀尾へ先日幾之進実名を与候節着到来之挨拶二行、辻へ寄帰ル、お梅先達而之灸治殊之外致相応、此間大快、食餌久振二而味好給候由也、帰掛佐藤与三右衛門を訪、大分快方之由二者候得共、未出勤等之場二も不到候由也、夕弓術御相手二罷出ル

廿四日、今日旦那様川内へ御慰二御出被遊候由二而、夜御獵之魚頂戴被仰付也

○廿四日、丙辰、晴、朝御内密稽古二付御馬場江出ル、例時出勤、夕八時前退、先達而辻お梅点を乞候名灸人、下九軒町二居候喜久藏与申者之由、達而被勸候故今夕呼寄点を乞、尤予か眼者さし薬を調くれ可申由也、何分委敷様子承候処、決而虚誇之者二も無之様被考、右喜久藏者下方二而者稀之者二而、往古武田之家臣之末二而、十一代髮結商買致居候処、先年防州下之関二而筑前芦屋之医師二出会、術を受候由、三年前方髮結職を罷、倅江讓、自身者灸点を専二致居候由也、夕弓術稽古二出ル、慈君夜誓願寺説法へ御参り被成、今朝西向寺へ平次郎為参也

○廿五日、丁巳、晴、朝寒、今朝幾三郎幟を立ル、尤当年方表之庭内へ建候也、実五郎来、助ル也、夜前四時比有地震、稍有力且長し、今暁も軽震有之候由也、朝弓術稽古二出ル、例時出勤、九半時比退、今朝喜久藏目薬を調持来り呉る也、二宮五礼江服薬暫休候趣

廿七日早晨

いり酒わへ

御皿

あけ
香たけ
こんにやく
蓮根
三ツ葉

御汁

すめ
苞豆ふ
椎茸
茗荷小口

御飯

御香物

ねりみそ

御坪

銀杏
岩茸
慈姑

御平

ふき
牛房
椎茸
竹子
油あけ
三ツ葉
葉山椒

御菓子

焼饅頭
ひくわし
卷せんへい

申遣ス也、夕方御用向有之、御輿へ罷出ル、今昼九半時頃又有輕震也、慈君夜御熱氣甚敷、御吐も有之、幸良伯御館二居候ニ付申遣、来診、葉を恵、全氣候之御感触方之儀、少々御熱有之由申也、今朝丹羽庄司先達而之返礼ニ来候由

○廿六日、戊午、晴、朝之内微雨、御三家様共上御足輕備押之業御所望見物之義御願被遊、一昨日方東之明地へ御出、御見物被遊、今朝も御出被遊候由也、朝炮術稽古ニ出ル、弓術御相手夕方罷出ル、御輿ニ而於信殿御不例ニ付夕為伺罷出ル、先御居合被成也、朝松本良伯并万之進來、慈君夕方悪寒強、御振之気味有之、全瘧之様ニ被考也

○廿七日、己未、晴、寒し、今晝八時過於信殿御難儀強御様子ニ付為伺罷出、夜明前退、夜前以来御発瘧ニ相成、殊之外御難儀被成也、信楽廟御正忌ニ付、宿戒、晨興、礼服、献膳恒規之通相濟、常称廟も御一緒ニ献膳仕ル也、早朝西向寺へ參詣、同御輿へ為伺罷出、朝弓術へ出、同素読所会読へ出、夫方出勤、夕八時退、夕又射場へ出、長喜三太此間灸治を勸候処、殊外致相応候由ニ而礼ニ来ル、慈君夜中御振有之、其跡御発熱ニ相成、少々謔言も有之程也、夜岩崎およし来ル

○廿八日、庚申、晴、夕白雨、雷鳴、蒸、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時退、早朝松本良伯来診、慈君全御瘧症之輕様ニ被考由申也、夕弓術御相手ニ出ル、夜お梅来宿、慈君右之御様子ニ付申遣、逗留之積ニ而来呉る也、書院台所御玄関南手江此度上り口出来、自今足輕以下之者者右口方往来いたし、御步行組以上も無僕二候へ者都而右口方上り可申、尤出火等急速之節者格別与申振ニ、今日席達を以被仰出也、同所御式台も此度御取繕有之、自今御勝手通り御出事之節も、御式台下御駕籠へ被為召候事ニ相改り、御台

夕

御茶

さ、け飯

所上方之御乘駕者止候由也、慈君今日者御振無之

○廿九日、辛酉、晴、薄暑、朝松本良伯来診、慈君少し者御熱浮候方二有之趣申、何分不絶嘔噦之御気味有之、食事一円不被成、御困被成也、三宅内外家内・矢野源内家内・石井後室・辻清人等見舞二来ル也、桂辰馬從長州昨日帰候由、為挨拶来、渡辺四郎右衛門右同断二付欲使遣又

五月 大

朔日

入梅

○朔日、壬戌、朝曇、後晴、薄暑、当月子月番受也、朝御乘馬江罷出、例時出勤、夕八時退、岩崎常介・松本良伯・同玄順・辻清人等来ル、慈君今日御脚湯被成候処大分御発汗二相成、玄順者何分傷寒症之様二申、尤右御発汗二而御熱勢も余程挫可申由也、良伯も少々御熱屈し候由申也、今日遠江様御家中丹羽四郎兵衛門人弓術稽古二来候之由、夕御下へ罷出掛卒与見物二射場へ寄也、左之通七人、始而逢人五人也

丹羽四郎兵衛

深町真喜太

西尾織衛

湯浅勝之助

野崎千之助

西尾幾馬

笠間新太郎

夕御用向有之、御幟拝見旁六丁目御館へ罷出、御幟御書院御庭二御建被遊、殊之外御賑々敷被為在也、御幟・四半共三本、御槍対、御道具御目付槍・御打物・御持槍共五本、其外二鯉幟二ツ、御床二御飾兜耆対、其外御到来之御床幟・飾槍等彼是御賑々敷御事也、今日六丁目御付老女瀬川方文二而、市松殿御初幟御内祝被遊候由二而御粽十一本頂戴被仰付也、告于廟、森岡後室夜前以来風邪二而被困候由二付卒与見舞、入夜帰

○二日、癸亥、晴、薄暑、朝御用向二而御館へ出ル、岩崎常介入来、源之進義(兼井)暫逗留、

稽古事等為致くれ候様藤井母之方ヲ頼二付弥引受、暫逗留為致候事二致治定候趣相咄候由也、朝良伯来診、慈君今日者些者御食事も被成、能方也、何分時々嘔噦之御気味有之、

御難儀也、渡辺四郎右衛門入来之由、二宮五礼右同、堀尾ヲ見舞使来ル、辻方同断、見舞として肴被贈、夜長喜三太為見舞来(前大僧正光深)

○三日、甲子、晴、朝涼、後蒸、瑜伽定院准后様薨去二付、三日之間法事穩便之御移檄昨

日出ル、尤朔日之日付也、右者姫君様御母方御叔父君之由也、慈君夜半方今朝疣虫二ツ

御吐被成、昨朝森岡万之進來、幾三郎を市松殿御幟拜見二連歸りくれ、夕方平次郎迎二

遣し歸ル、周防様御前江も被為召、御菓子頂戴仕候由也、朝渡辺四郎右衛門へ長州方婦

候歎二行、素読所講釈へ出席、岡本主馬殿来儀、予素読所出席中二付佐藤与三右衛門方

江被行候処、同人不快中、達而逢くれ候様被申候趣、予同方へ罷越、及応対、例時出勤、

夕八時退、松本良伯朝夕来診、同玄順も夕方見舞呉る也、長喜大夫室見舞二来、辻清

人同断、慈君今日も昼後御嘔飢甚敷、御困り被成、尤御食事者少々上る也、夕白雨、

雷鳴稍甚

○四日、乙丑、晴、薄暑、極夕雨、夜中暴、雷鳴、朝例時出勤、夕八時退、夕御弓御相

手二出ル、并御乗馬へも出ル、慈君今日方者余程御宜敷御様子也、御嘔逆稀也、良伯朝

夕来診、湯川新太郎・星野武平次・辻清人見舞入来、今日左之通被仰付有之(頭書九)

○五日、丙寅、朝雨罷、後晴、涼、朝五時頃麻上下着、為御祝詞罷出、御方々様江御祝詞

例之通申上ル、岩崎常介此間人來、源之進逗留二相約候段申置候二付、卒与見舞旁二參、

四日
一炮術師加役

吉本恒之丞

毎歳金壺両被下之

御側詰

一日參

御役料銀百目

格列唯今迄之通

石井寿兵衛

達而被留酒出ル、辻清人為祝詞入来、酒出ス、弓術江夕方卒与出ル、大御目付中井出衛殿就御用被罷出候付夕方御館へ出ル、松本良伯来診、慈君弥御快方之由申也、今日者御嘔吐之気味もなく、御食も少し者上ル也、夕方玄順も来診之由、藤井源之進祝詞二来ル、夕方方渡辺へ囲碁之約ニ而行、跡ニ而酒出ル、同方吉太郎当年幟立取之由也、夕方雷鳴、雨振、涼、六丁目様ニ而市松殿御初幟ニ付、同御役三人申値、軽キ交肴御内々昨日差上ル、当時稠敷御省略之御場合ニ者候得共、御当家ニ而御幟者誠ニ御珍らしき事ニも候故、右様格別ニ差出也、交肴三頭ニ而代九匁也、旦那様今日御下城掛六丁目御館江御出被遊候由、尤此節於時殿御不例中故、御招等被為在候ニ者無之、只御伺ニ御出被遊候由也、今日三度程軽地震有之候由

○六日、丁卯、晴、薄暑、朝炮術稽古ニ出ル、例時出勤、夕八時退、良伯来診、慈君昨今大分御宜敷方也、永井仲之介・小倉甚右衛門・石井寿兵衛見舞入来、尤寿兵衛者昨日歎ニ參候謝也、堀尾・木野方見舞使来ル、夕方御乗馬へ出ル

○七日、戊辰、曇、朝会談ニ付素読所出席、夫方出勤、夕八時過退、常称廟御祥月忌ニ付朝西向寺へ參、今朝有地震、夕方射術、良伯来診、脇本武兵衛御用向ニ而来、謁、就右夕又御館へ出ル

○八日、己巳、雨、涼、初梅雨之気色あり、早朝御用向有之、福山直衛、脇本武兵衛へ行、謁ス、午為御機嫌伺罷出ル、夕方福山直衛就御用向来、謁、夫ニ付又々出勤、夕方七時宅御用有之、佐藤与三右衛門不快中ニ付、予申達、藤川毎登殿不念筋有之、御叱也、今日者葉動ニ而眼腫痛、終日困ル、松本良伯来診、夕方木野一馬為見舞入来、酒を出ス

九日
夏至

○九日、庚午、時々雨、後罷、蒸、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時前退、夏至也、夕又弓術へ出、堀尾精一郎・小倉甚右衛門・菅馬之進・岩崎常介・辻清人為見舞入来、尤清人者夕迄咄、酒を饗、夜於梅も一緒二帰ル、松本玄順来診、丹羽庄司去ル六日御出頭格被仰付候由為知差越

○十日、辛未、雨、終日蕭々、朝炮術稽古二出、例時出勤、夕八時過退、夕弓術御相手二出ル、良伯来診、慈君日々と御快方也

○十一日、壬申、曇、将晴不晴、朝弓術稽古二出ル、夕為伺御機嫌罷出、夜渡辺四郎右衛門来、九州話を聞、今朝辻清人入来

○十二日、癸酉、雨、朝例時出勤、夕八時退、朝弓術江も卒与出ル、今朝喜久藏来、眼を見合くれる、至極宜敷趣申也

○十三日、甲戌、晴、蒸気強、朝素読所講釈へ出席、直二出勤、九半時過退、良伯来診、慈君益御快方与申也、尤今日者少々頭痛二而御困被成、堀尾眠石翁・辻清人・矢野源内室見舞入来、弓術江夕方出ル、夜岩崎およし見舞入来

○十四日、乙亥、晴、薄暑強、朝御館江御用向二而出勤、午前六丁目御館江為伺御機嫌罷出、丹羽庄司江先日御出頭格被仰付候知せ差越候欲二行、森岡・木野・水谷江寄帰ル、木野二而酒出ル、水谷伯母君江、藤川毎登殿勤向兎角等閑多く、毎時御機色(乳力)二触候様子二付、内々御異見方之義二付心付御咄申置也、右之義二付而者去ル八日三宅吉左衛門江も頼置候義有之也、森岡万之進・藤川毎登殿・三宅吉左衛門為見舞入来、夕方黒田門人中為槍術稽古多人数相見へ、御馬場二而稽古有之候二付為見物出ル、筑前秋月藩名越

續藏も来ル、近来者此方様御家来中も黒田稽古場江出席致候処、一統殊之外心切ニ而、少も隔意ケ間敷義無之候由、尤右續藏同方稽古場へ被留置候ニ付而者、諸入用ニ門弟中被困、段々先生方之御願も有之、右御家来中も稽古ニ出候訳を以、毎月銀式拾五匁ツ、内々御贈与申事ニ相成、夫ニ依て一入門弟中之取持も宜敷もの与被考也

○十五日、丙子、雨、夕方罷、朝例時出勤、夕八時前退、夕弓術、松本良伯来診

○十六日、丁丑、曇又晴、夕雨、薄暑強、早朝西向寺江参詣、朝炮術出席、例時出勤、夕八時前退、今日昼後飯田又市殿御馬場を借用、門弟中打毬之戯有之、周防様ニも御出被遊、御方々様無屹御見物被為在、為見物出ル、此方御馬二匹、渡辺・佐藤馬も出、あちら方借馬五牽々来られ、殊外面白事ニ有之し也、人数者世話掛旁見物等之衆を併五六人許も見へ候様子也、藤川兄弟午方来ル

十七日

夕七時前御用向ニ而主水様御用人福山直衛罷越、致

応対也

○十七日、戊寅、晴、薄暑強、朝御用向ニ而出勤、弓術稽古ニ出、六丁目御館ニ而於時殿御不快、今晝以来御衰弱之御気味強、御不出来之御様子ニ付四時前雅登被出、慈君此度之御病氣御自身ニ者御全快者無心元与御覚悟被成候由之処、案外速ニ御平愈被成、其上近来御白髪甚敷、夫等もうるさく思召候ニ付、旁御剃髮被成度、此間以来類而御望ニ付、今日吉辰ニも有之、弥御剃髮被成、予剃而上ル也、於時殿何分重キ御容体被成御坐候由ニ付、夕雅登替合、予御下屋敷江罷出ル、然ル処極夕方追々御差重り、終ニ夜六時半時前御卒去被成、当年御三歳、当春以来之御病氣、全御脾胃虚与申様之御症也、兎角御不仕合之御事、乍恐是非も不被為在次第也、彼是御用向申談置、夜半頃退、直ニ罷帰、御館へ出勤、晝七半時前退

○十八日、己卯、時々雨、蒸甚、雷鳴、夕豪雨、早朝六丁目御館江罷出、四時頃帰、直二出勤、夕七時頃退、今夕八時於時殿御死去之趣席々江御達し有之、極夕六丁目御館江御悔・御機嫌伺与して罷出、麻上下着也、入夜帰ル、井沢元秀今朝本安橋上二而主水様御通行江御出会申上候処、不都束二而平伏不仕罷在、御供方右姓名尋も有之、井沢元秀与答候得共、右様之作舞故上之御医師中与氣取候哉、既主水様御下馬も可被成御様子之処、其儘二御通過被成候由、右二付元秀早速主水様御医師三宅春齡江罷越、内濟取持之儀頼入、同人も心配いたし呉候由之処、何分あちら御供方見損、既二御下馬をも申上候程之義二而、夫々書付も出候趣故内濟不相調、依之元秀恐入申出候之由也、今晚六丁目右帰途暴雨二逢、困ル

〔十九日

於時殿御法名

芳雲詠感大童女

右今度者長安寺江御斂被成

候也

〔同日、極夕出水一丈壹尺、五寸二至、出勤無程引落、終二本丁場二不至相済也

○十九日、庚辰、終日雨、時々暴降、例時出勤、極夕退出、夜辻右お梅来宿、芳雲殿今晚御葬斂、此度者周防様思召二而長安寺江御斂被成、暮六時御出興、御病氣建二而御寺入被為在候也、其節為御見送罷出候筈なれ共、此節与三右衛門煩中、殊二御用番二も有之事故、申值候而雅登右人罷出ル也

○廿日、辛巳、雨、為伺御機嫌罷出

○廿一日、壬午、朝晴、夕雨、朝弓術へ出、例時出勤、夕八時退、夕御弓御相手二罷出、喜久藏来、予眼を見合くれる也、一昨日之雨二已斐天神之山拔ケ、下人家一字破壊、四人ほとも怪我人有之候由也、藤川右慈君御見舞肴来ル

○廿二日、癸未、晴、向暑甚、麗照院様御祥月忌二付海藏寺江御代參被仰付、相勤、四時過罷帰、御留守中二付御用達中迄相勤候段申上置也、一応帰宅、直二出勤、八時頃退、

〔廿二日、御帰城御供之衆
左之通

御用人

沢徳三郎殿

堀田恂之助殿

大御小姓頭

森島佐伊記殿

御騎馬頭

堀江太左衛門殿

〔太守様今日御帰城被遊、且那樣如例為御迎八丁堀江御出被遊候由也、右二付早朝卒与出

勤いたし、其後御代參相勤也、太守様御供立殊外御減少、御先備等も無之由、尤当年者

八町堀御家老様方御目見之御場所二而、御例方も御駕籠御静二而、御恐悅等被仰上候御

間合も御充分ニ被為在、御意も是迄ニ不被為在御分明ニ被為在候由、何となく御心持も

被為在候御事哉ニ被伺候与之評也、〔西向寺へ平次郎代參申付、〔今朝予御代參方帰掛、

西御門菅笠ニ而罷通候処、門番之者着拔者不相成候由二声程申、黙而通ル、夫切之事也、

不審也、〔夕又御用向有之、出勤、〔夜蒸

○廿三日、甲申、晴或雨、〔朝御乗馬江出ル、且那樣今日も佐伯郡已斐村石風呂江御入治被遊、

昨年迄者予も御相風呂奉願候得共、当年者其義不仕、雅登も同様也、〔朝御用向ニ而出仕、

極夕も亦出、〔夕方御用向ニ而福山直衛へ行、謁ス、〔夕弓術へ出、〔夜雨

○廿四日、乙酉、晴又雨又晴、蒸気強、〔今朝御帰城為御歛御登城被遊候ニ付出勤、退又例

時出勤、夕八時前退、〔夕福山直衛来、謁、〔極夕出勤、〔佐藤与三右衛門不快少々快、今

日方出勤、尤行步者いまた六ヶ敷そう也、〔夕辻清人入来、酒を出ス、於梅帰ル、〔西向

寺江平次郎為參也

○廿五日、丙戌、晴、向暑甚、夕雨一過、〔今朝六時過より家小産之催有之、日出過安産、

小児者男子也、産者至而軽く、児も丈夫二見ゆる也、石井後室・田中榮作妻早速来り、

万端預世話也、〔右男子出生血忌之案内、同役兩人江紙面を以申遣ス也、〔無程血忌御構

無之二付、勝手ニ出勤候様思召之旨渡辺雅登方紙面到来、御請返書差出、例時出勤、夕

八時前退、〔右安産之趣松本良伯へ申遣、留守中来、見合くれ候由、小児丈夫二者有之候

〔廿六日、小兒今朝乳を付

候処、兎角悪心之気味有之

様子ニ而睨々不飲、何分胸

下つかへ候方之事与被考、

森岡弟婦乳を付呉る也

〔廿七日、小兒名

他三郎

廿八日

〔仏護寺本堂普請去ル文政

年中方之事ニ有之処、此節

漸屋根下地程出来ニ至、一

昨廿六日方今日迄三日之間

入仏供養有之、殊之外賑敷

候之由也

へとも、胸毒強候故氣を付候様ニ与申、葉を患候由、家小も腰痛強候ニ付葉を乞候由、〔安

産之趣木野・森岡・辻・藤川・水谷江為知遣シ、其外岩崎・小倉江も為知候也、〔渡辺雅登・

佐藤益之丞・岩崎常介・石井寿兵衛・小倉甚右衛門・三宅内外・長喜三太歎入来、尤雅

登者御用向を帯而被来也、〔木野方使来、〔夜森岡夫婦・辻妹来、弟婦・妹者直二宿、石

井後室・長老室も宿し被呉、榮作妻も宿ス也、〔慈君益御快、今日方者何角之御世話も被

成遣也、〔夕方岡本主馬殿方手紙ニ而大口鰈老尾被患、先達而借用銀之義取次進候謝之趣

也、佐藤・渡辺へ及配分也

○廿六日、丁亥、晴、朝涼、後向暑甚、〔今日方於御城御家中年頭御礼初り候由、旦那様御

登城被遊候ニ付早朝罷出、〔小兒夜前者大小用共通し少キ方ニ付、今朝松本良伯申遣、昼

前来診、何分胸毒之事与申、葉を致加減くれる、且産髪をも前之方程剃遣候方可然与申、

其通ニいたす也、〔辻清人・山田多喜登・渡辺四郎右衛門・桑原盛蔵・大島五兵衛歎入来、

木野方使来ル、〔矢野源内夫婦昨日早速来ル也、〔小兒午後通滞、極夕小水たつふり通

候而已ニ而、其後者一円不通ニ付、夜良伯申遣、早速来、浣腸等も致しくれ候へ共更ニ不

応、乍併啼声等少も不替、胸下苦痛之様子ニ者無之、良伯者直ニ泊り被呉也

○廿七日、戊子、晴、夜涼、〔小兒昨日以来之様子故、今朝松本玄順を申遣、尤平次郎此間

以来夜中へ熱発ニ而致難儀候様子ニ付、岩崎良之進を頼、参呉る也、〔今日三ヶ日ニ付

小兒名を命、〔午前玄順来、夕迄話、良伯申值種々心配いたし呉、備急丸等をも用、浣腸

も度々致くれ候得共更ニ通し無之、〔御登城ニ付極朝出勤、又例時出勤、九半時退、〔西

向寺江取紛、代参も得不申付、〔松本良伯今日者終日見合被呉也、〔小兒右之通ニ而何角

卅日

寺納物

一銀式両 作善料

一銀式匁 卒都婆料

初七日 壹匁

七本塔婆 五分ツ、
四十九日一壹匁 家来へ
穴掘料

右家来方納所宛目錄書二而

為持遣也

行列

白張釣燈 壹人

色掛 持手
棺 壹人手提釣燈持
支配人 壹人

上下着

取紛候二付、今晚方月番雅登江頼也、近隣彼是与歎・見舞等二預候へ共不記

○廿八日、己丑、晴、朝涼、午暑、小兒夜前も終宵通氣無之、朝松本三珠来診、何分六ヶ敷趣二申也、良伯者夜前方詰切呉る也、例時出勤、夕九半時退、他三郎今朝大用・小水とも真二聊通氣有之候得共、何分真之通氣立候二も無之様相見、危篤之次第二候得共、啼声之能処少々頼有之、今一思案尽試度候二付、三宅春齡江成とも見合もらい度趣良伯申聞、最早不入事与者存候へ共、男子之事とも有之故、小倉甚右衛門を頼、迎申遣候処、夕方来見合くれ候へ共、格別異考も無之、危篤之趣申聞候也、木野一馬歎入来、酒を出ス、同方方他三郎を祝し帷子地・紅絹ひもとも酒切手・赤小豆飯被贈、近隣其外歎・見舞等彼是来客有之、石井後室・長老室等、并二栄作妻格別二世話なり

○廿九日、庚寅、晴、向暑強、他三郎夜前も終宵苦啼、今朝二至而者大ニ衰弱見ゆる也、松本良伯今日も終日詰切、種々心配を尽し呉候へ共効無之、朝夕同入弟三珠来診、夕水谷又左衛門殿御出、酒を出ス、夜万之進泊呉る、他三郎極夕者甚不出来之様子二有之処、尚又居合候へ共、何分追々衰弱也

○卅日、辛卯、晴、暑し、他三郎夜半後方只様陽脱至、今晚如眠絶續二及、天哉命乎、凡六時前之事也、右之趣今朝紙面を以同役へ案内申遣、三日遠慮之儀申達る也、木野・水谷・辻・藤川等へ為知遣、近隣格別懇中程へ口上二而為知遣ス、大島五兵衛・長喜三太・小倉甚右衛門・石井寿兵衛・岩崎良之進・平野藤吉郎等来、何角見合くれる、丹羽庄司方江者おしけ遠慮掛二付、木野之口上二して為知遣ス、近隣其外悔・吊彼是有之、木野・水谷方使来ル、渡辺雅登も早速来、少々見合被呉也、妙慶院へ家来方納所宛之紙面二而、

仮門持 志人

以上

惣容代香者右支配人へ一拜
二而焼香申付る也

〔他〕三郎法名

義純童子

右小児死去之趣為知遣し、且今晚六時葬送、秀山智英童子墓所へ合葬ニ致度旨も申遣、夫々承知之返答也、尤水兒之事故至而手輕ニ取計候趣も申遣也、〔御門通し并不浄門明之義、長喜三太を以御目付江及案内也、〔出入之者武八郎・庄八・利作・庄助・国藏等世話いたし并二供二も參くれる、平次郎此間以來兎角夜中致難儀候二付、家来代武八郎參呉る也、〔寺納物・供列等者貞乘童女・貞玄童女君等之例二仍而取捨を加、申値治定いたす也、〔夜六時半比出棺、何も無滞相濟、〔森岡弟婦今晚万之進伴婦ル、去ル廿五日夜方今日迄逗留、不大方世話二預也、〔同役初切紙知せ者不出、尤御家中者此節留守中也、〔芳雲殿今日御二七日二付御茶被遊候由二而、牡丹餅一重頂戴被仰付也、尤御請者遠慮中故不申出

六月 大

○朔日、壬辰、快晴、〔予遠慮之处、御構無之二付勝手次第出勤候様思召之旨渡辺雅登方紙面二而申来、御受返書差出、〔例時出勤、夕八時過退、〔今日七夜二候得共、遠慮中故祝義差延る也、〔朝妙慶院へ平次郎代參申付也、〔石井寿兵衛・同老室・松本良伯・三宅吉左衛門・松本良伯・岩崎良之進・松尾善三郎・野口唯藏・渡辺内室等入来、〔幾三郎午前方度々腹痛二而難儀いたし候二付、夕方松本良伯を迎、診を乞、全ふめくり之事与申、薬を投し、腹暖治等致しくれ、大便通ニ相成、腹痛者速ニ治、石井老室見舞入来

名 鈆之進殿

○二日、癸巳、雲出、蒸氣甚、〔幾三郎今日者大二快方也、〔松本良伯来診、〔夕方木野伯母君於喜代を連御出、御宿被成、〔家小今日湯浴、蓐を払也、〔石井老室・吉本恒之丞・山田多喜登・佐藤益之丞・三宅内外・石井老室・八木藤弥入来、〔且那樣石風呂御入治今日也

於信殿二も今日方左之通
御改名被成候由也

於卓殿

五日夕

皿 酢和会

すめ

汁 椎茸
結かん瓢

飯

香物

平 紅切
からし

酒肴

くすに

八寸 玉ふ
しゐ茸

平鉢 こんやく
さし身

猪口からし酢

布施 五分

迄二而被為濟、愈御相応被遊候由、奉恐悦候也、妙慶院へ平次郎為參也

○三日、甲午、曇、有風、蒸氣強、朝素読所へ出席、夫方出勤、九半時過退、森仙太郎・
檜垣捨次郎・星野幸次郎・高木唯一悔入来、大杉屋半右衛門先之頃三島屋喜一郎一件之

謝之由来也、今朝御奥二而出衛様御側女中志津安産、御男子様御誕生被成也、出勤中於
御奥老女迄恐悦申上ル也、木野伯母君・お喜代夕方婦ル

○四日、乙未、晴、向暑、例時出勤、夕八時過退、松本良伯来診、藤川毎登殿・菅多久馬・

長束茂兵衛・上野彦三郎・渡部卓爾・丹羽庄藏・石井寿兵衛入来、妙慶院江明後六日初
七日二付法事之義、并明夕弟子一人来、内仏二而回向之義頼遣、承知之返答申婦ル也

○五日、丙申、晴、向暑甚、朝御多門内江何角之返礼二行、松本良伯来診、幾三郎弥快、
大分気軽二相成也、午後御奥へ伺旁罷出、御小兒様御名被進候恐悦老女まで申上ル也、夕

妙慶院弟子仙丈来、内仏二而説経、跡二而茶漬・酒を出ス、布施を引、近隣彼是世話二
成候方角江も茶漬二而振廻度候へ共、真之水兒之儀、殊之当時之事二も有之候故、一円

二其義不致候也、御年寄二川清記殿江戸以来之大病二而、御供之外者先二御戻し二而、
矢張御帰城御当日帰着有之由之処、兩三日前物故、今日披露有之候由也、家来平次郎義

先達以来不快、兎角快無之、全瘡疾之趣二而毎夜難儀致候容子二而、下宿を願候故、今
晩下宿を許也

○六日、丁酉、晴、向暑厳也、朝妙慶院へ代参田中実五郎を頼、法事中詰呉ル也、石井寿兵衛・
小倉甚右衛門・平野藤吉郎法事前後参詣有之由也、例時出勤、夕八時前退、朝御乘馬江出、

今日豇豆飯を製、先達而格別世話二成候左之方角江贈也

七日
土用

辻 森岡 石井 岩崎 長 渡辺室 三宅室

右之外柴作方江も遣ス也、其外出入之者江者多葉代(粉脱力)与して五分ツ、遣ス也、永野武八郎・御手回庄助・小回利作・同庄八・小人国藏・小回弥十、尤中二而利作者朝方世話二成候故八分遣ス也

○七日、戊戌、晴、暑甚、土用入也、朝弓術出、素読所会読ニ付出席、夫方出勤、今日方出勤全五半時ニ相成也、九時過退、西向寺へ家来無之、参詣不能也、松本良伯来診、桑原盛藏入来、夜長喜三来話

○八日、己亥、晴、朝曇、甚暑、朝炮術江出、御用向ニ而被為召、御館へ出ル、午後渡辺雅登申合、鉄炮数放いたす、夕御弓御相手ニ出ル、岩崎常介見舞入来、辻清人此間内不快之由ニ付見舞ニ下女を遣ス、最早快方之由也

○九日、庚子、晴、朝曇、嚴暑、朝御内密稽古ニ付御馬場へ出ル、相濟出勤、九半時退、良伯来診、夕御弓御相手ニ出ル、慈君今日者又々御熱氣有之、御平臥也

○十日、辛丑、晴、炎威強、夕雨はらつく、朝御乘馬江出ル、例時出勤、九時過退、伴三之丞殿・調子政記殿御立入始而被罷出候ニ付出而謁ス、後刻両家共為挨拶宅江被来也、夕御用向有之、福山河瀬喜和馬江行、謁ス、永野武八郎供ニ参くれる、武八郎義今日者終日来、米搗・菜園守護等致くれる也、辻清人・森岡万之進・大崎和三郎・長束吉之進来

○十一日、壬寅、晴、暑甚、夜白雨、雷鳴、快雨也、朝遠江様・主水様江暑氣御機嫌伺与して罷出、去ル申歳以來不罷出、春秋両度時候御機嫌窺与申て罷出来候所、当年方復旧也、尤世上者年頭・五節句之勤而已ニ而、暑寒者いまた不始候得共、御両家様之処計遠江様来

十五日
 幾三郎住吉祭ニ付水主町
 へ夕方行、桑原江寄、暮過
 二帰ル、同方ニ而暫遊、饗
 二逢候由、与藏付ケ遣ス也
 例年之通附足輕夏御貸
 米頂戴仕、米価諸郡米石
 九十三匁之由也

之意ニ而相始候也、夫方妙慶院へ参、六丁目御館へ罷出、森岡・木野・水谷へ返礼ニ行、
 坪内久米之助・野崎千之助を訪帰ル、木野ニ而酒飯出ル、夕炮術稽古ニ出
 ○十二日、癸卯、晴、嚴暑、朝涼、朝弓術へ出、例時出勤、九時過退、夕御弓へ罷出、夜
 三宅室来話

○十三日、甲辰、晴、暑嚴、朝涼、朝素読所講釈へ出席、相濟出勤、九時過退、平次郎
 不快今以睨々無之様子ニ付、下番弥三二男与藏を当分雇、今朝方来ル也、十七歳之由也、義
 純童子二七日ニ付妙慶院江与藏為参也、夕御馬場ニ而打毬之稽古被仰付、出ル、借馬二
 牽来リ、御馬共々四牽也

○十四日、乙巳、晴、暑甚、白鳥辺へ慈君御病中以来之返礼ニ朝方参、出掛西向寺へ去月
 度々参詣怠候ニ付参ル、辻ニ而酒飯出、日盛を避帰ル、留守中吉田藤馬入来之由、慈
 君近処何角之御挨拶ニ御出被成

○十五日、丙午、晴、暑輕、有風、朝弓術江出、例時出勤、九時過退、六丁目様昨夕方
 川下江御胤ニ御出被成候由ニ而、御胤之潑尾魚五頭拜領被仰付也、今日初而鈆之進殿江
 御目見仕ル也、松本良伯・堀尾精一郎・伊藤徳之助入来之由

○十六日、丁未、曇、夕より雨快降、早朝妙慶院へ参、西向寺江も貞善童子祥月ニ付卒与参、
 小倉後室病を訪、^(切)兎角睨々無之、氣遣候由也、御乗馬江出、例時出勤、九時前退、永
 井仲之介・大崎和三郎・高木唯一入来之由、喜久藏来、腹背灸治いたしくれる、粉葉を
 も患候筈也、慈君も見合御もらい被成候処、いまた余熱大分有之、葉を可患与申也、夜
 雨快降、涼甚、昨年之通今日御供船者御用船耳ニ而、飾も当所ニ而者不致候由也

十七日

〔藤母江祝義〕

一銀八匁 樽代

一同貳匁 肴料

其外心付左之通

一銀四匁 栄作妻

一同壹匁 実五郎

一同五分 平次郎

一同壹匁 とめ

一同貳分 与藏

膳酒肴

鱈うり

汁 蛤

赤小豆飯

平鉢 蛸魚
さし身

八寸 冬瓜
焼蒲鉾

井 白芋茎
いり子

以上

○十七日、戌申、曇時々雨、涼甚、〔御裏殿島社御祭礼済、御供物頂戴被仰付也、〕家小安

産七夜之祝延引ニ相成居候ニ付、今日内祝いたす、尤當時之義、且小児も不育候故、一

緒内江も案内者不致、真之其節格別世話ニ成候方角計左之通招、尤森岡弟婦・辻お梅者

暑之砌故態与不招、其代ニ万之進・清人を呼、長老室も此節御奥へ出居、差間ニ付、喜

三太を名代ニ呼、石井後室者不快ニ而不被来候故、酒肴・膳具を贈る也、藤母へ者今朝

祝義為持遣ス、今夕者不来、差間とも有之歎、松本良伯江者本直酒一陶贈る也

石井後室 長老室 森岡弟婦 辻お梅 藤母

田中栄作夫婦 同実五郎

○十八日、己酉、晴又曇、蒸意あり、〔朝素読所会説ニ付出勤、夫方出仕、九時頃退、〕菅

馬之進入来之由、〔夕炮術稽古ニ出ル、〕極夕西向寺入来、謁を被乞候ニ付謁ス、奴可郡

宇山村禅仏寺東城町江移住之志願有之、公辺者去冬免許も有之候処、此御方様之処不相

調趣ニ而甚当惑被罷在候由ニ而、内々頼之趣有之、予者一円承知も不致儀ニ付其趣答置、

尤西向寺内話之趣ニ而者、只今迄ニ東城表より不申来義者無之筈ニ候得共、いか、之義

歎不審之事共也、〔夜雷鳴、雨降甚、蒸気強

○十九日、庚戌、晴又曇、炎暑蒸、朝射場江出、〔例時出勤、九時頃退、〕丹羽庄司歎之返礼

入来之由也、〔森岡万之進此間之礼ニ来、其節頼置候白鷺之義、空鞘真光寺小路山泉屋清

藏与申者方江明朝取ニ遣候様ニ与申置候由也

○廿日、辛亥、曇、蒸、午後有風、涼、夕晴、〔早朝河瀬喜和馬御用向ニ而来、謁ス、〕御

乘馬江出、〔午方為御弓御相手罷出、極夕相済、百射被遊候也、〕渡辺雅登御下屋敷へ罷

廿一日

殿様御召物・御上り物・

御物数奇事等御作略筋、尚又御直書を以被仰出候由二而、御書付之写昨日大御目付衆主水様へ御持参有之候由也

廿四日

武田正之助殿今日御年寄被仰付候由、此人者去永く御供頭被相勤候処、去極月御用人二被移、尚又此度御年寄二被進、誠二早進也、人物者如何之人哉ゆかし

此人之義後二承候処、

少々学才も有之、當時之

執政二而八第一有力人な

出候二付家來借用致度由二付、立用申也、永野武八郎へ義純童子墓文字彫入申付之義頼置候也、野崎千之助入來之由

○廿一日、壬子、晴、炎暑、朝弓術稽古二出、例時出勤、九時過退、上野彦三郎入來之由、平次郎不快々方之由二而、夜戻り來、今夕松本良伯入來、家小・幾三郎共弥敷由申也

○廿二日、癸丑、晴、炎暑、朝有涼風、朝西向寺江代参平次郎申付、義純墓所江も一昨日三七日差間、得不為参候二付今日為参也、朝素読所講釈へ出勤、夫方直二出勤、九時前退

○廿三日、甲寅、晴、炎威強、朝有涼風、朝波多野權祐・菅多久馬・長束茂兵衛へ挨拶二行、桑原吉郎二江も寄、西向寺江昨日不参候故参ル、井上市太郎・脇本武兵衛暑氣為問安入來有之、星野幸次郎・長束清次郎入來之由、夕炮術稽古二出

○廿四日、乙卯、晴又曇、蒸暑、朝御内密御用二付御裏へ出ル、相濟出勤、九半時頃退、夕御鉄炮御相手へ罷出ル、斎藤七太郎殿も被出、同方者自由斎流也、山田多喜登・渡辺四郎右衛門・堀尾眠石暑氣見舞入來之由也

○廿五日、丙辰、晴又曇、朝暑輕、午後蒸熱、朝射術稽古二出、例時出勤、夕九時過退、夕弓術御相手二罷出、昨日石井寿兵衛何角之挨拶与して入來之由

○廿六日、丁巳、曇又晴、東風吹、暑不烈、朝御乘馬並二炮術江出、坪内久米之助入來之由、立秋

○廿七日、戊午、晴、夕曇、東風吹、有蒸氣、尤暑者不烈、今朝六半時揃、炮術稽古前御覽二付罷出ル、小筒二玉通相濟、又異風拾匁玉筒二放棄前仕、両方共星角中り也、拾匁

るへしとの評也、定而當時之御人撰敷と思わる

知行高六百六十石
御加増
御年寄役

武田正之助殿

御用人方

廿六日

立秋

遠江様方御到来被遊候西瓜、例年之通御取頒、頂戴被仰付也

廿八日

出衛様先達而御産母病死、長々御朦中二付、為御消閑同勤三人申合、左之通今日御内々差上ル
葛饅頭 二重
但数三十二
右二而直四匁八分、上餡二而一ツ二付代壹分五厘取也

筒者葉三匁込候而放ス也、右相濟四時過出勤、九半時頃退、三宅吉左衛門入来之由、極夕々水谷へ行、兼々御頼之福田方離縁差纏一件、昨年以來岡田八十太郎義種々致心配くれ候得共、今以埒不明候二付、此余者最早何日を限ともなく打捨被置候事柄も無之候間、兼而之通表向達しニ相成候外者有之間敷、尤弥其方ニ御治定候得者、今一応八十太郎を福田之方江遣し、為申談試度趣及御相談候処、御存旨も無之由ニ付其方ニ相約可申与御約束申帰也、酒出、深更迄咄ス

○廿八日、己未、晴、朝涼、午後熱、御旗業前御透覽ニ付早朝出勤、御裏へ出ル、午後退、夕炮術稽古ニ出

夕炮術稽古ニ出

○廿九日、庚申、晴、朝涼甚、午後残暑強、矢野源内を呼、借用銀之義及内談也、来月十一日秋露七回忌ニ付、墓所磨西向寺江平次郎遣ス也、朝弓術稽古ニ出、去ル廿一日之頭書ニ有之殿様御召物并被召上物、御建物等、御直書を以被仰出候儀左之通ニ有之由也

夏 一晒御帷子 一越後縞 一川越平御袴

冬 一紬染 但縞共 一棧留御袴

一御長上下・御半上下 右両品共五郎丸 一御肩衣 目せき紹

但御社參・御仏詣其外御祝式之廉者是迄之通、五節句・月次御礼被為請候節御

羸服被遊候義も可有之候

日々御三度共被召上御膳部

一汁二菜 但必一汁之取組ニ不限、珍味調理ニ不及、品統等も不苦候事

大須新開 皆実新開 御休所

右御鷹野之節計御小休被遊候間、御腰掛同様之事ニ而相濟候間、有来御建物解崩し、纔之御建物ニ仕替、東新開之御休所同様ニ被遊候事

一御鷹野之節御弁当ニ而御濟被遊候間、御膳所相廻候間不及、尤五日市辺御鷹野之節ハ是迄之通ニ候事

一御野合ニ而御用被遊候御駕籠此已後御止メ、御平日之御駕籠ニ而御濟被遊候事

一御泉水幽玄庵損所有之、此御場所ハ破損所其儘難被御捨置ニ付一向ニ解取、懇ニ仕舞置、追而取建御時節ニ至可被仰付候事

一御同所超然居江御渡相成候橋是又同然解取、仕舞置候事

一御同所石燈籠倒レ等も有之候得共、差向損し等手入ニ不及候事

一水主町御屋敷・東御山屋敷者漏留程仮成取計、余ハ御手入ニ不及、取捨同様之事ニ而可然候事

○卅日、辛酉、晴、朝曇、涼甚、午後残暑強、朝炮術稽古ニ出、例時出勤、九半時頃退、義純初月忌ニ付妙慶院へ平次郎為参也、夕弓術稽古ニ出、此間殿様御身前之儀嚴敷御省略筋被仰付御振合ニ付、此御方様ニ而も猶又御取締筋被仰出、今日向々御役方於小書院ニ之間御達し事有之、向々心付之廉早々申出候様ニとの御趣意也、周防様昨廿九日朝潮ニ御乗船、地御前辺江御泊掛ニ御出被為在、女中向をも被召連候由、御内々者嚴島御渡海与相聞る也、昨朝平木順次郎殿被来、謁ス、田辺幾衛殿居合用之御稽古道具拝借被仕度義ニ付内談有之、此節六丁目様御留主中之義ニ付其段答置也

七月 小

○朔日、壬戌、晴又曇、殘熱、酷蒸、当月子御用向月番也、早朝弓術稽古ニ出ル、例時出勤、九時過退、午後矢野源内入来、此間頼置候借用銀相調候旨也、夕弓術御相手ニ罷出ル、今日大橋代^天之進殿并松宮滝次郎殿息藤太郎殿御立入初而被罷出候ニ付出而及挨拶、代之進殿者御騎馬筒也、夜前戌刻方亥刻過へ掛兩度地震有之候由也、予者臥而不知

○二日、癸亥、曇、蒸熱甚、当夏以来始而之酷蒸也、朝御乘馬并炮術へ出、夕為窺御機嫌罷出、夕弓術江出、今午後過雨一霎、且那樣今日鯨船ニ而五日市迄御出、夫石内村江御出、河内川ニ而鵜遣御覽被遊候由也、幾三郎夜半前度々吐有之、致難儀候ニ付松本良伯を迎乞診、格別之義ニ而も無之、全不和之義、少々暑氣之冒触も可有之与申也

三日
周防様夜前地御前^{佐伯郡}辺より被為人候由也
六日
思召ニ而改名
正之助事
武田大炊殿
右大炊殿家者祖父何某殿代迄者御口捕ニ而有之処、夫方御次坊ニ成、追々立身御取立ニ相成候家之由也、大

○三日、甲子、晴或曇、蒸氣強甚、朝素説所講釈へ出、夫方出勤、夕九時過退、幾三郎今日者快也、朝之内良伯来診、昨日石内江御出、御獵被為在候由、年魚十五頭御分賜被仰付也、夕弓術御相手ニ罷出
○四日、乙丑、晴、殘炎猛烈、例時出勤、九時前退、岩崎常介入来、御用向内談也、頗及長話、六丁目様方御庭前之梨子十五御分賜被仰付也
○五日、丙寅、晴、殘炎酷烈、朝御乘馬并射術江出、夕為窺御機嫌罷出ル、夕炮術稽古ニ出

○六日、丁卯、晴、殘炎強、例時出勤、九時頃退、夕御弓御相手与して罷出候処御延引ニ付罷帰ル、森岡万之進入来之由也、松本良伯入来、幾三郎愈快旨申候由也
○七日、戊辰、晴、殘暑酷烈、汗流如漿、麻上下着日出頃出仕、御登城前於御居間御祝詞

炊殿父每登殿者御用人二
而、姓も末田与申居候由也、
珍敷家也

七日

〔朝由良政太郎来、軍学稽
古致度由二而内々厚申聞候
義有之也

九日

〔秋露童女七回忌二付西向
寺江備物

銀耆両 経志

精式斗 鉢米

以上

十二日

処暑節

申上、周防様江御祝詞於御次三宅吉左衛門迄申上、御奥江出、五時過退出、出衛様二者
御贖中故御祝詞不申上、〔朝辻清人祝詞入来、酒飯出、午時方渡辺雅登、岩崎常介入来、
團茶、夕取合祝酒を出、暮前各退去也、夕幾三郎今門川江歌流しニ参ル也

○八日、己巳、晴、残暑酷烈、〔朝井上市太郎・脇本武兵衛へ暑氣問安ニ預候謝旁ニ行、吉
田藤馬江右同断、夫方山下太八郎殿へ行、謁、近来御弓御相手ニ罷出、不絶親切ニ示教
ニ預候厚謝を述ル、松本玄順も先達而慈君御病中以来安産後迄度々預見舞候謝ニ行、午
時前帰ル、午時為窺御機嫌罷出ル

○九日、庚午、晴、残炎酷烈、〔早朝御内密稽古江出、相濟出勤、九時過退、岡本主馬殿
来儀有之、留守ニ而御館江被出、謁ス、明後日秋露七回忌ニ付西向寺江備物為持遣、法
事之義相頼

○十日、辛未、晴、残炎強、〔例時出勤、九半時頃退、今朝鼓嚙吹打稽古前御見聞被遊、為
席話出ル

○十一日、壬申、晴、残炎酷烈、夜些涼、〔巳鼓後為窺御機嫌罷出、夕松本三珠・渡辺四
郎右衛門入来、〔夜木野一馬入来、酒を出、暫話ス、同方於しけ丹羽庄藏妻ニ縁組之義去
ル六日願濟、表向引越之達も致候由也、〔秋露童女七回忌相当ニ付、今日西向寺江平次郎
代参申付、法事中為相詰、妙慶院へも義純四七日ニ付為参也、〔夕方茶飯を製し、田中榮
作夫婦并久保万治妻たけ江遣ス、右之者共者秋露格別世話ニ成候者故也、其外者一円樽ニ
も不及也

○十二日、癸酉、晴、朝涼風多、午後炎熱如燬、〔朝例時出勤、九時過退、夕弓術御相手ニ罷出、

〔夜〕一緒内其外之寺々江平次郎為參、燈を点也

○十三日、甲戌、晴、炎蒸最酷烈、汗如漿水、夕々曇、〔今日〕夕例年之如御役所休廢也、夕為窺御機嫌罷出、〔夜〕西向寺・妙慶院へ參、燈を点、寺僧へ壹封宛如例贈る也、其外西蓮寺・本照寺・興徳寺・興禪寺等江も參ル也、〔今朝〕夜前殘之寺々江点燈ニ平次郎を遣入也、

〔夜〕蒸熱実ニ不堪

○十四日、乙亥、曉来微雨、已鼓前々風ニ成稍甚、未後快雨、風罷、新涼之意あり、〔夕〕為窺御機嫌罷出

○十五日、丙子、晴、蒸意強、〔朝〕御弓御相手与して罷出ル、〔夕〕為窺御機嫌罷出ル、〔夜〕慈君・家小・幾三郎西向寺・妙慶院・興徳寺江參ル、留守中実五郎を頼置也、〔夜〕前者燈籠点しに平次郎參らす也

○十六日、丁丑、晴、蒸氣強、〔朝〕例時出勤、九時頃退、〔家〕来永野平次郎義去ル弘化四年未年盆後々召抱、当年ニ而九ヶ年相勤候得共、菟角平日心得振熟与無之、猶此度甚心得違之儀有之候ニ付、不得止今日暇遣ス也、田中榮作を以申付ル、〔右〕之通ニ而家来差問候故、妙慶院へ參詣不能也、〔夕〕堀尾眠石入来、平次郎暇之義堪忍者出来申問敷哉之旨咄有之候得共、不得已趣意を申、及断也、有合之酒を出、困某

○十七日、戊寅、曇、已鼓頃暴雨、少々雷も鳴、〔夜〕来蒸氣強、暴雨後蒸氣止、〔朝〕御乘馬江罷出、弓術江も出ル、〔夕〕為窺御機嫌罷出ル、〔朝〕辻清人入来、素麵を饗し候由也、〔平〕次郎代水主佐兵衛（森島）二男兵藏を家来二抱、今晚来ル、田中実五郎口入也

○十八日、己巳、快晴、朝涼、午熱、夜大涼、〔義〕純童子尽七日ニ付朝兵藏を妙慶院江為參

也、法事者早朝相濟候由也、例時出勤、九時過退、御用談ニ而渡辺雅登・佐藤益之丞・大島五兵衛来ル、極夕迄御用向を談スル也

○十九日、庚辰、晴、朝大涼、午後雲出、熱、尤炎威者大ニ減ス、朝由良政太郎来、先達而七夕之朝来越後流軍学懇祈之趣段々厚頼候義も有之候得共、素子者いまた其道之初発を少々学得候迄ニ而、決而人ニ伝候抔申義者難出来事ニ候得共、何分厚志之至、致感心候ニ付承覚候義閑暇之節咄し程者致し聞せ可申段約束致し、要鑑抄一冊用立置也、例時出勤、九半時前退、藤井源之進昨日来、波多野周蔵当时善問也病氣冤角不勝由同方之伝言申聞候由、依而見舞使遣ス、先居合同篇之由也、夕弓術江出

廿日

二百十日

○廿日、辛巳、雨、涼、二百十日也、朝炮術稽古ニ出、橋本屋周五郎来、尤吉助を同道ニ而来、去ル嘉永元年不所存ニ而当所出奔いたし候後始而来、当春之歎地御前江帰住致居候由、周五郎達而断候ニ付逢遣ス也、酒飯を饗、夕方帰ル、夕為窺御機嫌罷出、夫々六丁目御館江出ル、御用向相濟候後御茶之御下・御鮮・御吸物・御酒御次ニ而頂戴被仰付也、出掛妙慶院へ参、帰り森岡へ寄、入夜帰宅、雨甚

○廿一日、壬午、雨、涼、朝弓術稽古ニ出、例時出勤、夕八時前退、昨日喜久藏来、眼之留灸致しくれる、是ニ而最早全快ニ可至由申候へ共、今以屏物者騷自若也

○廿二日、癸未、雨罷、晴、涼、午後残炎、朝素読所講积江出、夫々出勤、九半時頃退、退徳川家徳出後西向寺江参詣、今日於正清院慎徳院様一朝之御法事有之、遠江様御寺詰被成候由也、御三回忌也、江戸表当月五日大地震有之候由風説也、高謙院様御供ニ而当春京師江罷越候由、宗右衛門藤野源兵衛・谷川兵助抔一昨日罷帰候由、渡辺者今以逗留、高

謙院様ニも当月朔日方錦小路様へ御引移、いまた御下り之御様子者頓与不相知由也、禁裏御造営誠ニ御大造之事ニ而、日々大工五万人ツ、出候与申沙汰之趣、平左衛門咄也、福田直左衛門殿一昨日死去之由也

○廿三日、甲申、晴、涼、午残炎強、有蒸氣、朝御乘馬江出、又御弓御相手ニ出ル、今日御機嫌者御直ニ奉窺候得共、御奥江出候義風与及失念也、松村弥助殿江武辺咄聞書致立用也

○廿四日、乙酉、晴、朝涼、例時出勤、夕八時過退、出衛様方竹館遺事与申書拜借、沢故三石老先年著述之由、恭照院様重晟公御生涯之御德行を私記して子孫江被遺候秘書也、実以奉感歎候様之事而已也、三石老者名者喬、字伯遷、能書之名有之、誠ニ篤実之人ニ而之し由、一昨春物故也、夕地震、稍有力、尤予者不覚、地藏尊之御供物如何拜領仕ル也

○廿五日、^{丙戌}乙酉、晴、朝涼、午熱、例時出勤、夕八時前退、朝万之進來、酒飯を出候由、公儀御目付浅野^{一氏姪}大学殿此度長崎表江就御用向御越、今日当町御止宿、国泰寺江御參詣有之、夫方遠江様水主町御別業江御出、出羽様・遠江様御対面被成候由、右一学殿者三千石御旗本ニ而、原浅野左衛門佐忠知^(知近)ニ男之御家也、遠江様御家御元祖忠吉公之御養子、忠長公者左衛門佐忠知之御婿ニ而有之し由、右様之御訳合故先年出羽様江戸御出府之節も一学殿御屋敷江も御招待有之し由也、夜長喜三太来話、夜酉刻後有地鳴、微震も有之也、惣而此節者日夜微震之気味有之也

○廿六日、^{丁亥}丙戌、晴、朝涼、後蒸、朝辻清人入来、炮術稽古ニ出、秀山忌日ニ付妙慶院

〔廿七日〕

白露節

へ兵藏を為參也

○廿七日、戊子丁巳、晴、蒸熱強、夕曇、例時出勤、九半時頃退、西向寺江兵藏為參也、御

直參并御家中奉公人御国於江戸致出奔候者差置申間敷、立婦、隠住居之者有之趣相知候ハ、早速召捕、屹度御咎可被仰付、差置候義相頭候ハ、御直參者頭支配方、又ものハ其主人まで御沙汰可有之との旨御移檄出ル、并從公儀之被仰出ニ通有之、皆御尋人之人相書也、夕弓場へ出

○廿八日、己丑戊午、雨、涼、朝例時出勤、夕七時頃退、夜有地鳴、日之内地も輕震スル也

○廿九日、庚寅己未、雨罷、大ニ涼、朝弓術へ出、為伺御機嫌罷出、夕弓術御相手ニ出、辻清人入来、同方下女当季方暇出、代者僕を置度由ニ而先達而以來頼有之、小回り植藏弟を森岡万之進世話ニ而取次進スル、今日目見ニ来、安心之段挨拶有之也、慈君夜辻へ御出、御宿被成

八月 大

〔朔日、幾三郎終日御奥へ罷出、入夜帰ル也〕

○朔日、辛卯、晴、涼、朝六半時頃麻上下着、為御祝詞罷出、御登城前於御居間御祝詞申上、於御次周防様江之御祝詞御用達中迄申上、出衛様江御祝詞御部屋ニ而御逢被成、夫方御奥へ出ル、今日鈺之進殿御七夜御宮參之御延引、御内祝被為在候由、恐悅をも老女迄申述、

午方渡辺江囲碁ニ行、堀尾眠石老人・岩崎常介会ス、夕茶并ニ酒も出ル、入夜帰ル、森岡万之進・辻清人祝詞入来之由、(森岡)兵藏下宿を願、朝方遣ス、夜帰ル

○二日、壬辰、晴、涼、朝御用向ニ而六丁目御館江罷出、森岡へ寄、木野・水谷江見舞帰ル、

木野ニ而酒飯出、水谷ニ而も酒出ル

○三日、癸巳、晴、涼甚、朝辻清人入来、此間之同方家来昨日方參候由、素読所講釈江出、

直ニ出勤、夕八時、^マ夕御弓御相手ニ罷出、山下先生被出、^{多八郎}吉田藤馬時候見舞旁ニ入来、

尤御用向を兼入来之處、御相手罷出中ニ付御館ニ而応対いたす也、岩崎およし入来、

^{藤井方}藤川源之進猶又後室方取戻し度由、同居致度由内談有之旨ニ而内話有之也

○五日、甲午、雨、涼甚、朝炮術稽古ニ出ル、例時出勤、夕八時過退、義純童子位牌相

調候ニ付妙慶院江為持遣ス也、波多野善閑見舞ニ遣ス、居合宜敷由也

○五日、乙未、雨、涼意甚、佐藤江盆前到来物之謝ニ行、岩崎常介を訪、源之進藤井江還

住之義ニ付愚存及咄合、夕方源之進を呼、猶厚及示諭也

○六日、丙申、晴、暑し、朝地鳴甚し、震も有之、例時出勤、夕八時頃退、弓術稽古ニ

出、夕藤川・堀尾へ盆前到来物之謝ニ行、辻江寄帰ル、同方ニ而酒出ル

○七日、丁酉、晴又曇、蒸、朝射場へ出、素読所会読出席、直ニ出勤、夕八時頃退、夕御乘馬へ出ル、西向寺江兵藏為參、夜丹羽庄藏妻おしけ来、吸物・酒を出ス、土産肴

持參也、去ル三日猶又思召を以嚴敷御省略筋被仰出、心得ニ相成候廉々左ニ記之

一 御庭用御草履跡先革を付御用ひ、鼻緒切候得者立直し、古ひ候迄御用之事

一 日々朝御膳焼味噲、御香物或者梅干限、昼御膳・御夜食共一菜御膳付限り、尤品ニ

も寄見合可有之、度ことに魚類計相用候ニ不及、夕御茶者茶碗御飯・握飯之内、是

以菓物等之類ニ而も御有合之節者不及仕構候事

但御精進日之外者朝鯉一片添

一 御登城初海藏寺御参詣都而御箱入御用意御弁当相止、尤時二取可被仰付、御登城者九半時二も相成候ハ、御定飯之内を以仕出し焼味噌・御香物計、時二取御したし物・御香物二も見合之事

一 五節句朝一菜、昼一汁一菜、御銚子御取肴限之事

但御昼計御懸盤之事

一 御氏祭之御祝一汁一菜、御銚子御取肴限り、尤新古米両構二不及、且又御赤飯も相止候事

一 初午・祇園会・嚴島御祭礼等之節二も御平常之通二候事

一 御他出之節、昼御膳・御夜食・御夕茶等も御内輪二而之通り、尤御器物者御弁当箱二仕、御定飯を以炊出し候事

一 菱之餅・粽・中元之蓮飯等も真之形而已二致候事

一 御常用之御椀器御塗替之節方御紋付二不及候事

一 御障子紙、御表者御居間・一二之御間・御書院右同御替用之分計、御奥者御居間・

一 之間・御書院地障子、其外者都而諸口

但向二寄張紙二も不苦候事

右之外猶数条有之候へ共事多二付略之

○八日、戊戌、晴、暑し、朝炮術稽古二出、夜慈君辻方御戻り被成、家小夜酉刻方少々腹痛、夫方吐瀉二相成、殊外致難儀候二付、夜半頃松本良伯を迎、診を乞、全不回り方之事与申、薬を恵、其内熱発二相成、丑刻後方追々居合、快方二相成也、

九日早晨

すわへ

蓮根

油あげ

御皿

莖蕪

香茸

けむ

みそ

御汁

小椎茸

豆腐才

葛煮

岩たけ

御坪

銀杏

おろし生賀

御飯

御香物

しみたけ

人參

牛房

御平

油揚

里いも

白芋茎

御菓子

焼まん頭

かき

粟

○九日、己亥、晴、残暑強、蒸氣甚、利巴廟御祥月、宿戒、早起、礼服、獻膳如恒規相濟也、妙円廟も如例配祀仕ル也、朝御内密稽古二付御馬場へ出、幾三郎義昨夕迄誠二氣輕二遊嬉いたし、夜二入候而も西鼓過迄も遊び、臥候処、今曉卯鼓前々少々微熱を発し、其後夜明候頃迄二兩三度大便通し、追々腹瀉二相成、痢疾二も可相成様子也、朝之内松本良伯家小を来診、幾三郎も診を乞候処大分熱氣有之、尤格別之事二も有之間敷敷、多分痢疾二可有之敷与申、菓を患候由、已刻過御馬場へ帰、直二出勤可致存居候処渡部卓爾来、明後日回村出立二付御用談も有之出勤延引致居候之処、幾三郎急二塞之氣味有之、早速熊胆を用、漸々開候得共、何分聡々不致候二付良伯迎二遣、早速来診、何分余程熱有之由申、脚湯を致しくれ、発汗二相成、少々快方二被存候二付予者出勤、八時頃退、右之仕合故、利巴廟夕御茶・点心を献候義延引仕ル、幾三郎全痢疾之趣良伯も申聞候処、予帰宅後度々通し有之候処、夕七時頃何となく顔色悪敷、冷汗を發、始終うとく^〱与して正氣無之様被考、熱も却而醒候様二而全内攻之様子二相成、暮過猶又良伯来診之処、其内又々塞閉二相成、脈状甚難心得候二付良伯江申談、後藤松軒を迎診を乞、何も良伯同考、何分二も危難之症与申、尤痢毒而已之事二も無之、疣虫之業も可有之与申聞、同人考二而猶又疣之療治をいたし呉、金子元達をも呼来、見合、浣腸杯もいたしくれ候得共、一円脈上不開、少も薬効を不見、戌刻頃々発播之姿二相成、終二亥鼓過強^辛く迫込、脈絶二至る、扱々案外至極之劇症、嗚呼天哉命哉、唯惘然たる耳、嘉永四年亥亥七月之出生二而、当年実二五歳、是迄至極丈武二而、追々生長を相樂居候処、是非もなき事也、不堪悲歎、右二付夕方々夜中江掛御多門内、別而近隣之輩男女共多人数見舞被相詰、就中

皇
履
取
神

細
納
燈
田
中
実
五
郎
以上

葬式之節寺江使

佐藤氏
渡辺氏
藤川氏
辻氏
松本氏

○十三日、癸卯、晴、秋暑強、朝素読所へ講釈二付出席、相濟出勤、夕八時前退、慈君今暁以来御熱強く、御腹瀉之気味も有之、朝松本良伯来診を乞、何分余程御熱氣有之由申、薬を投、御腹瀉之方者午後者止、夕又良伯来診、中津屋万之助悔二来宿、一昨日橋本屋周五郎慈君御迎二来候処、右之様子申返し候故早速来候也、慈君夜御ふるひ之気味有之、森岡万之進・岩崎およし来居、彼是世話二相成也、又々良伯申遣、来診、何分格別之事二者有之間敷旨申也

○十四日、甲辰、晴、秋暑強、朝夕者稍涼、松本良伯来診、慈君夜来者御快方也、妙慶院江明後十六日当座之法事執行之義頼遣、承知之返答有之也、此間世話二成候方格江十六日夕真之酒計二而寸志之挨拶致度存候二付、夫々江案内之義長喜三大江頼置也、月色佳

○十五日、乙巳、曇、蒸、今朝迄日々妙慶院実山墓江兵藏代参申付候也、例時出勤、夕八時退、実山初七日逮夜二付夕七時頃妙慶院弟子仙丈来、於内仏読経・念仏相濟、軽キ茶漬・酒を出ス、木野一馬相伴、松本良伯も呼来候へ共、早く来候故勝手二而茶漬を出ス、其外者一緒内を初皆明日二いたす也、台所者永野武八郎・小回り新五番中の方時々見合呉る、栄作妻を朝方頼む也、夜戌鼓頭方雷鳴甚敷、夜半後二至罷、雨も亦甚、実山内仏江極御内々二而御菓子拝領被仰付、不堪感戴、及落涙也

○十六日、丙午、朝晴又曇、巳鼓後暴雨、夜又雨、涼し、実山法事二付朝妙慶院江参、法事中相詰ル、木野一馬・小倉甚右衛門・岩崎良之進・桑原盛藏被相詰、右前後参詣之人々左之通、帳場江者田中実五郎参りくれる也

十五日夕

酢わへ

白瓜

油あげ

こんじやく

椎茸

青味

すめ

昆布

汁

椎茸

茗荷子

飯

香之物

平

紅切
からし

酒肴

葛煮

八寸

冬瓜
石焼豆ふ
椎たけ

酢漬

井

白芋茎
小倉麩
茗荷子

以上

水谷又左衛門殿

藤川每登殿

堀尾精一郎

佐藤益之丞

星野正大夫

丹羽庄司

石井寿兵衛

矢野源内

松本玄順

大島五兵衛

岩崎常介

小倉甚右衛門

渡辺四郎右衛門

湯川新太郎

山田多喜登

辻 清人

森岡万之進

三宅内外

長 喜三太

平野藤吉郎

桑原盛藏

岩崎良之進

渡辺雅登使者

外水主佐兵衛も帳場江詰呉る也

今夕八時頃招候人々左之通

石井後室

長 老室

渡辺四郎右衛門家内 三宅内外家内

岩崎およし

辻 お梅

森岡おたづ

同七時頃左之通

渡辺雅登

藤川每登

辻 清人

佐藤益之丞

石井寿兵衛

矢野源内

森岡万之進

岩崎常介

大島五兵衛

渡辺四郎右衛門

星野武平次

小倉甚右衛門

湯川新太郎

山田多喜登

三宅内外

長 喜三太

長 弥三郎

平野藤吉郎

野口唯藏

岩崎良之進

桑原吉郎二

下方出入之者左之通

田中栄作

同人妻

田中実五郎

同人妻

十六日夕

吸物 すめ こん布 しる葎 めう荷子

小付飯

小皿 茄子 したし物

酒肴

昨夕之通

同下方之分も同断、尤酒肴

者八寸壺種也

寺江塔婆左之通被建也

水谷氏

木野氏

辻氏

森岡氏

桑原氏

内仏備物

渡辺氏

木野氏

水谷氏

林 茂平太

松本清次

永野武八郎

小畑幸次

御船手 佐兵衛

小回り 理作

同 庄八

同 徳七

下番 弥三

茂兵衛伴 勝蔵

小回り 弥十

小人 国蔵

右之内森岡弟婦・辻妹・岩崎およし・山田多喜登不來、藤川者甚吉名代ニ來ル也、台所者武八郎・新五・実五郎・栄作妻等見合くれる、勝手長喜三太・石井後室專見合被呉、座敷者岩崎常介見合くれる、今朝妙慶院ニ和尚江慈君御院号之義頼置也、來ル廿一日頃取ニ差越候様被申也

○十七日、丁未、曇、冷氣、御多門内不幸以來何角之返礼ニ行、辻お梅午後方來、夜帰ル、

藤川毎登殿其外挨拶・悔等人來有之、夕見せ馬有之、御馬場へ出、夜喜三太來話

○十八日、戊申、雨、冷氣、朝素読所會説へ出、直ニ出勤、夕八時退、今朝一甫流稽古

前御覽有之、予者素読所へ出候ニ付不出、夕六丁目御館江為伺御機嫌罷出、往來木野・

水谷其外江梅・見舞等之返礼ニ行、木野ニ而酒出、暮過帰、慈君御快起也、良伯來診、

辻清人其外入來有之

○十九日、己酉、曇、風吹、朝例時出勤、八時退、夕白鳥辺返礼ニ行、辻ニ而酒出、暮過帰ル、

松本良伯來診、慈君益御快由申也、夜長喜三太來ル、先達而実山送式之節駕籠之水引

紛失之由ニ而、此間仙丈方内々申聞候義有之、無屹其節駕籠ニ參候者之内尋合之義相頼

置候処、果而駕籠二雇候者之内ニ誤而帶江挾取帰候者有之、早速妙慶院へ戻し合為致候而

相濟候由内々申也

○廿日、庚戌、曇、終日風吹甚、時々雨も振、朝岡本主馬殿來儀、調ス、御挨拶事也、渡

佐藤氏

藤川氏

辻氏

石井氏

森岡氏

岩崎氏

小倉氏

平野氏

桑原氏

渡辺氏

三宅氏

御用人沢徳三郎殿嫡子喜

代槌殿此度近江守様御養

子二御所望有之、仕回次第

早々出府被致候筈之由、当

年十四歳二被成候之由也、

沢三郎殿者（徳脱力）右京様御子二

而、近江守様御弟也、二男

某殿者若狭殿養子二被參、

三男某殿当年四歳嫡子二被

成候由也、浅野若狭殿も徳

辺雅登入来

○廿一日、辛亥、晴、冷氣、夕蒸、曇、朝弓術江出、例時出勤、夕八時過退、慈君御院

号之義此間妙慶院へ頼置候二付今日取二遣候処、左之通認来ル

逆修果号 瑞祥院光誉明心大師

夕弓術御相手二出ル、夕長束茂兵衛来、々ル廿四日亡妻七回忌二付、同日夕近所へ務

之序も有之候ハ、立寄咄くれ候様申置候之由也、夜佐藤益之丞算盤稽古致度由二而頼二

来ル

○廿二日、壬子、曇又晴、冷氣、朝西向寺江參、素読所講釈江出席、夫方出勤、夕八時退、夕

貫心流劍術稽古前御覽二付罷出、暮頃相濟、慈君午前方妙慶院へ御參、夫方波多野權祐

森岡江御寄被成、尤森岡二者皆々留守之由、昨日妙慶院方調来候慈君御果号、瑞祥之音

瑞章院様江指支候様二候故、寿祥与御改被成可然与申上、今日妙慶院二而其義御咄被成候

処、至極宜可有御坐与申聞候由也、先達方矢賀村才藏峠江土申江大峰巢を造、中々大造

之巢二而容易二取除難出来、往来之人を蝨、夫か為此節同所往来留二相成居候由也、去

ル十五日夜之雷雨五日市光禪寺江落、乞食人老人震死、本堂柱不殘裂候由、猥野村江も落、

百姓家一軒焼失、人三人死し、海田市辺者誠之大雨二而山潰、大水出、市中坐上へ壹尺

許も水漲、往来損所多、三日之間往来も留り候由也

○廿三日、癸丑、晴、冷氣、昨今日色黄也、朝御乘馬江出、并弓術江も出ル、夕妙風寺

長束茂兵衛方七回忌二付墓参いたす、記月魚二頭御内々拝領被仰付、夜前岩崎常介川上

江被遣候由也、実山二七日妙慶院へ兵藏為參也

三郎殿兄也

右京様御子

近江守様

○於富殿

上田主水

浅野若狭殿

様之御奥

関尚之丞殿

様、先年

沢徳三郎殿

浅野木工殿

廿二日

慈君御逆修御果号

寿祥院光誉明心大姉

右之通御治定也

廿四日

早晨

すわへ

冬瓜

御皿

油揚 菘蕪 椎茸 青味

味噌

御汁

小椎茸 焼豆腐 青味

○廿四日、甲寅、晴、冷氣甚、能称廟御祥月忌、宿戒、晨興、礼服、献膳恒規之通相濟、例

時出勤、夕八時退、尤早朝御内密稽古二付御裏江出、朝西向寺江兵藏代參申付、夕西

向寺江參、夫々後藤松軒・檜垣捨次郎・桑原吉郎二等江返礼二行、夫々長束茂兵衛江兼而

噂之趣二付行、松本三寿会、有饗、入夜帰ル、内仏へ練香を呈、山下太八郎殿悔来儀有

之候由也

○廿五日、乙卯、晴、冷氣強、朝例時出勤、九時過退、退出後仁保島本浦村眼医江至、診を乞、

全内障眼、至而本大切之症、何れ者膿内障二相成可申考之由、治療相頼候へ者外療を以

脊々悪血を取不申候而者実効者無之、何れ四十日計同所へ引越居不申候而者療治難出来由

申也、何分二宮五礼申分余程功者二被考、生所者筑前之産二而、近年浪華二住居罷在候処、

追々故郷江帰度所存二而下向之途中、昨年三月頃々当地へ逗留罷在候由也、藤井何某と

申候由也、帰途松本玄順隠居江先達而之礼二寄、良伯參居、鮎を被饗、石州浜田村松平

左近将監様御領分、当春三月頃々野鼠多生し、耕作を損し、種々手立を以狩取候へ共難

狩尽趣、公儀江御届有之候之由、近頃迄二狩取候鼠数式万余二及候由也、奥州・羽州辺

も赤毛之鼠多生、百姓大ニ騒動いたし候由、甚怪事之由、玄順話、桜井織部殿方写し被

越候与申書付をも被為見、慈君今朝以来御腹瀉之気味有之、御困被成

○廿六日、丙辰、曇、冷氣、松本良伯来、慈君を診し呉ル、何分痼病とも不見、多分御風

邪ニ可有之歟、余程御熱有之由申也、慈君格別之御様子ニも無之候故已鼓後方出、廿日

市二而蓮教寺を訪、眼診を乞、昨日藤井某申分与者少々考替り候へ共、何れにも難症与見

受候趣被申、尤今日者曇天二而睨与様子難見留候二付、来月六日・七日之頃広島へ出受

受候趣被申、尤今日者曇天二而睨与様子難見留候二付、来月六日・七日之頃広島へ出受

御坪 こん蕨
白和会

御飯

御香物

御平

人參 牛房 松茸 油あげ 里いも 蕪芋茎 輪袖

御菓子

焼饅頭 棗 かき

夕

御茶

紅豆飯

右去ル九日御延引之分も御
一緒二献スル也

候便有之ニ付其節来訪、今一応得斗見合候上、弥之症合相定可申聞与被申、何分申方実

意面白被考候ニ付、必相待候趣厚頼帰候也、(佐伯郡) 帰掛直ニ平良村中津屋迄参、夜亥後帰宅、

中津屋ニ而酒鮓を饗、今日宅馬屋等普請之積ニ而手斧始いたし候由也、長喜三太伴し参ル、

留守中慈君八度程御通し有之、時々御腹痛も有之候由ニ而御困り被成、(多) 山下太八郎殿

又々入来之由、留守ニ而不遇

○廿七日、丁巳、曇、夕雨、温 暖、慈君今晝以来御通ひも些繁く、御熱氣菟角表発不致様

ニ御見へ被成候故、松本良伯申遣シ早朝来診、何分ニも格別之御様子与者不被考由申聞、

葉少々加減いたし呉ル、例時出勤、夕八時頃退、夕良伯又来、今朝同様之申方也、終

日十一度程之御通し物也、時々御腹痛ニ而御困被成候也、石井後室度々見舞被成、来 矢野

源内・長喜三太も来ル、夕方又々御葉加減いたし呉、下剂ニいたす、其故歎夜中者少々

御痛も多キ方也、尤度数者十一度許也、今朝西向寺江兵藏代参申付、宮崎松下院殿当

年七回忌今日正当之処、今朝失念罷在候故夜焼香致遥拜也、夜慈君御脚湯被成、少々御

発汗被成候へ共、何分菟角御表発被成兼候方也

○廿八日、戊午、曇又晴又雨、風も有之、通し 温、慈君先御同様、夜前者大分血滑御痛被成也、松

本良伯来診、今少シ者御盛可有之歎之旨申也、慈君時々御腹痛強ク御困り被成候付、予

頭痛之振を以出勤不致、同御役江紙面を以案内申出ル也、去月十九日記ニ有之義ニ付由

良政太郎今朝初而来ル、尤慈君右様之御容子故、軍談之義者相断、真之一通り而已逢候而

及談話置也、束脩之意与して持参物有之候得共辞而不受、夕良伯又々来診慈何も御同様、

尤御度数者夕々大ニ御減し被成也、夕水谷又左衛門殿御出被成、酒を出、夜中迄御話し

廿九日

寒露節

被成、同方娘おたけ事豊田郡田浦村(野尻)百姓嫁二縁談之義世話人有之、先方百姓之事二者候得共何も宜敷相聞、其上当人望二付、任其意御返答被成、去ル廿三日囉受も相濟候由御話被成也

○廿九日、己未、晴、冷氣、寒露節也、慈君夜来者先御宣布方也、朝渡辺雅登入来、御用向也、大御目付中井出衛殿御用向二而御入来、雅登他行留主中二付予出勤、及出会、右二付今日も直二快出いたす也、午後松本良伯慈君来診、其内ニ玄順も来、見合呉る、良伯同考、何分御痲病之方者格別之義者有之間敷、御腹痛者全血塊之所為ニ可有之与申、酒飯を出ス、慈君夕々者御腹痛も止、御度数も減、益御快方、安心仕ル也、夜森岡万之進・辻お梅・岩崎およし見舞入来、三宅吉左衛門室も同断、酒を出ス、辻清人も朝入来、其外近隣彼は預見舞也

○卅日、庚申、晴、冷氣強、慈君益御快方也、尤御項へ出候腫物御疼強く御困り被成、例時出勤、夕八時退、山下先生来儀、内々被相頼候儀有之也、金子元達入来、慈君を診し呉る、最早格別之義も有之間敷、御腫物も為指義二者無之旨申也

九月 大

○朔日、辛酉、晴、冷氣強、当月予月番也、例時出勤、夕八時退、松本良伯来診、慈君益御快方、尤夜前者御項之腫物痛強御困り被成、辻清人其外見舞彼是有之、夕藤井音次郎源之進事来、波多野権祐父善閑義今朝病死之由為知伝言申来候由也、仍而悔・見舞使遣ス、長喜三太来、沼田郡阿戸村二百姓政助与申者眼之灸を能し、既御馬捕藤次先年眼

二日

山下先生方相伝之目薬

一黒胡麻 四合

酒を打蒸

一沙糖 半斤

右搗鉢ニ而搗末シ、一日ニ

三度宛、七日之間ニ服用之

事

病、当所之眼家無寸効候処、右阿戸之名灸へ參、平癒いたし候由申也

○二日、壬戌、晴、暖、今日者佐藤御機嫌伺ニ出候故予者不及罷出、夕香取流槍術見物

ニ出ル、今日者初穂祭之由、源平勝負有之、面白し、慈君夜来者御腫疼痛強く御困被成也、

星野幸次郎入来、山下先生方目之薬被承及候由ニ而伝言申来ル、厚意挨拶之義嘱し置也、

夜万之進來、酒飯を出ス

○三日、癸亥、夜来雨、温、朝長喜三太来、昨日川下へ參候之由、獵之蛤を恵、矢野源

内来、此間頼置候借用銀之義相調旨申聞、素読所講釈へ出席、直ニ出勤、夕八時過退、慈

君御腫物御痛被成、夕良伯来診、今少し者御日間入可申与申候之由也

○四日、甲子、晴、寒、例時出勤、夕八時退、辻清人・小倉甚右衛門・松本良伯入来、

慈君御腫物大分膿出ル、尤弥張御痛者御同様也、夕上野彦三郎来、内談事也

○五日、乙丑、晴、暄、朝冷、大御目付野村良之進殿就御用御入来ニ付朝之内出勤、波

多野権祐方明後七日亡父当座之法事いたし候二付、明夕慈君御出被成候様案内申来、岩

崎常介見舞入来

○六日、丙寅、曇、冷気強、例時出勤、夕八時退、廿日市蓮教寺今日来くれ候約なれ共、

曇天故歎不来、慈君御項之御腫物菟角御痛強御困り被成、又々脇へも口ニ成候様二見ゆ

る也、大髭御山方出候松茸十五本御内々拝領被仰付也、波多野権祐方江使を以慈君得

御出不被成候段断申遣、備物いたす也、来ル十日義純童子百ヶ日ニ付、妙慶院へ法事之

義頼遣し、軽キ寺納物為持遣ス、九日之速夜も寺ニ而誦經取計くれ候様申遣ス也、星野

正大夫見舞入来、長喜三太も兼而之蓮教寺今日參候哉否見舞旁ニ来候由也

六日

来ル十日義純百ヶ日ニ付

備物

回向料 銀式匁

靈供米 精一升

塔婆料 銀五分

以上

九日

〔暁八時前地震有之、稍強

○七日、丁卯、曇、微雨、寒、〔実山四七日二付妙慶院へ兵藏（森越）為參、西向寺江も同斷、波多野寺多門院江も代參二同人今朝遣入也、〔朝素読所会読二付出席、直二出勤、夕八時退、〔松本良伯来診、慈君御腫物只様大ニ相成候様ニ而御困り被成候得共、何分最早格別之事者無之旨申候由也、〔石井寿兵衛見舞入来、〔夜万之進來、酒飯を齧

○八日、戊辰、曇、寒、〔朝辻清人入来、松本良伯来診、慈君今日者少々御食味御出来被成、御腫物も少々御快姿なり、〔廿日市蓮教寺今以何たる義も無之ニ付旅宿を為尋候へ共不相分、水野左金吾殿方江者一昨日參候由也、〔午後地御前吉助慈君御見舞ニ来、酒飯を饗、〔夜長喜三太来話

○九日、己巳、晴或曇、寒、〔朝五時前麻上下着出仕、御登城前御祝詞申上、其外へも例之通御祝詞申上、相濟退出、〔松本良伯来診、慈君先御同様也、〔夕長喜三太母子入来、酒を饗入、〔夜松本玄順来、慈君を診し呉る、最早格別之義も有之間敷旨申也、〔渡辺雅登方長喜三太を以紛れ旁咄ニ參候様申越候へ共、今日者辞而不行、〔今暁地震、稍強

○十日、庚午、晴或曇、暖、〔朝松本良伯来診、夜来も慈君御痛所御同様也、〔例時出勤、夕八時過退、〔夜家小妙慶院へ參ル、石井後室を頼伴也、〔今日義純童子百ヶ日二付、妙慶院へ早朝兵藏代參申付ル、回向者相濟居候由、実山も今日初月忌也、田中実五郎參くれ候由也

○十一日、辛未、曇、寒、有風、〔夕為伺御機嫌罷出、〔今日小島左源太炮術会催候由二付為見物出ル、尤予も少々業もいたす也、〔慈君御腫物脇之口方大分膿出、御疼少し甘ム也
○十二日、壬申、晴又曇、〔例時出勤、夕八時過退、〔廿日市蓮教寺其後左右も無之ニ付、

今日兵藏を様子尋二遣ス、今日も留守二而様子不分候由也

○十三日、癸酉、晴又曇、朝松本良伯来、慈君御腫何分最早格別之事者有之間敷旨申也、素
 読所講釈へ出、夫方出勤、夕八時過退、夕七時頃方廿日市江行、蓮教寺を訪、同寺を宿
 ス、尤右罷越候趣者内々達御聴置もらい候上、雅登江頼置參候也、夜深月佳也、今朝
 辻清人入来

○十四日、甲戌、快晴、暖、朝蓮教寺眼を熟覽し被呉候処、何分未屹与内障と名を命候程
 之事二者無之様被考、全虚火之上昇方生候義与相見候間、多分速二平愈可致、其内実張
 与服薬・指薬等致候様二与申聞、夫々薬を惠、午時頃同寺を出、暮過帰宅、途中五日市
 光
 興禪寺先月十五夜震雷之跡を見る、本堂外回りの柱八九本程霹靂痕有之、誠二可怖之至也、
 内陣江掛惣容柱数廿本之余損し有之由、夫方中須賀・石内(佐伯郡)通り高井越江回り帰ル、慈君
 夜来も御同様之内、少シハ御快方之由也、今日実山五七日二付、朝妙慶院江田中実五郎
 を頼為參也、堀尾眠石翁入来之由、夜森岡万之進・岩崎およし来

十五日

〔二〕葉山御祭礼御社詰、
 主水内記様御詰被成候由、殿様
 御社參被為在候也

内記様二者あらず、主水
 様也

○十五日、乙亥、曇、寒、例時出勤、夕八時過退、慈君御快方也、水谷へ其後無沙汰二
 付見舞旁兵藏遣ス、おたけ来ル廿日二引越候筈之由也

○十六日、丙子、曇後晴、暖、例時出勤、夕八時退、松本良伯来診、慈君大分御快方也、

岩崎常介入来、御奥通御遺残之由二而松茸拝領被仰付也、西向寺方先達而内談之宇山村(奴可郡)

禪仏寺一件紙面二而尋二越し、見事成飯魚尾恵来ル、返却スル也、夕妙慶院へ參ル也

○十七日、丁丑、晴、暄、朝弓術へ出、辻清人入来、松浦お喜せ殿明日方辻江見へ候筈二付、
 十九日・廿日之内予二參候様申置候由也、お喜勢殿者清人母方之伯母、南御屋敷若年寄

廿二日早晨

酢和会

香茸

御皿

葛蕪

油あけ

人しん

けむ

大こむ

みそ

御汁

豆ふさい

しる苺

青味

さわく

御坪

松茸

卸生置

御飯

御香物

のつへい

油揚

昆弱

香たけ

里いも

山のいも

焼とうふ

牛房

人参

へち柚

相勤被居也、午後御機嫌伺罷出、夫方六丁目御館江も右同断罷出、波多野権祐へ悔二行、

木野・水谷へ寄帰ル、水谷おたけ愈廿日之夜汐二船二而田浦江内分引越候筈之由也、夜

辻お梅慈君御見舞二来ル、今日東照宮御祭礼、殿様御社参被遊、内記様御拜参被成候由

也

○十八日、戊寅、曇又晴、寒、朝御用向二而永田丹解殿へ参、留守二而不調、例時出勤、

夕八時過退、朝松本良伯来診、慈君御同様也、家小一昨夜以来腹痛二而臥、今日者少々

宜敷方也

○十九日、己卯、晴、寒、今朝六半時揃炮術稽古前御覽二付罷出ル、人数八人也、松茸之

御景物出、予星角中二而松茸拾四本五本頂戴仕也、例時出勤、夕八時退、家小快起也、良

伯来診、慈君追々御快方也、森岡恵教童子童女七回忌、此間内仏へ香料相備、今朝寺江者代

参も不能也

○廿日、庚辰、晴、暄、松本良伯来診、午後為伺御機嫌罷出、夕弓術へ出、極夕辻江行、

松浦お喜勢殿を訪、始而逢、酒出、入夜帰ル

○廿一日、辛巳、曇又晴、冷氣強、例時出勤、夕八時過退、堀尾眠石翁人来、実山六七

日二付朝妙慶院江兵藏を代参申付ル、廿日市蓮教寺江葉取兵藏遣ス、松本良伯来診、

慈君御同様、尤午後者御食御進不被成方也、町方大年寄藤井茂三郎本名三国屋也家者代々

大富有之豪家二候処、去ル天保十三年中島大火之節居室焼失、其以来銀札之下落二付而

身代大二縮、内実当時者大二難渋いたし候由二而、家作も今以出来二不至、漸富士本屋

久兵衛与申者種々世話を致遣し、近頃家作二取掛り候由、夫二就而者此御屋敷江も御助精

御菓子

伊賀饅頭

烏柿

蜜柑

以上

廿五日

茶を贈方格

木野

水谷

藤川

辻

森岡

桑原

平野

渡辺

佐藤

石井

岩崎

小長

渡辺

小倉

三宅

筋内々歎出も致候処、弥以困窮ニ付古々不開穴藏を此間開候処、大ナル坪六ツ石之唐櫃

二居有之、古金収有之候ニ付右坪壹ツヲ開、千両箱三ツ取出候処皆々慶長小判ニ而、壹

両之掛目四匁七分有之、凡當時之金六兩二直候由、松本玄順者現ニ其判を見受、目方も

改見、虚説ニ者無之由、星野正大夫話也、乍併些不審、珍話也

○廿二日、壬午、晴、冷氣強、或曇、誓円廟御祥月祭祀如恒規相濟、受安廟も配祀如例、朝

渡部廉之助此間回村方罷帰候由ニ而入来、東城宮崎・吉田方之届状等持参、例時素読所

講釈出席後出勤、九半時頃退、今日九半時揃弓術稽古前御覽被為在、予も出ル、今日も

御景物被下、予式本中ニ而松茸廿一本拜領仕、於御次藤川毎登殿執達、西向寺参詣不能、

兵藏代参申付、辻清人・森岡万之進入来

○廿三日、癸未、晴、冷氣甚、朝松本良伯入来、慈君御腫物江少々缺を入候処血夥敷出ル、小

倉甚右衛門入来、夕良伯又広藤道庵老門人良庵与申者を同伴し来、慈君御腫物を見せ呉

ル、何も良伯同考、最早格別之義も有之間敷旨申也、今夕八時後有地震、夕為伺御機

嫌罷出ル、桑原吉郎二・岩崎良之進入来、夜松本玄順入来、御祈禱御供物拜領仕

○廿四日、庚辰、晴、朝寒、午後暖、朝御内密稽古へ罷出、相濟出勤、夕八時退、松本

良伯来診、慈君稍御快方也、西向寺江参詣不能、兵藏代参申付、岩崎常介見舞入来、室

角左源次・冲守次郎悔入来、尤守次郎者昨日之事也、夕方渡部廉之助入来、昨日方

之間衾炉を開

○廿五日、辛巳、晴、夕曇、温、例時出勤、夕八時退、実山当座法事之節到来物有之方

角江茶一袋ツ、贈ル、当御時合何れも輕キ備物ニ預候義ニ付此事々敷様ニも有之候へ共、

松本

栄作

弥十

慈君御不快中牡丹餅杯製候も六ヶ敷候二付、便利を以真之輕キ袋茶ニいたす也、実山墓所地直し田中実五郎を頼、一昨日兵藏兩人妙慶院へ遣ス也、立派ニ能直しくれ候由也、夜半地震、稍強く長し、今朝御奥天満宮へ拜参

○廿六日、壬戌、雨、温、六丁目様ニ当年菊御作らせ被遊候処、殊外善出来、御奥御庭へ

御植被遊候二付、屹与被為召候ニ者無之候得共、今夕渡辺雅登申値、拜見ニ罷出候之様御内々御沙汰も被為在候旨昨日鱷兵馬方申聞候二付、夕八時過方罷出ル、菊拜見、殊外見事ニ出来居候也、当年者久敷御前ニ而御酒不被遣候二付、折柄御酒被遣候与の御振ニ而、於御側ニ^(行力)おゐて御吸物、御酒頂戴被仰付、当年者市松様御初職之節も不被為召候二付、其御合共ニも被為在候哉与奉恐察候、御懇之御義共也、暮過帰、夕方御機嫌伺御館へ罷出、妙慶院へ明後日実山四十九日之案内并明夕弟子老人差越し呉候様申遣、承知也

廿七日

内仏餅

靈供一汁三菜

餅 団粉 柿

饅頭 卷煎餅

花

菊花数種

仙成へ布施

五分

○廿七日、丁亥、晴、暖、朝御用向ニ付吟味役若月準二殿へ参、応対仕ル、帰り西向寺江参、金子元達妹之喪を訪也、例時出勤、夕八半時頃退、夕妙慶院弟子仙成来、於内仏誦經相濟、龜抹之茶漬・酒を出ス、今日者一緒内其外へも一円案内者不致也、田中栄作并先達而格別ニ骨折くれ候者当番ニ候へ者茶漬を振回候積之処、永野武八郎一人番ニ而来ル、栄作者夕方来也、今日之献立一汁式菜、酒肴二種限り也、曉地鳴

○廿八日、戊子、晴、暖、実山満七日ニ付朝妙慶院へ参、法事中詰ル、尤今日者勝手ニ初くれ候様兼而昨日申置候故肩衣ヲ為持参、継肩衣ニ而詰ル也、法事前後左之通参り被呉也

岩崎常介

小倉甚右衛門

長喜三太

平野藤吉郎

桑原吉郎二

田中実五郎

廿九日

立冬節

〔上田内記様時候御見舞御出ニ付昼後出勤、御出迎・御送りニ罷出、御機嫌も伺也、〔慈君今日御月代を被成也

○廿九日、己丑、快晴、暖、朝為伺御機嫌罷出、夕弓術へ出、極夕周防様御出被遊候付為伺御機嫌御次迄罷出ル、早朝より辻妹来、夕方清人来、夜一緒ニ帰ル、夜中森岡万之進も来ル、皆々祭酒・飯を饗ス、兵藏朝方下宿、夜中御奥へ咄物真似師出、御慰事有之ニ付見聞ニ罷出候様御内々被仰出候旨老女方申越し出ル、相濟候後御側江罷出、周防様御酒之御取持被仰付、御吸物・御酒頂戴仕ル、深更退

○卅日、庚寅、雨、温、今曉七時地震、長し、例時出勤、夕八時過退、予当五六月頃沙汰事失念之義有之、此節心付候ニ付恐入申出、相慎罷在、早速不及其義旨被仰出候段雅登方紙面を以申来、御請申出ル、今日兵藏を菓取ニ廿日市江遣ス也

十月 小

朔日

〔御遠乗御相手之面々

御供 村上彦右衛門

渡辺雅登

御供 佐藤益之丞

御供 大崎和三郎

佐藤喜代槌

同 猶人

○朔日、辛卯、晴、暖、例時出勤、九時退、今日九時御供揃ニ而祇園迄御遠馬被遊候ニ付御供ニ罷越、御宿者感神院なり、被為入掛横川ニ而菊細御見物被遊、御供ニ而見物仕ル、江戸霞ヶ関之景也、中々面白く出来居る也、御馬四牽、予并佐藤益之丞拜借仕、外ニ渡辺雅登、其外手馬并御家中馬借受ニ而御供仕、都合御相手七人、馬数九牽也、感神院ニ而御菓子并ニ雑煮ヲ被差出、予等も御相伴ニ御下夕を被出也、日之入頃被為入、御相手之面々者横川方御先へ帰ル也、御次江罷出、御用達中迄御機嫌を伺、御馬拜借之御受も申也、〔今朝松本良伯・辻清人入来

森光太郎

得井勘次郎

御目付御供

伊藤徳之助

御馬方同

得井満四郎

吉田藤馬方坪内久米之介弟助

拾義囉受、二男ニ仕置度段願之通被仰出候由知せ来ル也

○二日、壬辰、晴又曇、六丁目御館ニ而市松殿昨日以来御不例之御様子ニ付夕方為伺罷出、

帰リ水谷江先月廿日おたけ引越之欲ニ行、酒出、入夜帰ル、伯父君此間眩暈ニ而大二御難儀被成候由、尤御一時之事ニ而、最早与御快由也、小倉甚右衛門母之病氣を訪、昨

日吉田藤馬悔与して入来之由、先月十二日昼夜日月赤色ニ有之候処、石州津和野御城下又々大火ニ有之候由風説有之也

○三日、癸巳、晴、寒、朝素読所講釈へ出席、直ニ出勤、夕七時退、今夕田中榮作御城

御裏門辺通り掛候処、殿様学問所江被成御座、被為入掛御門前ニ而参合、病足故速ニ立退候事も難叶体ニ付、御歩行組竹林何某見兼候而、矢庭ニ御門脇之供腰掛江抱入遣候由、其中ニ御通り過被為在、御供頭中方名前尋有之候由也、尤六月廿九日被仰出之趣も有之、御払切ニ者無之候由也

○四日、甲午、晴、寒、朝御乘馬江出ル、例時出勤、夕七時退、松本良伯来、慈君余程

御快方之由申也、昨日田中榮作一件、御供頭矢島大衛殿方申来候由也

○五日、乙未、晴、寒、午鼓頃方御用向有之、出勤、夕七時前退、昨日榮作一件ニ付

御差扣可被遊哉之旨被為仰込候段御家頼中江御達し有之也、藤川乙次郎朝方来り、直ニ宿ス、兼而暫逗留之約束ニ而来ル也、甚吉も伴来、午後帰ル、三原吉光家先年断絶、墳墓同所香積寺ニ有之候ニ付、何卒祠堂金少々ニ而も御納置被成度慈君兼々之御念願ニ候処、是迄折を不得延々ニ相成居候得共、幸此度久野秀太郎出羽様御供ニ而三原へ罷越候由承候ニ付同人へ附托、書状を以左之通駆合遣、金式分相送候也、則今日藤川甚吉へ托し秀太郎へ頼遣ス、出羽様明日御出立、三原御越被成候由、当年者遠江様御差問ニ而御

九日、江戸御沙汰書之内

一 加判之列上座
御勝手懸

堀田備中守様
(正廳)

出不被成候故、出羽様御名代心ニ御越被成候との御様子也

未得貴意候得共態与啓上仕候、先以寒冷之砌弥御安剛可被成御法務珍重奉存候、然者其御地御藩中先年断絶之吉光氏先祖代々諸亡靈江為祠堂金式百疋老母寿祥院方相備申度旨申聞、則送呈仕候間御寺納被下、永代御回向之儀宜御取計被下候様仕度、厚奉頼候、此段御頼為可得貴意如此御坐候、恐惶謹言

十月五日

村上彦右衛門
判

十日、御用召

一 御見小姓

由良嘉久馬

御馬回り方

香積寺様玉床下

右之通ニ而、金者別ニ幅紗包ニして遣ス也、小倉甚右衛門見舞人来

○六日、丙申、晴、暖、例時出勤、夕八時過退

○七日、丁酉、曇、寒し、例時出勤、夕七時退、西向寺江兵藏(森田)為參、松本良伯来

○八日、戊戌、曇後雨、温暖甚、乙次郎今朝藤川へ帰ル

○九日、己亥、雨、朝暴雷一声、電光殊烈、例時出勤、夕七時前退、去ル五日記之通田

中榮作殿様御見掛りニ罷在候一件ニ付御差扣可被遊哉之旨被仰込候処、御差扣二者不及旨思召之趣今夕御年寄衆方被申上、大御目付野村良之進殿被申參候由、奉恐悦、今日ニ而五日振ニ而相済候也、南北庭之蜜柑当年始而多子を生、両樹ニ而八拾余も生候ニ付、今日御奥并六丁目御屋敷江廿一顆ツ、御内々差上ル也、六丁目様方者甘干柿御移ニ頂也、

一 鼓貝方加役

山本円之助

石川東太郎

今朝之暴雷(佐伯郡)已斐村へ震、怪我人も有之由風聞也

○十日、庚子、晴、暖、小春之景也、実山命日ニ付妙慶院へ兵藏代參申付、例時出勤、

一 御用部屋詰

長束清次郎

一 御歩行組被召出
式人扶持
鼻紙代並之通
日參

岩崎良之進

御履、御用部屋詰也

右自今御祐筆之勤向見習
相勤候之様被仰付

○ 一 叱
一部屋追込

田中栄作

右去ル三日殿様学問(所脱カ)方御

立座之節、同所御門前通掛、
押払有之候へ共不立退、御
見掛へ罷在候段、畢竟行歩
六ヶ敷不任心底、不得已方
右之次第二及候趣二者候得
共甚不敬之儀、不埒二付
○ 印之間江

夕七時前退、今日御用召頭書之通有之、岩崎良之進為吹聴来、松本良伯来、慈君益御
快然也、藤川乙次郎来宿、夕岩崎江欲二行、達而被留、酒出ル、桑原吉郎二、藤井音

次郎会、菅多之進(多久馬力)も後二来ル、江戸表方当月三日仕立飛脚到着、江戸表同二日之夜四

時頃俄二地震嚴敷、姫君様・若殿様早速御馬場江御立退被遊、三日暁七時頃御帰殿被遊、

何之御氣動も不被為在、御住居中二而雀御門押倒、其外外回り煉塀不残、御長屋一棟、

土藏一ヶ所、押倒五ヶ処、御屋敷も損所有之候へ共格別之義二も無之、公方様(徳川家定)方非常之儀、

出格之思召を以上使御兩人御入来有之趣申来候由、今日御年寄衆方御連手紙を以被申上
候由也、上使之御名前者忘れたり

○ 十一日、辛丑、曇、微雨、寒、朝御乘馬へ出ル、桑原盛藏長束清次郎を伴吹聴与して来ル、

辻清人入来、夕松本良伯入来

○ 十二日、壬寅、曇、暖、例時出勤、夕七時前退、夜家小帰寧、宿ス、今朝長束茂兵衛

此間清次郎被仰付之吹聴二来ル也

○ 十三日、癸卯、曇、寒、朝素読講釈(所脱カ)へ出席、直二出勤、夕七時前退、岩崎良之進此間

参候謝二来、慈君先御子兩人明十四日並十一月六日卅三回忌二付、経志鉢米西向寺江御

備被成度由二付、則銀式匆・精式升今日為持遣ス也、渡部廉之助先達而改名致候二付、

右名書調くれ候様無余儀相頼候二付承諾致候処、折柄幾三郎右之仕合二付只様延引二相

成、今日相調為持遣ス也、藤川乙次郎今朝返ル也、夕弓術へ出、夜家小木野方還ル、今日

日頭書之通被仰付有之也、今日湯川兵馬殿御立入始而被出候二付出而謁ス、宅江も為扨

拶入来有之也

権六蟄居
御免

河野熊之進

十三日

御歩行目付

御先供頭取兼帯
御免

山中権兵衛

右跡役

辻権太郎

御用部屋書役

一 式人扶持
被下

千賀代槌

右故喜兵衛養子九郎右衛門

義先年御暇被下、跡家内之

者難波之趣相聞、御憐愍ヲ

以右之通被下置

但御目付受引被仰付

十四日

小雪節

○十四日、甲辰、晴、暖、朝松本良伯来ル、堀尾眠石入来、昨日千賀代槌御扶持被下候
挨搦有之也、夕六丁目御館江御機嫌窺罷出、吉田藤馬江先達而入来之謝二行、森岡へも
寄候へ共留守也、森仙太郎夜前備前々帰候由二而来、出衛様今日海田市辺迄御遠馬被成、
御家中御出入之衆山下多八郎殿・島本広右衛門殿・松宮半五郎殿・松宮東太郎殿御供被
仕、其外佐藤益之丞父子・堀尾幾之進・得井勘次郎・森光太郎等も御供を願、渡辺雅登、
御馬方御側辺共都合馬数十一匹、西御門外方直二御召切、本町通り御出被成候由也

○十五日、乙巳、晴、暖、今朝四畳半江衾炬を開、朝岩崎常介此間之謝入来、例時出勤、
夕七時前退、中津屋方之助来、酒飯を出ス、夜長喜三太来話、江戸表地震之様子追々
承候処、何分大変二而、昨年当所霜月五日之震方五層倍も強キ様被考、当御屋敷内二而
も怪我人十二三人も有之候由、右通之儀二而処々倒れ家有之方出火与なり、五口六口程
も同時二燃出、御大名様方御屋敷始町家迄大半焼失、同五日之朝迄も未鎮火二不至由、
尤当御屋敷者火難者御通被成候得共、何分破損所者余程之義二而御届も有之候由也、先
達而於江戸御老中阿部伊勢守様・久世大和守様江薩州侯御呼寄二而、伊勢守二而者魯西亜・
英吉利・亜墨利加等へ長崎并下田豆州・箱館松前三港へ渡来御聞届二相成候二付、御取替
せ二相成候条約書御見置被成候様御達、大和様二而者此度亜墨利加方日本海辺測量之義
願出候書翰和解御渡、右測量之義者穩二御断二相成候外者無之、自然不承知二候へ者追而
同国江使船被差越、官府江御駆合二可相成与迄申論二相成筈二候へ共、万一右等之場合
二至り、理不尽二内海へ乗込候様之儀有之間敷二も無之、左候時者不得已戦争二可相成
も難計候間、手厚二御心得被有之候様二与のあたり御達し有之、猶伊勢守様方も右等之

御趣意何御実備有之候様精々御演達も有之趣二而、薩摩守（松平）右御書付類御回し二相成候由二而、去ル八七日大御目付衆ヲ以御回覽ニ御並様方江被差上候由、何分右測量願者不容易難題之儀ニ有之由窃ニ承之候也、（夜月清）

○十六日、丙午、快晴、（淺野道博）於江戶宮崎采女様去々月以來御病氣之処、御養生不被成御叶、八月廿九日御卒去被成候趣御知せ申參候由、右者周防様御弟、御定式半減之御服忌可被為受処、日數過御承知被遊候ニ付、今日一日御遠慮被遊候旨、並ニ出衛様ニも御父方御叔父ニ被為當、是又御同様一日御遠慮被成候之旨御移檄有之也、（朝）御用向ニ而御用達所詰頭（三）取取永田完次殿江參、応対いたす、夫々直ニ六丁目御館江前段之趣ニ付為窺御機嫌罷出、尤兼而上下回し置着用仕ル、御目通りも被仰付也、四半時頃罷歸、直ニ出勤、出衛様御機嫌伺於御次御用達迄申上ル、是又上下着也、夕七時前退、（極）夕御用向申上事有之、猶又出勤

○十七日、丁未、曇時霏々、（午）後近隣江先達而以來慈君御不快中預見舞候謝ニ行、（星野）武平次鉄炮会催候由ニ付出席、柿持寄ニ而賭有之也、（極）夕々藤川江行、同方乙次郎義急度所望杯申ニ者無之候へ共、当家幾三郎死去後甚淋敷、且度々之不幸何となく心細存候様之気味も有之候ニ付、何卒生立之世話致試度候間、心長く逗留為致被呉間敷哉（マ）之每登殿へ御相談申候処、殊之外大慶之御様子ニ而、如何様とも可被致之旨御返答也、水谷伯母氏も御出合せ被成、酒出ル、帰辻江も卒与寄也

十八日

六丁目様ニ而御男子様御誕

生被成

○十八日、戊申、雨、温、（朝）素読所会読江出席、直ニ出勤、夕七時前退、（藤川）乙次郎今朝方来、（水谷）伯母君八十郎を連午方御出、夜御還り被成、酒鮓を饗、（六）丁目御館ニ而老女並た

十九日、右之通周防様御
妾腹御男子御誕生之旨席達
を以被仰出候事

廿日

六丁目様御小兒様御名左
之通被為付

太吉殿

右之趣心得之義席触二而御
達有之、尤御奥通二而者様
唱之旨も例之通被仰出也

つ今夕安産、御男子御誕生被為在候由二付暮過方恐悦御機嫌伺与して罷出、御小兒様何
之御滯も不被成御坐、御丈武二被為在候御様子也

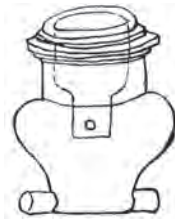
○十九日、己酉、晴、暖、朝弓術江出、例時出勤、夕七時退、廿日市蓮教寺午後來、出
勤中卒与御断を申退、診を乞、何も同様、尤左眼之障物少々減候様覺候たけ宜候与申也、
酒飯を饗ス、橋本屋周五郎來、右同酒飯を饗ス、辻清人も同時二來、同断也、今朝六
丁目江与三右衛門被出也

○廿日、庚戌、晴、暖、森仙太郎此間備前方牽帰候御相手馬今朝御覽被遊候二付御馬場江
出、予も初而乗也、六丁目様二而此間御誕生之御小兒様御名付二付、午後為恐悦罷出、
麻上下着也、御次二而御祝酒・御吸物頂戴被仰付、渡辺雅登も一緒二出ル也、今日主水
様東辺江御遠馬被成、御馬数も有之由二而六丁目江出掛、雅登同道京橋辺迄行拜見いたす、
御馬数十九匹、御家中之方格十一人被參、御家頼御用人以下七人參候也、今日者此御方
様御馬をも御借用二而、二牽御立用也、当月二日江戸表地震之出火二而南部美濃守様
伊東修理大夫様御上屋敷御焼失之旨今日御年寄衆方被仰上候由也、藤川每登殿御入來、
(和禮)
乙次郎逗留之御挨拶也、今日帰掛森岡万之進へ寄也

○廿一日、辛亥、時雨、俄寒、朝波多野権祐忌明二付何角之挨拶二來、中飯を出ス、例時出勤、
夕八時過退、風呂を建、夜由良政太郎要鑑抄軍談二來

○廿二日、壬子、晴、朝初而有霜、寒冷強、朝素読所講釈へ出席、相濟出勤、夕八時過退、
退出後西向寺江參、冲和多理・井沢元秀へ悔之挨拶二行、岩崎江先日之謝、長江も度々
見舞之謝二行也、今暁以來朝之内三兩度地鳴、有輕震

廿三日、吉田与一右衛門所持卑耳白礮之図



口径四寸二步三厘

物長壹尺

ハンドモルチール
汎独白礮

但汎独ハ手之義、手白礮

ト申候炮之由也

廿四日夕

御茶

豇豆飯

此度御牽入之御馬名左之

通

紅鹿毛

○廿三日、癸丑、晴、夕曇、暖、夜雨、温、朝御乘馬江出ル、森岡万之進借銀之儀二付昨朝矢野源内へ參、内々申談置候儀も有之候処、今夕源内来、談通り相調候旨申来ル、

右者御趣法役所ニ而拜借之金、合而六兩、来辰霜月御切米壹石押証文并国泰寺村畠証文

一通差入、年賦返納利息月五朱之筈ニ相成也、依而厚及挨拶置也、夜渡辺雅登御用向内

談有之、来、深更迄咄ス也、長喜三太御用向ニ而来、此度御藩中大炮之数公儀江御届ニ

相成候由ニ而、此方様ニも大炮壹貫目以上之物有之哉否之儀内々被仰出ニ相成候様差向

義之由ニ而、御用達所下方通り通達有之候之由也、然処此方様二者いまた貫目以上之御

筒無之、此節御判談中也、遠江様・主水様二者昨年頃十三封度之忽微炮壹挺ツ、御新調

有之、尤遠江様二者白炮も壹挺御調之由也、尤此方様ニも東城ニ而吉田与一右衛門一昨

三貫目玉之卑耳白礮壹挺鑄造之由ニ付、其分被仰出候ものニも可有之哉与内存申談置候

也、乙次郎藤川へ帰ル

○廿四日、甲寅、晴、暖、夜来も兩三度輕地震あり、朝御内密稽古ニ付御馬場江出ル、御

馬場へ帰、直ニ出勤、夕八半時頃退、六丁目御館ニ而太吉殿御七夜二付夕為恐悅罷出、

於御次御吸物・御赤飯・御酒頂戴被仰付、麻上下着罷出候也、妙円廟御祥月二付夕御茶

例之通献ル也

○廿五日、乙卯、晴、暖、朝森岡万之進來、例時出勤、夕八半時頃退、夕弓術へ出、且

那樣今日午後牛田御山屋敷江御出被遊、御着具ニ而御山中御歩行被遊候由、佐藤益之丞・

大島五兵衛其外彼是御相手被仰付罷越候由也、夜長喜三太来、東城江之返礼書状を頼、

認もろふ也

○廿六日、丙辰、晴、暄、朝御乘馬江出ル、乙次郎今朝方又来、夜藤川伯母氏御出、酒飯を出、深更迄御咄、乙次郎逗留ニ来候ニ付挨拶旁御出也、夜政太郎来

○廿七日、丁巳、晴、暖、朝素説所会説へ出席、相濟出勤、夕七時前退、夕弓術江出、今朝西向寺江代參兵藏申付

○廿八日、戊午、晴、暄甚、朝堀尾眠石入来、并松本良伯来診、湯川新太郎母先達而以

来病氣ニ而下り居候之處、夜前以來不出来、今曉死去致候由、悔・見舞使度々遣入、同人母者六丁目御館老女瀬河事也、夕万之進來、夜湯川葬式、家来を門前江見送ニ遣入也、夕二宮五礼来、同御乘馬江出ル、今午時地震有之、少し者長く有之候由、予者不知

○廿九日、己未、晴或曇、暖甚、朝森岡万之進來、朝矢野源内へ此間万之進方御趣法役所拝借銀永年御取立利易ニ相成候謝ニ行、湯川新太郎母之喪を吊、弓術稽古ニ出、夕御用向ニ而被為召、罷出ル

廿九日

大雪節

江戸御沙汰書之内

十月十六日

(伊達慶邦)
松平陸奥守様

此度稀成地震等ニ而不敢上納米仕度旨内願之通達御聽、奇特之事ニ被思召候、依之壹万俵上納被仰付候、此節御救助筋之御用途ニ可被差加候

十一月 大

○朔日、庚申、朝曇、後晴、暖甚、今曉寅刻前有地震、余程烈、尤短震故庭上へ避二者不及也、当月子月番、尤当月方御勝手向・村方等之義者非番月之者引受候事ニ相成ル也、御登城被遊候ニ付早朝出勤、一応退、又例時出勤、夕七時頃退也、例年之通今日知行物成切手相渡、拜戴仕、并ニ附足輕之御切米も同断、米価世羅米石ニ付八拾弍匁ニ相場立候之由也、夜由良政太郎来

○二日、辛酉、晴又曇、蒸、暖甚、夕炮術稽古へ出、朝矢野源内入来

○三日、壬戌、晴又曇、温、朝素読所講釈へ出席、直ニ出勤、夕七時過退、夕弓術江出、

夜六丁目院家ニ於て伯耆之客僧説法有之由、家小三宅室ニ被誘聽聞ニ參、全心学道話か、り候説方ニ而、大ニ勸善ニ相成、聽聞多候由也、今朝万之進・清人来、今朝周防様御乗馬ニ御出被遊、御次ニ而御用達中迄御機嫌を窺也

○四日、癸亥、曇、午後雨、寒、例時出勤、夕八半時過退、矢野源内来、内用也、暮前方六丁目御館へ御用向ニ而罷出

○五日、甲子、晴或曇、午前御用向有之、出勤

○六日、乙丑、晴或者曇、温、朝御乗馬ニ罷出、例時出勤、夕七時前退、夜政太郎来、乙次郎今朝藤川江帰ル

○七日、丙寅、晴、暖、朝素読所会読所へ出席、直ニ出勤、夕七時前退、西向寺江兵藏(森島)參らする也、夜矢野源内を呼、御用向申談る也、夜木野伯母君御出、御宿し被成

○八日、丁卯、曇、温、午前弓術稽古ニ出ル、夜木野伯母君御帰被成、慈君・家小夜辻

〔九日、御裏二而御獵之小鳥左之通拜領被仰付

暢 七羽

右告于廟

〔十日、諸武芸御賞し

一銀五兩宛

佐藤益之丞

大島五兵衛

山田多喜登

一諸武束宛

佐藤喜代槌

同 猶人

岩崎保之進

右月廿度以上之出精也

一諸口三束宛

伊藤徳之助

星野武平次

大崎和三郎

三宅内外

菅 諸登

一 江參、宿入、夜中御用談二付渡辺雅登来、深更迄話ス

○九日、戊辰、晴、寒、朝御内密稽古ニ罷出、相濟出勤、夕七時退、藤川乙次郎今朝来、吉田藤馬入来之由、予御内密出勤中ニ付不遇、内談事有之、又々重而可来旨口上書残し置還候由也、右ニ付紙面ニ而駈合越、相濟義ニ候ハ、其分ニ致度旨挨拶旁申遣又也、

〔夜慈君・家小白鳥方帰ル、家小者今日藤川江も行、饗ニ預候由、夜中者万行寺説法へ御參被成候由ニ而深更御帰り被成也

○十日、己巳、晴、寒、朝野村仲右衛門与申者来、謁を乞候故通して、以前沢軍太与申而坂井塾ニ而之知音也、同人所持之越中則重之刀、先達而御武具役所へ石井寿兵衛伝ニ而差出候由ニ而、何とぞ御買入之義取持くれ候様内談也、連も不相調趣を以辞ス、右仲右衛門者御歩行組ニ而、当時御作事之方相務候由也、例時出勤、夕八時半頃退、今日諸武芸出精之面々江御褒美被下候義有之也、右者昨年正月方当十月迄之度数しらへ被仰付、出精之甲乙ニ依而夫々軽重有之、御銀又者紙等を被下、又御褒詞限之分も有之由也、森岡万之進・辻清人も御詞之御褒美を蒙候也、猶又右ニ付而之御移檄も出ル、何分武芸筋厚御力入結構之御事也

○十一日、庚午、晴、朝冷、後暄、朝御用向ニ而出勤、御乗馬へ出、御年寄生田筑後殿江、先達而森仙太郎自備前牽帰候馬内々御所望ニ而今日御牽入ニ相成、此御方方桜戸之御馬ニ、鼻皮料金三枚、轡助一掛御贈ニ相成候之由、畢竟御三家様御乗せ御覽被仰出候哉之御様子ニ付右様御牽入ニ相成候由、好御馬也、予も今日拝借被仰付也、午後六丁目御館江罷出、森岡、木野・森岡へ寄帰ル、木野ニ而酒出ル、万之進來、酒飯を饗、夜政太郎来、

一 諸口巻束宛

堀尾幾之進

此分三輩也
伊藤茂登

森平之進

岩崎保之進

長弥三郎

右月十度以上之出精也

一 御詞之御褒美

辻清人

由良嘉久馬

森岡万之進

米原岩之助

平野藤吉郎

高木唯一

右月六度以上之出精也

一 銀巻兩

田中実五郎

一 鳥目三十疋

御馬捕

藤次

一 御褒

〔堀尾眠石昨日幾之進御褒美頂戴之挨拶旁入来之由也

○十二日、辛未、晴、暄、夕曇、夜風吹、雨降、〔例時出勤、夕七時前退、〔朝万之進來

○十三日、壬申、晴、暄、〔朝素読所講釈へ出、〔例時出勤、夕八半時退、〔夕射場へ出、今

明日射揚也、〔慈君夜中万行寺へ御参り被成、〔去ル十日之御移檄左之通也

文武之道相励候様二との義者連々被仰出之趣茂有之候処、一昨年垂墨利加船渡来二付

而者尚又厚き御沙汰振も有之、何れ茂御趣意相守、武事相励候処、其以来不忘各別二

出精之輩も有之、此度御場所出席度数改メ被仰付、出精之甲乙二依、夫々御銀賞等被

下置候、然処中二者未格別老年与申二も無之して一円御趣意二不応向も相見、且又近

来追々及廢絶候輩も有之、甚苦々敷事二候、近年魯西亜・嘆咭喇・垂墨利加等之諸夷

所々入港之義二付而者、諸国一統防禦之御備嚴密之御移合も有之、此御方二而者当御時

節中なから御武備之筋連々御力被入、一昨年以來者別而右等御失費莫太之義二有之候

処、尚又西洋炮^法大炮之義者防禦第一之要器、是非共御貯無之候而者不相濟義二付、甚

不容易御事二者候得共、既二御鑄立之御目論見も有之事二候、何分当今之形勢実二油

断難相成場合二候条、得斗思慮有之相加、是等^迄等閑之面々者屹与奮発有之、平常之義

者随分勘弁相尽、武辺之筋厚相心掛候様可仕候、是等之趣手堅申聞候様被仰出候

右之趣不洩様可被相達候、以上 月日 御步行列加以上、他向江稽古二被罷越候面々も自今者度数書付、月々御目付所江可被

差出候 但当月分分被差出候事

永野盛次郎

右之趣席々江相達可被置候、以上 月日

右前兩人月廿度以上、後坐人月六度以上之出精也

十四日

冬至節

十六日、此度御牽入之御

馬名左之通被仰出

唐綾

十五日

一御年寄見習

沢徳三郎殿

御用人方

但足輕拾五人御附、尤御用番印形者無之、其外者並之通与被仰出候由也

十八日、実山百ヶ日二付

妙慶院江備左之通

回向料 銀壹両

靈供米 精一升

卒頭婆料 銀壹匁

以上

○十四日、癸酉、時雨、風吹、寒、為窺御機嫌罷出、射場へ午後出、清人、万之進射場江出候而來り飯ス、夕冬至之祝酒を饗ス、夜慈君白鳥万行寺へ御參り被成

○十五日、甲戌、晴、朝有霜、冷後寒、例時出勤、夕八時過退、今日午後伴三之丞殿御馬場を借用、申合之打毬有之、見物二出ル、御家來内も彼是組合出ル、周防様今日川下江御出被遊候由二而、御獵之鯛魚一器拝領被仰付也、今日沢徳三郎殿御年寄見習被仰付候由也

○十六日、乙亥、晴、朝有霜、冷甚、例時出勤、夕八時半時退、退出後妙慶院へ參、興徳寺江も去ル十二日參詣不能候二付參、夜被為召候義有之、卒与出勤、由良政太郎來候へ共右出勤二付辞ス

○十七日、丙子、晴、寒、午後為窺御機嫌罷出、夕御乘馬江出ル、風呂を建

○十八日、丁丑、晴或曇、寒、朝素説所会説江出席、夫方出勤、夕七時過退、明後廿日実山百ヶ日二付今日備物為持遣ス、并二明夕七時前小僧壹人參りくれ候様二との義頼遣ス也、夜政太郎來ル

○十九日、戊寅、暁有雪、寒冷強、例時出勤、夕七時退、夕七時前仙成來、於内仏説經相濟、茶漬并酒を出ス、當時之儀故何れへも案内者不致也

○廿日、己巳、曇、寒、夜前慈君・家妙慶院へ參、昨日乙次郎藤川へ歸ル、今朝妙慶院へ兵藏代參申付、法事中詰さす也、予者御用向差湊候二付不能參、遠江様・主水様昼後為御用談御出二付為御送迎罷出、入夜退、朝御乘馬へ罷出、夜渡辺宗右衛門殿從京都

十九日、内仏飾何も通例
之通、茶漬・酒肴左之通也

皿 酢和会

汁 みそ
豆ふ才
しゐたけ
青味

飯

香物

平 京菜
飛龍頭

酒肴

八寸 芹
油揚

平鉢 豆ふ田楽
山椒味噌

以上

布施 五分

廿一日夕

御茶

豇豆飯

帰着之案内有之、以使歛申遣ス

○廿一日、庚辰、晴、冷、朝渡辺氏(宗右衛門)へ帰着之歛・見見旁(舞力)二行、例時出勤、夕七時頃退、夜

政太郎来、長喜三太来話ス、受安廟御祥月也、御菓子を献、夕御茶・飯を献、辻清人
方專祐童子一周忌之由、茶飯贈来ル、夜寒冷強

○廿二日、辛巳、終日雪降、寒冷強、朝素読所講釈出席、相濟出勤、夕七時過退、今曉
八時頃出火ニ罷出、中島木挽町々家三軒焼之由也、西向寺へ兵藏(筋力)参らす、松田謙藏・
檜垣捨次郎・平野藤吉郎へ今曉之火事見舞使遣ス也

○廿三日、壬午、晴、朝冷甚、有凝、朝御馬江出ル、周防様御出ニ付夕方為窺御機嫌罷出、
今日井上権之丞殿火輪船・火輪車雛形を持参、御裏ニ而被入御覽候由、右者江戸井上之
方相伝有之、試に雛形被調候之由也、夕西向寺・妙慶院へ参、本照寺へも今日藤川聞
寿院殿二十五回忌相当ニ付卒与参ル、誓願寺ニ而辻專祐童子墓江も参ル也、江戸表ニ而
此度地震大変ニ付嚴敷御省略筋被仰出、并二兼而之諸国寺院之梵鐘大炮・小銃ニ鑄換之
義叡慮を以被仰候一件も弥其通取計候様心得方等之義被仰出候由、夫々御書付写拜見被
仰付候へ共、事長故未写取ことあたわす、藤川毎登殿御入来也

○廿四日、癸未、曇時々雨、或者雹雪あり、例時出勤、夕七時退、留守中一場忠次郎殿
来儀有之由、口上書被置、一昨廿二日も被来、謁ス、銀談事ニ而来也、夜一甫流稽古見
物ニ出ル、尾道三島屋孝助々書状差越、同人養子喜一郎義弥以不向之人物ニ付、無扱及
離縁候由、并娘ゆり六月廿四日安産、男孫出生、且兼而内含之間屋商売復旧、当月五日
東中浜与申処江転宅致候由為知差越也、味噌を製候由

〔廿七日夕

牡丹餅

御茶

〔廿九日

小寒節

〔江戸御沙汰書之内

十一月十三日

時服十五 (伊達慶邦) 松平陸奥守様

上納米仕、御用途ニも相成

候ニ付被下之

同廿五日

御手目 (島津斉彬) 松平薩摩守

御刀 備前国景光
代金百五十枚

御脇指 同作
代金百枚

右先達而大船・炮器類とも

献上仕、早速御用途ニも相

成御満足ニ被思召候、依之

於御前拝領之

○廿五日、甲申、晴、寒、夕曇、〔例時出勤、夕七時過退、夜御用談有之、渡辺へ行、跡
ニ而酒粥出ル、夜半後帰ル

○廿六日、乙酉、晴或曇、寒冷強、〔朝就御用向出、〔同吉田藤馬江御用向ニ而行、謁ス、夕
又被為召御奥へ出、〔夜政太郎来

○廿七日、丙戌、晴、寒冷強、〔朝御内密御用向ニ付御馬場江出ル、相濟出勤、夕七時退、〔遠
江様方御到来之三原大根例年之如拝領被仰付、告于廟、〔休廟御祥月、祭祀者潤廟之節相

濟居、御菓子等献ス、〔例年之如煮込を製、〔慈君夜辻へ御出、御宿し被成

○廿八日、丁亥、晴、寒冷甚、〔例時出勤、夕七時前退、〔夜前万之進來、〔夕弓術江出

○廿九日、戊子、晴、寒威緩、〔小寒、〔夕為窺御機嫌罷出、帰而弓術へ出、〔夕一場忠次郎
殿来儀、此間以来之再談也、〔岡本主馬殿方鉢肴被惠比目魚一、鰯尾魚二、いか、之趣意二
哉、尤輕肴也

○卅日、己丑、晴、寒威緩、〔例時出勤、夕七時過退

十二月 小

二日

煉葉方

狗杞子 三十目

野菊花 廿五匁

右二味細末蜜煉

三日

一慮慮

久保田 薨殿

右於江戸木曾路人足八人、

馬三匹繼立之儀申立置候

処、出足之節申出も不仕、

人足八人之内三人、馬三匹

之内壹匹相減、殊二右三人

者用意として先触書へ書載

差出候段達御聴、兼而用意

人足之義二付而ハ從公儀被

仰出之趣も有之候処右之次

第、彼是以不念之儀二付

右此後廿二日、十日振二

而御免之由也

○朔日、庚寅、晴或曇、寒威緩、朝黒田益之丞殿被来、謁、一昨日一場忠次郎殿内談之一

件二付猶又厚談有之也、例時出勤、夕七時頃退、夕岡本主馬殿被来、謁、同方当夏之

借用銀返弁、元入甘メ之義二付内談有之也、夜政太郎来

○二日、辛卯、晴又曇、時々雪霏々、寒威強、晝寅下刻出宅、廿日市蓮教寺江乞診二行、

先眼者何も同様二候得共、最早煎葉を止、煉葉二致候様申、葉方を書而被患、尤指葉者

今暫其儘いたし候様ニ与申、昼飯を出、夕八半時過帰

○三日、壬辰、晴、寒氣強、朝素読所講釈へ出席、御乘馬江出、其後出勤、夕申鼓後退、辻

清人入来

○四日、癸巳、晴、寒威強、朝飯田又市殿被来、謁、借銀談也、例時出勤、尤出掛炮術

稽古場へ出、一昨日より丁之日寒稽古始候旨一昨日吉本恒之丞申来候ニ依て也、夕申鼓

前退

○五日、甲午、晴、寒威嚴、凝甚、吉田藤馬より二男広馬義安井平司養子二遣申度、願之

通被仰出候段、去ル三日之日付ニ而昨日為知来ル也

○六日、乙未、曇、寒威強、朝御乘馬江出、例時出勤、夕七時過退、乙次郎藤川^(其根)帰、夜

慈君辻方御歸り被成、夜政太郎来、去ル朔日左之通御移檄出

御政務之筋^儀御代々様之思召を以被為繼、毎々御世話被為在候得共、年久敷昌平之化二

浴し、人心兎角外見虚飾ニ相流、万端御手重ニ成行、無益之手数而已相増、御実備之

処往々御安心不被遊、殊ニ近来諸夷引続キ致入津、夫々御処置之品も有之候得共、後

〔七日〕

一御広式詰

田中幸之丞殿

間宮伝吉殿

池内午之丞殿

保田覚之助殿

一同御免

金子幾太郎殿

大橋源之進殿

植木七之丞殿

一同免

但御番外

右三人之衆

一御騎馬筒

太田盛之助殿

大橋清太郎殿

福田直衛殿

御切米拾五石

一 三人扶持被下

被召出

御騎馬筒

大之進俵
大橋勝太郎殿

〔九日〕藤川乙次郎来宿

来別而非常之御手当肝要之儀ニ付、此度諸事格別簡易之御制度ニ被為復、総而無益之

旧習、手重之古格を被為省、質直之士風相成候様被遊度との思召ニ付、追々被仰出候

品も可有之候、因而者一同右之思召ニ基き、万端厚く申合、聊等閑之心得無之様、精々

忠勤を可被励候

右之通向々江不洩様可被相触候 八月

別紙之通從公儀被仰出候間、此趣得斗相心得、兼々被仰出候質素節儉相守、士風引立、

非常之覚悟心掛候様被仰出候

右之趣相組支配方へも不洩様可被相触候

十一月晦日

十一月晦日

○七日、丙申、雪降積寸許、寒威強、朝素説所会説江出席、相濟出勤、夕八半時頃退、西

向寺江兵藏(森忠)代參申付

○八日、丁酉、晴或曇、寒威強、朝炮術稽古ニ出ル、午後御用向有之、出勤、極夕退、夜

政太郎来

○九日、戊戌、晴、寒威、例時出勤、夕七時前退、極夕又出勤、今日四時為寒氣御機嫌

御伺旦那様御登城被遊候処、例者九時前二者是非とも御下城被遊候得共、一向二御下城

不被為在、漸七半時頃御下城被遊、依之為伺御様子極夕又々出勤致候也、今日者遠江様

方御例之通御並様御一同御目見被遊候後、何事歟御直々被仰上事被為在、夫等之義二而

右様御下城御日間被為人候由也、夜渡(宗右衛門)辺氏へ御用談有之、參ル、深更帰ル、於京都高

謙院様方当度渡辺氏被帰候二付煮紺柄糸一具御内々頂戴被仰付也、尤与三石衛門・雅登(渡辺)

謙院様方当度渡辺氏被帰候二付煮紺柄糸一具御内々頂戴被仰付也、尤与三石衛門・雅登(佐藤)

謙院様方当度渡辺氏被帰候二付煮紺柄糸一具御内々頂戴被仰付也、尤与三石衛門・雅登(渡辺)

謙院様方当度渡辺氏被帰候二付煮紺柄糸一具御内々頂戴被仰付也、尤与三石衛門・雅登(佐藤)

江も同様羽織紐・下緒等被下候由也、〔多力〕今夕坪内久米之助寒氣見舞入来

○十日、己亥、晴、寒威強、〔多力〕朝波田野權祐・辻清人入来、〔例〕時出勤、夕八半時頃退、〔極〕

夕御用向二付又出勤、〔十二月十日〔朱書貼紙〕〕入夜退、〔今日御年寄生田筑後殿・御用達所詰頭取永田完二殿御用〕

召二有之候処、登城之上二而御故障之儀有之由二而、今日之御用御延引被仰出、筑後殿

二者何も之通御目見等も有之、御用向も被相勤候候之由、〔符力〕何分珍事、畢竟者昨日遠江様

何事歟御直々被仰上事有之、夫方事起候義二而、夜前六半時頃急々御用召之奉文到来被

致候由之処、今朝へ至り又々俄二御様子替候もの共、不審成事迎衆評紛々たる事之由也、

尤右遠江様被仰上事者外御両家様二者一向被仰合候事二者不被為在御様子之由、何分不堪恐懼事也

○十一日、庚子、晴、寒威強、〔夜前九時前久野秀太郎差向御用向之由二而来、右二付直二〕

出勤、同半時頃遠江様へ為御使罷越、脇本武兵衛江応対、八時過帰、猶又出勤、無程退、

遠江様御差掛御面会被成度儀被為在候間、只今方即刻御出被進候様二との御様子也、尤

且那樣二者御風邪二付御出不被遊、依而予被仰付罷越也、主水様・内記様二者御出被成

候御様子也、何分一昨記・昨記之一条二付、今夕御年寄浅野若狭殿、御騎馬頭大小姓同格御與

小姓筆頭寺西小八郎殿被罷出候趣二而、御難題事被出候哉二被察、久野秀太郎誠二周章

之気色二而、無僕無釣燈二而来候也、〔午後出勤、御用向也、〕未鼓頃方六丁目御館へ為

伺御機嫌罷出、帰森岡へ寄、酒飯出、夕又出勤、入夜退、〔今朝御年寄武田大炊殿被出、〕

其後出羽様御出、極夕又主水様御出被成、入夜御立座被成候由、皆々遠江様御一件二付

六丁目様方御庭へ生候橙子
五ツ頂戴被仰付也

〔十二日〕

而之御事歟与奉恐察也、〔夜風呂を建〕

十四日

大寒節

十八日

一知行高百七拾五石

半三郎家督

田原保之進殿

右職方之儀弥以不怠心掛相

勤候様被仰出

一知行高百五拾石

本太家督

奥田保人殿

御鷹方諸用向

一河田友五郎通相勤候様被仰出

右同人

△

一知行高百五石

内外跡

沢井且二郎殿

一願之通隠居

田原半三郎殿

奥田本太殿

大野孫六殿

○十二日、辛丑、晴、寒威強、嚴凝、(淺野高平)朝健徳院様へ御代參被仰付、海蔵寺へ罷越、尤穢多

橋近所迄罷帰候処、周防様急ニ御不參被仰出候ニ付、其御代參をも相勤候様跡方申来、猶亦折返海蔵寺へ罷越、夕八時前帰、尤今日者御馬借用仕候而罷越也

○十三日、壬寅、曇、寒威強、嚴凝、朝御内密稽古ニ付御裏江罷出、相濟出勤、夕七時頃退、鱸兵馬・藤井音次郎寒氣問安入来、夜御内御用向ニ付渡辺氏江行、(宗右衛門)曉帰宅、今朝

武田大炊殿御呼寄被遊、被出候由、夜中出羽様急々御步行ニ而御出被成候由、夜半後又遠江様御用人脇本武兵衛御呼寄ニ而罷出候由也、夜半御奥へも卒与出ル

○十四日、癸卯、夜来雨、午前方晴、寒威緩、当年煤掃未済候故、今日煤払いたす、例長喜三太・平野藤吉郎杯頼候へ共当年者内輪限ニ而済ス、尤田中実五郎を頼也、午後方御

内用向ニ付渡辺氏へ行、夜半後帰、極夕御館へも卒与罷出、今夕も又々武田大炊殿被出候由也、今日大寒節也、夜風吹、寒威少加

○十五日、甲辰、晴、寒威緊、早朝方渡辺へ行、就右御館へ不及出勤、極夕御用向ニ而御奥へ罷出、入夜退

○十六日、乙巳、晴、寒威、嚴凝も亦甚、妙慶院へ朝兵蔵代參申付、渡辺四郎右衛門入来、例時出勤、夕八半時頃退、又仙石右仲殿御入来ニ付出勤、謁ス、夕妙慶院へ參、夫方木野・

水谷へ行、両家ニ而酒出、水谷ニ而深更迄咄帰ル、同方ニ而者福田差纏一件此余表向之取計(虫損)相成候之外有之間敷与相考候ニ付、其運ひ方御咄合申置也、大橋代之進殿(天)方も先達

而子息被召出之為知有之候ニ付歛ニ行也

○十七日、丙午、晴、寒氣強、冷甚、未鼓頃方遠江様・主水様へ寒氣為何御機嫌罷出、久

△印之処江
一知行高百石

孫六家督

大野久馬殿

廿四日

一御側詰

御膳番兼役

小島良大夫殿

一同次席

長谷川半弥殿

一浦辺御藏奉行

天野守衛殿

一同御免

大柿忠次郎殿

一御加増拾石宛

早川七郎兵衛殿

松岡台八殿

右年采出精二付

一御加増三拾石宛

三木茂大夫殿

右家芸出精、弟子中指南筋
厚力入候付格別を以被下之

野秀太郎を訪、吉田藤馬・丹羽庄司を訪、藤馬方ニ而者右水谷一件之義内話いたし置也、
夫方白鳥ニ而松本・永井・堀尾・藤川・辻へ見舞、辻ニ而被留、酒出、入夜帰ル、伊勢
三村棍助大夫方御祓・来曆贈来ル、佐藤餅搗之由、家来を致立用

○十八日、丁未、晴、寒威些甘、今曉寅鼓前有地震、長束茂兵衛入来、朝素読所会読へ出席、
相濟出勤、未鼓後後松原出火、井口庫人殿屋敷焼失、類焼者無之、就二付例之場所へ出張、
申鼓後及鎮火、退出いたす也、佐藤与三右衛門方孫女之乳母此間以来少々不快之処、今
曉以来水気衝心ニ相成、今午時病死いたし候由也、可憐事也、永井仲之助入来之由

○十九日、戊申、晴、寒威強、例時出勤、夕七時過退、丹羽庄司寒氣問安入来之由也、乙
次郎藤川へ帰ル、夜雨

○廿日、己酉、晴、風吹、曉来纔雪、不嚴冷、例歳之通今日鯨を製、田中実五郎、佐藤家
来兵次を頼、小人国蔵も当番之由ニ而来、扶る也、矢野幹太郎夜前以来吐瀉ニ而塞之氣
味有之、見舞使遣ス、例時出勤、夕七時過退

○廿一日、庚戌、晴、寒威緩、例時出勤、夕七時過退、当御場合御仕向等被為出来候義
二者無之候得共、武芸事等別而精練無之候而者不相濟時節二付、格別之御差繰を以一昨年
之振合ニ御仕向被下候段此間被仰出、今日切手相渡、御扶助七歩五厘渡也、御役料も今
日渡、是又七歩五厘渡也、今日相場田打米七拾六匁、近年之賤価也、東城辺者五拾八匁
位之米価之由也、吉田藤馬寒氣問安入来、先達而村方役所御借入銀之義申談候之御挨拶
之由ニ而、丸炭五俵之切手右御役所方之振ニ而被惠、全主水様方被下置候与申趣意二者無
之、予留守中ニ付家小へ厚伝言申置也、乍併不存寄義也

一 花房清之丞殿

右常々出精相勤候二付

廿六日、増田藤兵衛御裁許其後承候処左之通之由也

一 格禄御取上
御暇

増田藤兵衛

但御城下住居御構、家財者

勝手二引取候事

廿七日

節分

廿八日

立春

廿四日之統

一 御側医師並

宮木玄洞老

佐竹玄丈老

一 書物料金五両

堀小一郎殿

右每歳被下之

○廿二日、辛亥、晴、寒氣紓也、早朝西向寺江參、佐藤与三右衛門不快、矢野子供不快を

訪也、於京都高謙院様へ寒氣御安否伺旁老女幾田迄同勤三人文差出、折柄海苔百枚申合差上ル也、昨日之船便二出ス也、夜、辻於梅歳暮・祝詞旁二来、酒・餅を饗、昨日吉

田藤馬方被贈候炭、何とも難濟寄二付、今日紙面を以厚断申遣候之処、何分二も予口次二而速二再借相調、役所二而大ニ便利相成悦候二付、真之寸志二相贈候間、受納致くれ候様二与、尚又紙面二而戻し来ル也

○廿三日、壬子、晴、寒威緩、今朝六半時揃二而諸品御礼被為受候二付為席詰罷出、一応退、御乗馬へ出、猶又例時出勤、及暮退出いたす、藤川乙次郎来

○廿四日、癸丑、晴時々曇、雪霏々、寒威加、例時出勤、暮前退、西向寺江兵藏為參、廿市蓮教寺江葉謝為持兵藏遣ス、夜家小木野へ參、宿ス、乙次郎も參也、夜長喜三太来、深更迄話ス

○廿五日、甲寅、晴、寒威強、例時出勤、入夜退、今日限二而御役所廃休也、家小乙次郎幾三郎從木野帰、夜悪寒有之、早臥、今晚浅野出羽様急々御咄合事被為在、御出被成候由也

○廿六日、乙卯、晴、寒威強、暁来腹瀉、有頭痛、悪寒、午後臥、今日於竹々鼻成敗者有之、内斬罪一人、打首四人、斬罪者当春御城御勘定所へ忍入、御銀盜取候御書方御步行組増田藤兵衛倅藤太郎之由、一之胴尾関五八郎殿、二之胴三村仙兵衛殿、三之胴尾関子息之由、御様し被出候御道具之銘未聞、父藤兵衛者御城下追放被仰付、跡家財闕所二相成候由、扱々可哀事共也、母者二三日前縊死いたし候由風聞有之、夕木野一馬人来、酒を出ス、夜

五人扶持被下
御醫師組被
召出

順庵倅

山中松庵老

一五人扶持

甚三郎弟

平尾宗右衛門殿

只今迄之被下銀ハ上ル

右積年鎗術出精仕、業も宜

二付、格別を以生涯被下之

一御切米式拾九石
三人扶持

大三郎跡目

吉田熊三郎殿

廿六日、於江戸

一御加増五拾石

金子徳之助殿

一同拾石

丸毛久兵衛殿

右年来出精相勤候二付

臨時御用向ニ而渡辺氏へ会、夜半後帰、臥

○廿七日、丙辰、晴又時々雪降、寒威嚴、節分也、夕方武田大炊殿被罷出、御居間ニ而

御談話被為在、御菓子も出候由也、夜節分之祝、夜臨時御用向ニ而渡辺江会ス、間ニ

而酒出、夜半頃帰、臥、今日も終日頭痛、難義いたす、夜半後又瀉二成なり

○廿八日、丁巳、晴、寒威緩、午後六丁目御館江御歳暮・御機嫌伺旁ニ罷出、於御次御酒

頂戴被仰付、妙慶院・西向寺江參詣、森岡へも卒与寄帰ル、立春

○廿九日、戊午、晴、寒威緩、夕八半時頃方為歳末之御祝詞罷出、御登城前於御居間御祝

詞申上、周防様江之御祝詞者於御次御用達迄申上、出衛様二者御部屋ニ而御逢被成、御祝

詞申上、夕七半時頃退出、近隣相互ニ祝詞之勤合無之、佐藤益之丞・岩崎良之進來、長

喜三太も来、夜万之進祝詞二来、例年之通田楽を焼、家内歳暮之盃を伝ふ、今般蝦夷

地一体上知被仰出候二付、従公儀之御移檄并御家中着服之義二付御示之御移檄等先達而

御達し有之候得共、追而移檄録江写し置候二付此記二略之

江戸御沙汰書之内

十二月四日

松前伊豆守
(崇徳)

名代 佐竹右近将監
(義亮)
(左)

十二月廿四日

松平加賀守
(前田齊泰)

名代 松平大蔵大輔
(慶永)

廿七日

一名改

德三郎事

沢 外衛殿

一御側医師並

松岡良策老

今度東西蝦夷地、西在下部村、東在木古
内村迄島々一円上知被仰出候、為替地陸
奥国伊達郡、出羽国国村山郡之内高三万
石、込高壹万三百五十八石余とも被下、
且又為御手当年々金壹万八千両ツ、被
下、以来三万石高之家格ニ被仰付之

此節格別御事多ニ而御入費差湊候折柄相
察、上納金仕度旨達御聽、尤之儀御機嫌
ニ被思召候、厚心入之段ニ付、内願之通
金拾五万両上納被仰付、差向京都御造营
御用途之方江可被差加候

良庵(広藤道庵門人) 167

れ

嶺光幻雲禪孩女〔嶺光殿〕 44, 53

→浅野 常

麗照院(浅野道博正室) 134

蓮教寺(佐伯郡廿日市町) 160, 163

～ 166, 175, 184, 189

ろ

六丁目様(浅野道博) 14, 34, 70,

75, 76, 107, 121, 141,

145, 146, 168, 171, 174,

175, 186 →浅野周防,

御隠居様

わ

若月準二 168

若殿様〔若殿〕(浅野慶熾) 4, 54, 65,

77, 79, 81, 100, 104,

108, 115, 172

脇本武兵衛 7, 8, 101, 108, 131,

143, 147, 186, 187

渡辺吉太郎 131

—幸次郎 120

—四郎右衛門 2, 6, 7, 10, 14,

21, 29, 37, 50, 75, 76,

80, 91～93, 105, 110,

119, 129, 130, 132, 136,

143, 147, 157, 187

—四郎右衛門家内 157

—四郎右衛門娘 53

—駿河守(広瀬社神主) 125

—千寿院〔渡辺宗右衛門母, 渡辺氏
母〕 49, 50

—宗右衛門〔渡辺氏〕 6, 11, 13,

40, 41, 46, 48～51, 55,

59, 63, 65, 69, 71, 91,

100～102, 108～110,

114, 115, 121, 149, 181,

182, 185, 187, 189, 190

—雅登 2, 3, 10, 11, 14, 24, 35

～ 38, 42, 48, 50, 62,

64, 65, 67, 71, 79, 82,

88, 91, 92, 100, 101,

104, 111, 113～115,

118, 120, 122, 123, 126,

133～138, 140, 142,

147, 149, 155, 157, 158,

162, 164, 165, 168, 169,

173, 175, 176, 179, 185

—雅登内室〔渡辺室〕 103, 138,

140

渡部廉之助〔卓爾〕 27, 29, 30, 56,

57, 139, 154, 167, 172

—多喜登 3, 6, 10, 36, 53, 57, 58,
66, 74, 136, 138, 143,
157, 158, 179
—隼之助 76
山中一庵(医師) 38
—権兵衛 173
—順庵(医師) 190
—松庵(医師) 190
山村一馬 13
—静登〔静人〕 4, 25, 101, 106,
113
—恒之丞 13
山本円之助 171
—十四郎 101

ゆ

湯浅勝之助 129
瑜伽定院准后(前大僧正亮深, 近衛経
熙子) 130
湯川十郎次 118
—新太郎 4, 27~29, 36, 42, 44,
66, 78~80, 87, 88, 94,
95, 103, 105, 122, 130,
157
—新太郎母 177, →瀬河
—兵馬 172
遊行上人(一念) 45, 47, 48
弓削壺岐 94
—織衛 40
—熊之進 94
由良嘉久馬 171, 180
—助三郎 8, 9, 48, 52
—政太郎 7, 78~80, 87, 105,
147, 149, 161, 175, 177
~179, 181~185
—兵左衛門(助三郎父) 8, 9, 52
—保人 3, 57

よ

横関庫次郎 113, 115
—新兵衛 24, 84, 86, 103, 113
—恒太郎 76
横山十介〔十助〕 6, 7, 36

—十郎 6, 7
与作(海蔵寺行者堂番人) 29
吉田栄蔵 28
—儀右衛門 76, 117
—喜蔵 28
—熊三郎 190
—広馬 184
—大三郎 190
—藤太 51
—藤馬 13, 14, 25, 67, 72, 79,
87, 141, 147, 152, 170,
173, 179, 183, 184, 188,
189

—与一右衛門 12, 176

吉光軍右衛門(慈君父) 105
→無庵一甫居士

吉村重介 101
吉本繁右衛門(全忠院) 7, 20, 89
—恒之丞 6, 7, 9, 41, 50, 56, 65,
91, 94, 101, 109,
115, 117, 122, 126, 130,
138, 184

与蔵(下番弥三二男) 141

米倉丹後守(昌寿, 武蔵金沢藩主)
15

米蔵(水主) 53

米原岩之助 70, 180

—岩之助姉 123 →ちか

—岩之助母 108

ら

頼 聿庵 2, 100

り

利円廟(村上家初代三郎右衛門)
16, 17, 53, 54, 60, 154
→不遷廟

利作〔理作〕(小回) 85, 138, 140,
158

利三郎(己斐石風呂亭主) 37

隆円寺(佐伯郡原村) 54

隆玄院(浅野道興実母) 13, 114

龍神角馬 8

103, 114, 167

も

本山小伝次 4

—大進 78

茂兵衛(勝蔵父) 158

森 光太郎 27, 52, 57, 118, 173

—仙太郎 5, 6, 27, 28, 30, 52, 59,
61, 87, 108, 112, 118,
139, 173, 175, 179

—豊吉 31

—直十郎 109

—平之進 180

森岡恵教童子(童女, 晴) 166

—後室〔姑婦〕(十兵衛室) 18, 37,
49, 64, 107, 129—後室姉〔万之進伯母〕 69
→岡田清太郎母

—さよ 107

—たづ〔弟婦〕(万之進室)
18, 21, 77, 114, 136,
138, 142, 155, 157, 158—万之進 2~4, 6, 10, 13, 14,
16, 18, 20, 21, 25, 30,
34, 45, 48~52, 54, 62,
64, 65, 67, 69, 71, 75,
81~83, 86, 90, 93, 94,
101, 102, 104, 109, 111,
114, 119, 128, 130, 132,
137, 138, 140, 142, 146,
150, 151, 156, 157, 162
~165, 167, 169, 175~
181, 183, 190—ゆき〔智証童子〕 78, 97, 98,
109 →智証童女森川出羽守(俊民, 下総生実藩主)
16

森島佐伊記 43, 135

—佐兵衛(水主) 42, 148, 157,
158—兵蔵(村上家若党) 42, 45, 148,
151, 152, 156, 159~
161, 163~169, 171,177, 178, 181, 182, 185,
187, 189

守山源之助 66

や

矢河稻荷(備後) 69

八木広次郎 109

—藤弥 138

—真喜太 47, 117

—野右衛門 57, 58, 62, 75, 108,
111

薬師寺小兵衛 8

薬師坊(白神六丁目) 76

八島外守 30, 76

矢島大衛 170

弥十(小回) 140, 158, 168

安井平司 184

—雄之丞 74

保田覚之助 185

弥三(下番) 83, 109, 141, 158

八十野(東城浅野家老女) 112, 118

屋根屋万兵衛 108

矢野幹太郎〔矢野子供〕 188, 189

—源内 3, 9, 11, 12, 35, 37, 40,
77, 80, 82, 83, 88, 91,
114, 115, 136, 144, 146,
157, 161, 163, 176~
178—源内室〔家内〕 10, 91, 104,
114, 129, 132山県兵太郎 11, 57, 58, 75, 94, 115,
117山県屋清蔵(空鞘真光寺小路)
142山川久左衛門〔熊賀〕 28, 37, 113,
117

山下右仲 5, 6

—勘右衛門 38

—多八郎〔太八郎, 山下先生〕
36, 93, 111, 118, 126,
147, 152, 160~163,
173

山田清助 47, 48

真野謐五郎 57, 58, 117
 間宮伝吉 185
 丸茂久兵衛 190
 万行寺(東白島町) 123, 179～181

み

三木茂大夫 188
 三島屋喜一郎(尾道) 105～107,
 109, 113, 114, 118, 121,
 123, 139, 182
 一孝助 105, 106, 118, 121, 123,
 182
 一ゆり 182
 水谷伯母(又左衛門室) 17, 18, 20,
 75, 132, 174
 一たけ 161, 165, 166, 170
 一八十郎 75, 174
 一又左衛門〔伯父, 水谷君, 水谷氏〕
 12, 18, 20, 62, 64, 71,
 101, 102, 137, 155, 157,
 161, 170
 水野壺岐守(忠宝, 上総鶴牧藩主)
 15
 一左金吾 164
 一出羽守(忠良, 駿河沼津藩主)
 15, 96
 三津井玄賀 72
 湊源太郎 40
 源家定(徳川家定) 1, 99
 →公方様
 一斉肅(浅野斉肅) 1, 99 →此御
 方様, 太守様, 殿様
 三村梶助大夫 188
 一仙兵衛 189
 宮木玄洞(医師) 189
 三宅吉左衛門 21, 58, 80, 116,
 117, 132, 138, 144, 147
 一吉左衛門室 162
 一春齡 134, 137
 一内外 7, 12, 13, 35, 37, 38,
 50, 67, 105, 116, 136,
 138, 157, 179
 一内外家内〔三宅室〕 129, 140,

141, 157, 178
 宮川盛磨 61
 宮崎采女 174
 一松下院(本藏) 161
 一藤九郎 23
 名井敬之進 66
 一清磨 66
 妙円廟(村上家初代三郎右衛門室)
 60, 79, 154, 176
 妙慶院(新川場町) 2, 3, 5, 7, 10,
 17, 28, 29, 36, 38, 43,
 48～51, 54, 59, 62, 70,
 78, 84, 86, 93, 95, 98,
 104～107, 109, 111,
 113, 118, 126, 137, 138,
 139, 141, 145, 147～
 150, 152, 155, 156, 158,
 159, 163～166, 168,
 171, 181, 182, 187, 190
 一院主 2
 一和尚 158
 明星院(大須賀村) 6, 38, 72, 106
 明信院(白神六丁目) 37, 49
 妙風寺(東白島町) 40, 48, 159
 三好伊織 33
 一大式 33
 一彦之進 51

む

無庵一甫居士 105 →吉光軍右衛門
 村上幾三郎 5, 10, 30, 35, 36, 43,
 47, 49, 52, 64～66, 70,
 74, 75, 77, 78, 81～83,
 86, 88, 89, 91, 93, 104,
 109, 111, 113, 115～
 117, 124, 127, 130, 138,
 139, 141, 143, 146～
 148, 151, 154, 155, 172,
 174
 →実山賢秀童子
 一他三郎 136～138 →義純童子
 村越孫六 47
 室角左源次 49, 58, 62～64, 78,

- 松岡台八 188
 —良策 191
 松田謙藏 35, 36, 54, 55, 101, 103, 182
 松平阿波守〔蜂須賀齊裕, 阿波徳島藩主〕 15, 32
 —出雲守〔雲州侯〕(前田利友, 越中富山藩主) 4, 5
 →富山侯
 —右京亮(輝聰, 上野高崎藩主) 15
 —越後守(齊民, 美作津山藩主) 15, 32
 —越前守(慶永, 越前福井藩主) 15, 32 →越前侯
 —越中守(定猷, 伊勢桑名藩主) 15, 32
 —近江守(浅野長訓, 青山内証分家当主) 159, 160
 —大蔵大輔(前田利聲, 越中富山藩主) 190
 —隱岐守(久松勝善, 伊予松山藩主) 32
 —加賀守(前田齊泰, 加賀金沢藩主) 32, 190 →加州侯
 —内蔵頭(池田慶政, 備前岡山藩主) 15
 —相模守(池田慶徳, 因幡鳥取藩主) 15, 32, 82
 —左近将監(武聡, 石見浜田藩主) 160
 —薩摩守(島津齊彬, 薩摩鹿児島藩主) 15, 23, 174, 183
 →薩州侯
 —下総守(忠国, 武蔵忍藩主) 15, 32
 —大膳大夫(毛利慶親, 長門萩藩主) 15
 —丹波守(戸田光則) 95, 96
 —出羽守(定安, 出雲松江藩主) 82
 —時之助(柳沢保徳, 大和郡山藩主) 83
 —肥後守(容保, 陸奥会津藩主) 15, 32, 95
 —肥前守(鍋島斉正, 肥前佐賀藩主) 39, 46
 —備中守(大河内正和, 上総大多喜藩主) 15
 —兵部太輔(慶憲, 播磨明石藩主) 32
 —誠丸(典則, 武蔵川越藩主) 15, 32
 —美濃守(黒田斉溥, 筑前福岡藩主) 39
 —陸奥守(伊達慶邦, 陸奥仙台藩主) 177, 183
 松野覚衛 50
 —文四郎 8
 松前伊豆守(崇広, 蝦夷松前藩主) 190
 松宮滝次郎 146
 —東太郎〔藤太郎〕 146, 173
 —半五郎 64, 173
 松村弥助 36, 93, 120, 150
 松本玄順(良伯父, 医師) 9, 27 ~ 29, 52, 59, 64, 67, 73, 76 ~ 78, 81, 94, 107, 109, 114, 122, 129 ~ 132, 136, 147, 157, 160, 162, 164, 167
 —三珠〔三寿〕(良伯弟, 医師) 3, 21, 27, 28, 52, 59, 137, 147, 160
 —清次 157
 —良伯(医師) 3, 9, 10, 13, 21, 28, 30, 35 ~ 38, 41, 42, 44, 48, 49, 54, 62 ~ 64, 66, 68, 77, 81, 84, 68, 87, 90, 91, 93 ~ 95, 101, 108, 107 ~ 109, 120, 128 ~ 133, 135 ~ 143, 146, 153 ~ 156, 158, 160 ~ 167, 169 ~ 173, 177
 松本屋亀治郎(東城) 53, 54, 64

一ちか〔ちせ〕 7, 8, 107, 108
 一毎登〔藤川氏〕 9, 11, 18, 21,
 33, 36, 63, 100, 101,
 111, 126, 131, 132, 139,
 157, 158, 167, 174, 175,
 182
 一又次郎〔又吉〕 62, 77
 一聞寿院 182
 藤田新五郎 13
 藤野源兵衛 94, 114, 149
 一源兵衛娘 115 →かね
 富士本屋久兵衛 166
 藤森恭助(弘庵) 12
 不遷廟(村上家初代三郎右衛門)
 60 →利円廟
 二川清記 139
 二葉山(饒津社) 67, 70, 165
 仏護寺(寺町) 136
 古川采女 46

へ

兵次(佐藤家来) 188

ほ

芳雲詠感大童女〔芳雲殿〕 134, 138
 →浅野 時
 宝国童子〔宝国〕(村上彦右衛門弟庫
 吉) 7, 105, 107, 109
 法信院(藤川毎登先妻) 126
 宝林寺(摂州住吉安立町) 5
 保科弾正忠(正益, 上総飯野藩主)
 16
 星野幸次郎 11, 111, 120, 139, 143,
 163
 一正大夫 77, 81, 117, 157, 163,
 167
 一武平次 94, 130, 157, 175, 179
 細川越中守(斉護, 肥後熊本藩主)
 15
 一能登守(利用, 肥後熊本新田藩
 主) 15
 細 六郎(呑空) 49
 堀田伊三郎 75

一格人〔求馬〕 101, 102
 一恂之助 66, 75, 135
 一高勝(浅野高勝) 1, 99
 一備中守(正睦, 下総佐倉藩主)
 16, 171
 一保右衛門 75
 堀 小一郎 189
 一才兵衛(周防山代) 119
 一十兵衛 43
 一正之助 43
 堀江太左衛門 135
 堀尾幾之進 105, 107, 108, 122, 127,
 173, 180
 一精一郎 2, 11, 13, 14, 20, 21,
 65, 101, 112, 120, 132,
 141, 157
 一眠石〔五郎八, 堀尾翁, 堀尾老人〕
 2, 3, 9, 11, 14, 38, 49,
 55, 59, 88, 91, 107,
 111, 113, 123, 132, 143,
 148, 151, 165, 166, 173,
 177, 180
 一老室(眠石室) 91
 本逕寺(六丁目村) 49
 本照寺(新川場町) 49, 101, 124,
 126, 127, 148, 182
 本多伊豆守(伊予守忠廉, 伊勢神戸藩
 主) 94
 一隠岐守(康融, 近江膳所藩主)
 83
 一豊後守(助賢, 信濃飯山藩主)
 95

ま

増田藤太郎 189,
 一藤兵衛 124, 189
 松井庫人 117, 118
 一佐直 39
 松浦喜勢〔喜せ〕(辻清人伯母)
 164, 165
 一久米之丞 117
 松尾善三郎 110, 138
 一茂兵衛〔善三郎〕 110

一良之進 163, 171

は

梅梢院(浅野齐肃生母) 81
 橋本屋周五郎〔周五〕 4, 25, 41, 51,
 69, 90, 107, 149, 156
 一周五郎元妻 51
 一周五郎実子 51
 一助四郎 51
 長谷川半弥 188
 畑口莊五 24
 波多野権祐 3, 5, 10, 52, 80, 85,
 102, 106, 114, 143, 155,
 159, 162, 166, 175, 186
 一善閑〔権祐亡父, 周蔵, 善間〕
 149, 162, 163
 服部権右衛門 7
 花房清之丞 189
 早川七郎兵衛 188
 林 播磨守(忠旭, 上総請西藩主)
 16
 一茂平太〔貞蔵〕 18, 20, 157
 早水蔵人 37
 一次内 9
 一瀬平 9
 一弥六 37
 原 伊三郎 104
 一庄水 112
 原田丈太夫 36, 118, 120
 一恒吉 120
 伴 喜八郎 48
 一佐助 53
 一三之丞 15, 108, 140, 181
 一新太郎 15

ひ

檜垣捨次郎 91, 93, 124, 139, 160,
 182
 樋口志津馬 24
 彦根侯(井伊直弼) 121
 →井伊掃部頭
 土方備中守(雄嘉, 伊勢菰野藩主)
 82

一井嘉内 101, 124
 一柳弥三右衛門 11, 43
 日比金介 22
 姫君様(浅野齐肃室末姫) 8, 130, 172
 檜物屋市郎右衛門(御扶持人) 24
 平尾甚三郎 190
 平川勘助 77 ~ 79
 平本順次郎 145
 平野たけ〔藤吉郎妻〕 8, 76
 一藤吉郎〔平野氏〕 2, 9, 18, 20,
 21, 23, 47, 55, 70, 87,
 91, 100, 101, 111,
 114, 124, 137, 139, 157,
 168, 180, 182, 187
 広瀬(社, 広瀬村) 125
 広瀬豊吉 46
 広藤道庵(医者) 167

ふ

深江静衛 14, 23
 深町真喜太 129
 福田直衛 185
 一直左衛門 64, 150
 福山直衛 14, 131, 133, 135
 藤井音次郎〔源之進〕 55, 59, 66, 101,
 123, 130, 131, 149, 152,
 162, 172, 187
 →岩崎源之進
 一源之進家内 59
 一左内〔佐内〕 35, 40, 45, 55
 一左門太 26
 一何某(仁保島本浦村眼医)
 160
 一母〔後室〕(佐内室) 130, 152
 一茂三郎(大年寄, 三国屋)
 166
 一百太郎 26
 藤川乙次郎 170 ~ 172, 174 ~ 179,
 181, 184, 185, 188, 189
 一伯母氏 38, 62, 177
 一広次 81, 107, 122
 一甚吉 28, 29, 81, 102, 107,
 122, 158, 170

な

直八(小人) 108
 中井出衛 122, 131, 162
 永井遠江守(直輝, 摂津高槻藩主)
 83, 84
 —仲之助〔仲之介〕 4, 8, 49, 56,
 62, 88, 101, 131, 141,
 171, 188
 中江保登妹 58, 67
 →佐藤益之丞後妻
 中島庄七 12
 永田完二〔完次〕 6, 7, 174, 186
 —丹解 52, 166
 長束吉之進 140
 —清次郎 20, 110, 143, 172
 —千甫 103
 —茂兵衛〔茂助, 長束氏〕 18, 21,
 25, 36, 51, 55, 79, 110,
 113 ~ 115, 120, 124,
 139, 143, 159, 160, 172,
 188
 —茂兵衛亡妻 159
 —六左衛門 4
 中津屋はつの 107
 —万之助 63, 103, 107, 123, 156,
 173
 中根栄蔵 111
 中野富三郎 3
 永野盛次郎 181
 —武八郎 18, 44, 138, 140, 143,
 156 ~ 158, 168
 —平次郎〔千代吉〕(村上彦右衛門
 若党) 6, 7, 9, 10, 12,
 14, 16, 17, 21, 25, 30,
 38 ~ 40, 42, 43, 45, 46,
 48, 50, 53, 54, 49, 62,
 65, 67, 70, 71, 73 ~
 77, 79 ~ 81, 84, 87 ~
 89, 91, 93, 95, 98, 102,
 104, 107, 109,
 113 ~ 115, 120 ~ 122,
 124, 126, 127, 130, 135,
 136, 138, 139, 141, 143,

144, 147, 148,
 中村善三郎 55
 —何某(忠左衛門カ) 101
 中山千太 65
 —半之丞 60
 —彦太郎 65
 名倉兵衛 117
 —求馬 49, 56, 90
 名越忠蔵〔緞蔵〕 113, 132, 133
 成川大五郎
 南部要人 103
 —伴五郎 35, 51
 —美濃守(利剛, 陸奥盛岡藩主)
 175
 に
 西尾幾馬 129
 —織衛 129
 二宮五礼〔五嶺〕 104, 105, 107 ~
 109, 112, 114, 117, 118,
 122, 125, 127, 130, 160,
 177
 丹羽しげ〔庄蔵妻〕 152 →木野しげ
 —庄司 25, 104, 109, 110, 113,
 114, 128, 132, 137, 142,
 155, 157, 188
 —庄蔵 24, 109, 114, 139, 147
 —四郎兵衛 129
 庭田公(重嗣) 2, 100

ぬ

貫名(海屋) 8, 30, 60

の

能称廟(村上家五代藤次郎)
 64, 159
 野口源六 4
 —静馬 4
 —唯蔵 9, 138, 157
 —半助 58
 野崎千之助 129, 141, 143
 能勢伝之進 31
 野村仲右衛門 179 →沢 軍太

128, 132, 134 ~ 136,
142, 157, 158, 162, 166,
169, 189
—勘三郎(維岳) 76
—清人〔辻氏〕 2, 3, 5, 6 ~ 8, 12
~ 14, 18, 20, 24, 25,
34, 37, 42, 43, 45 ~ 47,
50, 54, 55, 56, 60, 62,
63, 65, 69, 71, 74, 75,
78 ~ 81, 85 ~ 88, 90 ~
92, 94, 99, 101, 102,
104 ~ 106, 108, 111,
116, 117, 119, 124, 126,
129 ~ 132, 135, 136,
140, 142, 147, 148, 150
~ 152, 157, 158, 162 ~
165, 167, 169, 172, 175,
178 ~ 182, 184, 186
—清人母 117, 165
—恒次郎 117
—権太郎 112, 173
—千之進 84, 86 ~ 88
→専祐童子
—並次 2 ~ 5, 7, 9 ~ 12, 14 ~
16, 20
→光観院明山義雲居士
津田格兵衛 34
—三郎兵衛 118
植蔵(小回) 151
土屋徳甫 28
—政之進 27, 125
都筑九郎右衛門 101
坪内久米之助 4, 75, 86, 101, 102,
141, 143, 155, 170, 186
—拾(久米之助弟) 170

て
貞玄童女(村上勇蔵水子) 138
貞乗童女(村上勇蔵水子) 138
貞善童女(村上彦右衛門妹順)
43, 141
手島道仙(能美島医師) 25
寺尾石見 5, 6

—弥左衛門 118
寺川源之丞 33
—次左衛門 33
—直衛 53
寺西雅楽 10, 12
—小八郎 74, 186
天満宮(東城浅野家上屋敷)
73, 107, 168
→御奥御鎮守
天祐院(浅野齐賢) 79

と
当御代様(浅野道興) 126 →紀道
興, 此御方様, 旦那様
道寛(国泰寺住職) 21
道牛 77 →海蔵寺和尚
藤次(馬捕) 162, 180
東照宮 47, 166
藤堂和泉守(高猷, 伊勢津藩主)
80
得井勘次郎 27, 118, 170, 173
—満四郎 27, 30, 51, 110, 170
徳川家康 1, 99
徳七(小回) 158
得舟 29, 35 →海蔵寺和尚
徳永吉十郎 51
—登(滝登カ) 51
得能保允 8
徳了寺(東城) 53, 54, 60, 64
戸田伊豆守(氏栄, 浦賀奉行)
15
—平丞[平之丞] 6, 60, 87, 89, 90
百々亀之丞 73
殿様(浅野齐肃) 4, 8, 43, 100, 108,
143 ~ 145, 165, 166,
170 ~ 172 →此御方様,
太守様, 源齐肃
富永源五郎 10, 111
とめ 141
富山侯(前田利友) 4 →松平出雲
守・松平雲州侯

祖考君(村上家四代勇藏) 111
→常称廟

た

太守様(浅野齐肃) 134, 135 →此
御方様, 殿様, 源齐肃

高木後室 33

—唯一 4, 30, 139, 141, 180

高津応輔 31 →桜井広馬

高橋文良

—良左衛門(馬医) 90

武内純介 3, 30, 65, 67, 69, 115,
118

武田大炊〔正之助〕 143, 144, 146,
186, 187, 190

—每登 147 →末田每登

竹腰 恰 8, 11, 93

—左介 9

—隼之進 9

竹林何某(歩行組) 170

晷屋喜右衛門 17

立花飛驒守(鑑寛, 筑後柳川藩主)
15, 32

たつ(東城浅野家老女並) 75, 110,
174

田中栄作 18, 45, 49, 74, 140,
142, 147, 148, 155, 157,
168, 170 ~ 172

—栄作妻 18, 109, 135 ~ 137,

142, 156 ~ 158

—幸之丞 185

—実五郎 18, 20, 42, 43, 70, 85,

94, 119, 127, 139, 141,

142, 148, 155 ~ 158,

164, 165, 168, 180, 187,

188

—実五郎妻 83, 157

—実五郎母 18, 94

田辺幾衛 10, 101, 145

谷川兵助(袴着) 114, 149

谷口喜作 83

田原半三郎 187

—保之進 187

民(辻家下女) 12, 59, 91

田宮嘉仲太 56

為積篤之助 4

多門院(多聞院, 段原村) 164

旦那様(浅野道興) 28, 33, 44, 65,

79, 82, 86, 87, 89, 93,

107, 112, 115, 118, 127,

131, 135, 136, 138, 146,

176, 185, 186 →紀道

興, 此御方様, 当御代様

ち

智恵光院(京都) 29

ちか(東城浅野家女中) 123

→米原岩之助姉

千種公 106

智証童女 98, 104 →森岡ゆき

茶屋七右衛門 72

長安寺(金屋町) 109, 134

長 喜三太 2, 4, 8 ~ 10, 22, 36,

43, 47, 49, 51, 52, 62,

70, 72, 76, 81, 84, 85,

91, 100, 104, 112, 117,

120, 128, 130, 136 ~

138, 140, 142, 150, 155

~ 158, 161 ~ 164, 168,

173, 176, 182, 187, 189,

190

—喜三太母 164

—喜大夫 3, 6, 91

—喜太夫室〔家内〕 3, 10, 130

—弥三郎(信任) 10, 72, 180

—老室 116, 136, 137, 142, 157

調子政記 140

頂妙寺(京都) 121

智蓮孩子 46 →木野百太郎

つ

塚本小八郎 70

辻 梅〔妹〕(辻清人室, 村上彦右衛門

妹) 6, 37, 41, 44, 59,

74, 75, 79, 81, 82, 85,

104, 105, 111, 123, 127,

- 受安廟 (村上家二代甚兵衛室) 114, 168, 187
 87, 167, 182
- 秋教院 (藤川弥七郎室) 126
- 秋月君 (村上勇藏子松之助)
 62
- 秀山智英童子 (村上彦右衛門子正介)
 51, 138, 150, 155
- 秋露童女〔秋露〕(村上彦右衛門娘松濃) 48, 147, 155
- 主上 (孝明天皇) 29, 30 →統仁, 今上皇帝
- 寿祥院光誉明心大姉〔寿祥院〕
 159, 160, 171 →慈君
- 朱 天徳 91
- 潤誓廟〔潤廟〕(村上家三代彦兵衛)
 29, 127, 183
- 正観寺 (白島村) 118
- 聖護院 (京都)
 一宮 (嘉言親王) 29
- 常称廟 (村上家四代勇藏) 30, 34,
 128, 131 →祖考君
- 庄助 (手回り) 6, 109, 138, 140
- 正清院 (新川場町) 50, 149
- 正善院悟法日顯居士 39
 →石井園藏
- 勝藏 (茂兵衛子) 158
- 庄八 (小回) 138, 140, 158
- 白神社 (尾道町) 2, 74, 109, 155
- 心行寺 9, 74, 109
- 甚吉 8
- 新五 (小回) 156, 158
- 慎徳院 (徳川家慶) 50, 149
- 信楽廟 (村上家四代勇藏室)
 30, 128
- す
- 瑞章院 (浅野長包か) 159
- 末田每登 147 →武田每登
- 菅原恒之丞 35
- 杉江喜内 41
- 杉田新兵衛 31
- 杉谷亀次郎 9
- 鱸 兵馬 57, 58, 65, 78, 95, 96,
- せ
- 誓円廟〔誓廟〕(村上家二代甚兵衛)
 72, 167
- 誓願寺 (材木町) 17, 20, 34, 41, 44,
 47, 48, 89, 117, 118,
 127, 182
- 誓願寺 (京都)
- 清岸寺 (天神町) 45
- 清光院 (浅野幸長) 52
- 清住寺 (鷹匠町) 48
- 政助 (沼田郡阿戸村百姓, 眼灸)
 162
- 清藏 (小回) 120
- 瀬川〔瀬河〕(東城浅野家六丁目屋敷付老女) 107, 129, 177
 →湯川新太郎母
- 瀬川静人 62
- 関 藏人 (忠親) 5
 一尚之丞 (懋績) 160
- 関浦友助 55
- 千賀喜兵衛 173
 一九郎右衛門 173
 一代植 173
- 先考〔先君〕(村上彦右衛門父星右衛門) 11, 17, 71, 111
- 仙石右中〔右仲〕 108, 187
- 仙成〔仙丈〕(妙慶院弟子) 139, 156,
 158, 168, 181
- 禅昌寺 (薬研堀) 77, 104
 一和尚 104
- 仙波市十郎 (薩摩藩士) 23
- 先妣君 (先妣廟, 村上彦右衛門実母)
 16, 17, 20
- 禅仏寺 (奴可郡宇山村) 142, 165
- 善兵衛 (船乗) 121
- 禅林寺 (新川場町) 55
- 専祐童子 86, 182 →辻千之進
- そ
- 宗 対馬守 (義和, 対馬府中藩主)
 46

175, 177, 178, 182, 185,
189, 190
齋藤七太郎 87, 90, 91, 93, 143
—篤藏(徳藏, 拙堂) 72, 73
西蓮寺(細工町) 49, 148
酒井安芸守(忠一, 安房勝山藩主)
15
—雅楽頭(忠頭, 播磨姫路藩主)
15, 32
—左衛門尉(忠発, 出羽庄内藩主)
82
—修理大夫(忠義, 若狭小浜藩主)
82, 83
坂崎恒吉 24
坂本十尋 31
佐久間藤之丞 57
桜井織部 160
—広馬 31 →高津応輔
佐々木彦藏 61
—平左衛門 114, 149, 150
佐竹右近将監(左近将監義堯, 羽後久
保田藩主) 190
—玄丈(医師) 189
薩州侯(島津斉彬) 22, 173
→松平薩摩守
佐藤喜代槌 118, 169, 179
—猶人 118, 169, 179
—益之丞 9, 36, 51, 65, 75, 80,
81, 118, 136, 138, 149,
157, 159, 169, 173, 176,
179, 190
—益之丞後妻 58, 67
→中江保登妹
—益之丞妻〔後妻〕(徳永永登娘)
51, 54, 72
—与三右衛門 2, 11, 13, 15, 20,
22, 25, 33, 42, 51, 54,
63, 66, 67, 69, 71, 87,
100, 105 ~ 108, 110,
111, 113, 120, 126, 127,
130, 131, 134, 135, 162,
163, 175, 185, 188, 189
沢 喜代槌 159

—軍太 179 →野村仲右衛門
—外衛〔徳三郎〕(懋昭) 135, 159,
160, 181, 191
—三石〔喬, 伯遷〕 150
沢井且二郎 187
—内外 187
沢崎多八郎 9
—多八郎妻 65, 69
沢田勘十郎 3
—仙之丞 3
三次(元家来) 11, 76

し

慈君(村上彦右衛門継母) 2 ~ 5, 7,
13, 15, 17, 23, 28, 29,
33, 37, 38, 40, 41, 43 ~
45, 47 ~ 49, 54, 58, 59,
64, 65, 69, 71, 72, 78 ~
80, 82, 84, 85, 88 ~ 91,
93, 100, 102, 104, 105,
110, 114, 116, 117, 119,
123, 127 ~ 134, 136,
140, 141, 147, 148, 151,
153, 156, 158 ~ 170,
172, 174, 178 ~ 181,
183, 184
→寿祥院光誉明心大姉
宍戸美濃殿御奥様 20
地蔵尊(御裏御鎮守) 51, 150
志津〔しつ〕(東城浅野家出衛様御附
女中) 31, 139
実山賢秀童子(村上彦右衛門子幾三
郎) 155, 156, 158,
159, 163 ~ 168, 171,
181 →村上幾三郎
芝 和多理 51
—和平太 51
芝山様(敬豊) 9, 29, 30, 63
島本広右衛門 173
—甚内 59, 118
下加茂(社, 京都)
下瀬孫平 10, 67, 69, 73, 101
下曾根金三郎(信之) 69

- 久保田 蒞 184
 熊谷左門〔桐琴〕 44
 一善兵衛 108
 蔵田彦蔵(慈君祖父) 105
 一和太郎 10, 27, 101
 狐爪木社(安芸郡戸坂村) 33, 34
 黒田豊前守(直静, 上総久留里藩主)
 16
 一益之丞 184
 一弥五左衛門 77, 89
 桑原吉郎二 3, 5, 18, 20, 39, 53, 55,
 101, 104, 116, 124, 143,
 155, 157, 160, 167, 168,
 172
 一盛蔵 12, 112, 136, 140, 156,
 157, 172
 一竹吉 104
- け
- 契沖阿闍梨 106
 源左衛門(沼田郡阿戸村) 65
 源助(千代吉兄)
 健徳院(浅野高平) 92, 187
- こ
- 小池亀之丞 26
 一剛三郎 21, 31
 一常太郎 31
 一直次郎 51
 一良太郎 108
 御隠居様(浅野高博) 28 →浅野周
 防・六丁目様
 光観院明山義雲居士 16, 17, 43, 44,
 117 →辻 並次
 高謙院(浅野高平室) 14, 15, 25,
 34, 35, 47, 57~59, 63,
 69, 72, 82, 100, 102,
 109, 111, 113, 114, 149,
 185, 189
 →北之御部屋様
 香積寺〔光寂寺〕(三原) 105, 170,
 171
 高介(盲人) 59
- 光禅寺(佐伯郡五日市) 35, 159, 165
 興禅寺(竹屋村) 59, 148
 興徳寺(竹屋村) 43, 49, 98, 101,
 148, 181
 河野熊之進 173
 一権六 173
 高良大明神(神田八幡宮撰末社)
 112, 113
 国泰寺(尾道町) 21, 79, 150
 小島左源太 12, 27, 164
 一太郎作 30, 122
 小鷹狩平馬 11, 104
 御鎮守社(御裏御鎮守稻荷社) 8
 後藤松軒(医師) 123, 154, 160
 此御方様〔此方様〕(浅野道興)
 29, 38, 40, 41, 82, 88,
 104, 108, 126, 133, 142,
 145, 175 →紀道興, 且
 那樣, 当御代様
 此御方様(浅野齐肃) →太守様, 殿
 様, 源齐肃
 小島良大夫 188
 小林国太郎〔邦太郎〕 52
 一彦左衛門 52, 105, 106
 一弥右衛門 43
 近藤権次郎 43
 一重太郎 101, 102
 一万之進 25
- さ
- 西向寺(細工町) 2, 6, 7, 9~12,
 14, 16~18, 20, 21, 25,
 30, 34, 37, 38, 40, 43,
 44, 48, 50, 51, 53, 56,
 59, 62, 64, 65, 67, 72,
 73, 76, 79, 80, 84, 86,
 87~91, 95, 97, 102,
 106, 107, 109, 111, 114,
 115, 119~122, 127,
 128, 131, 133, 135, 136,
 140~144, 147~149,
 151, 152, 159~161,
 163, 165, 167, 171, 172,

一熊之助 24
 一元達(医師) 154, 162
 一元達妹 168
 一徳之助〔金子先生〕(霜山)
 91, 117, 190
 加納備中守(久徴, 上総一宮藩主)
 16
 狩野由信 2, 100
 亀井隠岐守(茲監, 石見津和野藩主)
 96
 河瀬〔川瀬〕喜和馬 84, 87, 93, 106,
 140, 142
 河田友五郎 187
 一平内 64
 川村瀬兵衛 68
 一對馬守(修就, 大坂町奉行) 72
 一常之進 68
 一和三郎 51
 川本屋伊助(武具商) 14
 菅 馬之進 33, 62, 73, 90, 100,
 103, 109, 114, 132, 142,
 172
 一馬之進後妻〔家内〕 114
 →岩崎せつ
 一後室 33
 一多久馬 10, 80, 115, 117, 139,
 143, 171
 一多久馬母 11, 75, 76, 115,
 120
 一諸登 179
 観光院(平野) 124
 感神院(沼田郡祇園町) 169
 神田八幡宮〔八幡社, 神田, 神田社〕
 11, 13, 77, 112 ~ 114

き

喜久蔵(白鳥下九軒町灸医)
 127, 132, 134, 141, 149
 義純童子〔義純〕 138, 141, 143,
 145, 147, 148, 152, 163,
 164 →村上他三郎
 吉助(地御前中津屋関係者)
 149, 164

北之御部屋様 9, 114 →高謙院
 木野伯母(文右衛門室) 119, 138,
 139, 155, 178
 一一馬 10, 18, 20, 47, 71 ~ 73,
 88, 101, 102, 113, 114,
 120, 123, 131, 137, 147,
 155, 156, 189
 一一馬室 120
 一きよ〔喜代〕(一馬娘) 45, 119,
 138, 139
 一しけ(一馬娘) 109, 113, 147
 →丹羽しけ
 一まつ(一馬娘) 120
 一百太郎〔亡児〕 43 ~ 46
 →智蓮童子
 紀 道興(浅野道興) 1, 99 →此御
 方様, 旦那様, 当御代様
 木原慎斎(町医) 108
 木村幾三郎 90
 一河内守(狐爪木社神主)
 34
 一喜斎 35
 木本衛門(進カ) 13
 休誓廟〔休廟〕(村上家三代彦兵衛室)
 30, 89, 127, 183
 恭照院 150 →浅野重晟
 今上皇帝(孝明天皇) 1, 99 →統仁,
 主上
 銀助(小者) 48, 49

<

久世大和守(広周, 下総関宿藩主)
 173
 国蔵(小人, 馬捕) 16, 18, 138, 140,
 158, 188
 久野幾馬 110, 121
 一秀太郎 10, 30, 80, 101, 104,
 108, 111, 112, 170, 186
 一八十介(八十助) 101
 久保万治〔万次〕 18, 20
 一万治妻 147
 一万治娘 18, 20
 公方様(徳川家定) 172 →源家定

- 大田市大夫 38
 一保之進 38
 太田撰津守(資功, 遠江掛川藩主)
 96
 一盛之助 185
 大野久馬 188
 一孫六 187, 188
 大橋勝太郎 186
 一源之進 185
 一序助 31, 65
 一清太郎 185
 一大之進〔代之進〕 146, 185, 187
 一登 37
 一盛登 37
 小笠原左京大夫(忠徵, 豊前小倉藩主) 15, 32
 岡田清太郎母 69 →森岡後室姉
 一大記 37
 一糺 37
 一八十太郎 47, 64, 70, 72, 111, 115, 144
 岡部冠斎 119
 岡本主馬 127, 130, 136, 147, 158, 183, 184
 沖 次郎兵衛 40
 一為五郎 78
 一和多理〔守次郎〕 55, 60, 78, 101, 167, 175
 奥 亀太郎 10, 26
 一久之助 26
 奥田鹿之助 37
 一平八郎 37
 一本太 187
 一保人 187
 小倉後室〔甚右衛門母〕 10, 25, 35, 40, 141, 170
 一甚右衛門 3, 5, 10, 17, 37, 51, 90, 107, 109, 110, 114, 124, 131, 132, 136, 137, 139, 156, 157, 163, 167, 168, 171
 統仁(孝明天皇) 1, 99
 →今上皇帝, 主上
 小瀬清九郎 8
 尾関五郎八 189
 落合軍兵衛 75
 尾長天満宮 77
 小畑幸次 157
 小幡繁太郎 52
 一孫兵衛 8, 117, 120

 か
 海蔵寺 3, 28, 29, 35, 44, 48, 49, 65, 77, 92, 103, 105, 106, 134, 153, 187
 一隠居〔隠僚, 和尚〕 3, 29, 48, 49, 65, 77, 105 →快瞳
 一和尚 3, 29, 35 →得舟
 一和尚 105 →道牛
 快瞳 35, 48, 77 →海蔵寺隠居, 海蔵寺和尚
 夏岳君 38
 笠間新太郎 129
 加州侯(前田齊泰) 32
 →松平加賀守
 家所佐一郎 42
 一守衛 42
 家小(村上彦右衛門室みつ) 5, 7, 9, 24, 30, 43, 47, 48, 62 ~ 65, 77, 78, 82, 83, 93, 94, 107 ~ 109, 135, 136, 138, 142, 143, 148, 153 ~ 155, 164, 166, 172, 178, 179, 181, 188, 189
 片岡大記 20
 桂 辰馬 76, 119, 129
 加藤越中守(明軌, 近江水口藩主) 94
 一衛守 31
 金屋源兵衛(尾道) 119
 かね(東城浅野家老女格) 100
 かね(御厘女中, 渡辺宗右衛門妾) 114, 115
 →藤野源兵衛娘
 金子幾太郎 185

- 一熊太郎 59
 一権之丞〔権丞〕 74, 76, 78, 126, 182
 一登門 59
 一彦之進 26
 今枝弥三郎 76
 今中角右衛門 59
 一新兵衛 59
 一大衛(権六) 4, 6, 94
 一丹後 4～6, 94
 今村文之助 11
 岩崎きく(常介娘) 20
 一源之進 10, 35, 37, 38, 40, 43, 45 →藤井源之進
 一繁之進 74
 一せつ(常介娘) 73, 90, 94
 →菅馬之進後妻
 一常介〔常助〕 3, 10, 18, 21, 35～37, 40, 45, 59, 66, 67, 73～75, 90, 93, 101, 102, 107, 109, 111, 114, 123, 129, 130, 132, 136, 140, 146, 147, 151, 152, 155, 157～159, 163, 165, 167, 168, 173
 一保之進 179, 180
 一よし(常介室) 17, 18, 20, 21, 54, 113, 128, 132, 152, 155～158, 162, 165
 一良之進 9, 20, 110, 136～138, 155～157, 167, 172, 190

 う
 植木七之丞 185
 上杉弾正大弼(齊憲, 出羽米沢藩主) 95
 上田内記(安敦) 55, 60, 69, 78, 82, 101, 117, 165, 166, 169, 186
 一主水(安節) 6, 20, 25, 38, 40, 41, 50, 55, 57, 60, 67, 70, 77, 78, 82, 84, 93, 101～103, 126, 133, 134, 140, 143, 160, 165, 175, 176, 181, 186～188
 一主水奥様(富, 浅野右京長懋娘) 160 →浅野 富
 一雄吉(安節子) 55
 上野彦三郎 87, 112, 115, 139, 143, 163
 植村左近 74
 宇佐美寅之丞 28
 内田織馬 64
 雲山 28

 え
 栄松院(浅野重晟娘, 日向飢肥藩主伊東祐民室) 40
 江川太郎左衛門(英龍) 39
 惠教(智証) 104 →森岡惠教童子
 江田佐源太 31
 越前侯(松平慶永) 69, 70
 →松平越前守
 遠藤佐兵衛 6, 7

 お
 大石良雄 28
 大岡兵庫頭(忠恕, 武蔵岩槻藩主) 16
 大柿忠次郎 7, 85, 188
 御奥御鎮守 38 →天満宮
 大久保加賀守(忠愨, 相模小田原藩主) 15
 大崎和三郎 53, 110, 118, 140, 141, 169, 179
 大島織衛 104
 一五兵衛 9, 47, 54, 58, 62, 70, 75, 90, 109, 115, 122, 136, 137, 149, 155, 177, 179
 一五兵衛妻 53, 54
 一五兵衛母 76
 大杉屋嘉蔵 109, 119
 一半右衛門 121, 139

- 189
 一遠江〔大和〕(忠助) 6, 13, 24,
 25, 40, 41, 44, 50, 53,
 55, 70, 71, 82, 86, 96,
 100, 101, 116, 126, 129,
 140, 144, 149, 150, 170,
 176, 181, 183, 185 ~
 187
 一遠江奥様 55, 60
 一時〔磯〕(周防娘) 14, 21, 91,
 93, 108, 121, 123, 124,
 131, 133, 134
 →芳雲詠感大童女
 一富(上田安節室) 160
 →上田主水奥様
 一虎人(高通) 126
 一長政 1, 99
 一八太郎 40
 一鈺之進(出衛子) 138, 141, 151
 一久姫(出羽後室) 116
 一木工 160
 一若狭 159, 160, 186
 阿部伊勢守(正弘, 備後福山藩主)
 23, 31, 173
 一駿河守(正身, 上総佐貫藩主)
 16
 尼崎侯(松平忠榮, 摂津尼崎藩主)
 73
 天野守衛 188
 有阪淳藏〔有阪氏〕 78
 安藤市兵衛 60
- い**
 井伊掃部頭〔井伊侯〕(直弼, 近江彦根
 藩主) 15, 32, 33, 83
 →彦根侯
 飯田又市〔飯田氏〕 108, 133, 184
 幾田(高謙院老女) 63, 109, 114,
 189
 生田筑後 27, 43, 47, 66, 96, 179,
 186
 井口喜久馬 26, 36
 一庫人 188
- 池内午之丞 185
 池田加賀守 13, 112, 113
 一万次郎 56, 58
 一要之進 56 ~ 58
 井沢元秀(医師) 37, 124, 134, 175
 一元秀妹 124
 一寿体(医師) 12
 伊沢美作守(政義, 浦賀奉行) 15
 石井園藏〔石井先生〕 16, 18, 20,
 25, 29, 37 ~ 40, 50
 →正善院悟法日顕居士
 一後室〔老室〕(園藏室) 116, 129,
 135 ~ 138, 142, 155,
 157, 158, 161, 164
 一寿兵衛 11, 12, 18, 21, 40, 50,
 51, 58, 88, 110, 120,
 130, 131, 136 ~ 139,
 143, 155, 157, 164, 179
- 石内村八幡社 45
 石川東太郎 172
 一主殿頭(総禄, 伊勢亀山藩主) 94
 石川土佐守(石河政平) 31
 伊田千松 8
 一定右衛門 8
 市川斎宮 69, 70
 一文昌(医師) 70
 一場忠次郎 182 ~ 184
 巖島(社) 27, 43, 81, 153
 巖島社(東城浅野家上屋敷御裏御鎮守)
 142
 伊東修理大夫(祐相, 日向飢肥藩主)
 175
 伊藤久之助 51
 一茂登 180
 一徳之助 10, 23, 67, 141, 179
 稲垣撰津守(長明, 志摩鳥羽藩主)
 96
 稲葉長門守(正邦, 山城淀藩主)
 15, 83, 84
 一兵部少輔(正巳, 安房館山藩主)
 74
 稻生豊人 40
 井上市太郎 60, 101, 143, 147

人名・寺社名索引

凡 例

- 算用数字はページ数を示す。
- 配列は五十音順とした。なお、読み方については、通例と思われる呼び方にしたがった。読み方が分からない人名については、原則として音読で配列した。
- 名前しかわからない人名や、院号、諸侯名、誤字もそのまま収録した。その場合、正しい名前、俗名、著者との関係、所属町村名、職名などを（ ）で補うよう努めた。
- 同一人物で2つ以上の呼称がある場合、〔 〕で示したり、→で参照できるようにした。
- 女性名の「於」「お」字は省略した。
- 採録に当たっては、検索項目が分かりやすいように体裁を変えた場合がある。

あ

- | | | | |
|------------------|--|-------------|--|
| 相庭百蔵 | 57 | —左衛門佐忠知(知近) | 150 |
| 青木弥次右衛門 | 43 | —重晟 | 150 →恭照院 |
| 青山下野守(忠良、丹波篠山藩主) | 83, 84 | —周防(道博) | 2, 4, 6, 9, 14, 17, 21, 24, 34, 47, 57 ~ 59, 63, 64, 66, 68, 75, 80, 95, 100, 101, 103, 104, 108, 113, 116, 125, 126, 130, 133, 134, 145 ~ 147, 151, 169, 174, 175, 178, 181, 182, 187, 190 →御隠居様・六丁目様 |
| 朝尾彦造 | 29, 30 | —太吉(周防庶子) | 175, 176 |
| 浅野出衛(道積) | 2, 14, 31, 33 ~ 35, 44, 47, 56 ~ 58, 63, 68, 72, 76, 78, 79, 82, 88, 89, 100, 104, 116, 120, 122, 123, 126, 138, 139, 145, 147, 150, 151, 173, 174 | —卓〔信〕(出衛娘) | 123, 128, 139 |
| —一学(氏綏, 目付) | 150 | —忠長 | 150 |
| —市松〔舍人〕(周防庶子) | 75, 76, 90, 91, 93, 126, 129 ~ 131, 168, 170 | —忠吉 | 150 |
| —右京(長懋) | 159, 160 | —常(出衛娘) | 33, 34, 38, 40 ~ 44 →嶺光幻雲禪孩女 |
| —玄蕃 | 40, 50, 51 | —出羽〔甲斐〕(忠敬) | 47, 77, 116, 150, 170, 171, 186, 187, |

むらかみ かじょう
村上家乗

あんせいがんねん
安政元年・二年

広島県立文書館資料集 11

令和3年(2021)3月26日 発行

編集・発行

広島県立^{もん}文^{じょ}書^{かん}館

〒730-0052

広島市中区千田町三丁目7-47

TEL (082) 245-8444

印 刷